

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第397集

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

(平成13年度)

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

(平成13年度)

序

岩手県は、埋蔵文化財の宝庫と言われておりますが、先人達が遺したこの貴重な文化遺産を保護し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。また、一方では農業基盤整備や幹線道路網など、社会資本を充実させることもまた行政上の重要な施策であります。このため埋蔵文化財の保存・保護と地域社会の進展との調整・調和が今日的な課題であります。

こうした見地から、財団法人岩手県文化振興事業団では埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会生涯学習文化課による調整と指導のもとに、道路建設などによってやむを得ず消滅していく遺跡について発掘調査を実施し、記録保存する措置をとって参りました。平成13年度は、県内23市町村におよぶ52遺跡に対して発掘調査を実施致しました。

調査した遺跡の時代は、後期旧石器時代の石器集中区が確認された山形村早坂平遺跡をはじめとし、近世まで多時期にわたっております。この中で特に注目される遺跡として、平泉町本町Ⅱ遺跡が挙げられます。この遺跡は北上川東岸、現在の市街地より一段低い水田地帯に立地し、9世紀後半～11世紀初頭の住居跡や10世紀初頭の15,000m²にも及ぶ広大な畠跡が検出され、県内でまれな灰釉陶器の耳皿が出土しています。また、平安時代末から鎌倉・室町時代かけて利用された墓域も確認され、藤原氏滅亡後も農業生産基盤を背景とする権力を持つ集団が存在していた事が明らかとなりました。

その他としては、縄文時代前期後葉の大形住居が集落の中心域を取り囲むように配置された胆沢町大清水上遺跡、一辺の長さが12m以上、深さも2mを超える縄文時代中期の住居を多く検出した普代村力持遺跡など、多くの貴重な発見がありました。

この発掘調査略報は、調査報告書の発刊に先立ちまして、今年度調査遺跡の調査概要を収録したものであります。本書が研究者のみならず、多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対してのご理解を一層深めていただく一助となれば幸いです。

終わりになりましたが、発掘調査を進めるにあたり、ご協力を賜りました委託者をはじめ、各市町村教育委員会と関係各位に対しまして、衷心より感謝申し上げます。

平成14年2月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 村上勝治

目 次

序

平成13年度の調査結果について

I. 国土交通省関係

(1) 仁昌寺遺跡（一戸町）	5	(6) 大清水上遺跡（胆沢町）	17
(2) 仁昌寺Ⅱ遺跡（一戸町）	7	(7) 北田Ⅱ遺跡（水沢市）	21
(3) 五月館跡（一戸町）	9	(8) 猪岡館跡第2次調査（平泉町）	23
(4) 力持遺跡（普代村）	11	(9) 河崎の櫛擬定地（川崎村）	27
(5) 柳沢Ⅱ遺跡（山田町）	15		

II. 農林水産省関係

(10) 米沢遺跡（二戸市）	31	(11) 釜石遺跡（一戸町）	33
----------------	----	----------------	----

III. 公團・公社関係

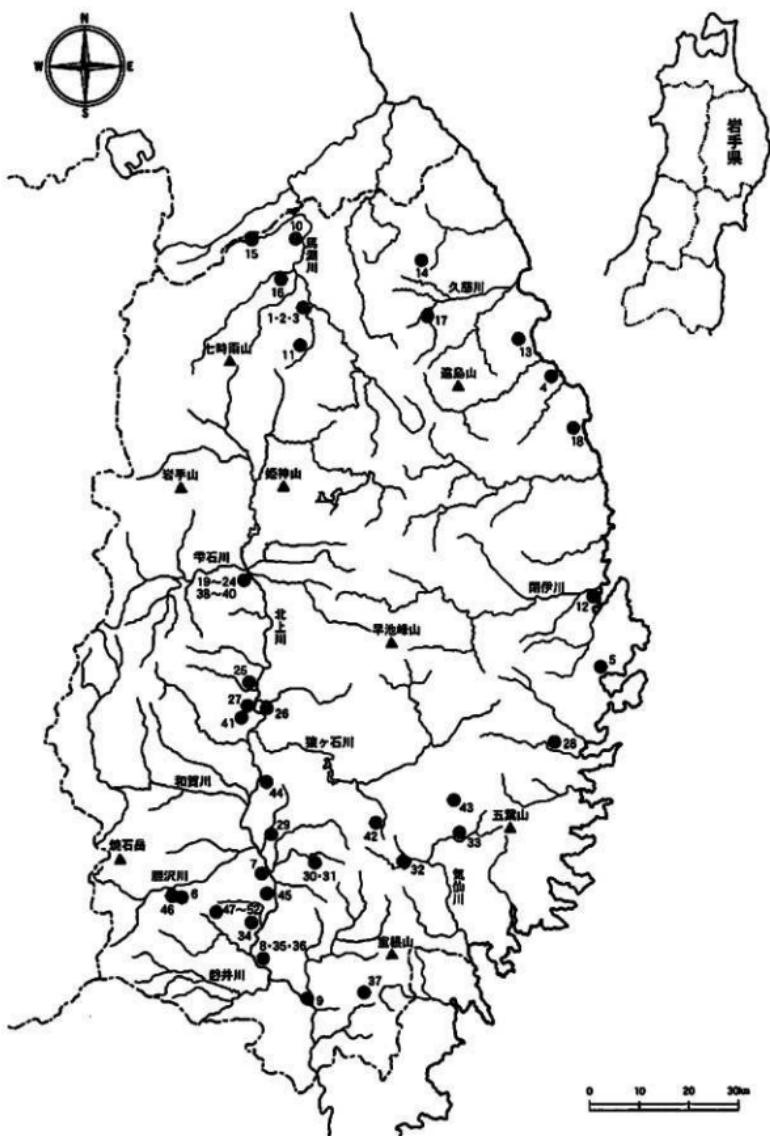
(12) 島田Ⅱ遺跡（宮古市）	37
-----------------	----

IV. 岩手県・市関係

(13) 平清水Ⅱ遺跡（野田村）	45	(25) 烏岡Ⅱ遺跡（石鳥谷町）	85
(14) 梅の木沢遺跡（軽米町）	47	(26) 稲荷遺跡（石鳥谷町）	87
(15) 門松遺跡（二戸市）	49	(27) 宮野町方八丁遺跡（花巻市）	89
(16) 浅石遺跡（二戸市）	53	(28) 沢田2遺跡（釜石市）	91
(17) 早坂平遺跡（山形村）	55	(29) 宝性寺跡（江刺市）	93
(18) 和野Ⅰ遺跡（田野畠村）	57	(30) 新田遺跡（江刺市）	95
(19) 飯岡林崎Ⅱ遺跡		(31) 久田遺跡（江刺市）	97
第1次調査（盛岡市）	61	(32) 館遺跡（住田町）	101
(20) 台太郎遺跡第35次調査（盛岡市）	65	(33) 小松I遺跡（住田町）	103
(21) 熊堂B遺跡第13次調査（盛岡市）	69	(34) 明後沢遺跡群第13次調査（前沢町）	107
(22) 飯岡沢田遺跡第3次調査（盛岡市）	73	(35) 本町Ⅱ遺跡第2次調査（平泉町）	109
(23) 野古A遺跡第12次調査（盛岡市）	77	(36) 矢崎I遺跡第2次調査（平泉町）	113
(24) 細谷地遺跡第5次調査（盛岡市）	81	(37) 清田台遺跡（千厩町）	117

V. 本報告

(38) 台太郎遺跡第36次調査（盛岡市）	121	(46) 市野々遺跡（胆沢町）	191
(39) 細谷地遺跡第6次調査（盛岡市）	125	(47) 一の台Ⅱ遺跡（胆沢町）	203
(40) 新井田Ⅱ遺跡第1次調査（盛岡市）	129	(48) 二の台遺跡（胆沢町）	207
(41) 遊子遺跡（花巻市）	137	(49) 上中沢遺跡（胆沢町）	209
(42) 平清水館跡（遠野市）	147	(50) N E 34-2172遺跡（胆沢町）	211
(43) 林崎I遺跡（遠野市）	157	(51) 屋敷遺跡（胆沢町）	215
(44) 黒岩宿遺跡（北上市）	165	(52) 上狼ヶ志田遺跡（胆沢町）	217
(45) 寺ヶ前Ⅲ遺跡（水沢市）	181		



平成13年度調査追跡遺跡位置図

平成13年度の調査結果について

平成13年度の発掘調査事業は、年度当初49遺跡196,317m²を対象としてスタートし、最終的には52遺跡190,452m²を調査して終了した。委託者の計画変更などが要因となり調査遺跡数は増加したもの、調査終了面積は結果的に減少している。これは、調査未了によって次年度に繰越さざるを得なかつた遺跡がかなりの数に上つたためである。

今年度発掘調査を実施した52遺跡のなかで特徴的な遺跡を各時代ごとに紹介すると次のようになる。

旧石器時代では、山形村早坂平遺跡（17）で今年度分の調査が行われ、搔器、削器、石刃など合わせて800点強の後期旧石器時代の石器が発見されている。

縄文時代の遺跡の調査は住田町小松Ⅰ遺跡（33）、釜石市沢田Ⅱ遺跡（28）、胆沢町大清水上遺跡（5）、早坂平遺跡、普代村力持遺跡（4）、江刺市久田遺跡（31）などで実施され、各遺跡とも多数の遺構・遺物が発見されている。昨年度からの継続調査となった小松Ⅰ遺跡では、住居など早期末葉から前期初頭にかけての遺構群が、厚い堆積性堆植物に挟まれて層位的に発見された。沢田Ⅱ遺跡は前中期中葉を主体とする集落跡で、大木3~4式期の住居群が検出されている。大清水上遺跡は前期後葉大木5式期の大形住居だけで構成される円環状集落で、昨年度分と併せ、大形の梢円（長方）形住居が60棟ほど発見された。早坂平遺跡では、前中期の住居に混じって100基ほどの陥し穴が検出され、大規模な狩場となることが明らかになった。力持遺跡は中期を主体とする大集落跡で、大小70棟強の住居跡が発見された。久田遺跡は後期の集落跡で、径10mを超える円形の大形掘立柱建物跡などが検出されている。

弥生時代の遺構としては、二戸市浅石遺跡（16）から土坑類が検出されている。検出遺構数は縄文時代に比べ極端に少なくなるものの、遺物だけが発見された遺跡はかなりの数に上っている。

後続する古墳時代の遺構は盛岡市飯岡沢田遺跡（22）で発見されている。飯岡沢田遺跡では、所謂「終末期古墳」と呼ばれる円墳が40基ほど検出され、大規模な古墳群であることが明らかになった。多くは奈良時代に築造されたものと考えられるが、一部の古墳は古墳時代末期の7世紀代から造営が開始されている。

奈良・平安時代の遺跡は二戸市門松遺跡（15）、盛岡市飯岡林崎Ⅱ遺跡（19）、平泉町本町Ⅱ遺跡（35）など数多くの遺跡が調査された。門松遺跡は出入り口をもつ掘で区画された奈良・平安時代の集落跡で、特異な構造の大形住居を中心に多量の須磨土器が出土している。志波城跡に近接する飯岡林崎Ⅱ遺跡は平安時代初めの集落跡で、多数の住居跡やそれに伴う大量の炭化米などが発見された。北上川左岸の冲積地に立地する本町Ⅱ遺跡では、火山灰に覆われた10世紀初頭の畠跡が検出された。この畠跡は約15,000m²にも及ぶ広大なもので、同時期の住居群からは灰陶陶器など稀有な遺物も出土している。

本町Ⅱ遺跡からは奥州藤原氏の時代から鎌倉・室町時代にかけて利用された墓域も発見されている。墓域は、結界的な意味合いをもつと考えられるコの字状の溝によって画され、各墓域群はこの溝に沿って整然と配置される。また、墓域中央には葬送儀礼の施設と想定される掘立柱建物跡群が密集している。

中・近世の遺跡としては、多くの中世城館のほかに近世鉄山の調査も行った。継米町梅の木沢遺跡（14）は19世紀初頭頃の操業とされる大規模な製鉄遺跡で、高爐や工房跡等の位置関係が明らかになった。

平成13年度調査遺跡の概要是以上のとおりであるが、その詳細については、平成14年度以降に発刊する本報告書を参照していただければ幸いである。なお、検出遺構、出土遺物とも見込みより少なかった15遺跡については、本書をもって本報告に代えている。

（調査第一課長 佐々木 勝）

I . 国土交通省関係

(1) 仁昌寺遺跡

所 在 地 一戸町小鳥谷字仁昌寺33-2ほか
委 託 者 国土交通省東北地方整備局
岩手工事務所
事 業 名 国道4号小鳥谷バイパス建設
発掘調査期間 平成13年4月17日～7月5日
調査対象面積 4,916m²
発掘調査面積 4,917m²
遺跡番号・路号 JF30-2804・NSJ-01
調査担当者 中村直美・北田 熊
協 力 機 間 一戸町教育委員会



1. 遺跡の立地

仁昌寺遺跡はJR一戸駅の南方約5.2km、八戸自動車道一戸インターチェンジの南方約7.6kmの地点に位置し、東向きの丘陵縁辺部に立地する。丘陵は両側に谷があり込む舌状を呈し、現況は畠地である。標高は199～203mで、平穂川との比高差は約24mを測る。

2. 調査の概要

仁昌寺遺跡の調査は、平成12年度に調査した仁昌寺Ⅱ遺跡から沢を挟んだ北西側の丘陵緩斜面を対象として行われた。今年度検出した遺構は、竪穴住居跡1棟、竪穴状造跡1棟、炉跡1基、土坑11基、埋設土器2基（縄文時代）、墓坑4基（近世～）である。

＜竪穴住居跡＞ 調査区南側より1棟を検出した。平面形はほぼ円形で、石圓柱をもつ。床面からは多数の遺物が出土しており、これら出土遺物から縄文時代後期中葉の住居跡であると考えられる。

＜土坑＞ 調査区全域から11基を検出した。平面形は円形を基調とし、断面形はフラスコ状を呈するものが4基、圓柱を呈するものが7基である。底面から縄文土器片を出土するものもある。

＜墓坑＞ 調査区北側斜面上部～南側全域で墓坑を4基検出した。平面形はすべて円形で、断面形は逆台形を呈する。出土遺物からおおむね近世の墓坑と考えられる。

＜出土遺物＞ 今回の調査で出土したのは縄文時代後期の土器・石器・土製品・石製品・弥生時代中期の土器、近世～近代の陶磁器・鉄製品・古錢である。縄文土器・石器はおもに竪穴住居跡から出土しているが、この他遺構内からの出土は少ない。出土量は大コンテナ4箱分で、遺構数に比べて少ない傾向にある。

3.まとめ

今年度の調査では、後期中葉の竪穴住居跡が1棟検出された。南半部は宅地を造成する際に削られ旧地形を留めていないが、遺構はこの部分に集中する傾向が認められる。このエリアには、周辺の遺構の分布状況から、本來は竪穴住居跡をはじめその他の遺構が存在したものと推測され、削平により消滅してしまった可能性が高い。



仁昌寺遺跡遺構配置図



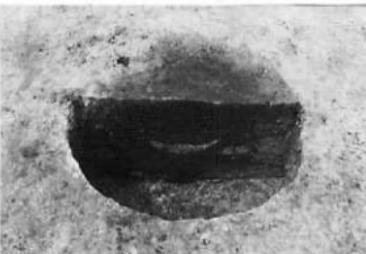
調査区全景



竪穴住居跡



アスファルトリ入り土器出土状況

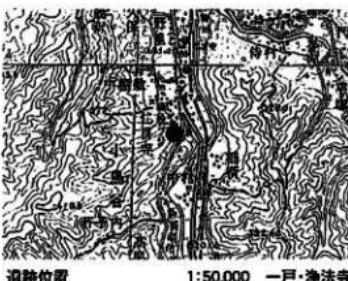


土坑

仁昌寺遺跡検出遺構・出土遺物

(2) 仁昌寺II遺跡

所 在 地 一戸町小鳥谷字仁昌寺4ほか
委 託 者 国土交通省東北地方整備局
岩手工事事務所
事業名 国道4号小鳥谷バイパス建設
発掘調査期間 平成13年6月11日～7月5日
調査対象面積 541m²
発掘調査面積 541m²
遺跡番号・略号 J F30-2094・NSJ II-01
調査担当者 中村直美
協 力 機 関 一戸町教育委員会



1. 遺跡の立地

仁昌寺II遺跡はJR一戸駅の南方約5.2km、八戸自動車道一戸インターチェンジの南方約7.6kmの地点に位置し、馬瀬川支流の平穂川が形成した砂礫（小鳥谷）段丘と火山灰砂（小姓堂）段丘が出会いう地点の背後に接する丘陵の縁辺部に立地する。丘陵は両側に谷があり込む細い舌状を呈し、現況は畑地である。標高は200～205mで、平穂川との比高差は約25mを測る。

2. 調査の概要

仁昌寺II遺跡の調査は平成12年度より6,217m²の範囲を対象として開始され、昨年度は5,801m²を終了している。今年度は未了であった541m²の継続調査を行った。今年度検出した遺構は、墓坑4基（近世～）、掘立柱建物跡1棟、柱穴列1列（時期不明）である。

＜墓坑＞ 調査区中央部から4基を検出した。平面形は円形で、断面形は逆台形を呈する。出土遺物から近世の墓坑であると考えられる。

＜掘立柱建物跡＞ 調査区西側から1棟を検出した。柱穴の径は約40～60cm、深さ20～40cm、2間×3間ほどの規模をもち、長辺6.5m、短辺4.4mを測る建物跡である。遺物等は出土しておらず、時期など詳細は不明である。

＜出土遺物＞ 今回の調査で出土したのは縄文時代の土器・石器である。遺構内から出土したものは少なく、ほとんどが遺構外出土である。内訳としては縄文時代早期・前期・中期の土器が各少量と、石器として石皿片1点、石臼片1点が出土している。

3.まとめ

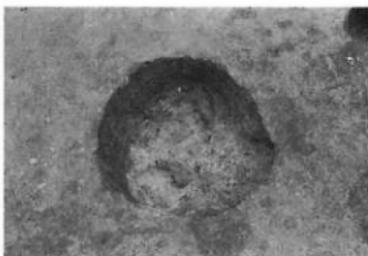
今回の調査の結果、昨年同様の掘立柱建物跡、柱穴列を検出した。本遺跡では東側の宅地部分は削平や近現代とみられる擾乱を多数受けしており、縄文時代の遺構が存在しないことが判明した。調査区は東側の沢に向かって傾斜しており、この部分のみ黒色土の堆積が厚い。この黒色土はきわめて疎な遺物包含層を形成しており、足付の石皿や早期の遺物など縄文時代の遺物が若干量出土している。



仁昌寺Ⅱ遺跡遺構配置図



調査区全景



墓坑



土層断面



作業風景

仁昌寺Ⅱ遺跡検出遺構・出土遺物

(3) 五月館跡

所 在 地 一戸町小鳥谷字上里48ほか
委 託 者 国土交通省東北地方整備局
岩手工事事務所
事 業 名 国道4号小鳥谷バイパス建設
発 墓 調査期間 平成13年7月2日～10月26日
調査対象面積 2,800m²
発 墓 調査面積 4,508m²
遺跡番号・路号 JF40-0005・STT-01
調査担当者 飯坂一重・中村直美・北田 熊
協 力 機 関 一戸町教育委員会



1. 遺跡の立地

五月館跡はJR東北本線一戸駅の南方約5.3km、八戸自動車道一戸インターチェンジの南方約7.7kmの地点に位置し、国道4号と町道（旧奥州街道）に挟まれた丘陵部に立地している。五月館の南側は小笠川の断崖を呈し、東側は数段の急斜面、北もV字形の断崖、西は狭い鞍部から山地に続いている。遺跡の現況は大部分が山林であるが、東側下段は畠地である。調査区の一部は昭和50年代までぶどう畑として利用されていた。本遺跡は町道を挟んで仁昌寺II遺跡と隣接している。

2. 調査の概要

五月館跡の調査は2箇年で合計12,450m²を対象としており、今年度は初年度である。今回の調査で検出した遺構は、北側より土壙状道構2基、曲輪状平坦地6箇所、切岸状急斜面4箇所である。東側下段畠地部分はトレンチによる調査を行ったが遺構は検出できなかった。他に調査区外に堀跡2条、土壙1基を確認している。

<土壙状道構> 北側の尾根筋に、2基検出した。

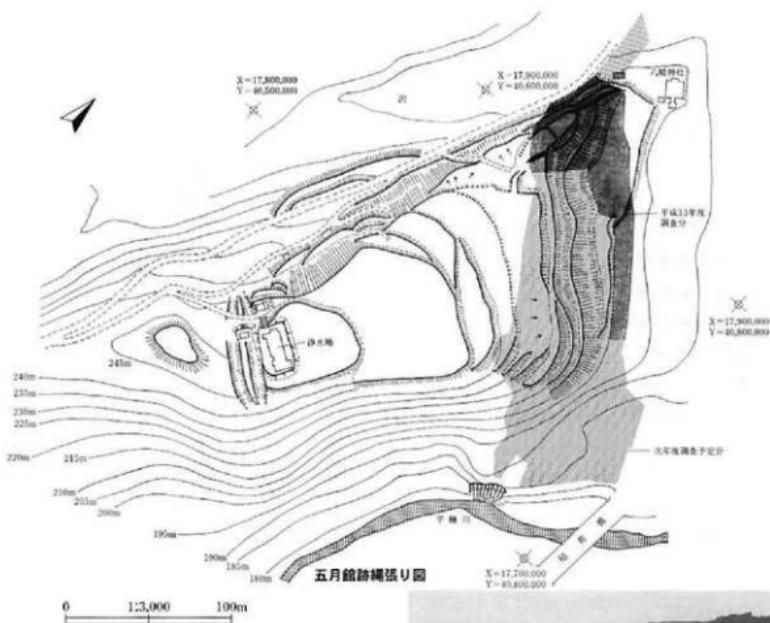
<曲輪状平坦地> 北側の尾根筋上から東側と西側に階段状にあり、6箇所検出した。

<切岸状急斜面> 平坦地の周囲に4箇所検出した。

<出土遺物> 繩文土器片21点、弥生土器片7点、陶磁器片32点、刀子などの鉄製品5点、錢貨2枚が出土した。出土地点はほとんどが雑物撤去後の表土及び擾乱である。陶磁器は国産（東北地方、肥前）であり、製作年代は大半が18世紀以降で、明治時代以降のものも數点出土した。

3. まとめ

五月館は、「二戸志」によると延暦・弘仁期の遠田公五月に由来するといわれ、遠田公五月が坂上田村麻呂の征討軍に協力し、その軍事拠点として利用されたと伝えられている。また、天正年間に小鳥谷沢が居城した小鳥谷館が五月館ともされているが、文書による資料はほとんど存在しない。本年度の調査では館主、創建年代・使用年代を特定できる遺構の検出、遺物の出土はなかった。



五月館跡縄張り図



調査区全景(俯瞰)



本年度 調査区域図(北側)

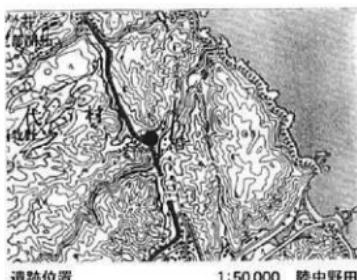


調査風景

五月館跡遺構配置図・調査区全景

(4) 力持遺跡

所 在 地 普代村第16地割字天拝坂28番地
5ほか
委 託 者 国土交通省東北地方整備局
三陸国道工事事務所
事 業 名 普代バイパス
発 勘 調査期間 平成13年4月13日～11月15日
調査対象面積 6,300m²
発 勘 調査面積 4,264m²
遺跡番号・略号 J G 92-0137・TM-01
調査担当者 星 雅之・飯坂一重・八木勝枝
駒木野智寛
協 力 機 関 普代村教育委員会



1:50,000 陸中野田

1. 遺跡の立地

力持遺跡は、三陸鉄道北リアス線普代駅の北約2km、力持海岸から西に約1.5km、力持川と刺畳沢の合流地点付近に広がる東～北東向き斜面地～緩斜面地に立地し、標高は55～65mである。調査区の現況は畠地、林、荒れ地、宅地である。

2. 調査の概要

今年度検出した遺構は、堅穴住居跡70棟以上（調査終了22棟）、掘立柱建物跡1棟、土坑50基以上（終了30基）、柱穴状土坑20基、焼土遺構7基（終了5基）、捨て場2箇所（終了1箇所）、旧沢跡3条である。検出された遺構の時期は、出土遺物から縄文時代前期前葉～中期末葉に比定される。

＜堅穴住居跡＞ 調査区中央部及び北部で検出されており、特に調査区中央部は密に分布する。堅穴住居跡同士やフランコピットなどと重複する場合が多い。縄文時代前期と中期に大別して記述する。

縄文時代前期は、平面形が方形基調を中心とし円形を呈するものが少數見られる。規模は3mほどの小形から10mを越える大型のものがある。全般に検出面から床面まで1mを越える深い堅穴が顕著に見られ、遺物も多量に出土する。炉を持つものは全て地床炉で、壁際には壁溝が巡るものが多い。時期の主体は中葉～末葉（円筒下層a～d式期）であるが、前葉（覆土に中層火山灰を含む）と推定されるものを調査区北部で1棟検出している。

縄文時代中期は、①前葉～中葉（円筒上層b式～大木8a式期）と②後葉～末葉（大木9～10式期）に大別される。なお、初頭期は今年度の調査では確認されていない。

①の時期は平面形は円形基調と方形基調（長方形が多い）があり、規模は3.5～12mまでのものが見られる。炉は石囲炉・石圓埋設土器炉がある。中葉の炉石の配列には規則性が窺え、斜面上方側に径が大きく整形された炉石（偏平気味なものが多い）を配置し、斜面下方側に径が小さく形が不整形のが石が配置される傾向がある。炉内に見られる焼土の発達は、住居個々に格差がある。

②の時期は平面形は円形基調で梢円形・多角形があり、規模は4~8mが見られる。炉は複式炉・石圓炉があり、複式炉を主体とする。複式炉はその形状に適した掘り方を持ち、構成する個々の炉石（偏平に整形した花崗岩を主に使用）は全般に深く埋め込まれ、部分的に二重に石を配置する（補強的に）など丁寧な作りのものが多い。また炉内に見られる焼土は全般に発達が良い。

＜掘立柱建物跡＞ 調査区南部で1棟検出した。4本の柱穴が2.7m間隔で配置される。検出面から縄文時代と推定されるが、出土遺物がなく詳細な時期を特定できない。旧沢跡を截り構築されていることから、沢の埋没した時期よりは新しい。

＜土坑＞ 調査区中央部を中心に50基以上が検出されている。直径1.5m以上、深さ1.5m以上を測る大形のプラスコピットが多い。出土遺物や竪穴住居跡との重複関係などから縄文時代前期末葉～中期中葉に多くは構築されたと推定される。

＜柱穴状土坑＞ 調査区南部で集中して検出された。規模は30cm~1.2mまでが見られる。縄文時代前期中葉の竪穴住居跡を截り構築されていることは明確であるが、この部分からは時期不明（近世～現代と推定される）の搅乱も顕著に見られることから、全て縄文時代とは断定できない。

＜焼土遺構＞ 調査区中央部で7基検出された。焼土の広がる規模は、30cm~1.2mまでがあり、焼土の発達は全般に悪い。詳細は不明であるが、周辺の状況から判断して窯外炉などではなく、竪穴本体は消失した竪穴住居跡の炉である可能性が高い。

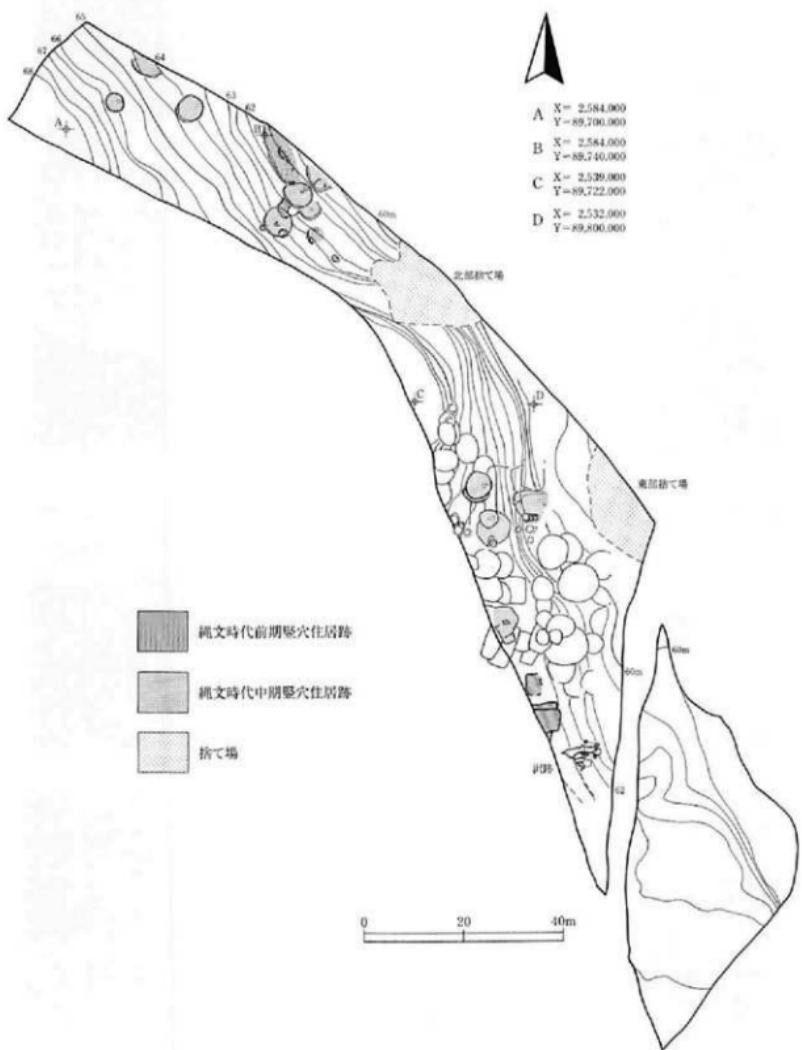
＜捨て場＞ 土器や石器などの遺物が、一定の範囲から多量に出土した2地点を捨て場と命名した。北部捨て場とした調査区北部やや東側の地点は、山側から急傾斜を呈する地形部分で、中期前葉～中葉の土器などの他に石冠や琥珀片なども出土している。東部捨て場とした調査区中央部東側の地点は、西～東に向かって緩やかに傾斜した後に急傾斜する地形部分である。この部分については、精査途中であることから大形で深い竪穴住居跡の可能性もある。来年度の調査で明確になると思われる。

＜旧沢跡＞ 調査区南部で検出された自然埋没した沢跡である。堆積する覆土より、大きく3時期の流路変遷が推定される。時期の上限は不明であるが、時期の下限として出土遺物から縄文時代中期後葉には埋没していたと推定される。

＜出土遺物＞ 遺物は、縄文土器250箱分（大コンテナ）、土製品40点、石器3,500点、石製品150点、チップ・フレーク約12箱分、琥珀数十点、黒曜石数点である。土器は縄文時代前期中葉から後期初頭のもので、主体は前期末葉から中期中葉に相当する円筒下唇d式～円筒上唇e式及び大木7b～8a式である。土製品は土偶、ミニチュア土器、斧状土製品、円盤状土製品などである。石器は、石鎌、削損器、廢製石斧、磨石などを主体に多種にわたる。石製品は块状耳飾り、石冠、石刀、石棒、有孔石製品などである。

3.まとめ

今回の調査により、縄文時代前期前葉～中期末葉の集落跡であることが明らかとなった。特記事項として、検出された竪穴住居跡の中には縄文時代中期前葉の突出して深い竪穴住居跡（地表面から2m以上）や縄文時代中期中葉の大形住居跡（最大長12m以上で長方形状）などがあり、これらの各竪穴住居跡からは大コンテナ20箱分以上に上る多量の土器や石器が出土した。上記のこととは廐屋に遺物を廐棄している行為が窺える。併せて、円筒式土器・大木式土器の両者が出土することが指摘される。来年度に継続して調査が行われる調査区中央部の遺構密集部分は、本道路の中心的空间と推定される。調査が進めば多数の竪穴住居跡の検出数が見込まれ、集落の内容がより明らかになると思われる。



力持遺跡遺構配置図



遺跡全景



中期前葉の住居跡(深さ2m)



中期末葉の住居跡



中期中葉 大形住居跡



プラスコピット(底面に完形土器)

力持遺跡検出遺構

(5) 柳沢Ⅱ遺跡

所 在 地 山田町山田第1地割11番15ほか
委 託 者 国土交通省東北地方整備局
事 業 名 山田道路改築事業
発 掘 調 査 期 間 平成13年4月17日～7月31日
調査対象面積 8,400m²
発掘調査面積 8,400m²
遺跡番号・略号 L G94-0079・YS II -01
調査担当者 阿部 徹・佐藤淳一・原 美津子
協 力 機 関 山田町教育委員会



1:50,000 大槻

1. 遺跡の位置

柳沢Ⅱ遺跡は、JR山田線跡中山田駅の北1.5km、関口川によって形成された沖積低地と国道45号線を隔てた山田湾を一望できるやせ尾根に位置している。道路の標高は2～45mで、現況は山林及び原野である。

2. 調査の概要

検出された中世城館に関連する遺構は曲輪9箇所・切岸2箇所・土塁1箇所である。

＜曲輪＞ 尾根上に連続して階段状に9箇所確認している。尾根頂部の平場は、北東側の高い部分の土を削り南東側斜面に盛土を施して作られ、規模は30×20mで橢円形状を呈している。

＜切岸＞ 尾根頂部の曲輪（1号曲輪）直下と調査区中央部付近の曲輪（8号曲輪）で確認されている。

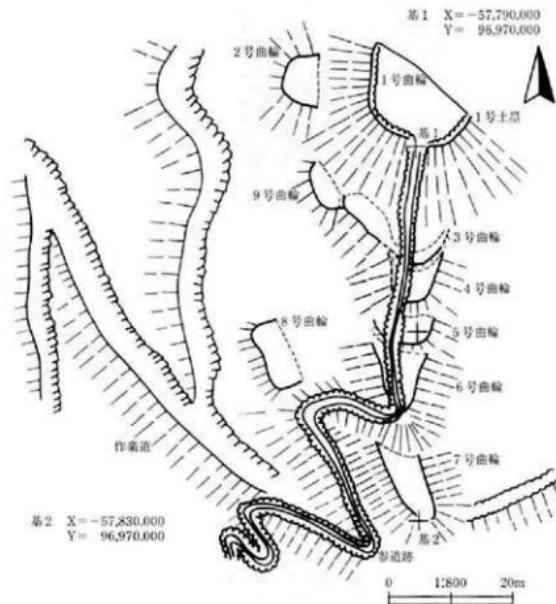
＜土塁＞ 土塁は頂部の平場を囲むように幅1.5m前後、高さ30～40cm前後で巡っている。中世の盛土の上に新たに土を盛って構築されている。出土した銭貨から近世と思われる。

＜出土遺物＞ 遺物は、縄文土器破片が1点、近世の陶磁器数点・鉄製品（釘、十手）、寛永通寶、鉄錢があり、銭貨は頂部の平場周辺から多く出土している。

3.まとめ

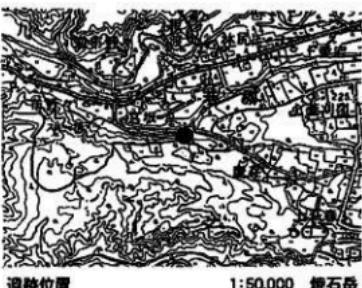
今回の調査では、尾根全体の約3分の1ほどの調査であったが、山頂と尾根の地形変更を行った曲輪、切岸、土塁などの中世城館に伴う遺構が確認された。関連する時期の出土遺物がほとんどなく、後日報告書で不明な点を明らかにしていきたい。

柳沢Ⅱ遺跡遺構配置図・検出遺構



(6) 大清水上遺跡

所 在 地 胆沢郡胆沢町若柳字慶存ほか
委 託 者 国土交通省東北地方整備局
胆沢ダム工事事務所
事 業 名 胆沢ダム建設
発掘調査期間 平成13年8月1日～11月16日
調査対象面積 3,000m²
発掘調査面積 2,000m²
遺跡番号・略号 NE 22-2286・O SK-01
調査担当者 佐藤淳…・阿部徹
協 力 機 間 胆沢町教育委員会



1. 遺跡の立地

大清水上遺跡は、JR東北本線水沢駅から西へ約20km、胆沢川によって形成された河岸段丘上に位置する。標高は約280mで、調査前の状況は畠地として耕作を受けた後放置されていた荒地であった。

2. 調査の概要

調査は昨年度から行われており、今年度は昨年度調査区10,630m²の南西側3,000m²が調査区となった。検出された遺構は、竪穴住居跡40棟、土坑100基、溝状陥し穴15基、埋設土器5基などである。このうち竪穴住居跡22棟、土坑65基、溝状陥し穴11基、埋設土器5基の調査を終えた。

〈竪穴住居跡〉 40棟検出し、22棟の調査を終了した。いわゆる「大形住居」と呼ばれるものがほとんどを占め、平面形は梢円形をなすもの、長方形をなすものの二種類に大別される。規模は長軸が10～15m、短軸が4～6m程度で周溝の巡るものと巡らないものがある。炉はすべて地床炉で住居の長軸に沿って複数確認される。周溝や炉、柱穴の配置などから住居の重複が確認されており、建て替えや拡張の可能性が推測される。また、これらの住居跡群は調査区北東部分にある直径約20mの遺構空白域を取り囲むように、長軸をその中心に向ける求心的配置をなすことが明らかとなった。

〈土坑〉 100基検出し、65基の調査を終了した。貯蔵穴には底面に排水用の溝と小穴を有するものがある。そのほか特徴的なものとしてこぶし大の礫が密集する集石土坑、覆土に多量の土器を含み土器廐棄を連想させる土坑などがある。また、円形もしくは隅丸方形をなし、底部に小穴を持つ陥し穴の機能を有すると思われる土坑も確認されている。

〈溝状陥し穴〉 15基検出し、11基の調査を終了した。規模は長さ3～5m、深さ1～2m程度である。住居址と重複するものが複数存在しているが、覆土断面の状況からいずれも溝状陥し穴の方が住居址より新しく構築されたことを確認している。

〈埋設土器〉 5基検出されている。住居址の縁に隣接して埋葬されている場合が多い。土器内部の覆土に礫が入っているものや剝片石器のフレイクが複数入っているものも確認されている。

〈出土遺物〉 大コンテナで土器は25箱、石器は35箱、その他（上製品、石製品等）1箱の出土である。土

器は円盤状、円筒状あるいは鋸歯状の装飾体を口縁部にもち、波状の貼付け文や電光状の沈線文が施される特徴をもつ縄文時代前期後葉の大木5式がほとんどで、一部大木6式が確認されている。地文は撚糸文が圧倒的に多い。石器に関しては磨石、凹石、石皿、石錐などの砾石器が計1,000点、剥片石器は、定形・不定形の製品が計600点余り出土し、そのほかにフレイクが大コンテナで計3箱出土している。土製品については有孔土製品（土玉）2点、ミニチュア土器1点などのほかイチジク形土製品が1点出土している。石製品では磨製石斧、石剣、有孔丸形石製品など計50点のほか、块状耳飾りの欠損品が5点出土している。

3.まとめ

遺跡の特徴は以下の四点にまとめられる。

①集落を構成する住居のほとんどが大形住居である。

従来、大形住居は単独での発見事例やその地域性などから、当深い地方（日本海側）の冬場の共同作業所ないしは集会所とする解釈がなされてきた。しかしながら、近年大形住居だけで構成される集落や雪国以外における発見事例が確認されてきていることから、大形住居を複数家族が入居する「複合居住家庭」とする考え方も出てきている。本遺跡はこれらの諸説を検証する貴重な事例と考えられる。

②住居群が造構空白域を中心として求心的かつ整然と配置される様相が明らかとなった。

集落の中心を取り囲むようにして住居群や土坑群などが現状に配置される様子は、縄文時代前期～中期頃の東日本、特に大木式土器窓の集落においては一般的傾向として認識されており、今回の調査結果はこれを裏付けるものとなった。本遺跡における造構空白域はいわゆる「広場」であると推定してほぼ問題ないものと考えられるが、そのような機能を具体的に示す遺構や遺物等は確認されていない。

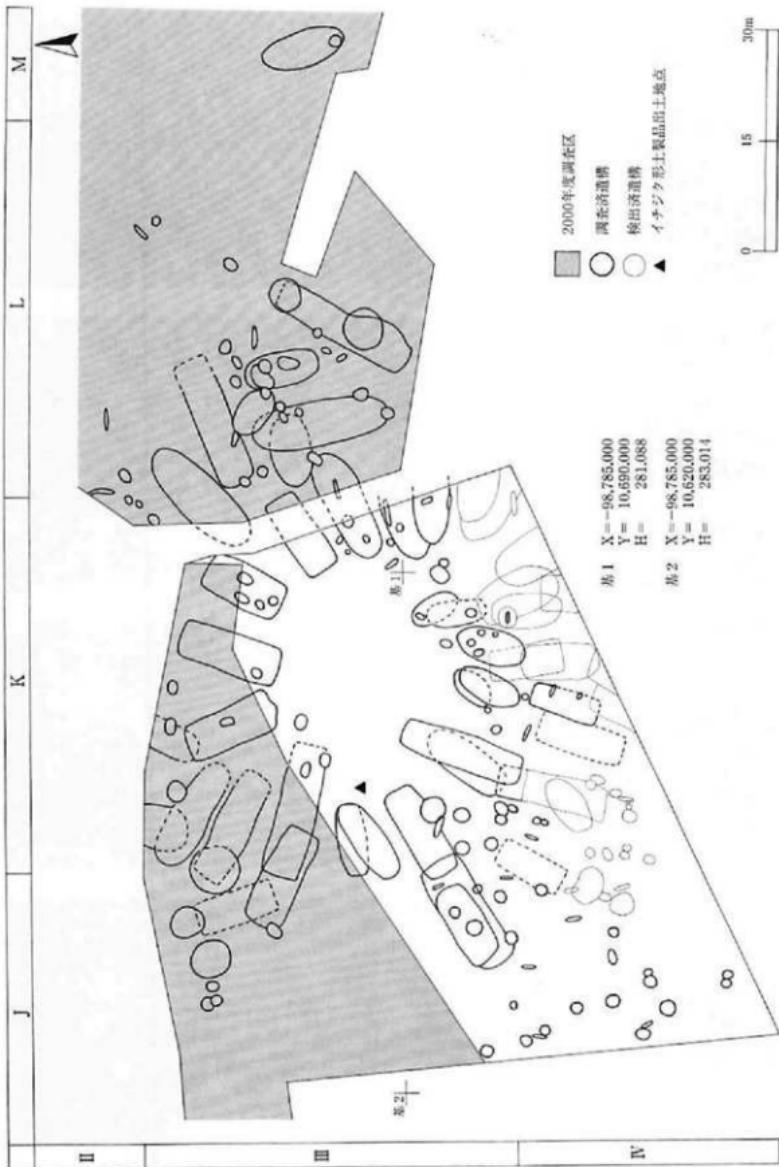
③縄文時代前期後葉の「大木5式」期にほぼ限定される集落である。

本遺跡はほぼ「大木5式」期に限定されることから、この時期の集落構造に加えて住居内部や付随する遺構、出土遺物などについての特徴が明らかとなる可能性が考えられる。

④イチジク形土製品と燕尾形石製品に代表される稀少かつ多様な遺物が出土している。

イチジク形土製品はこれまでに宮城県北部伊豆沼周辺の四つの遺跡（嘉倉貝塚、猿塚貝塚、若林遺跡、長根貝塚）から、合計14点のみ出土が確認されているものである。岩手県においてはおそらく本遺跡が初めての出土であり、宮城県北部（東北地方太平洋側）と何らかのかかわりを示すものとして注目される。また、昨年度の調査において秋田県上ノ山Ⅱ遺跡で大量かつ特徴的に出土した燕尾形石製品が出土しており、秋田県（東北地方日本海側）と何らかのかかわりを示すものと考えられる。これらのことは当時の人々の交流範囲や文化圈などを知る手掛かりとして、そしてこの集落の性格を考えていく上で貴重な資料になるものと思われる。

今回の調査の結果、昨年度調査区から続く一連の遺構群がほぼ明らかとなった。2ヵ年分の遺構数の合計は堅穴住居社約55棟、土坑・陥し穴約220基を数え、遺物量は大コンテナで土器・石器合わせて150箱にのぼる。発掘調査は来年度以降も継続して行われる予定であり、更なる遺跡の解明が期待される。



大清水上遺跡遺構配置図



調査区全景



調査区近景(北東から)



大型住居跡



埋設土器



土 坑



遺物出土状況

大清水上遺跡検出遺構・出土遺物

(7) 北田Ⅱ遺跡

所 在 地 水沢市佐倉河字前田中4-3ほか
委 託 者 国土交通省東北地方整備局
岩手工事事務所
事 業 名 水沢東バイパス建設工事
発掘調査期間 平成13年4月9日～5月7日
調査対象面積 2,000m²
発掘調査面積 900m²
追跡番号・略号 NE17-2038 KDII-01
調査担当者 菅原靖男・齋藤麻紀子
協 力 機 関 水沢市教育委員会
水沢市埋蔵文化財調査センター



遺跡位置

1:50,000 水沢

1. 遺跡の立地

北田Ⅱ遺跡はJR東北本線水沢駅の東北東約1.5kmに位置し、胆沢扇状地を東流する網状河川に浸食された沖積地に立地する。標高は約38m前後で、現況は水田である。遺跡の東方約600mを北上川が南流し、周辺には杉の堂遺跡や常盤広町遺跡などがある。

2. 調査の概要

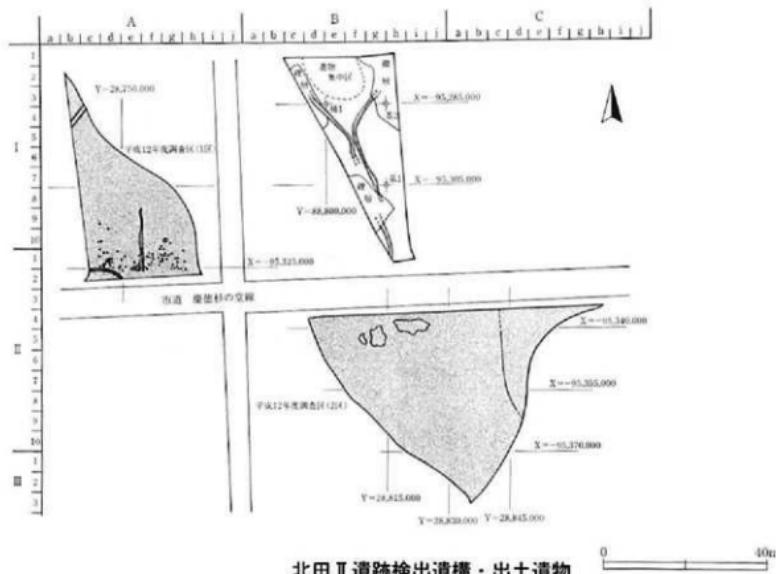
調査区は市道度徳杉の笠線の北側に位置し、昨年度調査区の1区の東側に隣接する。検出された遺構は近世以降と思われる溝跡3条である。

＜溝跡＞ 調査区西寄りの範囲で3条の溝跡を検出した。1号溝は長さ約7m、上端幅40cm～1.3m、深さ7～13cmを測る。北側は礫層によって切られるが、2号溝とつながる可能性も考えられる。2号溝は長さ約26m、上端幅60～90cm、深さ14～25cmを測る。調査区の中央付近で3号溝と接近し、北東方向に向きを変える。本遺構からは漆塗り木製椀1点と釉薬の施されていない陶器片1点が出土している。3号溝は長さ約19m、上端幅45～70cm、深さ17～28cmを測る。北端は礫層を掘り込んでいる。確認された3条の溝跡は規模も類似しており、2号溝の出土遺物から判断して全て近世以降の溝跡と思われる。

＜出土遺物＞ 大コンテナ1箱の土器と0.5箱の石器が出土しているが、全て遺構外からの出土である。僅かに土師器片もあるが、ほとんどが縄文時代晩期後葉～弥生時代に属するものである。石器は石鏃、石錐、打製石斧、凹石等が出土している。

3.まとめ

今回の調査で確認された遺構は、近世以降と思われる比較的新しいものであったが、出土した遺物の大部分は縄文時代晩期～弥生時代に属するものである。これは昨年度調査で確認された旧河道の影響によるものと思われ、周辺に当該時期の集落跡の存在が予想される。今後の周辺地域の調査によって、本遺跡の性格・全容が更に明らかになっていくものと思われる。



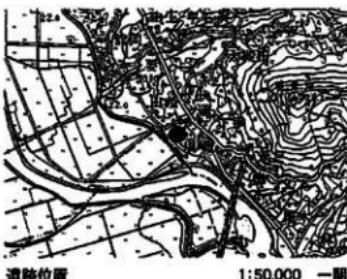
北田Ⅱ遺跡検出遺構・出土遺物



北田Ⅱ遺跡検出遺構・出土遺物

(8) 猪岡館跡第2次調査

所 在 地 平泉町民局宇須崎76-2ほか
 委 託 者 国土交通省東北地方整備局
 岩手工事事務所
 事業名 -開道水地管理用道路整備事業
 発掘調査期間 平成13年7月9日～11月16日
 調査対象面積 9,000m²
 発掘調査面積 9,000m²
 遺跡番号・略号 NE76-2347・I OT-01-2
 調査担当者 濱田 宏・吉川 徹・坂本一重
 清 浩二郎・杉沢昭太郎・中村直美
 原美津子・北出 熊
 協 力 機 関 平泉町教育委員会



1. 遺跡の立地

猪岡館跡は、JR東北本線平泉駅の東南東約2.8kmにある中世城館で、北上川によって形成された河岸段丘上に立地する。遺跡平坦部の標高は42m前後、沖積地との比高は24mほどである。調査前の遺跡の状況は、山林・原野・水田・畑地で、周辺は宅地や道路が建設され地形改変が進んでいるが、土塁や空堀の痕跡が残されている箇所も見受けられる。

2. 調査の概要

今回の調査によって確認された中世城館に関する遺構は、曲輪となる平坦部6箇所、堀跡6条、4期の門（櫓）跡を構成する柱穴12基、通路跡1箇所、柵列5条、掘立柱建物跡1棟である。このほかに、縄文時代の竪穴状造構1棟、近世の墓壙1基、時期不明の構築12条・土坑12基（縄文時代に属する可能性のあるものも含む）・柱穴状土坑132基が検出されている。

＜曲輪を構成する平坦部＞ 確認された遺構の内容と標高値から、3号平坦部と4号平坦部で主郭が構成される。想定される主郭の規模は100m×110mほどで、橢円形を呈しているものと思われる。調査区北東端の5号平坦部からは遺構が検出されなかった。

＜堀跡＞ 6条のうちの4条は、自然の汎跡を利用した空堀である。残りの2条も空堀であるが、人為的な埋め戻しがなされており、それとともに遡る土塁の一部も調査区外に観察された。いずれも築礎壁で、幅はおよそ5m、垂直高は3m前後である。

＜門（櫓）跡＞ 4号平坦部南側に礎石をもつ柱穴群が検出され、最終的に12個の柱穴から4期の門（櫓）跡を想定した。柵列との関連から少なくとも2期、最大で4期の変遷をもつものと思われる。

＜柵列＞ 3号・4号・6号平坦部の縁に5条検出されている。2条がほぼ平行して並ぶものがあるが、作り替えと思われる。

＜掘立柱建物跡＞ 4号平坦部で北東隅の一部が確認された。桁行6間に庇が付く大形の建物である。梁間

は不明である。

＜竪穴状遺構＞ 平面形は不整の長方形で、規模は2.2m×3.7mを測る。炉を持たないことから竪穴状とした。形状から縄文時代前期のものと思われるが、出土遺物が少なく詳細は不明である。

＜墓域＞ 6号墳跡の南西側に検出された。平面形は楕円形で、大きさは90cm×1.5mである。底面から寛永通寶8枚と漆膜が出土した。

＜溝跡＞ 12条検出されている。検出された地点から、柵になる可能性があるものを数条含んでいる。それ以外の所属時期は不明である。

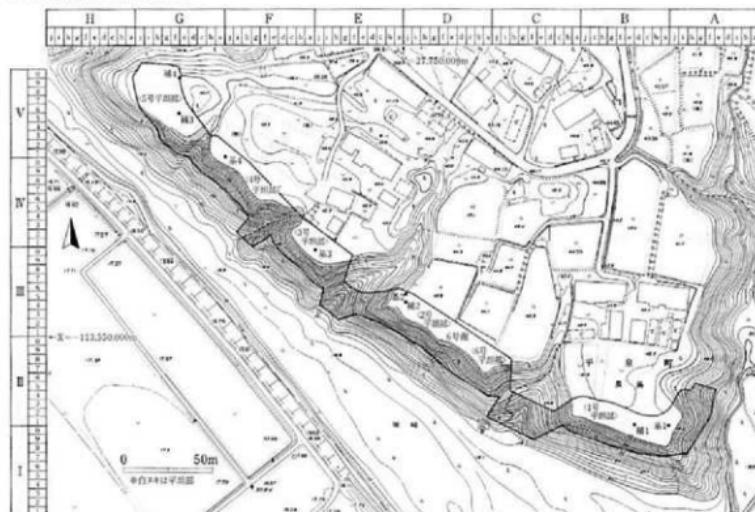
＜土坑＞ 形状などから縄文時代に属する可能性があるものは5基ほどである。他は時期が明らかでない。

＜柱穴状土坑＞ 132基確認されており、そのうち4号平坦部にあるほぼ南北方向に並ぶ數十個は、植生痕（桑？）の可能性がある。これらは掘立柱建物跡や門跡などを構成するに至らない。底面から鉄釘が出土した柱穴が1基あるが、時期は不明である。

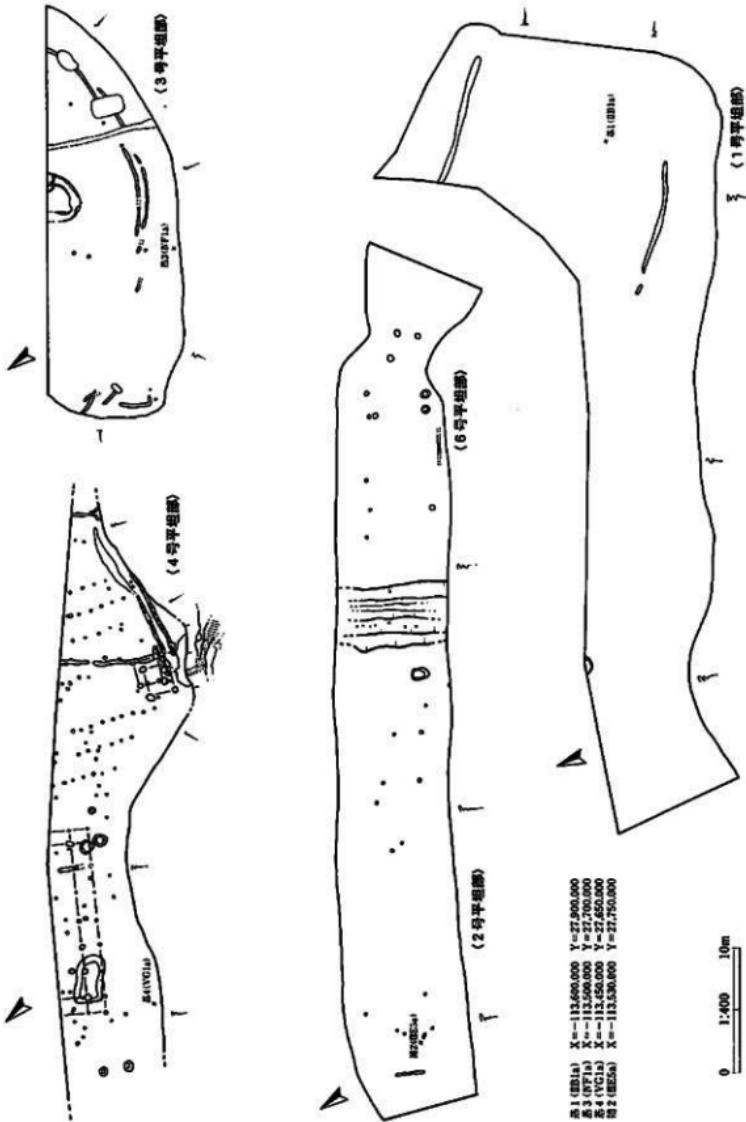
＜出土遺物＞ 陶磁器、鉄製品（釘）、縄文土器、石器類、銭貨（寛永通寶）が出土している。城館間に属する可能性のある遺物は、肥前産の志野皿1点だけである。全体の出土量も極めて少ない。

3.まとめ

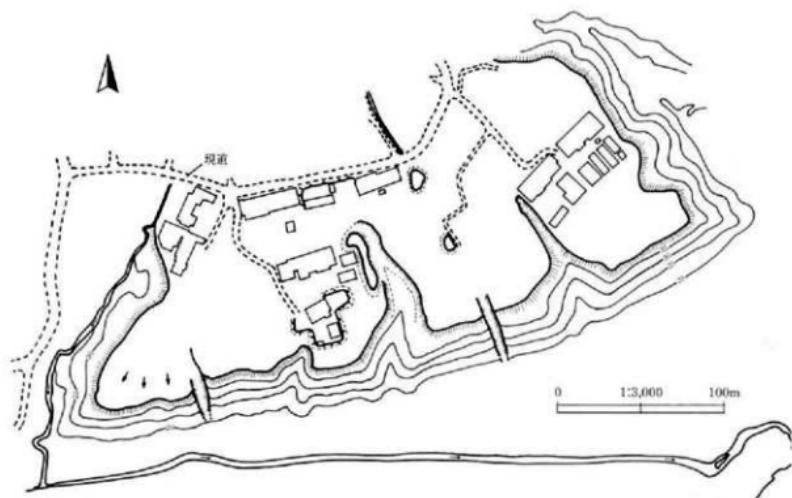
猪岡館は別称「東城」とも呼ばれ、城主は猪岡玄蕃とされる。また、猪岡氏は玄蕃の末裔、隼人の代で豊臣秀吉の奥州仕置（天正18年）によって、当地の支配者であった葛西氏とともに滅びたとされている。このことから、猪岡館が存在した時期は16世紀代を主体としていた可能性が高い。また、猪岡氏が北上川を利用した水運を掌握していたことも文献調査から推測され、この猪岡館は砦としての性格をもつだけでなく、交通・交易という重要な機能をもつたしていたものと思われる。今後は、周辺にある城館や社寺との関連についても検討していきたい。



猪岡館跡第2次調査全体図



猪岡館跡第2次調査遺構配置図



猪岡館跡縄張図



猪岡館跡第2次調査空中写真

(9) 河崎の柵擬定地

所 在 地 川崎村門崎字鏡子236-1 ほか
委 託 者 国土交通省東北地方整備局
岩手工事事務所
事 業 名 床上浸水対策特別対策事業
発掘調査期間 平成13年8月1日～11月9日
調査対象面積 5,774m²
発掘調査面積 1,000m²
遺跡番号・略号 O E 09-1173・K S G -01
調査担当者 潤 浩二郎・原 美津子
協 力 機 関 川崎村教育委員会



1. 遺跡の立地

本遺跡は川崎村役場の西北西約1kmに位置し、北上川左岸の河岸段丘上に立地している。調査前の遺跡の状況は畑地である。

2. 調査の概要

検出された遺構は、竪穴住居跡1棟、柵立柱建物跡1棟、竪穴状遺構3基、土坑29基、溝状遺構4条、柱穴状土坑180基である。

＜竪穴住居跡＞ 1棟検出されている。近世の溝状遺構と重複し、これに切られているため全体の規模は不明であるが、一边約3.7mの方形状を呈すると推測される。カマドは東側壁面に設けられ、芯材に疊や土師器壺の破片を使用している。また煙道部は残存しない。時期は出土遺物から平安時代9世紀代に属する。

＜竪穴状遺構＞ 3基検出されている。形状はいずれも長楕円形を呈し、規模は長軸が3.6～3.8m、短軸が2.2～2.3mで、遺構の性格は不明であるが、出土遺物から17世紀代の遺構と考えられる。

＜柵立柱建物跡＞ 調査区東側から1棟検出されている。規模は梁行6.0×桁行9.5m、各柱穴には建て替えと思われる切り合いが1～3基確認された。時期は江戸時代前期～中期と思われる。

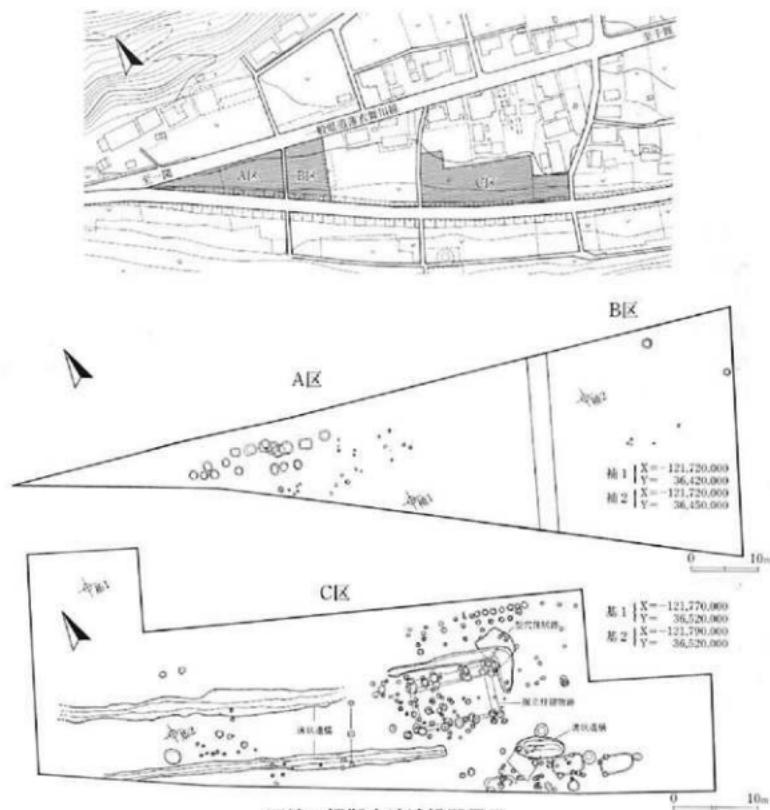
＜土坑＞ 29基検出されている。平面形は方形、円形、楕円形がある。規模は開口部径86cm～2.08m、底部径72cm～1.96m、深さは14～60cmである。時期は中世と思われるものが1基で、他は近世である。

＜溝跡＞ 4条検出されている。内2条は片端が調査区外に延び、全長は不明である。確認できた長さは最長で40m、上幅は80cm～2.30m、最深で約70cmとなっている。時期は中世～近世に属すると思われる。

＜出土遺物＞ 出土遺物は縄文土器（後期・晚期）、土師器、須恵器、かわらけ、陶磁器、石器、古銭等で、縄文土器・石器は遺構外、他は遺構内からの出土が多い。

3.まとめ

今回の調査では11世紀の河崎の柵に係わる遺構・遺物は見つからなかったが、古代～近世まで断続的に生活の場として利用されていたことが確認された。今後周辺の調査が進むにつれ、今回未調査の縄文時代をはじめとする遺跡の全容が明らかになると思われる。



河崎の柵擬定地検出遺構

II. 農林水產省關係

(10) まいざわ 米沢遺跡

所 在 地 二戸市米沢字長瀬27-1ほか
委 託 者 農林水産省東北農政局
馬淵川沿岸農業水利事業所
事 業 名 馬淵川農業水利事業
発 勘 調査期間 平成13年4月16日～6月7日
調査対象面積 600m²
発 勘 調査面積 600m²
遺跡番号・略号 IE 99-0390・MZ-01
調査担当者 杉沢昭太郎
協 力 機 間 二戸市教育委員会



遺跡位置

1:50,000 一戸

1. 遺跡の立地

米沢遺跡はJR東北本線斗米駅の北方約400mに位置する。市内を北流する馬淵川西岸に形成された河岸段丘上に立地し、遺跡の標高は100～105mである。馬淵川と遺跡がのる段丘面との比高は約25mを測る。調査区の現況は、道路・畑地である。隣接する遺跡として長瀬遺跡群がある。

2. 調査の概要

検出された遺構は、縄文時代早期の竪穴住居跡1棟・焼土9基、縄文時代の陥し穴状遺構2基、集石1基、中世と思われる堀跡1条、土坑1基（近世以降）、溝跡3条（近世以降）である。

＜竪穴住居跡＞ 縄文時代早期の竪穴住居跡が調査区の北端部から1基検出された。住居跡の規模は2.7×2.1m、堀高は30cmを測る。平面形は不整な円形を呈し埋土及び遺構の周辺からは縄文時代早期の土器が多く出土した。

＜焼土＞ 南部浮石直下の暗褐色土面にて9基の焼土を確認した。焼土は竪穴住居跡の周間に分布し、時期は縄文時代早期に位置付けられる。

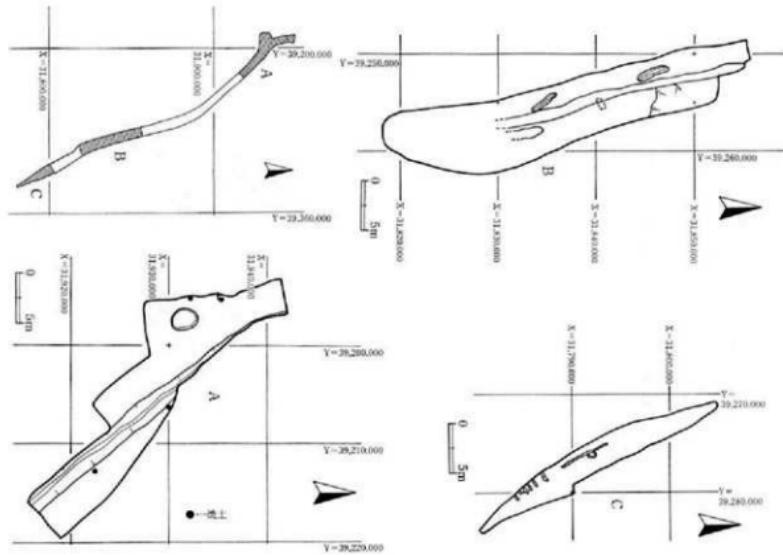
＜陥し穴状遺構＞ 調査区中央付近より2基検出した。規模は幅70cm、長さ3.1mほど、深さは1.25m前後を測る。遺構検出面から縄文時代前期以降のものと思われる。

＜堀跡＞ 調査区の北側で幅2.0m、深さ1.6mの堀跡を長さ33mほど検出した。堀は段丘縁辺部を取り囲むように延びており、堀を巡らす中世の屋敷跡の存在が想定される。堀埋土からの遺物出土は無い。

＜出土遺物＞ 縄文時代早期の土器及び石器群を主体に、縄文時代前期・中期、時期不明の鉄器などが大コシテナで17箱出土した。

3. まとめ

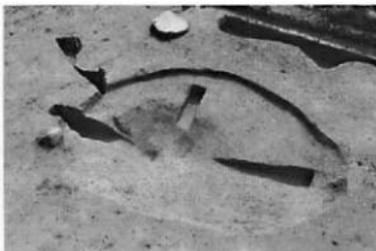
今回の調査は、米沢遺跡の中を段丘縁辺部に沿って南北に細長く調査したことになる。その結果、北側は縄文時代早期の集落と中世頃の堀を巡らす屋敷跡に、中央部は縄文時代前期及びそれ以降の狩猟場として主に利用されていたといえる。今後、隣接する長瀬遺跡群との関連を整理し、本遺跡の内容・性格を明らかにしていきたい。



米沢遺跡遺構配置図



堀 跡(北から)



縄文時代早期の竪穴住居跡

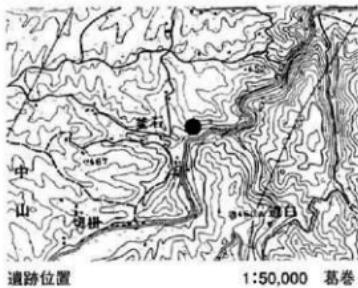


陥し穴と集石

米沢遺跡検出遺構

(11) 釜石遺跡

所 在 地 一戸町平塚字釜石29-35ほか
委 託 者 農林水産省東北農政局
馬淵川沿岸水利事業所
事 業 名 大志田ダム建設
発 墓 調査期間 平成13年4月16日～7月31日
調査対象面積 5,000m²
発 墓 調査面積 5,000m²
遺跡番号・略号 JE 69-0265・K I -01
調査担当者 杉沢昭太郎・吉川 徹
協 力 機 間 一戸町教育委員会



1. 遺跡の立地

本遺跡は、JR東北本線奥中山駅の北東約2.5kmに位置し、平塚川の北岸の緩斜面に立地している。標高は366.5～373mで、調査区の現況は畠地と休耕田で占められている。

2. 調査の概要

検出された遺構は掘立柱建物跡2棟、土坑1基、柱穴状土坑8基である。

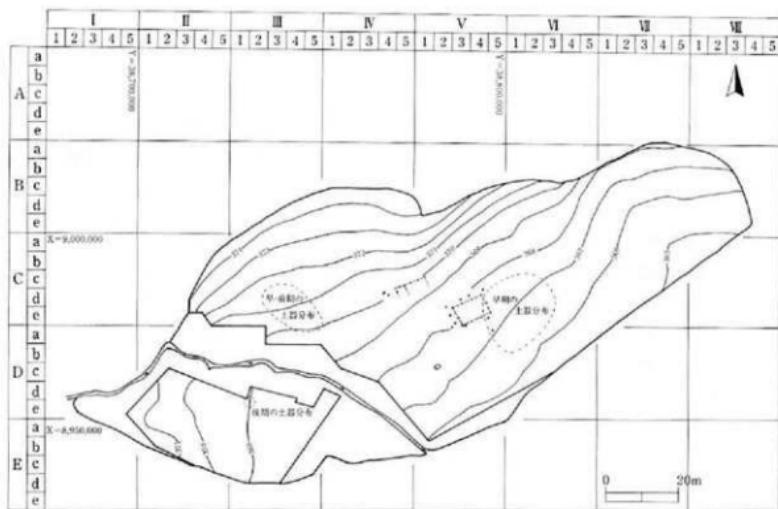
＜掘立柱建物跡＞ 2棟検出されている。共伴遺物がなく時期の特定は困難であるが、検出及び埋土の状況から、いずれも近世あるいはそれ以前のものと考えられる。規模は東側の建物が桁行3間(8.48m)×梁間2間(5.30m)、もう一棟が桁行5間(8.48m)で梁間は不明である。

＜土坑＞ 1基検出されている。検出面での規模は80×50cmで小判形を呈し、深さは60cmを測る。遺物はないが埋土及び周囲の状況から近世ないしそれ以前のものと思われる。

＜出土遺物＞ 繩文時代早期・前期・後期の土器と石器、近世の煙管が出土している。早期の土器は遺跡中央部や南東側と西側に分布し、前期の土器は遺跡中央部西側に、後期の土器は西端に分布する。出土総量は大コンテナで2.5箱である。

3.まとめ

今回の調査では、縄文時代早期・前期・後期を中心とする遺跡であることが確認された。土器の出土量、礫石器や剥片類が少ないと、住居跡や焼土の痕跡等が認められないことから各時期とも短期間に利用された場所であったと思われる。また、掘立柱建物跡及び柱穴群の存在から近世及びそれ以前において、一定期間利用されていたことも確認された。



釜石遺跡遺構配置図



調査区全景(南から)



掘立柱建物跡



土坑



遺物出土状況

釜石遺跡遺構配置図

III. 公団・公社関係

(12) 島田Ⅱ遺跡

所 在 地 宮古市大字八木沢第4地割ほか
委 託 者 岩手県住宅供給公社
事 業 名 宮古短大地区宅地造成事業
発 墓 調査期間 平成13年4月18日～12月7日
調査対象面積 21,867m²
発 墓 調査面積 15,967m²
遺跡番号・略号 L G43-0388・SMD II-01
調 査 担 当 者 小山内透・中田道・島原弘征
小林弘卓・江藤敦・井上信介
協 力 機 関 宮古市教育委員会・宮古市都市計画課



1. 遺跡の立地

島田Ⅱ遺跡はJR宮古駅の南方約2.5kmに位置し、遺跡の北東部には島田遺跡として調査が行われた岩手県立大学宮古短期大学部が隣接している。遺跡は北方向に木の枝状に延びる複数の尾根とそれに挟まれる谷(沢)からなり、標高は16~84m、今回の調査区では40~67mとなっている。調査前は勾配の急な斜面で、一部は伐採用道路となっていた。周辺遺跡には尾根続きで本来は本遺跡の一部であると考えられる島田遺跡をはじめ、平安時代の集落でもある磯薙館山遺跡、八木沢古館・新館、櫛文・弥生・古代の複合遺跡である上村貝塚など調査が行われた遺跡も多く分布している。

2. 調査の概要

今年度の調査で検出された遺構は、縄文時代の堅穴住居跡1棟、陥し穴状遺構2基、平安時代の堅穴住居跡82棟、掘立柱建物跡3棟、堅穴状遺構18棟、工房跡38棟、鉄生産関連炉跡30基、炉跡・焼土遺構24基、炭窯21基、土坑類99基、溝跡6条、貝塚2基、廃土(滓)場6箇所となっている。

〈堅穴住居跡〉 縄文時代の堅穴住居は西尾根西斜面で1棟検出された。平安時代の堅穴住居等に削平されているため、残存状態は良くない。平面形は略円形を呈し、規模は直径3m前後と推定され、石組炉をもつ。

平安時代の堅穴住居は大半の58棟が調査区の東西の標高50m以上の尾根上に位置している。平面形は隅丸方形、規模は一辻4~5m前後のものが多く、最小は一辻約2m、最大で一辻約6.5mを測る。大半の住居には貼床が施され、斜面上に位置しているものは谷側に貼床が施されているものが多くみられる。周溝が確認された住居は多くないが、斜面上に位置しているものは山側に施されるものがみられる。また、上屋を支える柱穴が見つかった住居は多くないが、確認されたものでは4本の主柱穴が配置されていた。カマドは東西南北いずれの方位にも設置されており規則性はあまりみられないものの、山側の高いほうに設置されている傾向がみられる。煙道部はくり貫き式が大半を占め、本体は粘土で構築されているものと石を材質としているものがあるが、廃棄時に破壊されているのか残存状況は良くない。西尾根の南部、東尾根では1棟の堅穴住居にカマドが複数設置されたものや、工房跡と堅穴住居が重複して検出されるなど、遺構の分布密度が遺跡内で最も高い。また、西尾根南部では尾根頂部東側に堅穴住居、西側に土坑類が検出される傾向があり、

逆に西尾根北部では尾根頂部の西側に竪穴住居が、東側に土坑類が検出される傾向が見られ、遺構の分布密度が最も高い西尾根頂部の土地利用に何らかの制約があった可能性が考えられる。

＜掘立柱建物跡＞ 東西の尾根から合わせて3棟検出している。西尾根北側の2棟は2間×1間の長方形建物で平安時代の竪穴住居跡等を整地して造てられている。東尾根の1棟は1間×1間の遺物で検出状況と出土遺物から竪穴住居とほぼ平行する年代が想定される。

＜工房跡・竪穴状遺構＞ 今回の調査で検出された竪穴状遺構のうち、床面に炉跡と考えられる焼土が検出されたものがあり、埋土中から鐵滓や羽口などの遺物が多く出土していることから、鐵生産に関する何らかの工房跡であると考えられる。その多くが斜面上に位置しており、地形的な理由からか、廃棄された竪穴住居跡を利用して工房跡を作ったり、逆に廃棄された工房跡を利用して竪穴住居跡を作るなどの重複が見られた。重複が激しいことに加えて、谷側が崩れることから、平面形・規模ははっきりしないが、平面形は長方形を呈し、長軸約3~4m、短軸約1~2mのものが多い。

竪穴状遺構は東西尾根を中心に18棟検出されている。平面形は隅丸長方形・長方形ないし梢円形を呈し、規模は長軸約3~5m、短軸約1~3mを測る。平面形・規模とも規則性はみられないものの、床面に掘り込みがあるものや埋土下位に廃棄焼土が堆積する遺構があることから、何らかの作業が行われたと思われるがはっきりしない。また、西尾根南部では遺構の重複が激しい為に一部分しか検出されなかった遺構の中で、性格が不明なものも竪穴状遺構として扱っている。

＜鉄生産関連炉跡＞ 工房跡の床面から検出された炉跡の中で、確実に鉄生産に関連する炉跡であると考えられる炉が30基検出されている。今回の調査では、原料鉄を精錬するための精錬鍛冶炉と精錬鉄から鉄製品を作る鍛錬鍛冶炉の2種類の炉が検出されている。前者は平面形は梢円形を呈し、規模は長軸で約50cm~1mを測り、炉壁の一部が残存し、炉底部には還元部が確認され、埋土中からは鐵治滓が出土している。後者は平面形は梢円形を呈し、規模は長軸で約40cm以下のものが多く占め、炉の埋土からは2cm以下の炉内滓が多量に出土するものが多い。また、炉の肩部に輪の羽口の装着口と考えられる滑や、炉周辺には鉄砧石や、その抜き取り穴と考えられる長軸約50cmのビットが検出された遺構もあり、これらと鍛造剥片・鉄砧石などの遺物出土状況から当時の鉄製品製作に関する人的な配置を推測させる工房跡も検出されている。

＜炉跡・焼土遺構＞ 炉跡は大きさが1~1.5m、深さ約60cmほどの円形や梢円形の形をした穴の中で火をたいたもので、調査区各地から検出している。焼土遺構は調査区各地から7基検出された。20~30cmの広がりをもつもので、現段階で用途不明なものを指すが、周辺から鉄生産関連遺構・遺物が出土していることから鉄生産に関連するものも含まれると思われる。

＜土坑類＞ 土坑は調査区各地から99基検出されている。平面形は円形と方形があり、方形のものは一辺が約2m弱で西尾根北部に集中してみられる。円形のものは直径約2~3m、深さ約1~2mのものも見られる。底面はほとんどが平坦で、断面形が筒状のものが大半を占める。

＜炭窯＞ 炭窯は調査区各地から21基検出された。平面形は梢円形・長方形・円形を呈し、規模は長軸約2~4m、短軸約1mを測るが、長軸2m前後のものが多くを占める。底面と壁面には一部熱を受けて赤く変色したものが認められ、埋土中に多量の炭が含まれることから、伏せ焼きの炭窯と考えられるものである。多くは斜面上に作られているが、竪穴住居が完全に埋まりきる前の窪みを利用して構築したものも見うけられる。

＜溝跡＞ 等高線に平行する溝が西尾根からそれぞれ1条ずつ検出されている。両者は延長線上にあることから一連の溝跡と考えられる。規模はそれぞれ幅約1m、長さ約14m、深さ約14cmを測る、周辺の遺構との

位置関係から昨年度検出された溝と同様に道路跡の可能性が高いものと考えられる。また、西尾根では尾根の北側を区切るかのように幅約1.5m、長さ約23m、深さ約20cmの溝跡が竪穴住居を壊して構築されている。

＜貝塚＞ 西尾根北部・東尾根で各1基発見された竪穴住居・土坑が完全に埋まりきる前の堆积に捨てられて形成された貝塚が検出された。範囲は約1.3×1mの広がりがあり、厚さは約10cmを測る。総量は大コンテナ4箱出土した。貝の種類はイガイが多く見られる。

＜陥落穴状遺構＞ 東尾根南西部と西尾根南部から各1箇検出されている。東尾根のものは開口部径約3.4m×70cm、深さ約90cm～1mを測る。西尾根南部のものは両端を竪穴住居に切られているため全容は不明だが、残存部分は開口部径約2m×30cm、深さ約60cmを測る。

＜廃土（津）場＞ 調査区西尾根南部と中央部西斜面と東斜面、東尾根先端部より6箇所検出された。東西尾根より検出された4箇所は埋土中より遺物が出土しないことから、斜面上の竪穴住居・工房等を構築する際にてた掘削廃土の広がりと考えられる。その広がりは約3.5～9m、厚さ約10～60cmを測る。西尾根中央東斜面より検出された2箇所は埋土中より鉄滓等が多く出土することから斜面上の工房から廃棄された鉄滓が堆積した廃津場と考えられる。その広がりは約3.3～6m、厚さ12～40cmを測る。

＜出土遺物＞ 今回の調査で出土した遺物は縄文土器・石器、平安時代の土師器・須恵器・羽口・炉喉・鉄製品・鉄塊系遺物・鉄滓類・近世陶器などが出土している。

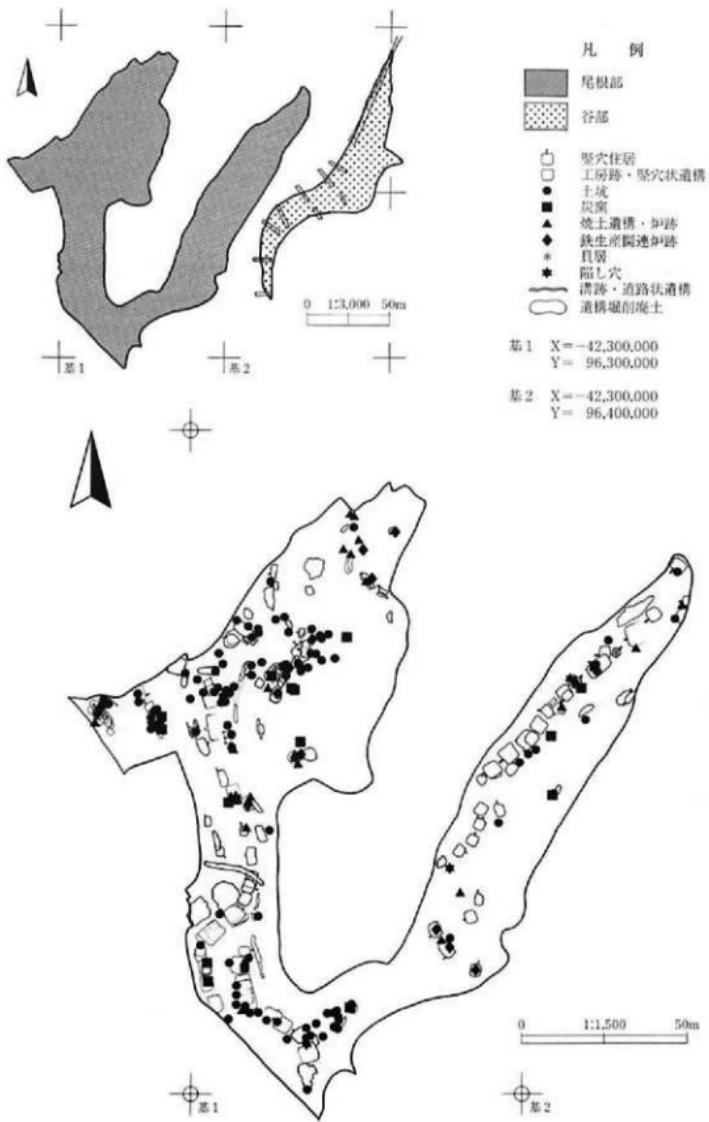
縄文時代の遺物は、縄文土器は小コンテナ1箱、石器は石礫が数点のみと量的には少なく、ともに斜面や沢の表土から出土している。

平安時代の遺物は、土器類（土師器・須恵器）が大コンテナ12箱、石器類（鉄床石・砥石・磨石等）が大コンテナ17箱、羽口が大コンテナ6箱、炉喉が大コンテナ2.5箱、鉄製品が約200点、鉄滓類（鉄塊系遺物・鍛造鋤片を含む）が大コンテナ26箱出土している。遺構数の多さに対し遺物の出土量は少ないが、大半は遺構内からの出土である。羽口・炉喉・鉄滓類の多くは鉄生産関連遺構や廃津場から出土しており、遺構と関連した出土状況を示している。

鉄製品は鎌先、鉄鏃、紡錘車、斧、刀子、祭具、釘、釣針等が出土している。残存状況は比較的良好で遺構内を中心に出土している。特に鎌先3点とは完形ないし大型の刀子は、いずれも竪穴住居の床面から出土している。

3.まとめ

今年度調査区では前年までの調査結果と同様、平安時代の竪穴住居群と鉄生産関連遺構が検出された。昨年度と比較して尾根部では竪穴住居を中心に工房・土坑等が密集して検出されていることから集落における中心居住域的性格をうかがわせる結果となった。谷部では昨年度と同様に精鍛鍛冶炉・鍛鍊鍛冶炉が検出されていることから、鉄製品の生産加工を中心とした工房域的性格をもつことが想定されている。平成11年度調査区では、製鉄関連の炉跡が検出されることから本遺跡は製鉄から鉄製品生産までの一連の作業を行う鉄生産に関連する古代の大集落で、特に今年度調査区は集落の中心域であることが明らかとなった。本遺跡は、次年度調査予定の東側調査区においても、試掘調査の結果から今年度と同程度の遺構の分布密度を示していることが明らかとなっており、今後の調査成果を含めた整理の中で、当該地域における古代の鉄生産の様相が明らかにできるものと思われる。



島田 II 遺跡遺構配置図



島田Ⅱ遺跡調査区全景



重複する竪穴住居



工房跡



精錬炉冶炉跡



銀錬炉冶炉跡



遺物出土状況(土師器・甕)



遺物出土状況(土師器・甕)



鑄先出土状況



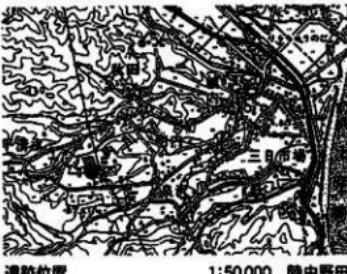
防護車出土状況

島田Ⅱ 遺跡検出構造・遺物出土状況

IV. 岩手県・市関係

ひらしみず
(13) 平清水Ⅱ遺跡

所 在 地 野田村大字野田第22地割53番地ほか
委 託 者 久慈地方振興局
久慈農村整備事務所
事 業 名 ふるさと農道野田地区
発掘調査期間 平成13年8月20日～11月9日
調査対象面積 1,100m²
発掘調査面積 350m²
遺跡番号・略号 JG 60-0224・HSM II-01
調査担当者 金子昭彦・坂部恵造
協 力 機 間 野田村教育委員会



1:50,000 陸中野田

1. 遺跡の立地

平清水Ⅱ遺跡は、三陸鉄道陸中野田駅の南西約2.5kmにある。明内川右岸の河岸段丘上にあり、段丘上は東流する沢に間折されながらかな丘陵状を呈す。遺跡は、このなだらかな丘陵の北端にある。今回の調査範囲は遺跡の北限に沿い、明内川に下る崖際に位置し、川との比高は約20m、標高は65m前後で、現況は山林と水田である。

2. 調査の概要

今回の調査では予想以上に多くの遺構が検出されたため、検出作業は調査範囲全体を行ったが、精査は今年度の工事（水路変更）にかかる部分を中心にして350m²を調査することになった。

今年度精査した遺構は、竪穴住居跡2棟、土坑33基、陥し穴状遺構5基、炉跡2基、焼土15基、配石遺構1基である。竪穴住居跡と土坑2基は古代（平安時代）で、陥し穴状遺構は縄文時代中期の可能性があり、その他はほとんどが縄文時代前期後半になるものと思われる。

＜竪穴住居跡＞ 2棟調査した。いずれも古代で、1棟は調査範囲中央付近にあり、3×3.5mほどの規模でカマドを東壁に持つ。掘り込み式のようカマド本体は石組みの比較的立派なものである。もう1棟は西端にあり、一辺が約5mで比較的大きく南側の調査範囲外に続く。北壁にカマドを持つが、壊されているようで残りは悪い。2棟とも出土土器が少ないので時期を特定しにくいが、平安時代のようである。

この他、炉跡としたものは、縄文時代前期後半～中期初頭の竪穴住居跡であった可能性が高い。また、来年の調査範囲中央付近には該期の大型住居跡らしいものが検出されている。

＜土坑＞ 33基精査し、覆土・検出状況、出土遺物から、2基が古代、その他は縄文時代、中でも前期後半のものが多い。縄文時代の土坑のほとんどは、フラスコ状土坑であるが、本遺跡の特徴は、口が非常に細く断面形が三角形に近いものが多いことで、中には、口の直径が約30～40cm、深さ約1.4m、底の直径約1.5mというものもある。深さは1.5m前後に集中するが規模は様々で、底径が1.5m程度のものが多いが、中には3m近いものもある。調査範囲全体に広がるが、連続と続くというより数基ずつ幾つかの地点に群在する。検出面では重複しているものは少ないが、前述の特徴的な形態のため底は重複している場合が多い。

古代の土坑のうち1基は、調査区中央の堅穴住居跡の埋土途中から掘りこまれたもので、 1.5×1 m程度の隅丸長方形の土坑である。底に一抱えもある砾が出土した以外遺物は出土しなかった。もう1基は、調査区西側の堅穴住居跡の東側に隣接し、一辺2mの隅丸方形、埋土が一部埋めもどしたような土で、下部には炭化物が見られ焼土粒が多く見られた。形からは物置などの施設の可能性がある。

＜陥し穴状遺構＞ 溝状で底が極端に狭く陥し穴と考えられている土坑である。5基調査したが、調査区西側の古代の堅穴住居跡と重複するものは不明な点が多く、陥し穴状遺構ではないかも知れない。その他は、いずれも埋土上部にクロボク土が見られ、縄文時代の土坑を切り古代の土坑に切られるものがあることから、縄文時代中期～古代のものと推測される。さらに、村が途絶えた後は森にもどるまで草食動物のえさになる低い草が生え、動物が寄ってくることが多いという民俗学の知識などから、縄文時代中期の可能性があろう。基本的には調査範囲内に点在しているが、来年度の調査予定地には検出されなかった。

＜炉跡・焼土＞ 土器理設炉が2基、西側の古代の堅穴住居跡の北西隅に検出されたが、その後の調査で床らしいものが確認されたので、堅穴住居の炉であった可能性が高い。縄文時代前期後半～中期初頭のようである。焼土は、15基精査し来年の調査予定地にも検出されている。幾つかの集中地点が見られ、特に中央よりやや西の部分では10基集中する。形成された層からいずれも縄文時代前期後半の可能性が高い。

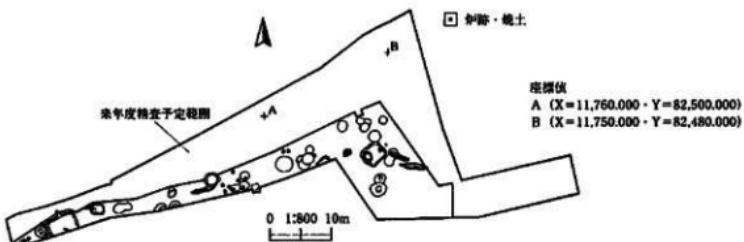
＜配石遺構＞ 配石遺構は、楕円形に石を組んだもので、規模が1m未満(60×40cm)と小さく通常は炉跡とされるものである。しかし、石は全く火を受けておらず焼けた土も発見されなかつて、配石遺構とした。調査範囲中央付近の土坑上に1基検出している。

＜出土遺物＞ 土器は、縄文土器が大コンテナ17箱、土師器が20点ほど出土している。縄文土器は、前～中期のもので(ほとんど全て円筒下肩a式～円筒上肩b式)、前期末～中期初頭が主体を占める。石器類は、中コンテナ6箱出土し、石器製作時の調片が約半分を占める。その他、琥珀が4点出土しているが、壊れてしまつたので加工品かどうかは不明である。石製垂飾品等も出土している。

3.まとめ

今回の調査では、縄文時代前期後半～中期初頭の村の跡、縄文時代中期(以降)の狩りの場、古代(平安時代)の村の跡が発見された。後二者については来年の調査区には広がらないようである。

縄文時代前期後半～中期初頭の村の跡は、堅穴住居跡(未精査)、炉跡、焼土、土坑、配石遺構などが発見された。調査範囲が狭く細長いため村全体の様子は分からなかったが、土坑、焼土には幾つかの集中地点が見られ、堅穴住居跡は調査範囲の西端と中央付近に偏るようである。野田村での本格的な発掘調査は、岩手大学の草間俊一氏の調査以来32年ぶりである。調査は来年も続き、その成果が期待される。



(14) 梅の木沢遺跡

所 在 地 軽米町大字小軽米第17地割字
玉川向平85-1ほか
委 託 者 二戸地方振興局土木部
事 業 名 荒廃砂防事業
発掘調査期間 平成13年8月1日～11月9日
調査対象面積 2,600m²
発掘調査面積 400m²
遺跡番号・略号 J F15-0344・UKS-01
調査担当者 村木 敏・星 幸文
協 力 機 関 軽米町教育委員会



1:50,000 調査中大野

1. 遺跡の立地

梅の木沢遺跡は、軽米町役場より南東約20km、山形村との境に位置している。遺跡はウチナイ沢と山から東流する沢とが合流した上流、標高350m前後の河岸段丘上に立地している。現況は山林・原野である。

2. 調査概要

今回は、調査区北半部分の遺構検出及び排溝場の掘り下げを行っている。検出された遺構は、高殿と鍛冶炉、排溝場である。ただし、排溝場以外の遺構は、来年度に主体部の調査を行うため遺構名や遺構数に変更があるものと思われる。

＜高殿＞ 道路の北西部に位置し、最も標高の高い平坦な面を利用し建てられている。その内部では製鉄炉、押立柱1基、用途不明の炉跡1基、炭置き場などを確認した。また、粘土で貼り床や配石により間取りが行われていると考えられる部分、高殿の壁と考えられる盛土が施されている部分などが確認され、高殿の内部配置が明らかとなる。

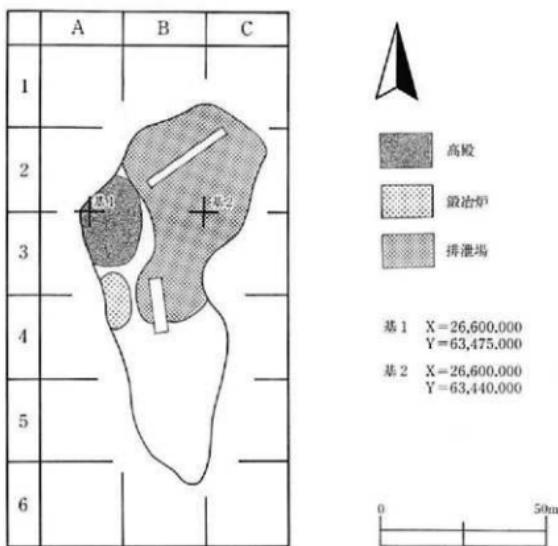
＜鍛冶炉＞ 高殿の南側に位置し、緩斜面に存在する平坦部で検出した。検出状況としては焼土と炭化物の広がりを見せており、この周辺で羽口と椀形鍛冶炉が表採されているため、現段階ではこのような扱いをしている。

＜排溝場＞ 高殿の北東から南東にかけての広範囲に位置している。最も厚いところで約1.8mあり、鉄滓や炉壁などが交互に堆積していることを確認した。

＜出土遺物＞ 出土遺物は近世陶磁器、寛永通宝、釘や鍼などの鉄器、鉄滓・炉壁である。近世陶磁器は肥前や大隅相馬、小久慈産のものが出土した。排溝場からの鉄滓と炉壁の出土量は土納袋で約3,000袋、その重量は45～60トンである。

3.まとめ

今回の調査は、遺構検出と排溝場の掘り下げにとどまったが、本道路内の高殿・鍛冶炉・排溝場などの位置関係が明らかとなった。来年度の本調査で、鉄山内の建物配置や製鉄炉の下部構造が明らかにされるものと思われる。



梅の木沢遺跡遺構配置図



調査前風景(北東から)



排溝場第1トレンチ完成状況



本年度調査終了時風景

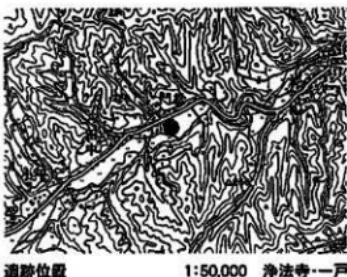


排溝場第1トレンチ断面

梅の木沢遺跡検出遺構

(15) 門松遺跡

所 在 地 二戸市下斗米字門松55ほか
委 託 者 二戸地方振興局
二戸農村整備事務所
事 業 名 中山間地域総合整備事業斗米地区第
5号埋蔵文化財発掘調査委託事業
発掘調査期間 平成13年7月16日～10月31日
調査対象面積 4,900m²
発掘調査面積 4,900m²
遺跡番号・略号 I E 98-1271・KM-01
調査担当者 佐々木信一・木村ひかり
協 力 機 関 二戸市教育委員会



1. 遺跡の立地

門松遺跡は、JR東北本線斗米駅の西約5kmに位置し、馬淵川の支流である十文字川北岸の河岸段丘上に立地している。標高は150～151m、十文字川との比高は5～6mである。遺跡の現況は水田である。

2. 調査の概要

検出された遺構は、竪穴住居跡13棟（縄文時代3棟、奈良時代3棟、平安時代7棟）、竪穴住居跡状遺構2棟、掘立柱造物跡3棟、土坑24基、柱穴状小土坑270基、陥入状遺構6基、溝跡1条、溝状遺構15条である。出土した遺物は、大コンテナ8箱分で、内訳は縄文土器、土師器、須恵器、石器、土製品、鉄製品である。

<竪穴住居跡>

（縄文時代の竪穴住居跡）3棟とも調査区域南東部から検出された。そのうち2棟は直径約5mの円形で、換気口から約60cm掘り込まれている。時期は出土遺物から後期初頭と考えられる。残りの1棟は、炉と柱穴のみの検出である。出土遺物がなく時期は特定できない。

（奈良時代の竪穴住居跡）調査区域北東部、南東部、中央部からそれぞれ1棟ずつ検出された。特に中央部のものは大型住居跡で、平面形は隅丸方形で、規模は8×7.7mある。カマドは、3棟とも北壁または北西壁に設置されている。

（平安時代の竪穴住居跡）7棟検出された。大きさ・形状は、一辺が5m前後の隅丸方形のものがほとんどであるが、中には一辺が約8mの隅丸方形をした大型住居跡もある。また、焼失住居跡も1棟ある。カマドの設置場所の方角は特に定まっておらず、南壁や東壁に設置されるなど様々でありカマドの作り替えをしている住居跡もある。

7棟のうち5棟の廃土には十和田a降下火山灰が含まれていることから、これらの住居跡は平安時代前半のものと考えられる。

<竪穴住居跡状遺構> 調査区域中央部から北部にかけて2棟検出された。それぞれの規模（平面形）は、

3.5×3.3m（隅丸方形）、4.2×2.8m（隅丸長方形）である。埋土には、十和田a陣下火山灰が含まれている。埋土中の出土遺物から奈良時代と考えられる。

＜獨立柱建物跡＞ 調査区域東部、南部、北西部からそれぞれ1棟ずつ計3棟検出された。大きさは東部が2間×2間、南部が2間×1間である。また、北西部の建物跡は寄棟造と考えられるが、西側の一部は削平されており、柱穴は検出できなかった。3棟とも時期は特定できない。

＜土坑＞ 24基検出された。平面形は円形、隅丸方形、隅丸長方形など様々である。出土遺物はなく、時期や性格については不明である。

＜柱穴状小土坑＞ 270基検出され、調査区域東部と中央部に集中している。時期や性格については不明である。

＜陥し穴状遺構＞ 溝状の陥し穴状遺構が6基検出された。長軸方向は南西→北東が5基、南→北が1基で、最大のものは幅1.75m、長さ5.85m、深さ95cmである。

＜溝跡＞ 1条検出された。調査区域南西部から東に向かって延び、途中から北東に向きを変えている。途中には土橋が設けられている。全長は約60m、幅は90cm～1.85m、深さは60～95cmである。掘り方は、箱築研掘りで、一部片箱築研掘りの部分がある。埋土上部には、十和田a陣下火山灰が含まれている。奈良時代と考えられる。

＜溝状遺構＞ 調査区域北東部から13条、南東部から2条検出された。北東部から検出された13条のうち12条は、幅20～60cm、長さ2.1～11.7m、深さ2.6～22.8cmで、1.5～1.8mの間隔でいずれも南西→北東の方向に延びている。残り1条は一部が住居跡に切られている。規模は幅53～60cm、長さ8.5m、深さ6～15cmであり、南東→北西の方向に延びている。南東部から検出された2条は幅17～25cm、深さ5.8～13cm、長さ6～7.4mであり、南南東→北北西の方向に延びている。これらの溝状遺構は時期や性格については不明である。

＜出土遺物＞ 大コンテナで8箱出土し、ほとんどが遺構内からの出土である。内訳は繩文土器、石器、土師器、須恵器、土製品、鉄製品で、そのうち土師器が大部分を占める。繩文土器は後期初頭の深鉢、石器は石鏃、磨製石斧、磨石などである。土師器・須恵器は、壺や壺である。特に土師器では、墨書きされた壺や、体部下半部を粗い龍目調整をし、底部を丸底風にする北陸地方の特徴を持つ長胴壺が出土している。土製品は紡錘車と勾玉、鉄製品は刀子である。また、壺の羽口も出土している。

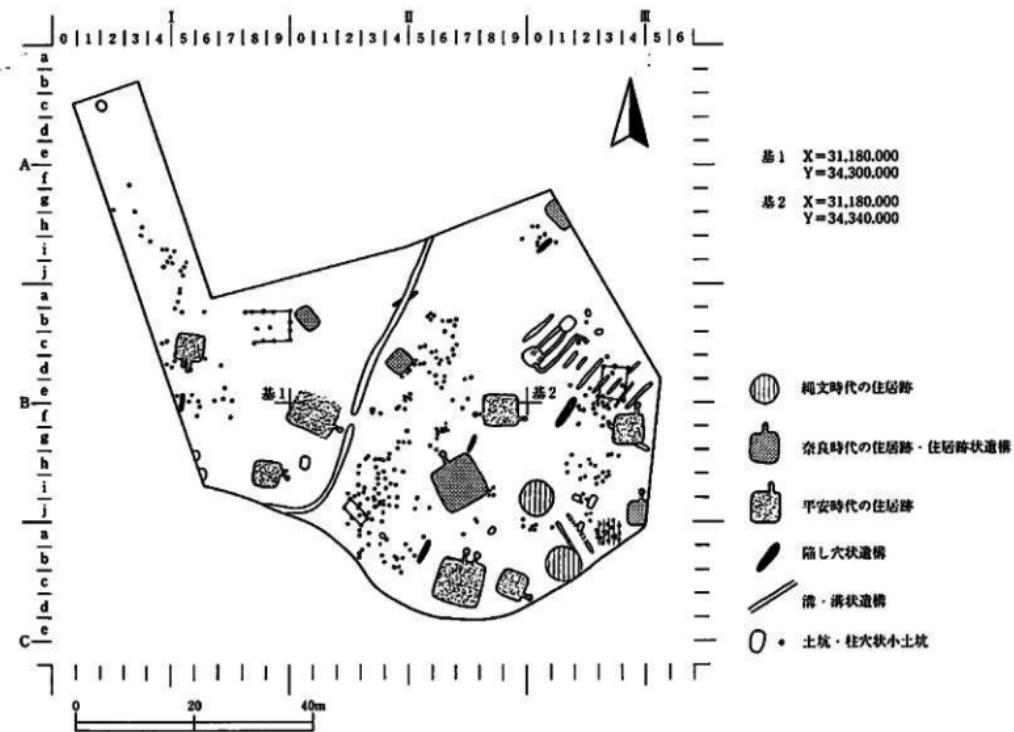
3.まとめ

調査の結果、本遺跡は、縄文時代、奈良時代、平安時代の複合遺跡であることが判明した。陥し穴状遺構や竪穴住居跡が検出されたことから、縄文時代には狩場として使われた時期もあったが、縄文時代、奈良時代、そして平安時代へと集落が営まれてきたことがわかった。

また、平安時代の住居跡から墨書きされた壺が出土したが、これは岩手県北地方における墨書き土器の出土例が少ないとから、同地方における墨書き土器の研究の良い資料になると見える。さらに紡錘車や羽口が出土したことや北陸地方の土師器壺の特色を持つ長胴壺が出土したことは、当時の人々の生業や他地域との交流を考える上で貴重な資料が得られたといえる。

門松遺跡遺構配置図

- 15 -

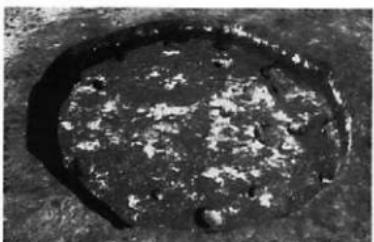




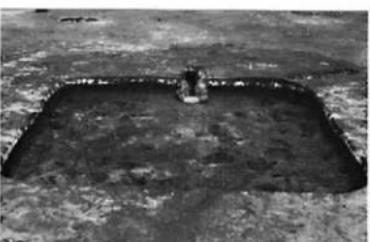
調査区近景(調査前)



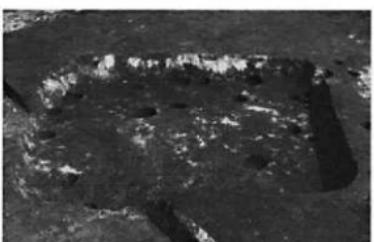
陥し穴状遺構



住居跡(縄文時代)



住居跡(奈良時代)



竪穴住居跡状遺構(奈良時代)



焼失住居跡(平安時代)



溝状遺構



溝跡(南側)

門松遺跡検出遺構

(16) 浅石遺跡

所 在 地 二戸市似田島字坂ノ坂19-1
委 託 者 二戸市地方振興局土木部
事 業 名 緊急地方道路整備
発掘調査機関 平成13年4月12日～7月6日
調査対象面積 2,030m²
発掘調査面積 2,030m²
遺跡番号・略号 JE 18-0396・AI-01
調査担当者 斎池賀広・小松剛也
協 力 機 関 二戸市教育委員会



1. 遺跡の立地

本遺跡は、JR東日本二戸駅から南西方向約4kmに位置し、安比川右岸に形成された河岸段丘上に立地する標高は約140mである。

2. 調査の概要

今回の調査は、平成12年度からの継続調査である。検出した遺構は、竪穴住居跡3棟・土坑15基・焼土遺構4基・柱穴状ピット57基である。その他に縄文時代後期中葉～後葉・弥生時代中期～後期の遺物包含層を確認した。

本遺跡の出土遺物は、大コンテナで約20箱である。時代は縄文土器（後期中葉～後葉・晩期前葉～中葉）・弥生土器（中期～後期）である。土製品は土偶・スタンプ形土製品・円盤状土製品等が出土し、石器は、石鏃・石匙等の剥片石器と石錘・凹石・磨石・石斧の環状石器が出土した。石器の中でも石鏃が半数以上の割合を占める。また、剥片石器の石材として、黒曜石を使用しているものも数点出土している。石製品としては、ヒスイ製の勾玉が出土した。遠隔地との交易を窺わせるものである。他に近世の遺物として瀬戸・美濃産陶器片（いわゆる志野）が1点出土している。

＜竪穴住居跡＞ 3棟が検出した。3棟は縄文時代後期中葉～後葉と思われる。壁際に柱穴を持ち、出入り口が確認されたものもある。

＜獨立柱建物跡＞ 1棟が検出した。4本柱で構成されるもので、時代時期は縄文時代後期中葉～後葉の可能性がある。

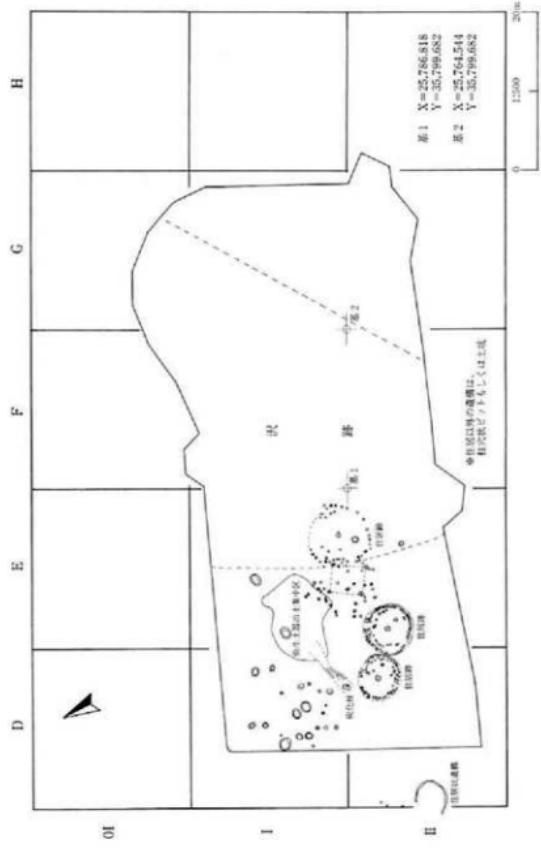
＜土坑＞ 15基検出された。うち縄文時代後期中葉～後葉と推測されるものが8基である。

＜焼土＞ 4基検出された。焼成は良好ではないが、このうち弥生時代の面で2基検出された。

＜柱穴状ピット＞ 57基検出された。検出状況から縄文時代後期中葉～後葉のものと思われる。

3.まとめ

2箇年に亘って継続調査が行われた結果、竪穴住居6棟と土器大コンテナ31箱・石器9箱の大量の遺物資料を得ることが出来た。特にも縄文時代後期中葉～後葉の竪穴住居跡と本県で出土例が比較的少ない弥生時代中期～後期の遺物は貴重な成果資料と言えよう。東北地方に類例をもとめ、広い視野で多角的に比較・検証し、遺跡の性格を明らかにしたいと考えている。



縄文時代後期中葉～後葉
穿穴住居跡から出土した単孔土器



縄文時代後期中葉～後葉
穿穴住居跡から出土した単孔土器



浅石遺跡遺構配置図・検出遺構・出土遺物

(17) 早坂平遺跡

所 在 地 山形村大字川井第4地割37番地
5ほか
委 託 者 久慈地方振興局土木部
事 業 名 地方特定道路整備（代行）
発 墓 調査 期間 平成13年5月11日～12月12日
調査 対象 面積 1,895m²
発 墓 調査 面積 785m²
遺跡番号・略号 JF46-0039・HST-01
調査 担 当 者 北村忠昭・長村克稔
協 力 機 関 山形村教育委員会



1:50,000 陸中関

1. 遺跡の立地

早坂平遺跡は、山形村役場の北東約3kmに位置し、沿岸北部を流れる久慈川の支流で山形村内を南西から北東に流れる川井川と、同村内をほぼ南北に流れる遠別川の合流地点の河岸段丘上に立地する。標高は229～234mである。現況は畑地である。なお、今回の調査区は平成元年に東京大学の安斎正人氏を中心に行われた調査区の西侧にあたる。

2. 遺跡の概要

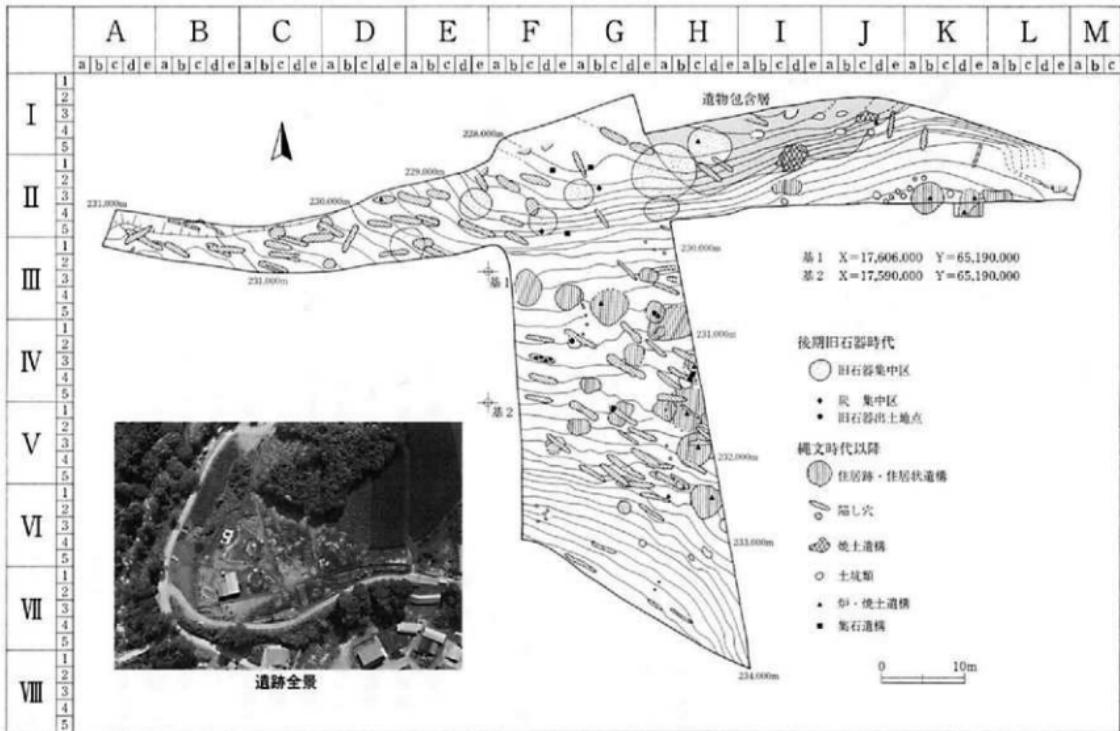
検出された遺構は縄文時代竪穴住居跡21棟、住居状遺構3棟（縄文時代前期前葉1棟、縄文時代に属するもの2棟）、縄文時代前期の陥し穴状遺構9基、中期末以降の陥し穴状遺構88基、フラスコ状土坑4基、用途不明の土坑類（柱穴状土坑含む）43基、焼土遺構7基、集石3基、磨製石斧集中箇所1箇所、前期前葉～中葉の土器を中心とする遺物包含層1箇所、旧石器の集中区7箇所、旧石器時代の炭化物集中区2箇所である。
＜竪穴住居跡＞ 竪穴住居跡の時期毎の内訳は、縄文時代前期前葉～中葉の住居跡6棟（方形3棟、卵形1棟、円形1棟、不明1棟）、中期後葉～末葉の住居跡4棟（円形3棟、不整円形1棟）、前期に属すると思われる住居跡5棟（円形2棟、楕円形2棟、長楕円形1棟）、中期に属すると思われる住居跡6棟（円形4棟、不明2棟）である。

＜出土遺物＞ 出土した遺物は大コンテナで土器が18箱、石器が13箱である。土器はすべて縄文土器（早期～晚期）であり、前期前葉～中葉のものが中心である。石器は縄文時代の石鏃や石匙などの剥片石器が多いが、他に後期旧石器時代の石器（搔器、削器、石刃、細石刃等）が800点以上出土している。この他に土製品（土製円盤）や石製品（玦状耳飾）、炭化種実（クルミ等）などが出土している。

3.まとめ

今回の調査で検出された遺構や遺物から、縄文時代前期前葉および中期後葉は集落として、縄文時代中期末以降は大規模な狩猟の場として利用されていたことが明らかになった。また、今年度の成果のみならず、来年度の調査によって、後期旧石器時代の石材产地遺跡の様相を解明する上で貴重な資料を提供できると思われる。

有坂平遺跡遺構配置図



(18) 和野 I 遺跡

所 在 地 田野畠村和野104ほか
委 託 者 宮古地方振興局岩泉土木事務所
事 業 名 公共下水道整備(代行)事業
発 墓 調査 期 間 平成13年7月6日～11月1日
調査 対象面積 2,635m²
発 墓 調査面積 2,479m²
遺跡番号・略号 K G 23-1047・WN I -01
調査 担 当 者 赤石 登・高瀬克範
協 力 機 閣 田野畠村教育委員会



1. 遺跡の立地

本遺跡は、三陸海岸北部の高位段丘面上、現在の和野地区から平井賀と島越のあいだに流れ出る竹平沢の頂部付近に位置している。現在の海岸線からの直線距離は約2km、標高は約180mである。本遺跡の範囲は、西和野と平井賀をむすぶ村道に沿って東西に長く括られているが、今回の調査区は段丘の縁に近い遺跡の周縁部にあたる。

2. 遺跡の概要

調査区は、大きく二つに区分される。下水処理場本体の用地である南側の広い部分を南側調査区と呼び、村道から処理場への進入路となる細長い部分を北側調査区と呼ぶ。検出した遺構および出土遺物は、次のとおりである。

＜堅穴住居跡＞ 繩文時代の堅穴住居跡を3棟、平安期の堅穴住居跡を9棟検出した。繩文時代の住居跡はいずれも南側調査区に位置している。隅丸長方形のプランをもつものが1棟、約1/2が調査区外に伸びているが円形もしくは指円形になると考えられるものが2棟検出された。出土遺物は少ないが、繩文前～中期に属するものと考えられる。

平安期の堅穴住居跡は、南側調査区で8棟、北側調査区で1棟を検出した。遺構内からの出土遺物はやはり少ないが、土師器、コハク原石、鉄製品、鉄滓が出土した。住居跡はいずれも上面が耕作による削平を受けているが、南側調査区の住居跡の残存状況はとくに悪く、床面の一部のみが残存し全体のプランが把握できないものもある。多くの住居で扁平な砂岩・泥岩がカマド袖の芯材に使用され、煙道は東から北東方向を向いている。

＜掘立柱建物跡＞ 南側調査区で1間×2間の掘立柱建物跡1棟を検出した。出土遺物はなく、上面が耕作による削平を受けており残存状況は良くない。

＜捨て場＞ 北側調査区で2箇所の捨て場を検出した。北部の捨て場は、大部分が調査区外に存在しているが、十和田中源火山灰(To-Cu)と考えられるテフラの上位から繩文時代前期～中期初頭の遺物が出土している。南部捨て場ではテフラの上下に捨て場が形成されているが、遺物のはほとんどはその上位から出土する。時期は、やはり繩文時代前期～中期初頭の中にはおさまる。

＜焼土＞ 調査区全体で7基の焼土が検出された。堅果類をはじめとする植物遺体、および焼骨が含まれているものがある。

＜土坑＞ 調査区全体で89基の土坑が検出された。北側調査区北端部および南側調査区西部・東部の3箇所に土坑の集中域がある。出土遺物は少ないが、北側調査区北端の土坑群には縄文時代中期の遺物を含むものがあり、フ拉斯コ状貯蔵穴と考えられるものも1基ある。南側調査区の土坑も時期比定の材料に乏しいが、出土遺物から近世の墓坑と考えられるものや、検出層から縄文時代の土坑と考えられるものも存在している。

＜集石遺構＞ 北側調査区および南側調査区からそれぞれ1基ずつ集石遺構を検出した。下面に焼土を伴うものと周辺から鉄滓が出土したものがある。

＜埋設土器＞ 南側調査区で1基の土器埋設遺構を検出した。

＜出土遺物＞ 土器は、大コンテナで250箱が出土し、この大半が南部捨て場から出土した縄文時代前期後半～中期初頭の土器によって占められている。精製土器の組成率が比較的低く、県北半～三陸沿岸のローカルな組成をもった土器群である可能性が高い。大多数は大木5～7a式および円筒下層c・d式であるが、調査区全体では大木8a・8b式、円筒上層a～c式および縄文後・晩期の土器、平安期の土師器もわずかながら見られる。

石器は中コンテナで10箱出土しており、石鏃、石匙、石錐、スクレイパー、石核、剥片、異形石器、磨製石斧、磨石、敲石、カツオブシ形石器、石皿、台石などが出土している。

このほか、玦状耳飾をはじめとする石製品、ホホジロザメおよびアオザメの齒、鉄製品、鉄滓、コハク原石、寛永通宝などが出土し、フローテーションによって各遺構から中型哺乳類や魚類などの動物遺体、および雜穀類や堅果類をはじめとする植物遺体も得られている。

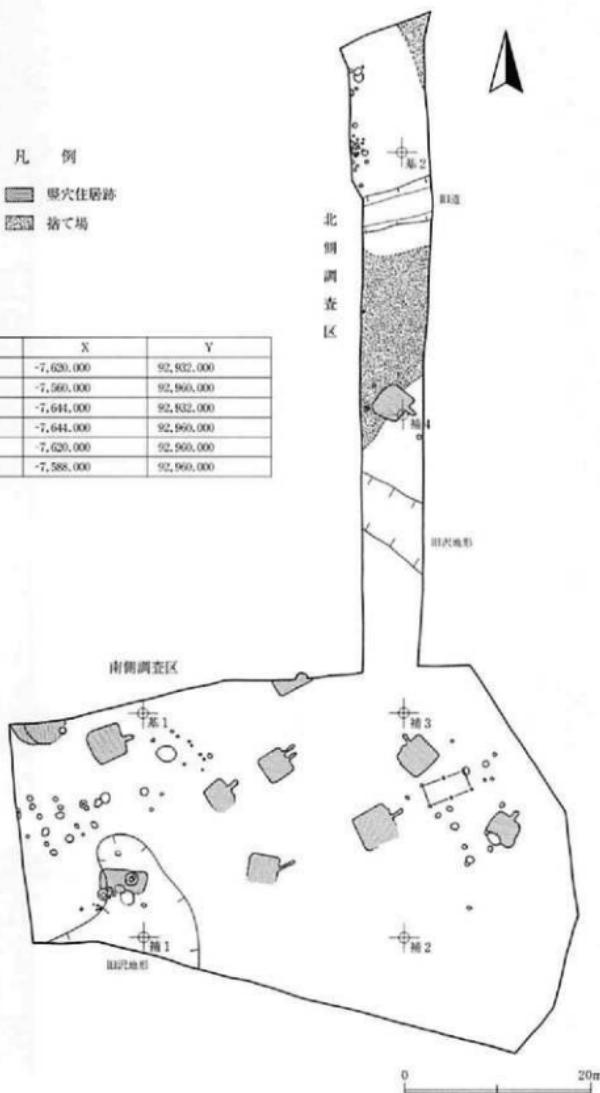
3.まとめ

和野I遺跡の調査により、縄文時代の集落・捨て場、および平安時代の集落跡の内容が明らかとなった。捨て場の時期は縄文時代前期後半～中期初頭を中心とするが、これまで田野畠村内ではまとまった資料がなかった当該期の土器・石器群としては、質・量ともにもっとも充実した資料体と評価される。捨て場の遺物出土量に比して住居数が少ないと予測される。平安時代の集落跡については、出土土器や床・カマドの構築法が隣接地域との比較の手がかりとなる。また、組織的なフローテーションによってえられた動・植物遺体もヤマセ地帯における食性復元のための貴重な資料となるため、今後基礎的なデータの提示をおこなってゆきたい。

凡　例

- 墓穴住居跡
- ▨ 捜て場

	X	Y
墓 1	-7,630.000	92,932.000
墓 2	-7,560.000	92,960.000
補 1	-7,641.000	92,932.000
補 2	-7,644.000	92,960.000
補 3	-7,620.000	92,960.000
補 4	-7,588.000	92,960.000



和野 I 遺跡遺構配置図



調査区全景



南部捨て場断面



竪穴住居跡



遺物出土状況(南部捨て場)



和野 I 遺跡検出遺構・遺物出土状況

(19) 飯岡林崎II遺跡第1次調査

所 在 地 盛岡市下飯岡4地割248番ほか
 委 託 者 盛岡地方振興局土木部
 事 業 名 緊急地方道路整備事業
 主要地方道盛岡と賀線改良工事
 発 勘 調査期間 平成13年4月13日～11月30日
 調査対象面積 5,602m²
 発 勘 調査面積 3,532m²
 遺跡番号・略号 L E 26-1005・I HK II-01-1
 調査担当者 村上 拓・中村絵美
 協 力 機 関 盛岡市教育委員会



1. 遺跡の立地

飯岡林崎II遺跡は、盛岡市の南西部、JR東北本線仙北町駅から南西3.5kmに位置し、遺跡の北方を流れる零石川によって形成された沖積地に立地する。現況は水田で、削平・盛土によって旧地形は改変を受けているが、本来は頻繁に流路を変える零石川旧河道と、それに伴う自然堤防及び後背湿地が入組み、複雑な小起伏をもった地形であったとみられる。

2. 調査の概要

調査区は盛岡と賀線の東西両側に沿った細長い区域で、さらにそれぞれの調査区内を農業用水路が南北に横断している。そのため調査できない区域があり、当初5,191m²の範囲を対象としていたが、今年度はそのうち3,121m²を調査した。また、南端の旧河道において縄文時代晩期末～弥生時代中期の遺物が検出されたため、調査区を南側に411m拡張して、合計3,532m²の調査を行った。

検出された遺構は、竪穴住居跡24棟、土坑11基、溝54条、柱穴状ピット約300基、掘削痕多数、捨て場1箇所である。

＜竪穴住居跡＞ 竪穴住居跡は、遺跡の中でも高い区域に分布している。いずれの住居跡も埋土の下層には十和田a降下火山灰を含まないため、少なくとも火山灰降下時点にはすでに廃絶していた。平面形は方形で、一辺が6.7mから2.3mと大小あり、4m前後のものが多い。カマドの向きは概ね西側と東側に分かれ、大部分がくり貫き式の煙道をもつ。カマドの袖は地山の土で構築されている例が多く、芯材として砾や土師器壺片などが使用される。

焼失した痕跡を残している住居跡も多く検出された。このうちC2区の南端部の焼失住居跡は、住居に使用されたと思われる板状・棒状・カヤ状の炭化材が床面全体に広がって検出された。住居内北西部の主柱穴には断面形が長方形の柱材が残存しており、西壁付近では多量の炭化米がブロック状に固結した状態で出土した。

＜溝跡＞ 溝跡は、埋土における十和田a降下火山灰のあり方からその降下前後に分かれる。降下前の溝は東西方向に走り、遺跡の中でも低い区域に何条も平行して検出された。B1区とB2区のものは連続すると

思われるが、道路東側のD2区では検出されなかった。溝の幅は約20~30cm、溝と溝の間隔は1.6~2.0mほどで、削平されてしまっているため本来の深さは不明だが、残りの良いところで25cm程度である。溝の側面に沿った工具痕や、逆ハの字状に掘削された痕跡が確認でき、一定の幅に規制しようとする意図がくみ取れる。幅、間隔、方向、埋土とも共通することから同じ性格を持つ遺構と考えられるが、水が流れた様子は観察できず、溝の機能については検討を要する。

＜掘削痕＞ 掘削痕には、広範囲に広がりを持つものと、溝状にいくつも交差するものがある。前者は十和田a降下火山灰を含み住居跡を切っているため平安時代集落の形成時期よりも新しい遺構である。底面には下位の層をかき混ぜたような亂れが見られ、水田耕作の痕跡に類似する。後者は遺跡のなかでも若干低い区域に広がる。数条が平行し、東一西・南一北方向に直交、あるいはこれと若干傾いて交差する。底面には掘削の際の工具痕が確認され、被削部では底面の工具痕のみ残存している。幅は20~30cm程度であるが、削半を受けており本来の幅・深さ等は不明である。遺物が出土しておらず明確な時期は不明だが、埋土の性状から集落形成時期とあまり差はないと考えている。

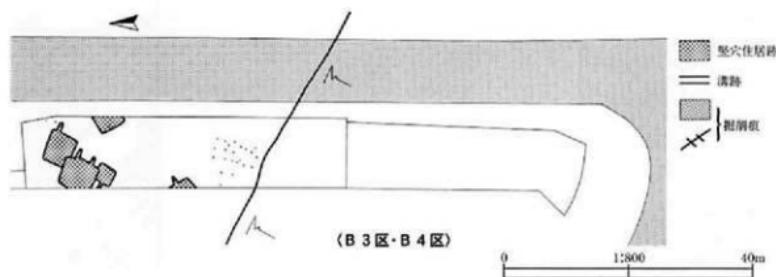
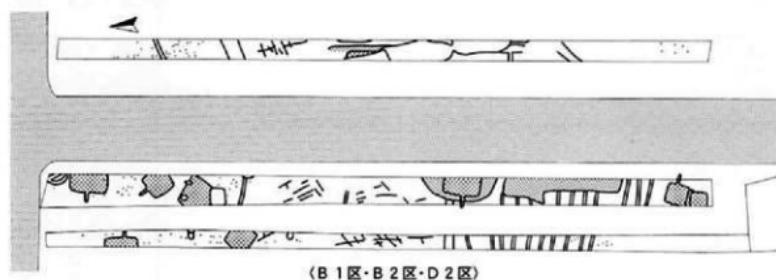
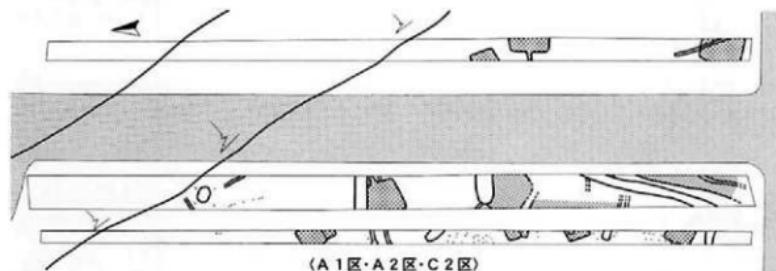
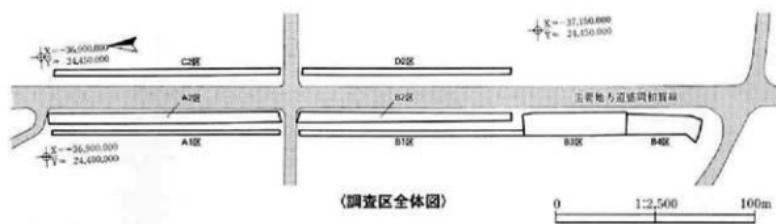
＜柱穴状ピット＞ 壇穴住居跡と同様に遺跡の中でも若干高い位置に多く分布しており、礎石や碇板・根固め石が用いられる例も複数検出されている。埋土に十和田a降下火山灰を含むものと、含まないものとが混在するが、今後掘立柱建物跡を構成するかについて検討をしてみたい。

＜旧河道・捨て場＞ 南北両端の旧河道は、集落形成時期にはすでに埋没し一段低い湿地になっていたと思われる。旧地表面を覆うように十和田a降下火山灰層が水平に堆積しており、北端旧河道ではこの火山灰層の下位層から大量の須恵器・土師器が出土した。これらの土器片は住居跡群が広がる南西側（居住域）から北西側低位面の湿地へ投棄されたものと解釈される。一方、南端旧河道では、縄文時代晩期末～弥生時代中期の土器が河道底面にはりつくように出土している。復元可能な個体が複数あることから、付近に該期の集落の存在が想定されるが、調査区内では検出されなかった。

＜出土遺物＞ 遺物は大コンテナで20箱出土し、大部分が平安時代の土器である。遺物の種類は、土師器、須恵器、羽口、纺錘車、小刀、錢貨、木製品（輪・下駄）、炭化米、炭化材、骨片、縄文時代晩期末～弥生時代中期の土器、石匙等である。

3.まとめ

今回の調査で本遺跡は、平安時代の集落跡であることが明らかになった。南北両端の旧河道の内側に沿った区域は遺跡の中でも若干高くなってしまっており、壇穴住居跡がまとまって分布する居住域となっている。この南北の居住域に挟まれる調査区中央部分は低くなっていて、掘削行為の痕跡や平行する溝跡が検出されている。調査区西側の区域では過去の調査で円面鏡が出土しており、集落の範囲は調査区よりも広がっていると思われる。性格不明な遺構の設施及び集落内構造の詳細について、次年度以降の調査成果とあわせて検討を行ってみたい。



飯岡林崎Ⅱ遺跡第1次調査遺構配置図



焼失住居跡(C2区)



焼失住居跡(C2区)柱穴断面



北端旧河道(A2区)遺物出土状況



竪穴住居跡(B3区)



竪穴住居跡カマド(A2区)



平行する溝跡(B1区)



堀削痕検出状況(B1区)

飯岡林崎Ⅱ遺跡第1次調査検出遺構

(20) 台太郎遺跡第35次調査

所 在 地 盛岡市向中野字向中野37-2ほか
委 託 者 盛岡市都市整備部盛南開発課
事 業 名 盛岡市新都市計画整備事業
発掘調査期間 平成13年4月17日～8月2日
調査対象面積 4,320m²
発掘調査面積 4,394m²
遺跡番号・略号 L E 16-2296・ODT-01
調査担当者 阿部眞澄・西澤正晴
協力機関 盛岡市教育委員会



1. 遺跡の立地

台太郎遺跡は、JR東北本線仙北町駅の南西約900mに位置し、宇石川左岸の河岸段丘上の標高120mに立地している。今次調査区は3つに分かれている（北からC・A・B区と呼称）が、いずれもほぼ平坦な地形である。A区は北側に第18次調査区、東側に第36次調査区に、C区は西と南側を18次調査区と隣接する。調査前の状況は住宅地と畠地であった。

2. 調査の概要

今回の調査は、住宅地の間の3つの調査区からなり、いずれの調査区も現況の建物の基礎、排水管などの影響を受け、残存状態はよくなかった。その中で、堅穴住居跡16棟、住居状遺構1棟、土坑5基、溝跡11条、柱穴群等が検出された。

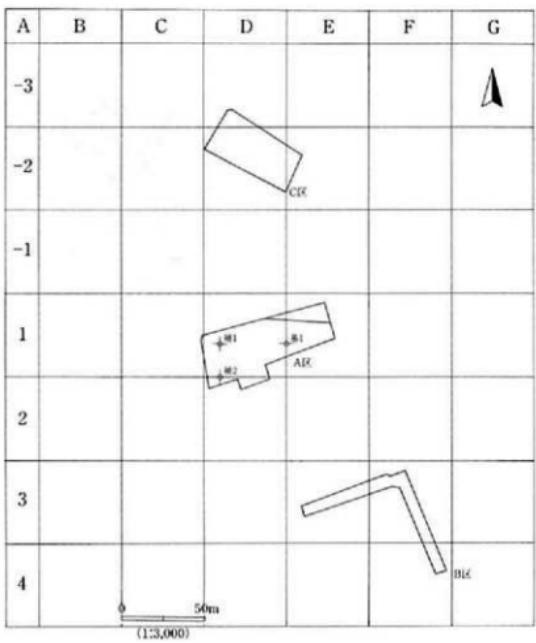
＜堅穴住居跡＞ 奈良時代の堅穴住居跡5棟、平安時代の堅穴住居跡12棟の計16棟が検出された。A区では、奈良時代の堅穴住居跡が3棟検出されたが、調査区全体が後世の擾乱を受けているのにに対し残存状態は比較的良好であった。3棟いずれも北壁中央部にカマドをもち、構築方法にはくり抜き式（1棟）、掘り込み式（2棟）がある。住居内に貯蔵施設と考えられる土坑や棚状施設と推定される施設が付属する例もある。これらの堅穴住居は、カマドの輪郭方向や出土遺物から奈良時代に属するものと考えられる。B・C区でも奈良時代の堅穴住居跡が1棟ずつ検出されたが、後世による擾乱や他住居との重複が著しい。

平安時代に属する堅穴住居跡は11棟あり、すべてC区から検出されている。3棟を除き9棟はすべて調査区北西隅に重複して存在する。この場所は調査前には住居として使用されていた建物の基礎や排水溝などにより遺構上部の大半が削平されていた。カマドは擾乱や重複により壊されているため判別としないがいずれも掘り込み式であると推定される。カマドの方位は東を向く例が多い。

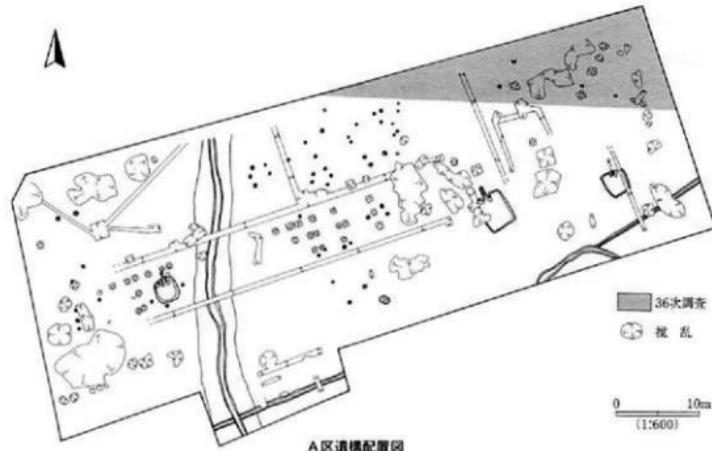
＜住居状遺構＞ C区南西部に単独で位置する。平面形は2.5mの正方形形状を呈し、深さは約20cmである。埋土から土器師杯が出土しており、それから判断すると平安時代に属するものと考えられる。

＜土坑＞ 土坑はA区南部に位置する。遺物の出土が無く時期を決定するのは困難である。

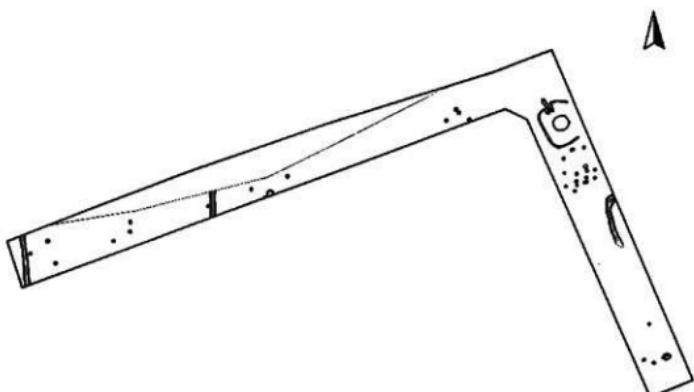
＜溝状遺構＞ 3つの調査区あわせて11条検出された。A区中央やや西にはしる溝は、旧河道を利用したものであり、南北に続く。出土遺物もないことから時期が不明であるが、これまでの調査結果を参照すると平



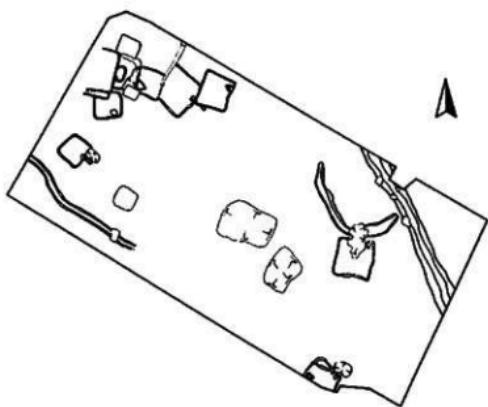
基準杭 1 X = -35,530.000
Y = 26,700.000
補助杭 1 X = -35,530.000
Y = 26,660.000
補助杭 2 X = -35,550.000
Y = 26,660.000



台太郎遺跡第35次調査遺構配置図



B区遺構配置図



C区遺構配置図

台太郎遺跡第35次調査遺構配置図

安時代に属する可能性が高い。その他の溝についてもその性格や時期は不明である。

＜柱穴状土坑群＞ A・B調査区の全域でみられるが、とくにA区中央付近にやや多く存在する。このすぐ北側では第18次調査の結果、中世の建物群の存在が判明しているため、これらもそれに付随する建物跡であると推定される。しかし、擾乱や未調査の区域があるため建物跡と認定するまでに至らなかった。

＜その他の遺構＞ 焼土や性格不明の土坑がある。後者はC区北西角にあり、住居に伴う土坑の可能性があるが、周辺が削平され壁が一辺も存在しないなど判然としない。

＜出土遺物＞ 大コンテナで、6箱の遺物が出土している。大半が土師器であり、約8割を占める。残りは須恵器で、縄文土器も若干出土している。また、鉄製品（刀子片）や玉類（勾玉）、土製品（紡錘車）も少量ながら出土している。出土土器の大半を占める土師器は、奈良時代（古墳時代末を含む）と平安時代のものとに大別される。

3.まとめ

今回の調査では、後世による擾乱のため遺構・遺物ともに多大な影響を受けていたが、上記のような成果をのこすことが可能となった。奈良時代の竪穴住居跡は、比較的散在し重複がなく、平安時代に属する竪穴住居跡は密集し重複がはげしいという状況が看取でき、これまでの調査結果とも矛盾することはない。細かな時期については今後の課題であるが、これまでのところ奈良時代の集落と平安時代の集落はスムーズに移行せずいくらかの時期差が存在することが判明している。つまり、9世紀初期の段階には集落の形成が途切れている状況が窺えるのである。この点は志波城との関係も含めて今後の検討課題となろう。



奈良時代の竪穴住居跡



奈良時代の竪穴住居跡



調査区全貌

台太郎遺跡第35次調査検出遺構

(21) 熊堂B遺跡第13次調査

所 在 地 盛岡市向中野字千刈田2-23ほか
 委 託 者 盛岡市都市整備部盛南開発課・地域振興整備公団岩手総合開発事務所
 事 業 名 盛岡南新都市開発整備事業
 発 埋 調 査 期 間 平成13年8月1日～11月2日
 調 査 対 象 面 積 4,009m²
 発 埋 調 査 面 積 3,751m²
 遺 跡 号 略号 L E 16-2118・OKO-01-13
 調 査 担 当 者 阿部眞澄・高木晃
 協 力 機 関 盛岡市教育委員会



1. 遺跡の立地

熊堂B遺跡は、JR東北本線仙北町駅の西約1.5km、零石川右岸の微高地上に位置する。今次調査区は南側が畠地と宅地跡、北側が道路で占められ、過年度におこなわれた第1・4・10次調査区に隣接している。標高は123m前後と概ね平坦であるが、その中でも若干の高低差がみられ、北側から東側にかけては微高地の縁辺部にあたっている。

2. 調査の概要

今次調査で検出した主な遺構は、竪穴住居跡9棟（奈良時代4棟・平安時代5棟）、掘立柱建物跡8棟（古代2棟・近世6棟）、土坑11基、竪穴状遺構1基、溝路6条である。

遺跡の層序については、I層灰褐色土、II層灰白色火山灰ガラス粒子含黑色土、III層黒色土、IV層黒褐色土、V層暗褐色土、VI層褐色地山シルト層であり、VI層上面とV層上面に於て古代の遺構を検出した。

なお、調査区北側では削平により段丘崖の一部が削られているとともに、NTTケーブルの埋設のため遺構の全容について把擱できない部分もある。

＜竪穴住居跡＞ 調査区全体から古代の竪穴住居跡9棟を検出した。そのうち調査区南側標高123.10～123.20mの微高地上で検出した4棟の竪穴住居跡の規模は、約3～3.5m四方、床面積10m²前後である。カマド煙道は溝状で検出され、天井部は残存しない。煙道が不明な1棟を除き、いずれも北西壁中央部分に構築されている。これら4棟はロクロ未使用の窓中心の出土遺物とカマドの向きにより、奈良時代の竪穴住居跡と考えられる。

一方、調査区北側で検出した4棟の竪穴住居跡と南側の1棟は、ロクロ使用の环とあかやき土器を中心とした出土遺物、並びに南側の1棟について埋土上層にみられる灰白色火山灰により、平安時代の竪穴住居跡とみられる。規模は約3.5～5m四方、床面積12～25m²と南側の住居跡に比べやや大きい。カマドは北側の重複する住居以外は南東壁に構築され、掘り込み式とくり貫き式で付近には貯蔵穴等の施設もある。南側の1棟は約3.5m四方、カマド煙道は北向きの掘り込み式である。壁面に沿って均質な黒色土が残存しており、焼化粧土の可能性がある。

＜掘立柱建物跡＞ 調査区南側で7棟、北側で1棟検出した。南側の7棟のうち、1棟は2間×2間の規模である。埋土に灰白色火山灰ブロックを含む柱穴があることから重複する竪穴住居跡と同時代の建物跡と考えられるが、うち1基がカマド烟道をもつており時期差をもつとみられる。他の6棟は南東部標高122.90～123.10mに位置し、表土付近からの近世陶磁器類と柱穴埋土中の窓水通寶出土により、近世の掘立柱建物跡と考えられる。うち4棟については、2棟ずつの主軸方向の一致と柱穴の重複状況により建て替えが想定される。調査区北側の建物跡は2間×1間の規模、時期を決定できる遺物はないが、付近の竪穴住居跡群と同じ平安時代の可能性が高い。

＜土坑＞ 調査区南側から3基、北側から8基検出した。規模は直径50cm～3m、深さ30cm～1m、平面形は円形・梢円形・溝状・不整形等である。このうち、南側の1基は狭い溝状で断面はV字形を呈する陥穴状土坑である。また北側には完形の内壁の坏が出土した土坑や、一部が焼成をうけ壺が半分に割れ伏せられた状態で出土した土坑がある。これらの土坑については平安時代の土坑と考えられるが、他については時期や性格は不明である。

＜竪穴状遺構＞ 調査区北側で1基検出した。規模2.1×3.5m、平面形は不整形、重複する竪穴住居跡より新しい。地山砂層を底面としており、竪穴住居跡にみられる粘土による貼床は施されていない。

＜溝跡＞ 調査区南側で4条、北側で2条検出した。規模は、長さ10～75m、幅30cm～2.5m、深さ30cm～1mと様々で、出土遺物も多くなく、時代を特定することは難しい。北側の1条は調査区を南北に縦断する浅い溝跡であるが、3棟の竪穴住居跡と1基の土坑を切ることから、これらの遺構より新しい。

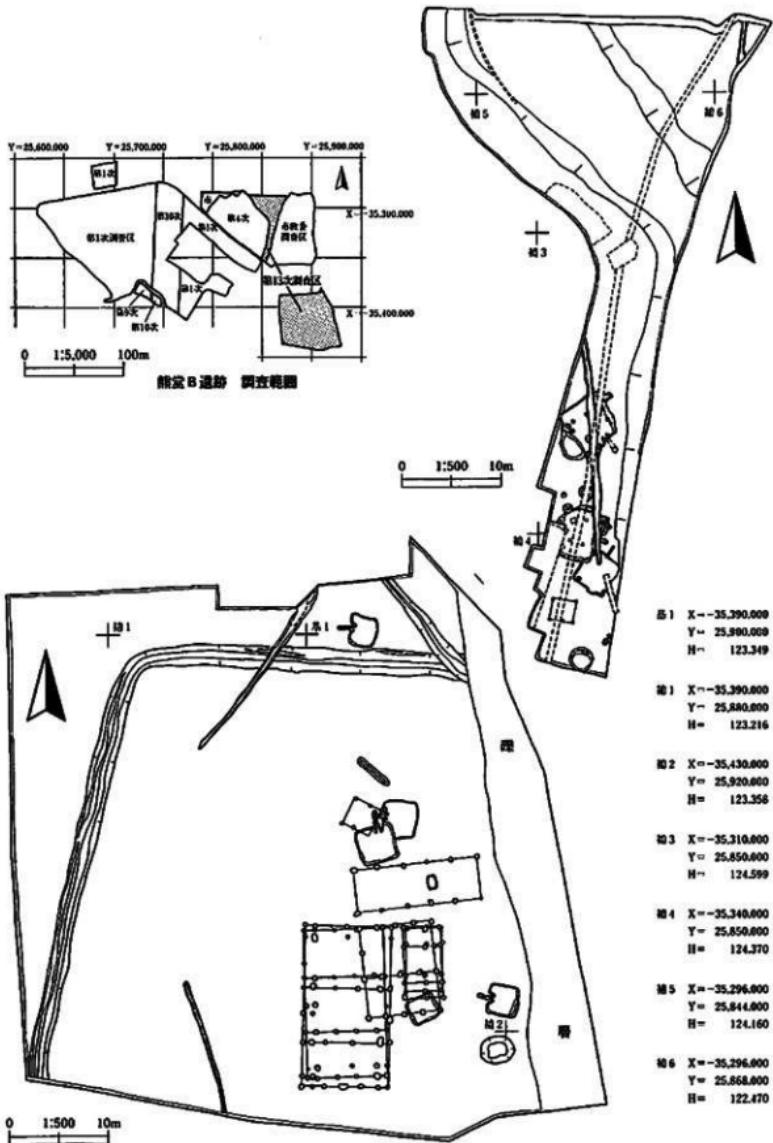
また、南側の1条に関しては、長さ75m、最大幅2.5m、深さ1m、調査区南側の北西と南東を分けるようにし字に曲がっている。埋土上層に灰白色火山灰粒子を含むこと、埋土下層から須恵器壺（体部）が出土することにより、古代の集落を区画する性格を有する溝の可能性もある。

＜出土遺物＞ 遺物は大コンテナで4.5箱出土した。種類は、土器（土師器・須恵器・あかやき土器）、石器（砥石）、土製品（土錐）、鉄製品（刀子・鎌）、古錢である。土器については、調査区南側でロクロ未使用的壺の割合が高く、略完形の壺や片口土器が出土、調査区北側ではあかやき土器が多く、器物が認められる坏も出土している。

3.まとめ

今次調査は、過年度の調査結果より古代集落の広がりを予想して行った。その結果、古代に属すると推定される遺構は、調査区南側の段丘へ微高地から奈良時代を中心にした竪穴住居跡、土坑、溝等を、調査区北側の微高地からは重複した形で平安時代（10世紀代）を中心とした竪穴住居跡、竪穴状遺構、土坑、溝等を検出した。これは過年度の調査から導き出された、古代熊堂集落の主体が今次調査区を含む北～東側に向かって展開するという予想を裏づけるものであろう。一方で、調査区南側で奈良時代の竪穴住居跡が認められたことから、古代集落はある時期には南側の微高地沿いにも展開していた可能性がある。また、調査区南側は、近世の掘立柱建物跡の検出と少數ではあるが近世の陶磁器類の出土により、近世以降の住居や作業小屋等が存在し、人々の生活の場として使われていたとも考えられる。

今次調査のまとめと来年度以降の調査を総合することで、古代熊堂集落の全容がより明確にされていくことが期待される。





調査区全景



調査区北側 検出状況



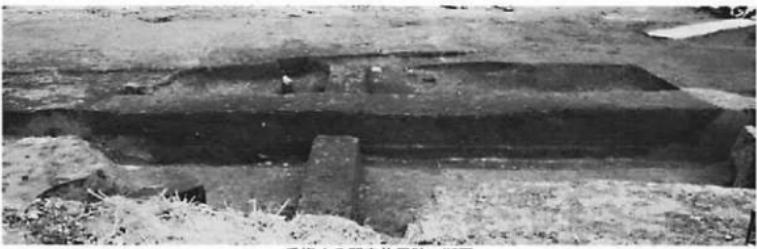
掘立柱建物跡



調査区南側 溝跡



平安の竪穴住居跡



重複する竪穴住居跡 断面

熊堂B遺跡第13次調査検出遺構

(22) 飯岡沢田遺跡第3次調査

所 在 地 盛岡市飯岡新田第1地割-61-1
ほか
委 託 者 盛岡市都市整備部盛南開発課
事 業 名 盛岡南新都市計画整備事業
発掘調査期間 平成13年4月16日～11月12日
調査対象面積 11,585m²
発掘調査面積 10,670m²
追跡番号・略号 L E 16-2169・I S D -01-3
調査担当者 半澤武彦・吉田里和
協 力 機 関 盛岡市教育委員会



追跡位置 1:50,000 盛岡

1. 遺跡の立地

本遺跡は、JR東北本線盛岡駅の南約2kmに位置し、平右川南岸の河岸段丘面上に立地している。標高は124～125mで、調査前の土地利用状況は畠地・果樹園・休耕地となっていた。概ね全体は平坦な地形であるが、調査区の東端は段丘の様となり1～2m前後の高低差がある。北側では幅約5mの鹿妻農業用水堰を隔て、今年度調査を行った野古A道路第12次調査区（奈良～平安時代の集落跡）と隣接している。

2. 調査の概要

今回の調査で検出された遺構は、奈良～平安時代を中心とした、古墳および円形・方形周溝が45基、中世のものと思われる、大形の方形周溝が1基、古代の堅穴住居跡が13棟（古墳時代末期1棟・奈良時代9棟、平安時代3棟）、土坑70基、溝路9条、堅穴状遺構2棟、および縄文時代の陥し穴状土坑3基となっている。
 <古墳及び円形・方形周溝群> 調査区のはほぼ全域から、古墳や円形・方形の周溝群が合わせて45基検出された。古墳は円墳であったものと想像されるが、中心部分から埋葬部と思われる土坑が見つかったものは5基にすぎず、後に墳丘部分が削平、もしくは土坑を設けずに埋葬した可能性などが考えられる。埋葬部はいずれも土坑墓で、木棺や石敷きなどの痕跡もなく、2基から副葬品と思われる刀子や土器片が僅かに出土したのみで、遺物が全く出土しないものも存在する。古墳および円形周溝の平面形は、南東側の一部が途切れで馬蹄形を呈するものが最も多く、次いで溝が途切れず完全な円形を呈するもの、いくつか途切れで不整な円形を呈するものなどがある。方形の周溝は平面形が長方形で溝が途切れずに通り、周溝内から底部に向転ヘラ切り痕が残る坏や、在地産とは考えにくいような須恵器の蓋などが出土している。

いずれの遺構も、周溝同士が互いに接することはあっても完全に重複するものは一切存在せず、おそらくこれらは「終末期古墳」に属するものも含んだ、周溝墓としての性格をもつたものと考えられる。

<大形方形周溝> 調査区の東端から、二重の堀を巡らせた大形の方形周溝が検出された。この遺構は完全に四方を巡る内側の堀と、北側の一辺がない外側の堀とで構成され、内側の堀の外径は18×15m、幅が1～2.2m、深さは65～80cmである。外側の堀の外径は、残存部分を計測した値で25m、幅が2～2.5m、深さは30～70cmとなっている。内側の堀の中心部分には、僅かに小さなピット窓が検出されてはいるものの、構造

物の支柱穴を形成するような配置は見られないことから、検出面よりも上部に盛り土等がなされていた可能性が考えられる。この周溝は6基の古墳・周溝（いずれも古代）を壊す形で存在しており、本遺跡で検出されている他の方形周溝群とは、規模や形態に大きな差異があり、外側の溝からかわらけが出土していることなどからも、中世の祭祀的な施設の遺構と推察している。

＜竪穴住居跡＞ 古墳時代末期のものと考えられる竪穴住居跡1棟からは、この時期の土器の特徴を示す丸底で内・外面に段差がある大型の坏が出土している。住居跡の平面形は約3.7m四方の隅丸方形で、本遺跡の奈良・平安時代の住居跡と比較して、規模が小さい部類に入る。奈良時代の住居跡9棟は、出土遺物から7世紀末～8世紀の遺構と考えられる。平面形は約3.2～7.5mの隅丸方形で、規模に大小の差が顕著に見られるものの、カマドは全て北西方向の壁面中央に位置している。平安時代の住居跡3棟は、出土遺物から9世紀代中心の遺構と考えられるが、カマドについては方位による設置位置の規則性は見られなくなる。

本遺跡における竪穴住居跡の分布について、奈良時代までのものは古墳や円形・方形周溝群の狭間を縫うように立地し、偏った状況もあまり見られないが、平安時代のものになるとこれららの周溝群を意図的に避けようとして立地している様子がうかがえる。また、検出された全ての住居跡は、いずれの古墳・周溝群と一切重複していないことも特徴として挙げられる。

＜土坑＞ 調査区のほぼ全域から70基の土坑が検出された。大小の差はあるものの、そのほとんどが隅丸の長方形を呈しており、いずれも古代の墓塚と推測される。出土遺物のないものが多いが、一部からは刀子・鉄製鋸車をはじめとする鉄製品や土師器・須恵器の壺などが出土している。また、調査区東側の大形方形周溝と重複する土坑からは、黒色処理された土玉が約170個、刀子とともに見つかっている。

＜溝跡＞ 大小合わせて9条検出しており、調査区中央で交差し南北・東西方向へ十字に延びる2条の溝跡は、出土遺物等から古代のものと確定され、古墳・周溝群を避けて構築された様子がうかがえる個所もいくつか見られることから、人為的な区画溝である可能性が考えられる。それ以外のものについては、上部を削平されたり出土遺物が乏しいなど、時期や性格が不明なものが多い。

＜出土遺物＞ 7世紀末頃～9世紀の土師器・須恵器が大部分を占め、大コンテナで16箱出土している。

奈良時代の竪穴住居跡から土師器の坏・壺が、平安時代の住居跡からは、土師器の坏の出土が多くなっている。古墳および円形・方形周溝群においては、須恵器の大甕・長頸瓶の出土が多く、特に長頸瓶については在地産とは思われないようなものもあり、今後胎土分析を含めた検討を進めていく予定である。

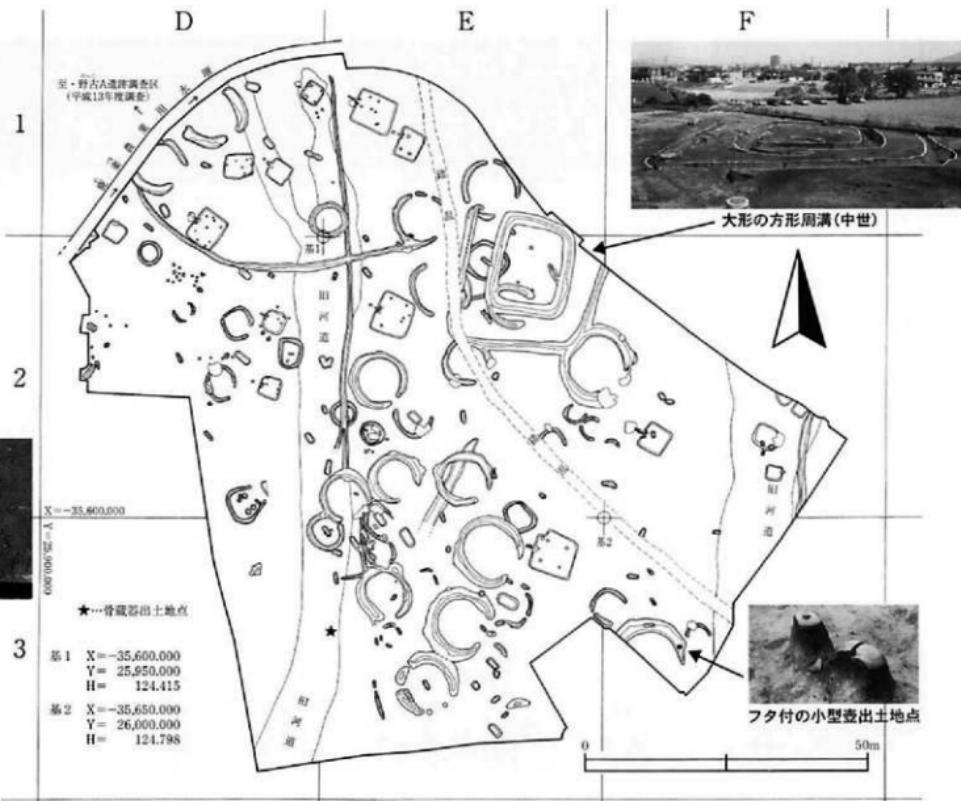
また、墓塚と推測される土坑から、副葬品と思われる刀子・鉄製鋸車・多数の土玉などが出土したのをはじめ、土坑を伴わないものとしては、古代以前に形成されたものと考えられる旧河道の黒色堆土・上層部から、須恵器長頸瓶の頸部を打ち欠いて、土師器の坏でフタをした火葬骨入りの骨蔵器が出土した。

3.まとめ

本遺跡は、奈良～平安時代を中心とした大規模な古代の墓域であったと思われる。古墳および周溝群の狭間からは竪穴住居跡が見つかっているが、出土した遺物をそれぞれ比較してみたところ、奈良時代の一部の住居跡について古墳・周溝群とほぼ同時期に存在していた可能性が考えられるものがあった。「生と死」の領域については、畏怖と崇敬の念から区別されることが一般的と思われるが、おそらくこの地では、「生と死」の領域が混在していた時期があった可能性も、強ち否定することができないのではないかと思われる。

今後出土した遺物についての更なる検討作業とともに、本遺跡と同形態および時期が異なる近隣の遺跡群や、北西2kmの位置にある志波城跡の成果等も合わせて踏まえながら、考察を深めていきたい。

飯岡沢田遺跡第3次調査遺構配置図





埋葬部が残る古墳



埋葬部の掘り下げ



周溝底部の工具痕と出土遺物



復元された古墳と住居跡



調査区全景(北から)

飯岡沢田遺跡第3次調査検出遺構・全景

(23) のっこ 野古A遺跡第12次調査

所 在 地 盛岡市下鹿妻字北40番1ほか
委 託 者 盛岡市都市整備部盛南開発課
事 業 名 盛岡南新都市計画整備事業
発掘調査期間 平成13年5月8日～11月12日
調査対象面積 5,351m²
発掘調査面積 6,224m²
遺跡番号・略号 L E 16-2155・ONK-01-12
調査担当者 菅原靖男・阿部徹・齋藤麻紀子
協 力 機 関 盛岡市教育委員会



1. 遺跡の立地

野古A遺跡はJR東北本線盛岡駅の南約2kmに位置し、半石川右岸の河岸段丘線上に立地している。段丘線は調査区の北側～東側にかけて巡っている。調査区の標高は段丘線下側で123m、段丘の高い場所で125mである。現況は畠地、果樹園である。段丘線下から北50mの位置には熊堂B遺跡が、本遺跡の南側を流れる「鹿妻農業用水堰」の対岸には飯岡沢田遺跡が隣接している。両遺跡とも盛岡南新都市計画整備事業に関連した発掘調査が本年度実施され、古代の集落跡・古墳群が確認されている。

2. 調査の概要

今回の調査区は市道を挟んで2箇所になるため東側をA区、西側をB区とした。基本層序はA・B区ともほぼ同様で、表土以下Ⅱ層黒色土、Ⅲ層暗褐色土、Ⅳ層黄褐色土となり、Ⅱ層上面が遺構検出面である。ただし、近現代の造成や耕作等によってⅡ層が削平されたA区東側～中央付近では、Ⅳ層上面が遺構検出面となる。

今回の調査で検出された遺構は、奈良時代の堅穴住居跡11棟（A区）、平安時代の堅穴住居跡16棟（A区）、绳文時代の陥り穴状土坑5基（A区1基・B区4基）、墓塚8基（A区）、土坑34基（A区29基・B区5基）、溝跡9条（A区）、柱穴状小土坑44基（A区30基・B区14基）である。

〈堅穴住居跡〉 堅穴住居跡はA区のほぼ全域にわたって分布しているが、B区においては1棟も検出されていない。検出状況はⅡ層上面において灰白色火山灰の小ブロックがほぼ方形に確認できるもの、同じくⅡ層上面において黒褐色土の広がりとして確認できるもの、Ⅱ～Ⅲ層が削平を受けたため、Ⅳ層上面で黒褐色土の広がりとして確認できるものの3通りに大別できる。重複関係は2棟のみと少なく、調査区中央～西側にかけて検出されたものは比較的良好な状態で残っている。平面形はいずれも隅丸方形で、規模は6～8m四方の大形、4m四方の中形、2～3m四方の小形に分類できる。カマドの設置位置は奈良時代の堅穴住居跡では北西向き、平安時代の堅穴住居跡では南東向きという傾向がうかがえる。例外は南向き1棟、北向き1棟である。煙道はくり貫き式のものが圧倒的に多く、削平や擾乱によって詳細が不明なものは5棟のみである。カマドの袖部についても時期的な特徴がうかがえ、奈良時代のものは、Ⅳ層を主体に褐色土や暗褐色土等によって構築されているのに対して、平安時代のものは礫を芯材に用いているものが多い。カマド自体

の作り替えは少なく平安時代の堅穴住居跡で2棟確認されただけである。

＜土坑＞ A区、B区あわせて47基検出している。A区で検出した溝状のもの1基とB区で検出した長方形のもの4基の計5基は縄文時代の陥し穴と思われるが遺物等が出土していないため詳細については不明である。また、A区で検出した小判形や長方形のもの8基については出土した遺物やその形状から古代の墓塚と思われる。これらのうち小判形のものからは完形の須恵器の壺が出土している。骨や土器以外の副葬品等は確認されなかった。残りの34基のうち、A区に位置し土師器片の出土したものと、石錠1点が出土したB区のもの以外は遺物が出土していないため詳細は不明である。

＜溝跡＞ A区において9条検出した。これらのうちもっとも規模の大きなものは調査区東側～北側にかけて、段丘線と並行する形で調査区間に位置している。この溝跡の東側からは土師器片、須恵器片が出土しているが、平安時代に属するとと思われる堅穴住居跡を切っており、これらの遺物が溝跡に伴うものか現在検討中である。

＜柱穴状小土坑＞ A区で30基、B区で14基検出した。規模は径約15～20cm前後のものが多く、時期を確定できるものはない。埋土の様相から判断するとB区で検出されたものの方が古いと思われる。A区で検出されたものの大半は段丘の下間に位置しているが、建物跡や堀列を構成しそうなものは見られない。

＜出土遺物＞ 大コンテナで13箱分の遺物が出土している。大部分は土器でそのうち約9割が土師器、残り1割が須恵器である。器種は土師器が壺・壺・高壺・高台付壺・耳皿・小型壺であるのに対し、須恵器は壺・壺・壺と種類が少なくなる。また、土師器と同質の粘土で作られたと思われる、手捏ねの小形土器状のものも出土しているが詳細は不明であり、今後の検討課題である。この他、少数ではあるが土製品（紡錘車、円盤状の土製品）、石製品（砥石、硯）、鉄製品（刀子）、陶磁器も出土している。

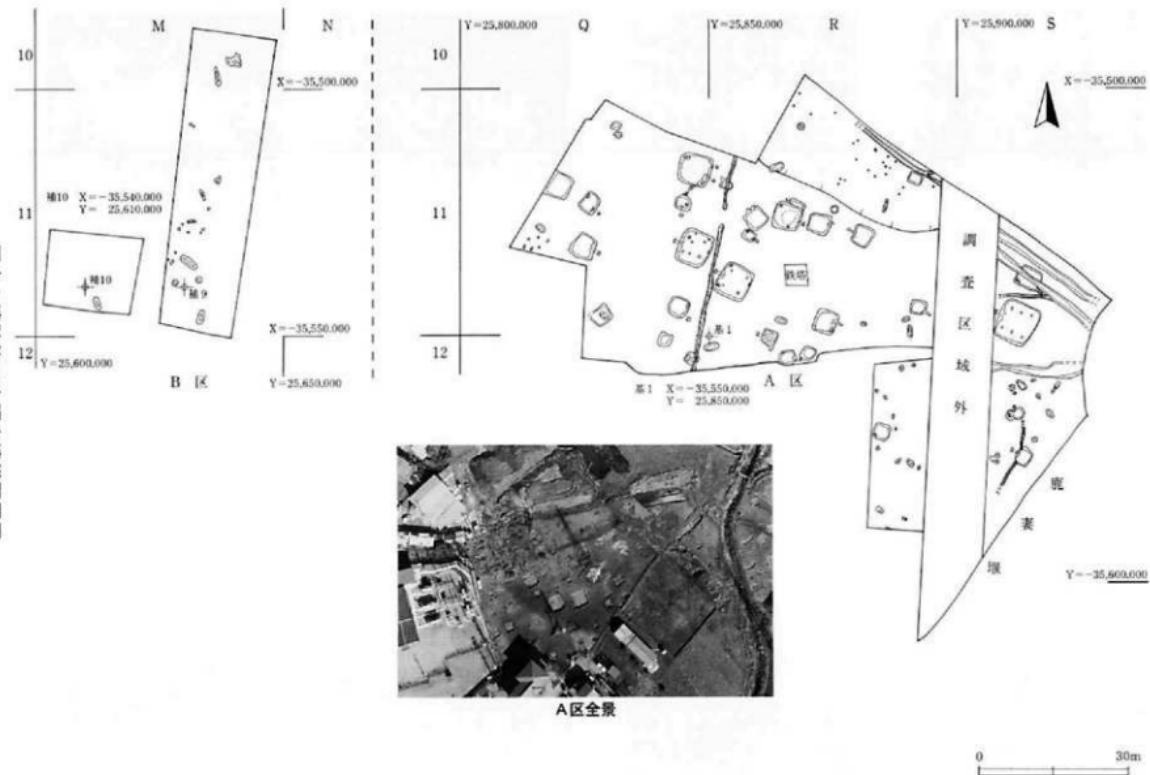
3.まとめ

今回の調査では堅穴住居跡が多数検出されており、本遺跡が段丘線上に立地した奈良時代～平安時代を中心とした聚落跡であることが確認された。住居跡については、同時代に属すると考えられるものであっても規模にかなりの差が認められるほか、カマドの設置位置や作りに時代による明確な違いが見られることが大きな特徴である。出土遺物については土師器の割合が圧倒的に多い。

調査の結果、堅穴住居跡等遺構は調査区全域に広がっており、鹿妻塙沿いから西側にかけて更に広がることが予想される。来年度も調査が継続されることから、その余容がより一層明らかになるものと思われる。また、鹿妻塙を挟んで南側に隣接する飯岡沢田遺跡や段丘の下間に位置する熊堂B遺跡との関係が大変興味深い点であり、遺構・遺物等の比較検討によって遺跡の性格や関連性を明らかにしていきたい。

野古 A 遺跡第12次調査遺構配図

-79-





竪穴住居跡(奈良)



遺物出土状況(住居内)



竪穴住居跡(奈良)



遺物出土状況(竪)



焼失住居跡(平安)



焼失住居跡のカマド



竪穴住居跡(平安)



平安時代の竪穴住居跡のカマド

野古 A 遺跡第12次調査検出遺構

(24) 細谷地遺跡第5次調査

所 在 地 盛岡市飯岡新田2地割67ほか
 委 託 者 盛岡市都市整備部盛南開発課
 事 業 名 盛岡南新都市計画整備事業
 発 勘 調 査 期 間 平成13年4月16日～7月31日
 調 査 対 象 面 積 5,805m²
 発 勘 調 査 面 積 5,805m²
 遺 跡 番 号・略 号 L E 26-0214・O H Y -01-5
 調 査 担 当 者 高木 見・八木勝枝
 協 力 機 関 盛岡市教育委員会



1. 遺跡の立地

細谷地遺跡は盛岡市の南西部、JR東北本線仙北町駅から南西約1.5kmに位置し、零石川右岸の河岸段丘上に立地している。零石川は遺跡の北東約2kmの地点で北上川・中津川と合流する。第5次調査区の標高は約122mで、現況は第4次調査区の西側571mが畠地である以外は水田である。北側は一段低い谷地形が東西にのび、対岸の微高地には古代の聚落跡を検出した飯岡才川遺跡が立地する。

2. 調査の概要

遺跡の層序は表上以下Ⅱ層黒色土、Ⅲ層黒色土、Ⅳ層黒褐色土に区分される。Ⅱ層上面は近世遺構の検出面、Ⅲ層は灰白色火山灰粒子を含む層で、上面が古代の遺構検出面となっている。Ⅳ層上面は縄文時代の遺構検出面となる。

検出遺構は、平安時代の堅穴住居跡4棟、堅穴状遺構5基、掘立柱建物跡3棟、土坑31基、陥穴状遺構25基、溝跡13条、井戸跡1基、カマド状遺構2基、献問状並列溝1箇所、小ビット約100基、風倒木痕1箇所である。第4次調査区の北側と西側に隣接する区域は一連の段丘面が広がり、主に古代の堅穴住居跡、掘立柱建物跡、堅穴状遺構等が分布する。中央から西の区域には、東西に延びる細い低地状の旧河道部分とそれに挟まれる微高地が2列ずつ平行しており、縄文時代・近世の遺構が分布する。

＜堅穴住居跡＞ 坚穴住居跡は、第4次調査区の西側に隣接する調査区に2棟、北側に2棟の合計4棟検出された。北側の調査区は水田耕作による前削を受け、遺構の残存状況は良くない。埋土中には灰白色火山灰がブロック状に混入するものがある。堅穴の平面形はいずれも方形で、規模は約5～6m四方ほどのもの2棟、約3m四方ほどのもの2棟があり、第4次調査区における大形、中形にそれぞれ該当する。大形の住居跡はカマドを2・3基持ち、作り替えがなされている状況である。カマド袖は概ね地山褐色土を積み上げて構築されるが芯材に河原石を用いた例もある。煙道はくり貫き式である。各住居跡におけるカマドの設置方位は一定の方向に偏る傾向はみられない。時期は出土遺物から9世紀後半～10世紀前半と考えられるが、詳細な区分は分析中である。

＜堅穴状遺構＞ 5基検出されている。平安時代の堅穴住居跡に隣接する位置に3基検出された。うち1基は平安時代の掘立柱建物跡の柱穴を切っていることや、古代の遺物が出土していないことから、時期が降る

可能性がある。平面形態は梢円形・長方形を基調とする。底面に酸化鉄層が形成されているものがあり、水没けの状態が考えられることから性格は溜め池が想定される。

＜掘立柱建物跡＞ 掘立柱建物跡は調査区北で1棟、調査区中央～西に2棟検出されている。調査区北の掘立柱建物跡は、2間×3間（規模5×6m）の長方形建物で、棟方向はおよそ東西に向く。柱穴掘り方は径45cm、深さ35cm、柱痕跡の径は約20cmである。柱穴埋土中に灰白色火山灰が混入しており、古代のものであると考えられる。調査区西の掘立柱建物跡2棟は近世の可能性が高い。この掘立柱建物跡の柱穴から、柱根が1点出土している。

＜土坑＞ 遺跡全体に31基が散在する。形状には特に傾向がみられず、性格・時期は不明のものが多い。旧河道に落ち込む斜面に位置し、溝と連続しているものが複数あり、近世の溜め池の可能性がある。

＜陥入穴状遺構＞ 調査区北東部隅に4基、中央～西の区域の平行する2列の微高地に21基検出された。平面形は横状、断面形はV字状のいわゆる陥入穴状遺構で、下半は垂直に深く掘り込まれる。長軸2.5～3.5m、検出面の幅60cm～1m、深さ60cm～1mが多い。配列は旧河道と直交して2～3基が等間隔で並ぶパターンが見られる。縄文時代の陥入穴状遺構である可能性が高い。遺物は底面から剥片が出土したものが1基あるが土器の出土はない。

＜カマド状遺構＞ 調査区西に2基検出されている。いずれも長梢円形の掘り込みに対して、焼成部分が一方に偏る。焼成部は側壁から底面が等しく焼成を受けている。1基から焼粘土塊が出土している他に遺物はなく、時期は不明である。カマド状遺構は性格が不明で、詳細な検討が待たれる。

＜溝跡＞ 調査区西に13条検出された。南北方向と東西方向があり、途中に溜め池と考えられる土坑に接するものもある。近世後半の陶磁器の出土、検出面から近世に属するものと考えられる。

＜井戸跡＞ 調査区西の旧河道と微高地が接する地点に1基検出された。河原石を利用した石組みで構成され、底面に径50cmの曲物が設置されている。石組み内側の径は80cmで、深度は約1.6mである。内側の礫は30cm程度のものを骨格として放射状に組み上げられ、その外側の隙間に小礫がはめ込まれている。石組み上位の掘り方は広く、礫との間に粘土が埋められている。裏込め粘土の範囲は直徑2.7m、最大厚30cmである。井戸の構造と検出面から近世のものと考えられる。

＜小ピット＞ 調査区北側に多い。径約20～30cmが多い。遺物等の時期判断材料に乏しく、帰属時期は不明である。建物跡や柵列を形成するかどうかについては検討中である。

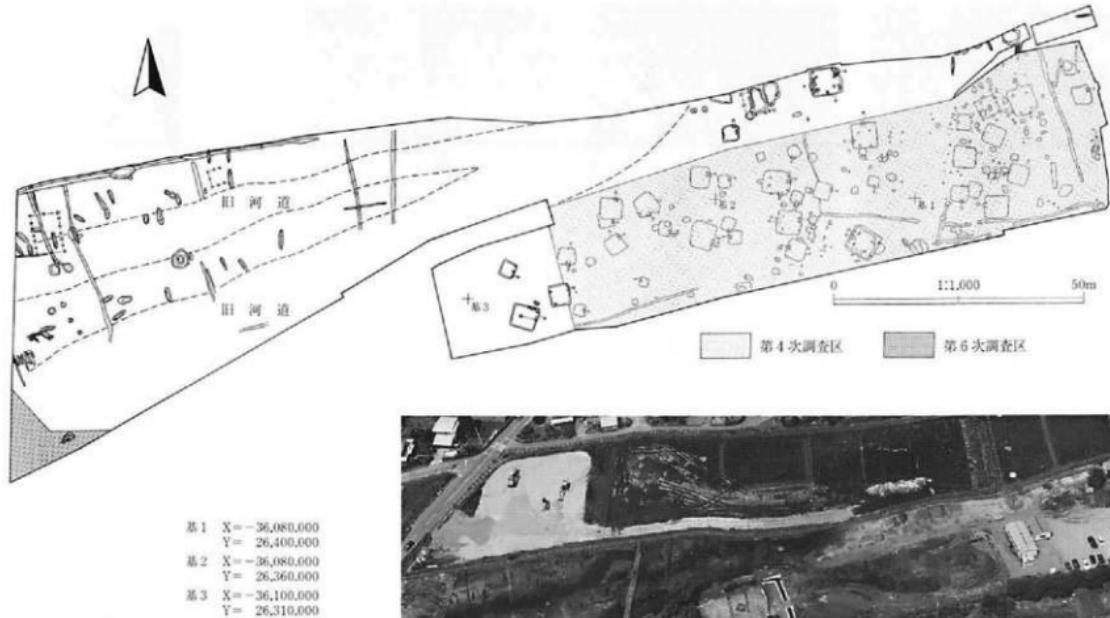
＜畝間状並列溝＞ 調査区西端に1箇所検出された。9条の溝が並列しており畠の畝間と考えられる。遺物が出土していないため帰属時期が不明だが、一部南北の溝に填されている部分があるため、近世以前と考えられる。

＜出土遺物＞ 土師器・須恵器・陶磁器・鉄製品・土製紡錘車・剥片石器・木製品が出土している。西側旧河道からの古代遺物の出土はごく僅かである。

3.まとめ

今回の調査では、第4次調査で検出された古代集落の広がりと、集落外の部分が明らかとなった。古代集落の時期は第4次調査同様9世紀後半～10世紀前半である。中央～西側の調査区には古代の遺構は見られず、縄文時代の陥入穴状遺構や近世の遺構に限られる。旧河道内は水が絶えず湧き、当時も居住域に適さない場所であることが考えられ、古代における土地利用をうかがう資料である。現在、盛南開発に伴う緊急発掘調査で近隣の同時期の遺跡が多数調査されており、時期毎の様相がより具体的になるものと期待される。

細谷地遺跡第5次調査遺構配置図



調査区全景





竪穴住居跡(中形)



竪穴住居跡(大形)



カマド検出状況



掘立柱建物跡(平安時代)



陥し穴状造構(縄文時代)



石組み井戸跡(近世)



旧河道脇調査状況



縄文土器

細谷地遺跡第5次調査検出遺構・出土遺物

(25) 島岡Ⅱ遺跡

所 在 地 石鳥谷町字八幡はか
 委 託 者 盛岡地方振興局
 盛岡農村整備事務所
 事 業 名 ほ場整備八幡東部地区
 発掘調査期間 平成13年4月10日～6月18日
 調査対象面積 2,800m²
 発掘調査面積 2,800m²
 遺跡番号・略号 LE 96-2343・S O-01
 調査担当者 村木 敬・星 幸文
 協 力 機 関 石鳥谷町教育委員会



遺跡位置

1:50,000 花巻

1. 遺跡の立地

島岡Ⅱ遺跡は、JR東北本線石鳥谷駅南東約3kmに位置し、北上川西岸に存在する南へ緩やかに傾斜する河岸段丘線に立地している。遺跡の標高は82m前後で、現況は水田及び畠地である。

2. 調査概要

検出された遺構は、平安時代の竪穴住居跡8棟、水路1条、溝跡1条、土坑10基、近世の掘立柱建物跡3棟、水路2条、土坑2基、時期不明の柱穴状ピット30基である。

＜竪穴住居跡＞ 調査区西側で7棟、調査区東側で1棟の計8棟が検出されている。全て9～10世紀に属すると考えられる。住居上部は耕作時に削平され、床面のみの検出であった。規模は3～5mの範囲内にあり、平面形は方形や隅丸方形を呈するものである。カマドを有するものは5棟、他の3棟は調査区外に延びていくためカマドは確認されていない。

＜掘立柱建物跡＞ 調査区中央で3棟検出され、すべて近世に属するものである。これらの住居は調査区外に延びていくため、全容は不明である。それら柱穴の中には直径15～20cmの柱根を残しているものもある。また、周辺で建物跡が存在するかどうかは検討中である。

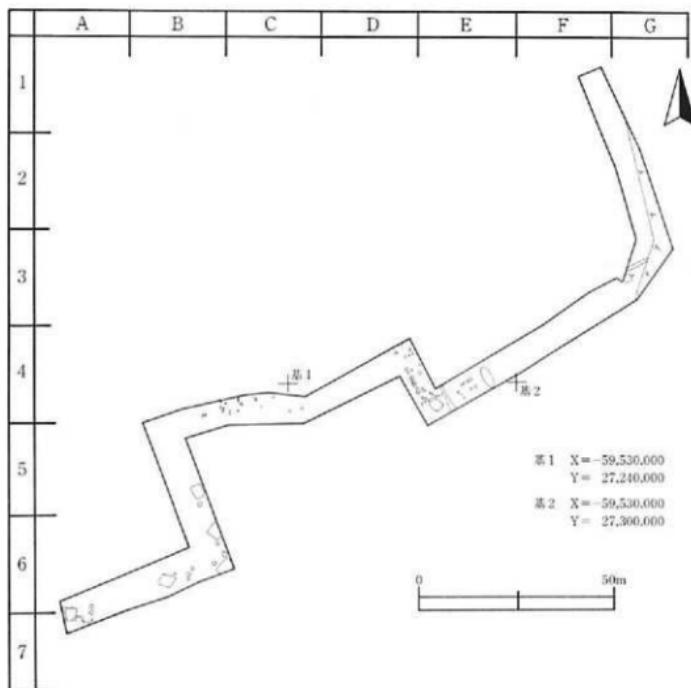
＜水路＞ 調査区西側で平安時代に属するものを1条、調査区中央で近世に属するものを2条検出した。前者は全長12m・幅2m・深さ1.5m、底面より若干上で桶状に木が散かれている。後者のうち1条は全長5m・幅30cm・深さ20cm、断面をV字形に合わせた木製の蓋が検出された。

＜溝跡＞ 調査区東側、住居の北側に全長5.3m・幅30cm・深さ40cmの規模を持つものを検出した。

＜出土遺物＞ 平安時代の土師器と須恵器が大コンテナ2箱出土した。この他に近世陶磁器や木製品の椀と櫛などが小コンテナ1箱出土している。

3.まとめ

今回の調査により平安時代と近世の両時代において住居跡と水路跡がセットで確認され、土地利用についての検討材料を得られた。今後、調査結果の整理・分析を基に本遺跡の利水について考えていく必要がある。



島岡Ⅱ遺跡遺構配置図



調査区西侧全景(東から)



竪穴住居跡

島岡Ⅱ遺跡検出遺構

(26) 稲荷遺跡

所 在 地 石鳥谷町八重畠76ほか
委 託 者 花巻地方振興局
花巻農村整備事務所
事業名 ほ場整備八重畠地区
発掘調査期間 平成13年6月18日～7月31日
調査対象面積 2,090m²
発掘調査面積 2,090m²
遺跡番号・略号 ME07-2078・IN-01
調査担当者 垣 幸文・村木 敬
協 力 機 関 石鳥谷町教育委員会



遺跡位置

1:50,000 花巻

1. 遺跡の立地

稲荷遺跡は、JR東北本線花巻空港駅から西へ3km、北上川によって形成された河岸段丘左岸上に位置し、標高は約80mである。調査前の状況は北東側が畠地、南側は水田として利用され耕作のため南側は削平されていた。

2. 調査の概要

検出した遺構は、平安時代の竪穴住居跡4棟、绳文時代の陥し穴状遺構1基、時期不明の土坑2基である。
＜竪穴住居跡＞ 住居跡は調査区中央から南側にかけて4棟検出されている。平面形はすべて隅丸方形を呈し、規模は3mほどのもの2棟、5m前後が2棟である。カマドと煙道が確認されたものが3棟、削平のためはつきりとは確認できなかったもの1棟である。各住居とも住居内の土坑から土師器の壺・甕が出土しており、時期は平安時代と思われる。また、中央東側住居の埋土には十和田a降下火山灰が含まれており、これらの住居跡は10世紀前後のものと思われる。

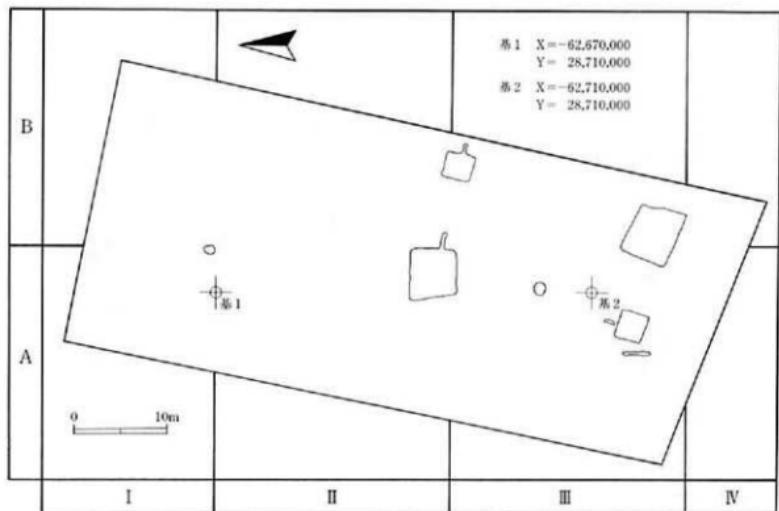
＜土坑＞ 中央部および北側で2基検出された。遺物が伴わないので、性格と時期については不明である。

＜陥し穴状遺構＞ 1基検出した。平面形は溝状で、断面はV字状である。規模は長軸3m、短軸40cm、深さ60cmほどである。

＜出土遺物＞ 中コンテナで2箱出土している。多くはカマド及び土坑から出土した土師器の壺・甕である。ロクロ使用のものが多く、壺の大半は内面に黒色処理が施されている。また、2点の壺には外側に縦刻で文字（刻印）が記されていた。また、外面に叩き目のある鉢の破片、底部に木葉痕のある甕も出土している。

3.まとめ

今回の調査で平安時代の住居跡が確認された。今回調査した範囲は、中央部が丘状で南北に傾斜した地形となっており、調査区外の東西にも延びていることから周辺部にさらに住居跡が存在する可能性があると考えられる。出土した遺物と類似の土器等の出土例が周辺遺跡でも確認されており、今後周辺遺跡との関係を検討したい。



稻荷遺跡遺構配置図



遺跡全景



竪穴住居跡



カマド断面



遺物出土状況

稻荷遺跡検出遺構・出土遺構

(27) 宮野目方八丁遺跡

所 在 地 花巻市葛第1地割68番1
委 托 者 花巻地方振興局土木部
事 業 名 東宮野目二枚橋線整備
発掘調査期間 平成13年5月7日～6月4日
調査対象面積 850m²
発掘調査面積 850m²
追跡番号・略号 ME06-2269・MNH-01
調査担当者 千葉正彦・猪池 賢
協 力 機 間 花巻市教育委員会



1:50,000 花巻

1. 遺跡の立地

遺跡は、JR東北本線花巻空港駅の東約1.3km、北上川右岸の段丘上に立地する。遺跡の東側は北上川の洗流によって形成された崖である。現在遺跡の大半が県立花巻農業高等学校及び花巻空港の敷地となっている。標高は約87mである。

2. 調査の概要

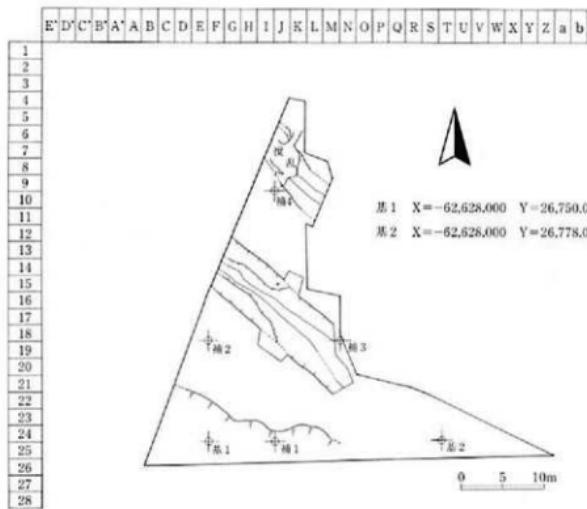
検出された遺構は、平安時代の溝跡1条と時期不明の堀路1条である。遺物は土師器・須恵器を中心に、大コンテナ約1箱出土した。

＜溝跡＞ 調査区北側において検出された。上幅は約4m、深さは約50cmを測る。上部が削平を受けているため、本来は上幅・深さ共にこれより大きいものであった。土器の大半がこの溝跡から出土したもので、9世紀前葉の年代観が与えられる。器種は土師器壺・甕、須恵器甕・壺などである。

＜堀路＞ 調査区中央部を横切って、北西から南東方向に走っている。上幅が約6.5m、深さ1.8mを測る。溝跡と同様に上部を削平されており、本来の規模のものではない。時期を特定し得る遺物を欠く。調査区外南東方向の林内において、土壌状の高まりと埋没しきらざる堀状の落ち込みとが現況で確認できる。これは今次調査で検出された堀跡と一連のもの可能性が考慮される。

3.まとめ

これまでに当遺跡の性格を巡って諸説が提起してきた。律令国家の城柵類似施設であるとする説、古代駅馬家説、弘仁二年設置になる稗貫郡の都衛説、あるいは前九年合戦における源氏の陣場説などである。かつて当遺跡は岩手大学学芸学部板橋源教授を中心とした調査団によって昭和31年と同41年に発掘調査が行われ、古代の堅穴住居跡などが確認されており、考古学的にも古代の遺跡であることは知られていた。今次調査では古代の遺構の存在は明らかとなったが、残念ながら遺跡の性格を決するような遺構・遺物は認められなかった。岩手県立図書館蔵「稗貫郡宮野目村方八丁全図」によれば、当遺跡は南北700m、東西300mに至る規模のものと認識されている。今後調査が行われる際、今回検出された堀が如何様に延長していくものであるか把握が可能となれば、遺跡の全体的規模や性格も明らかなものとなるであろう。



宮野目方八丁遺跡遺構配置図



調査区近景(南から)



溝跡全景



堀跡全景

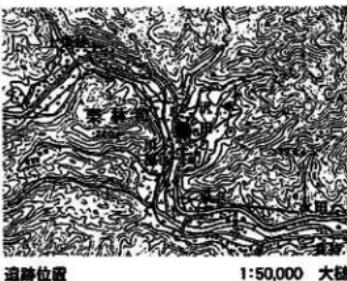


堀跡埋土土層断面

宮野目方八丁遺跡検出遺構

(28) 沢田2遺跡

所 在 地 釜石市梨林町11地割1番地1ほか
委 託 者 釜石地方振興局土木部
事 業 名 主要地方道釜石遠野線沢田地区
整備事業
発掘調査期間 平成13年8月6日～11月14日
調査対象面積 2,112m²
発掘調査面積 2,112m²
遺跡番号・略号 MG31-2270・SD2-01
調査担当者 鳥居達人・亀 大二郎
協 力 機 間 釜石市教育委員会



遺跡位置

1:50,000 大陸

1. 遺跡の立地

沢田2遺跡は釜石市役所から北西方向にあり、JR釜石線朝住居駅の北西約6km地点に位置する。遺跡の西側には、遠野市・大迫町と接する1,000m級の山々を水源として大槌湾に流れ出る朝住居川があり、遺跡はその河岸段丘の南縁に当たる。標高は約50mで、現況は水田や宅地である。

2. 調査の概要

検出された遺構は、縄文時代前期初頭から前期中葉にかけての堅穴住居跡22棟、同時代の土坑37基、遺物包含層1カ所と、近世の鍛冶に伴う焼土遺構7基、土坑9基である。その他では、時期不明の掘立柱建物跡1基が検出されている。

〈堅穴住居跡〉 内訳は前期初頭から前葉に属すると考えているもの12棟、前期中葉に属するもの4棟、前葉から中葉に属するもの6棟である。前期初頭～前葉の住居跡には、平面形が方形もしくは長方形を呈するものと梢円形のものがある。前期中葉の堅穴住居跡の1棟は、平面形が略長方形で長軸が9mあり、2基の地床炉を検出した。

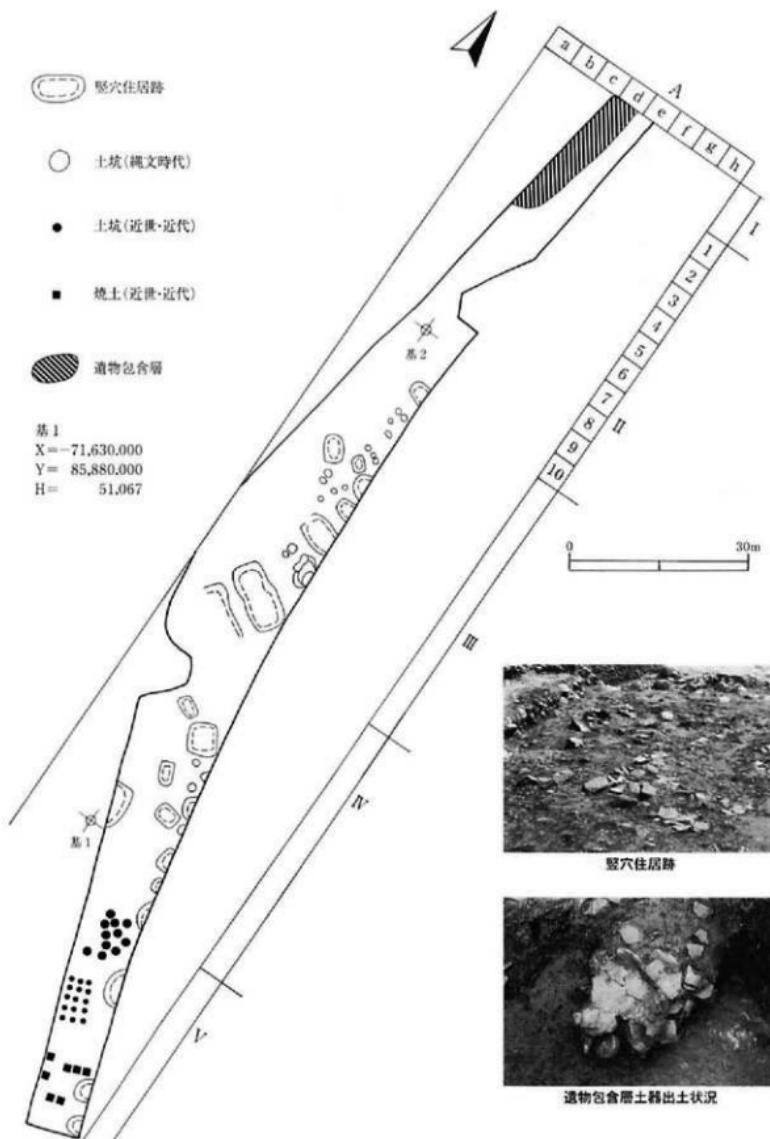
〈土坑〉 堅穴住居跡の周囲や床面下から検出されるものが多い。2基の土坑が重なりひょうたん型を呈し、規則的に並ぶものや、堆土上位に集石を伴った前期初頭に属する土坑も検出された。

〈その他〉 近世の鍛冶に伴う焼土遺構が、1区域にまとまって検出された。また、鉄滓を埋めたものや粘土で固めた土坑も確認された。掘立柱建物跡は時期不明であるが、縄文時代の可能性も考えられる。

〈出土遺物〉 縄文土器が大コンテナで16箱、石器は大コンテナ3箱、石製品が少量出土している。いずれも北部の遺物包含層からの出土量が多い。縄文土器では、大木2b式から4式に属するもの、石器では石匙がそれぞれ卓越し、軽石製のアクセサリーも出土している。また、近世の遺構に伴う釘などの鉄製品や相馬大塙窯などの陶磁器、泥めんこなど中コンテナ1箱出土した。

3.まとめ

平成11年度調査では検出しなかった縄文時代前期中葉の堅穴住居跡や土坑が確認できたことは、前期初頭から中葉にかけてのムラの変遷を知る手がかりになるであろう。



沢田 2 遺跡遺構配置図・検出遺構

(29) 宝性寺跡

所 在 地 江刺市字根岸23-6ほか

委 託 者 水沢地方振興局

水沢農村整備事務所

事 業 名 ふるさと農造根岸地

発掘調査期間 平成13年8月21日～12月12日

調査対象面積 1,500m²

発掘調査面積 750m²

遺跡番号・略号 ME97-1048・H.S.J.-01

調査担当者 岩渕 計・丸山浩治

金野 道・川又 晋

協 力 機 関 江刺市教育委員会



1. 遺跡の立地

宝性寺跡は江刺市街地、市役所から北西に1.9kmの距離に位置し、北上川東岸を南北に延びる丘陵地の西端部分となる段丘の縁に立地している。遺跡の西側を広瀬川が南西方向に流れ、北上川へと注いでいる。遺跡の標高は54～63m、調査前の状況は農道及び畠地、水田である。

2. 調査の概要

検出された遺構は、竪穴住居跡7棟、竪穴住居状遺構2棟、土坑8基、焼土遺構7基、溝跡8条、墓壙10基、集石1基、柱穴状小土坑115基である。また、調査区の南東部分に遺物包含層が形成されていた。

＜竪穴住居跡＞ 北部から2棟、西部から2棟、南部から3棟検出した。調査した範囲が狭いため、全容は明らかではないが、北部から検出した1棟は、長方形に巡る周溝を検出したことから「大型住居（ロングハウス）」の可能性が高い。その他の住居跡は径が4m前後の円形と推測され、検出した炉は地床炉であった。時期は出土した遺物から、縄文時代前期後葉から中期前葉と考えられる。

＜竪穴住居状遺構＞ 西部から検出した1棟は方形で、上蓋器・須恵器が出上している。

＜溝跡＞ 時期を明確に特定できないが、古代以降の溝跡と考えられる。

＜墓壙＞ 北部から4基、南部から6基検出した。块状耳飾や翡翠製の裝飾品が出土している。

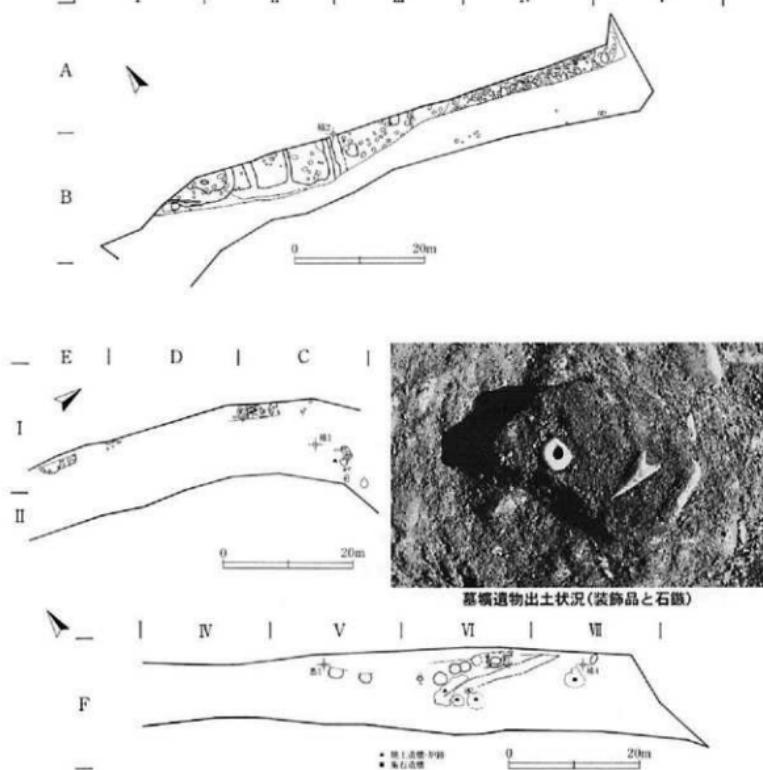
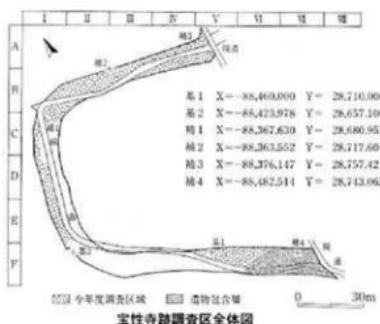
＜柱穴状小土坑＞ 北部から多数検出されている。周溝状の遺構も確認できることから、重複している住居跡の可能性がある。出土している遺物から縄文時代と考えられる。

＜遺物包含層＞ 南東部分の約460m²が遺物包含層となっている。南西向きの斜面に遺物を廃棄したものと考えられ、最大落厚は約90cmであった。長さ約10m、幅約5mの帶状に広がる焼土層を確認している。

＜出土遺物＞ 大コンテナ算で土器が約100箱、剥片石器・剥片が6.5箱、翡翠器類が21箱、土製品、石製品が出土している。縄文土器は前期から中期の土器が出土しているが、大木5～7式土器を中心とする。

3. まとめ

今回の調査区域は、縄文時代前期後葉から中期前葉の居住域と「捨て場」であることが確認された。来年度も継続して調査の予定であることから、さらに集落全体の構造が明らかになることが期待される。



宝性寺跡遺構配置図

(30) 新田遺跡

所 在 地 江刺市伊手字御堂33番地4ほか
委 託 者 水沢地方振興局土木部
事 業 名 河川改良事業伊手川
発 勘 調査期間 平成13年4月19日～9月3日
調査対象面積 1,660m²
発 勘 調査面積 1,660m²
遺跡番号・略号 N E09-1252・S D-01
調査担当者 金子昭彦・坂部忠造
協 力 機 間 江刺市教育委員会



1. 遺跡の立地

新田遺跡は、JR東北新幹線水沢江刺駅の西北西約9km、丘陵尾根状の地形に立地する。調査範囲は、伊手川に北面する尾根先端部分に当たり、中央は大きく削平されており西側も地形の改変を受けている。

2. 調査の概要

今回の調査では、住居状遺構1基、土坑・墓塚46基、焼土6基、溝跡1条、捨て場が検出された。溝跡は近世～近代の可能性があり、その他のはほとんどは縄文時代前期（特に後葉）と思われる。

また、調査範囲の南側にあつたらしい近世～近代の民家に伴うと推測される地形の改変が見られた。調査範囲南側から西側の谷に続く水路や、谷の南側に東西に広がる人工的な平場が検出されている。

＜住居状遺構＞ 壓穴住居跡に似ているが炉を持たない。土坑群西の調査範囲のはば中央に1基検出した。

平面形は長辺円形で規模は3×2mと小さく、床面には中央と長軸方向の両端に小さな穴がある（柱穴）。

＜土坑・墓塚＞ 46基検出され、大きく三つに分けられる。いわゆるフラスコ状土坑が大部分を占め、調査範囲東側の斜面に著しく集中する。小判形の浅いものは、2基だけだがフラスコ状土坑群の西端にあり、フラスコ状土坑に切られる。楕円形を基調とし深く規模も大きいものは、さらにその西側の尾根頭部付近に点在する。十数基あり、覆土中やその周辺に出土が見られるものが多い。小判形ものは、検出状況・出土遺物から縄文時代前期後葉の可能性があるが、その他は前期後葉の可能性が高い。

＜出土遺物＞ 土器は、縄文時代前期後葉（大木5～6式）が大部分を占め、主に捨て場から大コンテナ92箱出土し、その他前期前葉の土器片、土師器壺（平安時代）がある。石器は非常に少なく204点（剥片336点）、土偶が9点（1点は完形なら30cm以上）、土製耳飾4点、石劍が10点出土している。

3.まとめ

縄文時代前期（後葉中心）の村の跡、近世～近代の屋敷の一部が発見された。調査範囲が狭く細長いため村全体の様子は分からなかったが、調査範囲の北西隅～北端の伊手川に面した斜面にものを捨て、東端にフラスコ状土坑を集中して作っていた様子が窺われる。壓穴住居跡は、今回の調査範囲の南側にあるものと推測され、おびただしい量の土器が発見されたことから、本遺跡は地域の拠点的な村であったと推測される。



調査範囲(東から)



住居状遺構



東側のプラスコ状土坑集中部分



東側捨て場断面

新田遺跡遺構配置図・検出遺構

(31) 久田遺跡

所 在 地 江刺市伊手字沢田23番地ほか
 委 託 者 水沢地方振興局
 水沢農村整備事務所
 事 業 名 土地改良総合整備事業伊手西部地区
 発掘調査期間 平成13年6月8日～12月5日
 調査対象面積 3,000m²
 発掘調査面積 3,000m²
 遺跡番号・略号 NE09-1329・KD-01
 調査担当者 千葉正彦・菊池 貴
 協 力 機 関 江刺市教育委員会



1. 遺跡の立地

久田遺跡は、東北新幹線水沢江刺駅の東約9kmに位置する。調査区は伊手川左岸に形成された氾濫原にある残丘の北西部分である。調査区付近は現況では畠田となっているが、北～北西向きの緩斜面を造成して開田したものであった。調査区の標高は132～134mである。なお、低位部分（遺構配置図参照）については盛土保存されることとなり、遺構検出および部分的掘削のみを行った。当該部分の検出遺構については詳細不明で不確実な点があることから、ここでは記載を割愛しております、検出遺構数にも含めていない。

2. 調査の概要

検出された遺構は、竪穴住居跡24棟、住居跡状遺構3棟、掘立柱建物跡4棟、土坑類150基、配石遺構1基、焼土遺構1基である。遺物は土器、上製品、石器類、石製品等が出土している。

＜竪穴住居跡＞ 繩文時代の竪穴住居跡は20棟検出された。全形を把握できた4棟は円形ないしは梢円形を基調とする平面形態であり、他の16棟についても残存部分から推測して概ね同様な形態と推測される。床面積では最大32m²、最小10m²であり、規模の大小が見られる。柱穴の形態は一様ではない。實際に小径の柱穴が巡るものが多いが、深い主柱穴を伴うものや柱穴を欠くものも見られる。がはすべて地床である。また、斜面下方側に入り口状の施設（小土坑）が検出された。住居の形態および出土遺物から判断すると、その大部分が後期中葉に属するものと推測される。一方、平安時代の竪穴住居跡は4棟検出されている。一辺3～4mほどの方形基調で、いずれも斜面上方にカマドが設置されている。残存部分から判断すると、カマド本体は漆・土器片を芯材として黒色シルトを貼り付けて構築している。煙道はいずれも上部が崩落していたが、くり貫き（地下式）構造と推測される。2棟の燃焼部には支脚と思われる漆が直立状態で据えられ、土器片が伏せて被せられていた。主柱穴と思われるものは確認できず、柱穴配置は明確ではない。うち2棟の覆土では、十和田a降下火山灰の混入層がレンズ状に堆積する様相が見られた。出土した土器片の様相および覆土中の火山灰の在り方から推測して、9世紀末～10世紀初頭に属するものと思われる。

＜住居跡状遺構＞ 竪穴住居跡に類似するがが・柱穴を欠くもの1棟、柱穴のみ検出したもの2棟である。形態および出土遺物から縄文時代後期に属するものと推測される。

〈掘立柱建物跡〉 円形を呈する大形のもの1棟、六角形（亀甲形）を呈するもの3棟である。うち1棟は円形の大形建物であり、大径の主柱穴4基を小柱穴（櫛柱穴）列が円形に取り囲むものである。さらに櫛柱穴列は北側で大径の柱穴2基に連結して「出入り口」状に開く。櫛柱穴列の形成する円弧の径は約10m、主柱穴4基および出入り口部柱穴2基の掘り方は径1m以上である。柱痕跡の平面プランは不明瞭であったが、断面および掘り方底面の観察では、径30~40cm程度の丸太材を据えていたものと考えられる。建て替えの痕跡はない。竪穴住居跡との間に重複関係があることから住居跡より古いものと思われるが、柱穴からの出土遺物が寡少であり具体の中所時期は不明である。一方、他の3棟は柱穴6~8基を亀甲形に配置しており、竪穴住居跡との重複関係からそれに先行するものと推測される。

〈土坑類〉 土坑約50基及び柱穴状小土坑100基以上を検出した。土坑は円形・楕円形を基調とするものが多く、調査区上段東側に主に配置されている。出土遺物から縄文時代後期に属すると思われる。これらの土坑群には、覆土に人頭大の環が入るものや、赤色塗彩の土偶や腕輪などの土製品が出土したものなどがある。人骨等は出土しておらず確認を欠くものの、高塚である可能性が考えられる。一方、柱穴状小土坑は柱穴配列を明確には把握できていないものの、本来は建物を構成する柱穴が含まれているものと思われる。

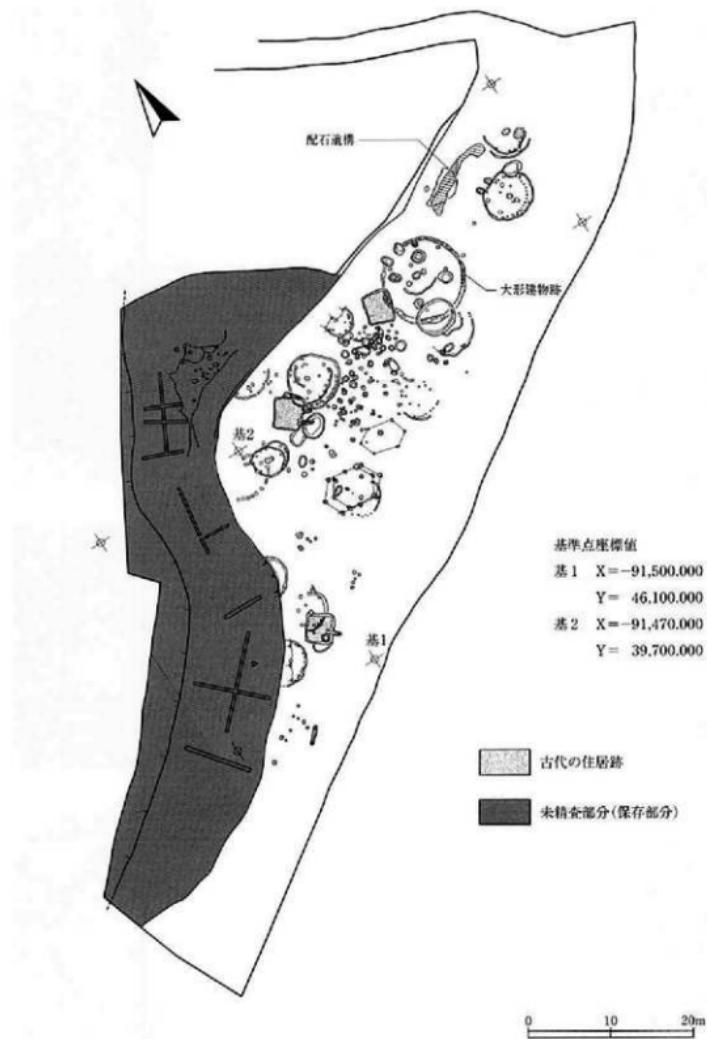
〈配石遺構〉 調査区中段部で列石1基、上段部で組石1基・立石1基を検出した。列石は縄文時代の生活面と推測される黒色土鐵斜面において検出された。斜面下側に膨らんだ長さ約10mの弧状を呈している。付随施設は確認されていない。斜面上方では確認できなかったが、本来は環状を呈するもの（環状列石）だった可能性もある。

〈焼土遺構〉 A区で1基検出されている。竪穴住居跡の炉跡だった可能性もあるが、それに伴う柱穴等は検出されなかった。

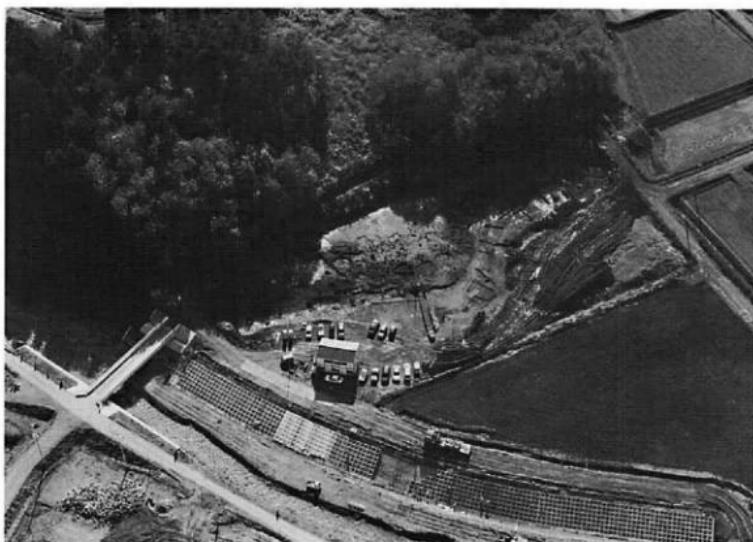
〈出土遺物〉 遺物総量は大コンテナ15箱分であるが、大部分を占めるのは縄文土器である。出土した縄文土器は破片資料が多いうえ、器形全体が復原できた資料は多くない。復原個体および文様のわかる破片資料で見る限りでは、器形・文様が加曾利B式併行の特徴を示すものが多い。一部前業や後業の特徴をもつ破片資料も見られるものの、出土資料の主体は後期中葉に位置付けられるものと推測される。土製品は土製円盤や土偶、腕輪、耳飾り、スタンプ形、振り子形の各種が出土している。石器類は石鎧、石錐、石逃、石窓、削挫器、磨製石斧、磨石、石製品では石剣が出土しているが、極端に量が少ない。一方土師器と須恵器は主に住居跡覆土及びその周辺から出土しており、器種では土師器壺・甕、須恵器壺・甕がある。

3.まとめ

今回の調査の結果、縄文時代後期と平安時代の集落跡が確認された。縄文時代後期の集落は竪穴住居・掘立柱建物・土坑（墓塚）・配石で構成されている。集落は北～北西向きの斜面地に立地し必ずしも良好な環境とはいえない難いにもかかわらず、検出住居数が20棟を数えること（但し時期差はあると推測される）、大形建物・配石遺構といった祭祀に関連すると思われる遺構が検出されたこと、などの点から該期としては比較的大きい特殊な集落だった可能性が考えられる。なお、竪穴住居（=居住施設）と建物・墓塚・配石（=祭祀施設？）には時期差がある可能性があるが、相互の関係については今後の検討課題である。また、遺構数に比して遺物量が少ないと、貯蔵穴と推測される土坑を欠くこと等から、調査区外に捨て場域や貯蔵域が存在している可能性がある。



久田遺跡遺構配置図



調査区全景



竪穴住居跡(縄文)



竪穴住居跡(平安)



配石遺構

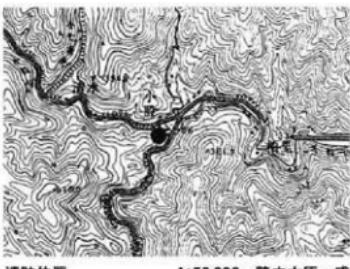


大形建物跡

久田遺跡検出遺構

(32) なで 館遺跡

所 在 地 住田町世田米字小殿
委 託 者 大船渡地方振興局土木部
事 業 名 国道397号道路整備事業
発 勘 調査期間 平成13年4月12日～8月23日
調査対象面積 2,500m²
発 勘 調査面積 2,500m²
遺跡番号・略号 NF14-0159・TT-01
調査担当者 丸山清治・吉田 光・佐藤あき子
川又 晴
協 力 機 関 住田町教育委員会



遺跡位置

1:50,000 陸中大原・盛

1. 遺跡の立地

館遺跡は住田町の北西部、国道107号と397号の合流点の南西側約300mに位置し、大股川及び小股川に挟まれた舌状河岸段丘の東向き緩斜面上に立地している。標高は185～190mで、現況は水田である。

2. 調査の概要

検出された遺構は、堅穴住居跡27棟、堅穴住居状遺構7棟、土器埋設遺構1基、土坑20基、柱穴状小土坑50基である。各遺構とも水田造成時の地形変容によって大きく破壊されており、残存状態は悪い。

＜堅穴住居跡＞ 扰乱の激しい部分を除くほぼ調査区全域で検出された。北端部は重複が著しい。27棟中3棟は地床炉を持つロングハウスで、大本3～5式土器が若干出土した。他は概ね平面形が直径4m前後の円形基調で、かぎには地床炉・石圓炉・土器埋設石圓炉の3種がある。構築時期はロングハウスが前期中～後葉、円形基調のものは大半が縄文中期の範疇に納まるものと考えられる。

＜堅穴住居状遺構＞ 堅穴住居跡に類するが炉のないもので、炉の欠損した住居跡も含む。主に北部で検出された。擾乱及び重複が著しく、大半は平面形が不明である。構築時期は住居跡と同時期と考えられる。

＜土器埋設遺構＞ 北西隅で検出されている。遺構上部は破壊され消失しており、本来どのような施設であったかは不明である。土器から縄文時代前期の遺構と考えられる。

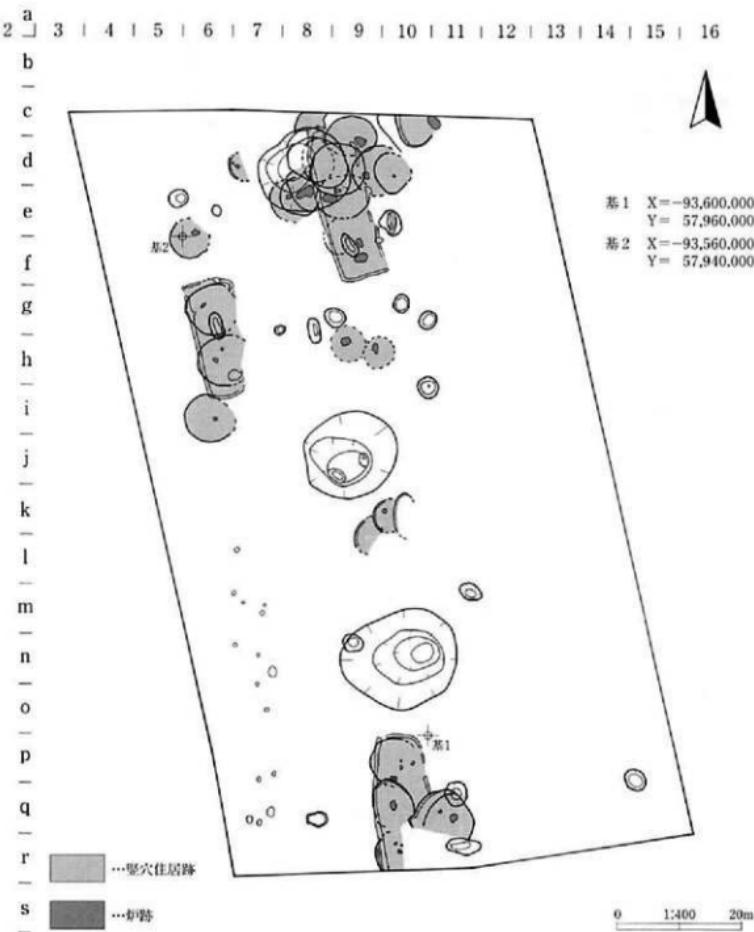
＜土坑＞ 全域で検出されている。①直径5mを超す大形、②長軸2m前後の長楕円形、③直径1～1.5m前後の円形の3種に大別される。①は埋土中にTo-Cu（十和田中振火山灰）を含むため縄文前期中葉以前と考えられるが、遺構ではなく陥没坑の可能性もある。②は形態から隨穴の可能性があり、半数が住居跡の床面以下から検出されているため前期と思われる。③は出土遺物から中期に属すると思われる。

＜柱穴状小土坑＞ 南西部でまとまって検出されている。直径30cm前後で、深さは10cm～1.5m程度と様々である。遺物が出土しておらず、構築時期は不明である。

＜出土遺物＞ 総量は大コンテナ17箱で、内訳は縄文土器7箱、石器10箱、石製品数点である。土器は前期中葉～後期初頭まであるが、主体は中期である。石器は大半が礫石器で、磨石が多い。

3.まとめ

調査の結果、縄文時代前期中葉～中期の集落跡が確認され、本県では出土例の少ない大木3～5式土器を伴う住居跡も検出された。また、遺構分布が調査区北・南端に密で、遺路範囲がさらに南北へ広がることが判明している。同部分も事業区域内であるため、次年度も継続調査の予定である。



館遺跡遺構配置図

(33) 小松 I 遺跡

所 在 地 気仙郡住田町上有住字小松28-1ほか

委 託 者 大船渡地方振興局土木部

事 業 名 一般県道釜石住田線改良工事

発掘調査期間 平成13年5月22日～11月30日

調査対象面積 4,345m²

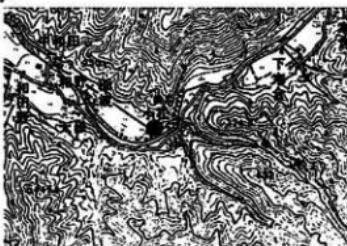
発掘調査面積 2,394m²

遺跡番号・略号 N F07-0030・KM I -01

調査担当者 吉田 充・西澤正晴・高瀬克範

佐藤あき子

協 力 機 間 住田町教育委員会



遺跡位置

1:50,000 遠野

1. 遺跡の立地

小松 I 遺跡は JR 釜石線上に住田駅の南西約8.5kmに位置する。本遺跡を含む上有住地域には古生代の石灰岩が分布し、流域洞をはじめとする洞穴が点在する。遺跡の数百m上流付近には小松洞穴が、約3km下流には巖王洞穴が気仙川に隣接して分布している。本遺跡周辺には小松洞穴付近で気仙川が狭窄し下流側に広がるため、多量の河川性堆積物が、また、北側の山体から供給された堆積物や局所的な扇状地性堆積物が多く堆積している。調査以前は水田及び畠地であった。

2. 調査の概要

昨年度未了部分745m²と新規調査区3,600m²の合計4,345m²が調査対象となった。昨年度調査で地山検出面が約3mと予想されたため調査開始前の3月下旬に表土を除去する予定であったが、調査区を含む道路建設予定地はイヌワシの生息が確認され、環境保護調査のために約2箇月遅れの5月下旬開始となった。

新規調査区の地山（疊層）は旧河道路跡で深さ3mを超える重機粗掘・人力検出精査を3回行なった。基本土層は黒色土層、崖壁性砂礫質粘土層、十和田中源火山灰層（2次・1次堆積層）、褐色粘土層、繩文早期末～前期とみられる包含層、粘土質砂層、疊層（地山）である。縦横調査区では埋め戻した土を除去後に3面（早期末）の人力検出精査を行なった。また、調査区中央に位置する生活用道路（昨年度未着手）の表土1mを除去し、1面・2面の検出精査を行なった。今年度は雨天の日が多いため常時湧水があり、8月・9月の台風では調査区が浸水するとともに山体側面が崩落した。このためにおよそ1箇月間調査不能となった。本区は繩文早期末・前期初頭・晩期末～弥生時代初の3面が検出され、早期末はさらに数面検出された。基本土層は黒色土層、崖壁性砂礫質粘土層、黒色土層、十和田中源火山灰層、砂礫質粘土・砂疊土・包含層（捨て場、最低3枚）の互層、砂層、疊層（地山）である。山裾に位置し、旧河道の影響もあるため、東西南北両方向に層相変化が激しく、地山検出面は2～5mと深い。検出された遺構は、堅穴住居跡・堅穴状遺構25棟、土坑18基、柱穴状土坑22基、焼土遺構16基、溝跡1条及び捨て場である。遺構の時期は、検出層位や出土遺物から判断して繩文時代早期末葉・前期前葉・晩期末葉～弥生時代前葉と考えられる。

＜堅穴住居跡・堅穴状遺構＞ ともに同様の規模・遺物出土状況をもち、炉のあるものを住居跡、無いもの

を堅穴状遺構とした。構築された時期は、縄文時代早期末葉が2棟、前期初頭が3棟、早期末葉～前期前葉が20棟である。新規調査区の住居跡は旧河道路からほとんど検出され、形状が円形～楕円形で、長軸規模は2.5～4.5m（単純平均値3.5m）である。後述する継続調査区の住居跡と比較すると早期末葉の住居跡と規模・形状が似ているが、出土遺物に表裏縄文を含まず、やや厚めで胎土に纖維を含む非結束羽縄文の土器片を含む点で、継続調査区の住居跡とは異なる。継続調査区で検出されたものは、早期末葉と前期初頭の住居跡である。前期初頭のものは昨年度検出されたものと同様規模が大きく、6m以上である。花崗下層に対比される土器片が出土する。早期末葉の住居跡は規模3.8mの円形状で、表裏縄文の土器片が出土する。これら2時期の住居跡の検出面は明らかに異なり、近接する位置で検出された住居跡は約50cmの高さがある。

＜土坑＞ 構築された時期は、縄文時代早期末葉が1基、前期初頭が4基、早期末葉～前期前葉が13基である。早期末葉のものは円形で、規模は1m、深さ16cmである。前期初頭のものは円形～楕円形で、規模は80cm～1.7m（平均1.28m）、深さは10～20cm、早期末葉～前期前葉のものは楕円形のものが多く、規模は60cm～2.1m、深さは5～27cmである。

＜柱穴状土坑＞ 新規調査区の旧自然堤防上と継続調査区内生活用道路下で22基検出された。継続調査区のものは北東方向に並ぶものがあり、埋土状況から近現代の遺構と考えられる。新規調査区のものは規模が40cm前後である。

＜焼土遺構＞ 新規調査区の旧河道上と継続調査区で16基検出された。継続調査区のものは円形～楕円形を呈し、長軸の規模は45cm～1.6mである。周辺から遺物が出土する場合がある。2つの面で検出され、時期は早期末葉と前期初頭である。新規調査区のものは不整な楕円形を呈し、規模は60cm～1.3mである。土器片がまとまって出土することがある。時期は早期末葉～前期前葉と考えている。

＜洞跡＞ 新規調査区旧自然堤防上で1条検出された。長さ12m・幅20cmで、崖懸性砂礫質粘土層下位の火山灰質土を掘り込むと判断したが、その後検出した旧河道路の中揮火山灰下位柱穴列に関係する可能性があり、検討中である。

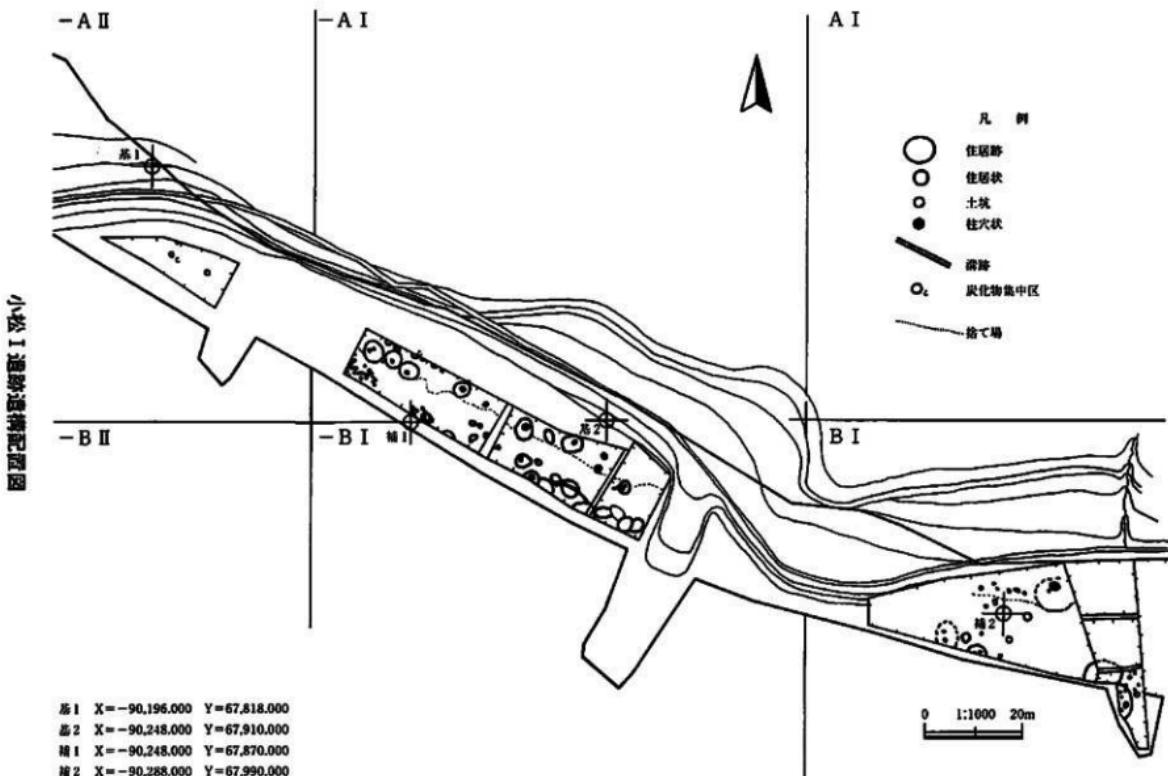
＜炭化物集積区＞ 新規調査区旧河道路の中揮火山灰下位褐色粘土層上で2箇所検出された。不整形～楕円形を呈し、規模は1.2～1.5mで、厚さは数cmである。最大数cmの炭化物片が密集する。早期末葉～前期前葉と考えられる。

＜捨て場＞ 新規・継続両調査区の主に山体間に沿って複数枚検出される。土器片・石器・剥片・獸骨・炭化物などが含まれる。層位関係など整理中である。

＜出土遺物＞ 大コンテナで12箱の土器片・石器が出土した。土器片は、ほとんどが住居跡と捨て場から出土し、貝殻文・撲糸文・条痕文・压痕文・沈線文・縄文の文様を持つ。継続調査区のものは出土層位と施文の特徴から、早期末葉・前期初頭・晚期末葉～弥生時代前葉に属する。新規調査区のものは継続調査区の前期初頭の系統をもつものがあるが、その位置付けは検討中である。石器は剥片石器が多く、石器や石器などが出土している。この他、新規調査区では片面に自然面を残す打製石斧が出土する。

3.まとめ

昨年度調査区西側約200m間に新たな調査区が設定され、昨年度未了分とあわせて調査が行なわれた。新規調査区においても旧河道路が検出され、旧自然堤防上と旧河道路から住居跡等の遺構が検出された。出土遺物から両調査区で多少の時期差が推定された。出土する石器の種類・剥片の量および獸の骨・歯から、狩猟も生活の糧としていた集落が主に縄文時代早期末葉～前期初頭にかけて営まれていたと推測された。昨年度に引き続き貴重な情報をえることができ、今後の整理でさらに明らかにしていきたい。





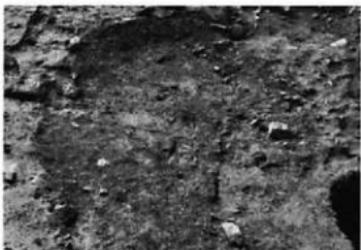
調査区全景(北西より)



竪穴住居跡(B I区縄文時代前期初頭)



竪穴住居跡(B I区縄文時代早期末)



竪穴住居跡(- A I区縄文時代早期末~前期)



土器出土状況(- A I区縄文時代早期末~前期)

小松 I 遺跡遺検出遺構・遺物出土状況

(34) 明後沢遺跡群第13次調査

所 在 地 前沢町古城字幅123-1ほか
 委 託 者 水沢地方振興局
 水沢農村整備事務所
 専 業 名 ほ場整備施設上野地区
 発掘調査期間 平成13年4月11日～8月6日
 調査対象面積 4,720m²
 発掘調査面積 4,720m²
 遺跡番号・略号 N E 36-2175・MGS-01
 調査担当者 島居達人・龟 大二郎
 協 力 機 関 前沢町教育委員会



1. 遺跡の立地

遺跡は水沢市の市街地と前沢町の中間にある明後沢台地に立地している。北を松の木沢川、南を明後沢川が流れおり、東側の斜面下を台地に沿って4号線が通っている。今回の調査範囲はそのほぼ中央に位置する。

2. 調査の概要

明後沢遺跡群は古瓦が出土する遺跡として知られているが、今回の調査区はその地域からはずれている。縄文時代の陥り穴状遺構、平安時代の住居跡、多くの溝跡や柱穴状土坑が検出された。

〈竪穴住居跡〉 竪穴住居跡は5棟確認されており、そのうちの2棟の住居跡はほぼ完全な形で検出された。大きさは南北3.5m、東西約5mほどで、形状は隅丸長方形をしている。また、カマドを複数持つものや、テラス状の高まりがあるものも検出されている。

〈土坑と柱穴状土坑〉 土坑と柱穴状土坑を検出したが、平安時代の土師器を出土した5基を除きほとんどが時代不明である。柱穴状土坑の中には柱穴列もあるが、調査範囲が狭く掘立柱建物跡は確認できない。

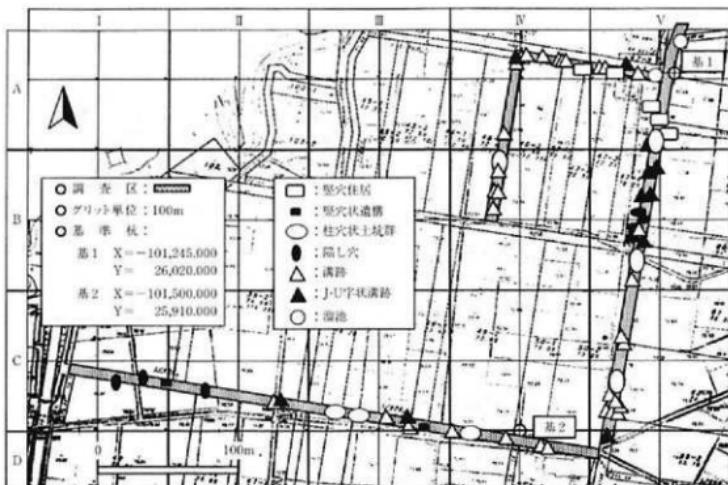
〈陥り穴状遺構〉 7基の陥り穴状遺構を検出した。すべて溝状のもので、長さは2m、深さが80cmほどである。この区域は縄文時代は狩猟の場で、平安時代には居住区に利用していたと考えられる。

〈溝跡〉 調査区域全体では現代のものも含めて、60条以上の溝跡が検出された。埋土から平安時代と推定されるものは平面の形状がJ字状もしくはU字状をしており、調査区で6条ほど確認された。また、南側で検出された幅約2m、深さが最大1mもある堀のような大きな溝から古瓦片が出土した。

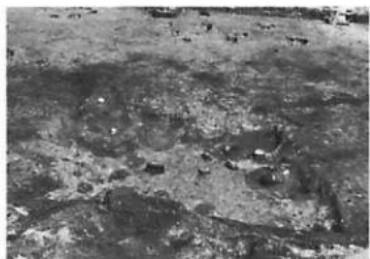
〈出土遺物〉 出土した土器は大コンテナ2箱で、住居跡から出土した土師器や須恵器が大部分を占めている。土師器はほとんどがロクロ使用のもので、その他に12世紀頃のものと思われるかわらけなども出土している。また前述の古瓦や、縄文時代の石斧、搔削器も数点出土している。

3.まとめ

今回の調査により明後沢遺跡群の北側区域は、平安時代には集落であったことが分かった。また、J・U字状に延びる溝跡が検出されたが、今回調査範囲が狭いため全体像を明らかにできなかった。



明後沢遺跡群第13次調査遺構配置図



壁穴住居跡



壁穴住居跡



周溝跡



溝跡

明後沢遺跡群第13次調査検出遺構

(35) もとまち 本町Ⅱ遺跡第2次調査

所 在 地 平泉町長島字本町3-2ほか

委 託 者 一関地方振興局

一関農村整備事務所

事 業 名 は場整備一関第2地区

発掘調査期間 平成13年4月12日～12月25日

調査対象面積 26,157m²

発掘調査面積 26,157m²

遺跡番号・略号 NE66-2179・MMⅡ-01-2

調査担当者 小笠原健一郎・本多準一郎

飯森秀文・佐々木信一・佐藤あき子

吉田真由美・木村ひかり

協 力 機 関 平泉町教育委員会



1. 遺跡の立地

本町Ⅱ遺跡はJR平泉駅の北東方約2km、柳之御所遺跡の北東約1.5kmに位置し、北上川左岸の自然堤防上に立地している。標高は約21~23m、現況は水田・畑地である。

2. 調査の概要

検出された遺構は、堅穴住居跡26棟（工房跡・住居状含）、建物跡27棟（礎石建物跡1棟含む）、焼土遺構10基、墓壙56基（茶見所含）、土坑135基、窓跡1条、溝跡17基、土器埋設遺構2基、周溝2条、道路状遺構1基、井戸跡2基、壺状遺構6基、壺跡約1.2m²、配石1基、炭窯6基、柱穴状小土坑2,462基である。

＜墓壙（墓域）＞ 周溝に区画され、中央の1基を中心にして東・南・西側に墓壙が並ぶ。北側からは六道鉢・火葬骨が出土した1基のみを検出した。墓壙、茶見所（2基）からかわらけ、白磁、常滑窯片、涅槃像片や古漁戸の壺片が検出されている。遺物から12世紀後半～15世紀頃の墓域と考えられる。

＜蟲跡＞ 調査区の南側から約12,356m²にわたり十和田a降下火山灰に覆われた蟲跡が検出された。蟲跡は調査区北側からも数十m²が確認されている。道等ではなく、東西方向と南北方向の2種の軌跡を持つ。

＜建物跡＞ 27棟を確認した。近世初頭のきもいりの屋敷跡と付随施設や中世の建物跡と考えられる。

＜堅穴住居跡＞ 26棟を検出し、内2棟は工房跡、3棟が住居状遺構である。9世紀後半～10世紀初頭が3棟。他は10世紀前半～11世紀初頭頃と考えられる。工房跡と考えられる1棟からは灰釉陶器の耳皿が検出された。

＜道路状遺構＞ 南側水路の東側から1基が検出された。石敷きあるいは構築材としての石を確認した。埋土から14～15世紀頃の青磁片が出土している。

＜壺跡＞ 道路状遺構の東側で道路に並行して1条を検出した。埋土上部からは常滑窯片が出土している。

＜土坑＞ 139基を検出した。時期は近世を主体に10～15世紀である。

＜配石＞ 近世の建物跡に付随するものと考えられる。

＜遺物＞ 中国産白磁・青磁、常滑・涅槃像陶器、古漁戸の壺・壺、かわらけ、土器・須恵器、近世陶磁

器等がコンテナ18箱が出土している。

特に渥美産の四耳壺は突帯文・縦耳・契文捺文の三種の装飾が施された希有な遺物である。このほか黒色処理された12世紀後半のかわらけ・13世紀後半の口禿の白磁（皿）や14世紀後半の古瀬戸直線大皿等の貴重な遺物が検出されている。

3.まとめ

今年度の調査により、清衡が平泉に入部する200年前にはすでに大規模な農業生産基盤がこの北上川東岸に成立し、10世紀後半頃には灰釉陶器の耳皿を持ち得るような何らかの権力を持つ集団が存在していた事が明らかとなった。清衡もこの生産基盤等の定着を背景に平泉に移ってきたものと推定される。また、検出された



調査区南側で検出された轟跡(北↑)

本町Ⅱ遺跡第2次調査写真図版1

た墓域は遺物から12世紀後半～15世紀頃まで何らかの形で存続していたものと考えられ、藤原氏滅亡後もこの生産基盤を背景に有力者が威勢を振るっていたものと考えられる。近世初頭の大型掘立柱建物跡が標高の高い墓域を避けて低地に造られていることは近世初頭まで墓域は聖域あるいは禁忌的場として認識されていたことを暗示しているものと思われる。平泉町において藤原氏時代に係わる遺跡は北上川東岸では一昨年まで確認されておらず、里跡に統き今年度の本道路の調査により9世紀後半から17世紀頃までの大よその北上川左岸の様子が明らかになりましたこと。特にも対岸の柳之御所関連遺跡と量的には劣るもののはば同様の遺物が検出されたことは、藤原氏時代の平泉の様相を知る上で大きな成果といえる。

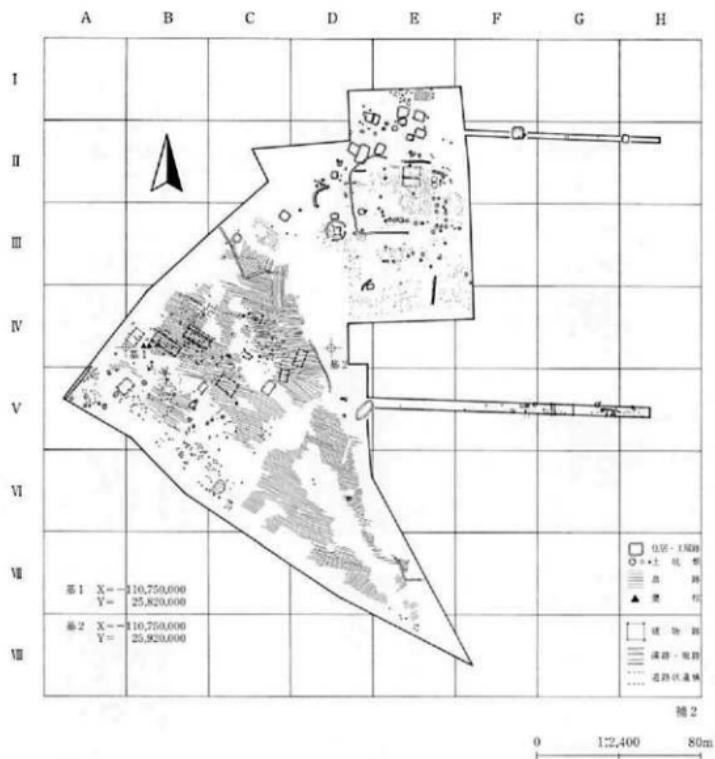


遺跡近景(東から)



調査区北側の墓域(直上 北→)

本町Ⅱ遺跡第2次調査写真図版2



灰釉陶器の耳皿



涇美産の四耳壺

本町Ⅱ遺跡第2次調査造構配置図・出土遺物

(36) 矢崎 I 遺跡第2次調査

所 在 地 平泉町長島字122-4ほか
 委 託 者 一間地方振興局
 一間農村整備事務所
 事 業 名 は場整備・一間第2地区
 発掘調査期間 平成13年4月11日～10月5日
 調査対象面積 4,500m²
 発掘調査面積 4,500m²
 遺跡番号・略号 NE 76-0283・YZ I -01-02
 調査担当者 岩渕 計・金野 進
 協 力 機 関 平泉町教育委員会



1. 遺跡の立地

矢崎 I 遺跡はJR東北本線平泉駅から東北東約2km、北上川の左岸に位置している。遺跡は北上川東部の舌状の台地を形成する丘陵地と氾濫平野の境界付近に立地しており、遺跡の標高は21m～23mである。周囲が水田として開発されているため、遺跡は微高地状に残されている区域となる。調査前の状況は主として畠地である。

2. 調査の概要

昨年度の第1次調査では今年度調査区の東側に隣接する2,150m²の区域の調査を行い、9世紀前半から中頃の竪穴住居跡2棟・縄文時代の竪穴状造構1棟・土坑5基・溝跡1条・焼土遺構2基が検出されている。今年度の第2次調査では縄文時代前期・後期、平安の遺構・遺物が検出された。縄文時代では前期の竪穴住居跡1棟・土坑2基・陥し穴4基・後期の竪穴状造構3棟・焼土遺構3基が検出された。平安時代では竪穴状造構4棟・土坑30基・溝跡6条・焼土遺構2基が検出され、出土遺物から9世紀から10世紀が想定される。また時期が不明の柱穴状小土坑を合計50基検出した。

＜竪穴住居跡＞ 縄文時代前期のものは小形の方形を呈しており、規模は一辺が約2.3m・検出面からの深さ約30cmである。壁外付近から柱穴状の小ピットを検出した。炉は確認されていない。

＜竪穴住居状造構＞ 縄文時代後期のものは径5.5×4.5mの規模で梢円形を呈している。炉跡や柱穴は確認されていない。また平安時代のものはいずれも径3～4mで、焼土が検出されている遺構もあるが、カマド・煙道は検出されていない。

＜焼土遺構＞ 縄文後期の焼土遺構が3基検出されているが、焼成はあまり見られない。平安時代の焼土遺構のうち、1基は鉄闇連の遺物が出土した土坑の周辺で検出されている。

＜土坑＞ 縄文時代のフ拉斯コ状の土坑を2基検出している。また、平安時代の土坑は規模が大きいもので径1.2～1.8mの深さがあり、形状は不整ではあるが方形を基調としている。規模が小さいものは60～80cmで、形状は円形のものが多い。そのうち3基からは、焼土と羽口片・鉄滓・鍛造片が出土している。周辺から焼土遺構・柱穴状小土坑を数基検出したことから、工房跡の可能性が考えられる。

＜陥し穴＞ 径が約1.5m前後の円形で、深さは1m～1.2mである。底面から逆茂木と思われる痕跡を検出している。

＜溝跡＞ 調査区をほぼ南北に走る溝跡は、幅1.1～1.2m、深さが40～50cm、長さ25mに亘り検出された。調査区の中央付近から北では、どの様に延びているのか確認できなかったが、調査区中央付近で検出した南東から北東に延びる同規模の溝とつながっていた可能性がある。遺構がこの溝跡の西側に集中しており、区画する機能を持つものと考えられる。また、L字状に屈曲する溝跡を1条検出した。

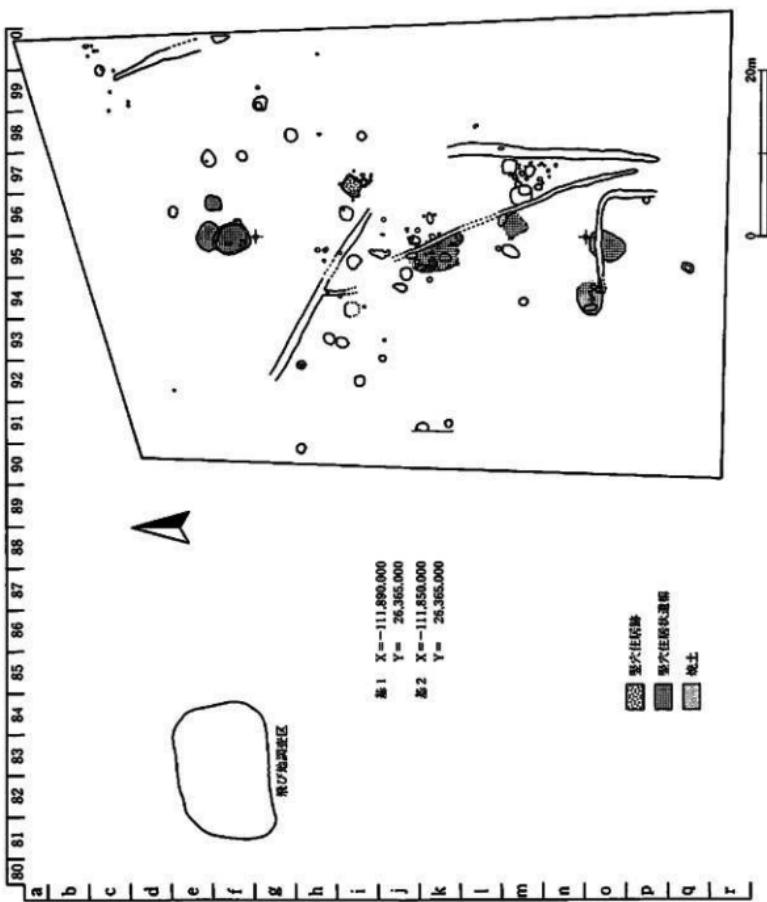
＜焼土遺構＞ 1基は鉄闇連の遺物が出土した土坑の周辺で検出している。住居跡のカマドなどに伴うものではないと考えられる。

＜出土遺物＞ 繩文土器片が大コンテナで約1箱出土し、前期前葉と後期後葉のものが多い。石器は石鏃、石匙、打製石斧、石鎧、磨石、敲石、四石等が約300点出土した。そのほかに石器剥片が大コンテナで約2箱出土している。これら石器類は、主に地山面の上層に堆積していた黒褐色土層からの出土である。平安時代の遺物については土師器・須恵器が中心で、大コンテナで4箱出土している。ロクロ使用の土師器が最も多く、器種は壺、皿、甕である。壺の中には内面が黒色処理されているもの、内外面黒色処理されたものが見られ、壺・皿類の中には高台を有するものも多い。またロクロ不使用の土師器、赤焼き土器も出土している。その他には少量であるが土鍾、鉄製品、羽口、鐵滓、鐵造剝片、陶磁器片なども出土している。

＜その他＞ 柱穴状小土坑を50基検出したが、時期は不明で建物になるものはない。また、水田面から約1.6mほど盛り上がった径約15～20mの環状の区域も調査の対象となっていたが、精査の結果岩盤状の自然石が取り残されたものであった。

3.まとめ

今回の調査では繩文時代前期・後期・古代の三時期の遺構・遺物を確認した。繩文時代前期には居住域として使用されていたことが明らかとなった。また、前期の面から多量の石器類が出土しており、製品よりも剥片や石核の量が多いことから、調査区域で生産していた可能性がある。平安時代では住居跡は検出されず、土坑が中心である。鉄製品の加工が行われた痕跡を示す遺構や遺物と区画する機能を持つらしい溝跡や竪穴状の遺構が検出されている。今後隣接する本町Ⅱ遺跡や竜ヶ坂遺跡との比較もふまえ性格を検討していくたい。



矢崎 I 退跡第2次調査遺構配置図



航空写真(平安面)



縄文前期の竪穴住居跡



円形竪穴



溝跡



遺物出土状況

矢崎 I 遺跡第 2 次調査検出遺構

(37) 清田台遺跡

所 在 地 千葉町清田字台5-4ほか
事 業 名 ふるさと農道緊急整備
委 託 者 千葉地方振興局
千葉農村整備事務所
発掘調査期間 平成13年4月11日～7月6日
調査対象面積 797m²
発掘調査面積 797m²
遺跡番号・路号 N F91-I291・K T D-01
調査担当者 小原真一・赤石 登・高瀬克範
協 力 機 間 千葉町教育委員会



1. 遺跡の立地

遺跡は、JR大船渡線千葉駅の東北東約1.3kmに位置し、千葉川の支流金田川左岸の緩斜面から尾根にかけて立地する。標高は110～120mである。道路内を旧沢が北流し、調査区を東西に分ける。遺構が検出されたたのは、東側の地区で、2段の平坦面で構成される。高い面は、尾根の途中に位置し、幅5～10mの狭い平坦面である。縄文住居跡と旧氣仙街道が検出された。検出された遺構のほとんどは、その下位の扇形をした緩斜面で検出された。

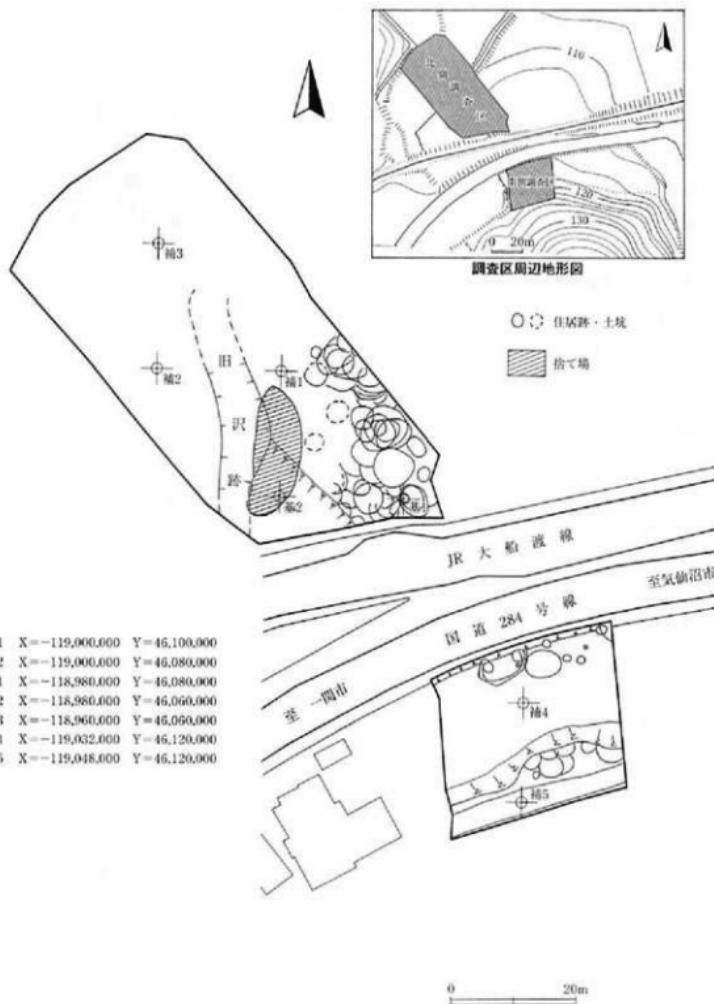
2. 調査の概要

3年間の調査で検出された遺構は、堅穴住居跡53棟、炉跡11基、住居状遺構3棟、焼土遺構15基、埋設土器遺構3基、石斧埋納遺構1基、配石遺構1基、土坑36基（含フ拉斯コ形9基）、柱穴状土坑341基である。今年度は、集落の西側の沢に面した斜面で、縄文時代中期中葉期の捨て場が検出された。広さは約160m²、厚さは約1～1.8mである。

3年間で出土した遺物は、縄文時代前期末葉から晩期にかけての土器を中心に大コンテナ約350箱にのぼる。特に中期の土器が全体の95%以上を占め、石器では約2,500点以上の石斧が出土している。そのほかに土偶、線刻石、有孔石製品、渦巻文様の彫り込みがある石皿、軽石に穿孔した浮子、アスファルト、炉の焼土内からはイノシシ、鹿、イタチ、キツネ、キジ、鮑及び鮎科、蛇、蛙、アイナメ、海たなご、マグロ、穴子？の焼骨、鮫の歯などが出土している。

3.まとめ

清田台遺跡は、出土した遺物や遺構の特徴から、縄文時代前期末葉から晩期にかけて集落が営まれていたことがわかった。また、集落の西側に形成された捨て場は、出土した土器から中期中葉期に限定され利用されていたこともわかった。調査は、集落の西端の一部（約800m）だけであったが、遺物の散布状況や地形から、集落は平坦面全体（約5,000m²）に広がっている可能性がある。今後さらに詳細な分析・考察を進め、本遺跡の性格・内容を明らかにしていきたい。



清田台遺跡遺構配置図

V. 本報告

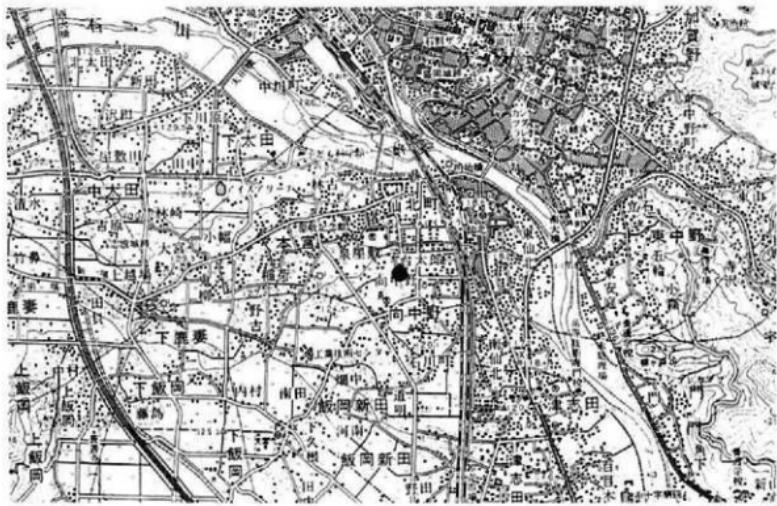
(38) だいたろう 台太郎遺跡第36次調査

所 在 地 盛岡市向中野字向中野37-3ほか
委 託 者 地域振興整備公団岩手総合開発事務所
事 業 名 盛岡南新都市計画整備事業
発 勘 調査期間 平成13年5月22日～6月5日
調査対象面積 370m²
発 勘 調査面積 290m²
遺跡番号・略号 L E 16-2296・O D T -01
調査担当者 西澤正晴
協 力 機 関 盛岡市教育委員会

1. 調査に至る経過

盛岡新都市開発計画は、盛岡市が来るべき21世紀に向けて、経済・文化などに対する各機能を兼ね備えた北東北の拠点都市を目指して、現在の既成市街地の他に、市域の南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都心を形成するために策定された土地区画整理事業である。

この事業は、平成2年9月に、岩手県、盛岡市、都南村（現盛岡市）の三者が、地域振興整備公団に対し



遺跡位置

て事業要請を行い、これを受け公団は実施計画を作成した。平成3年12月に建設大臣と国土庁長官から事業の実施認可が下り、平成3年度から平成17年度までの15年間を事業予定期間とし、面積313haを対象とした土地区画整理事業が実施されることになった。この間、事業対象地域に係わる埋蔵文化財取り扱いについても協議が重ねられ、その結果、盛岡市教育委員会が試掘調査を行い、本調査を必要とする範囲を確定し、本調査は財団法人岩手県文化振興事業団の受託事業とすることとなった。

当遺跡については、岩手県教育委員会が地域振興整備事業団と協議の結果、平成13年度の事業として確定した。これを受けて平成13年4月3日に財団法人岩手県文化振興事業団理事長と地域振興整備公団所長との間で委託契約を締結し発掘調査を実施することになった。台太郎遺跡第36次調査は平成13年5月22日に開始され、同年6月5日に終了する。

地域振興整備公団岩手総合開発事務所

2. 遺跡の立地

台太郎遺跡は、JR東北本線仙北町駅の南西約900mに位置し、半石川によって形成された河岸段丘上に立地し、標高は120m前後である。調査区は第35次調査区に隣接し、ほぼ平坦な地形である。調査前の状況は住宅地であった。

3. 遺跡の基本層序

本調査区の基本層序は、既知の調査と同様の堆積状況を示し、以下の通りであるが、擾乱を受けていることが多いため、Ⅲ・Ⅳ層を欠いている場合がある。

I 黒褐色土（現代耕作土）、II 暗色粘土層（旧水田面床土）、III 黒褐色シルト（中～下位古代遺構検出面）IV層 暗色砂質シルト層（上位～中位古代遺構検出面）、V層 暗色砂疊層（段丘の基盤をなす層）

4. 調査の概要と検出遺構

調査区は、第35次調査区と隣接し、第15次調査と道路を挟み向かい合っている。集合住宅の跡地であるため建物の基礎や排水管が地下深く入り込み、また近年の庭芥庵棄用の穴も多數発見された。そのため、遺構確認面は、ひどく荒らされており検出は困難を極めたが、柱穴状土坑を4基検出した（P1～P4）。

柱穴状土坑 いずれも円形を基調とする平面形で筒状に掘り込まれている。規模は、直徑20～40cmの間で深さは23～50cm前後であり、均一なものはない。また、調査区内に点在することから建物跡とは考えにくい。埋土はすべて半屑であり、柱根跡等は確認されなかった。P1は調査区北側の道路下に一部入り込んでいることから、北側に向てさらなる広がりが予想される。

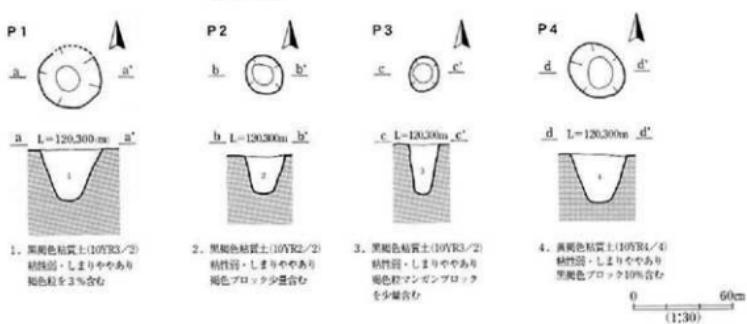
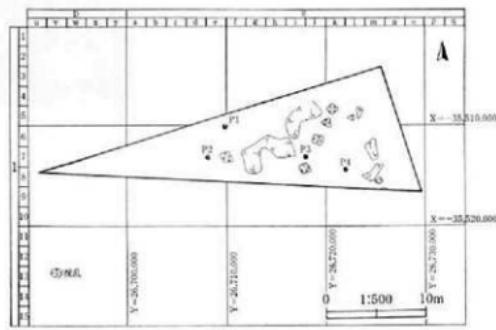
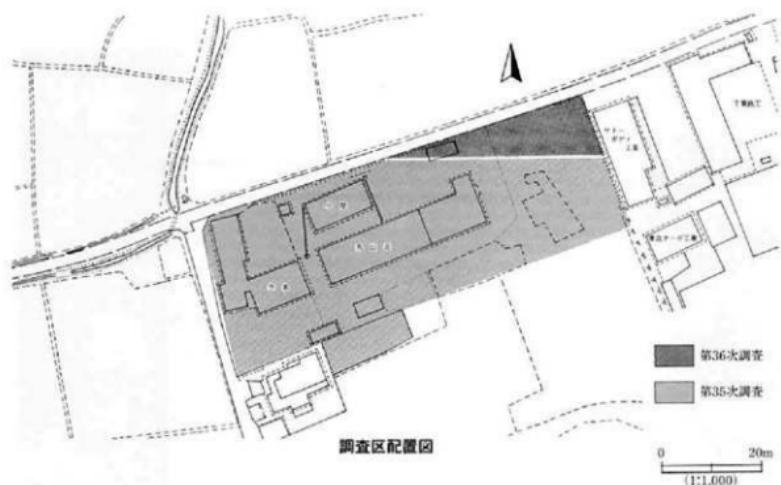
5. 出土遺物

今次調査では出土遺物は発見されなかった。

6.まとめ

今回の調査では、柱穴状土坑4基が検出された。これは並行して進められた第35次調査で検出された柱穴状土坑群に統くものであり、また北側に隣接する第15次調査で判明した中世の棚立柱建物跡に関連するものと予想される。しかし、遺物が出土せず、後世による擾乱のため時期や性格を確認するには至らなかった。しかし、今後周辺の調査が進めば今次調査のような結果も、台太郎遺跡を考える上では貴重な資料となり得るであろう。

なお、台太郎遺跡第36次調査に関する報告は、これをもって全てとする。



第1図 遺構配置図及び遺構平・断面図



写真図版 1 36次(35次含む)調査区全景

報告書抄録

ふりがな 書名	いわてけんまいぞうぶんかざいはくつちょうさりやくほう 岩手県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第397集							
編著者名	西澤正晴							
編集機関	財团法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0852 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	西暦2002年3月29日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号	。	。	。	。	。	。	。
岩手県盛岡市 台太郎遺跡	向中野字向中 野37-3ほか	03201	LE16 -2296	39度 40分 46秒	141度 08分 41秒	20010522~ 20010605	290m ²	盛岡南新都市 開発事業に伴 う緊急発掘調 査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
台太郎遺跡	集落跡	中世?	柱穴状小土坑	なし				

(39) 細谷地遺跡第6次調査

所 在 地 盛岡市飯岡新田2地割67ほか
委 託 者 地域振興整備公団岩手総合開発事務所
事 業 名 盛南区画整理盛岡南新都市計画整備事業
発掘調査期間 平成13年5月22日～6月5日
調査対象面積 190m²
発掘調査面積 190m²
遺跡番号・略号 L E 26-0214・O H Y-01-6
調査担当者 八木勝枝
協 力 機 関 盛岡市教育委員会

1. 調査に至る経過

盛岡南新都市開発計画は、現在の既成市街地の他に市域の南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた輪状都心を形成するために策定された土地区画整理事業である。平成3年度から平成17年度までの15年間を事業予定期間とし、面積313haを対象とした整理事業が継続中である。

事業対象地域に係わる埋蔵文化財の取り扱いについては、盛岡市教育委員会が試掘調査を行い本調査の必要範囲を確定し、本調査は財團法人岩手県文化振興事業団の受託事業として実施している。

細谷地遺跡については平成12年度に行った第4次調査の結果から、当初の遺跡範囲の北側に遺構の存在が確認され、市教育委員会との協議により本調査必要範囲が拡大されることとなった。これを受け、盛岡市盛南開発課委託分の5,805m²については平成13年4月16日～7月31日にかけて第5次調査、南西側に隣接する都市計画道路南仙北沢線と間連橋飯岡線の交差点用地190m²については、地域振興整備公団委託分として同年5月22日～6月5日にかけてここに報告する第6次調査を実施した。

調査の結果、遺構・遺物とともに僅少であったことから同年冬期間に整理を行い、当埋蔵文化財センターの平成13年度調査略報に本報告として掲載した。
地域振興整備公団岩手総合開発事務所



遺跡位置

2. 遺跡の立地

細谷地遺跡はJR東北本線仙北町駅から南西約1.5kmに位置し、平石川右岸の河岸段丘上に位置する。今回の調査区の標高は122m前後で、現況は水田である。

3. 基本層序

本遺跡の基本層序は以下のとおりである。

- I層 7.5Y R3/3暗褐色シルト 粘性弱 締まり密 表土(現代耕作土)
- II層 10Y R2/2黒褐色シルト 粘性弱 締まり疎(上面近世遺構検出面)
- III層 10Y R2/1黒褐色シルト 粘性やや中 締まり密(灰白色火山灰粒子含む、古代遺物包含層)
- IV層 10Y R3/1黒褐色シルト 粘性やや中 締まり密(漸移層、上面古代～縄文遺構検出面)
- V層 褐色土(地山シルト層) V層の下位は砂質シルト層、礫層となっている。

4. 調査の概要と検出遺構

第6次調査区は全域が第4次調査区より一段低い旧河道部分である。そのため遺構密度が低く、R102井戸状遺構が1基検出されたのみである。遺構検出面は、基本土層のIV層上面である。平面形は径約2.7mの円形で、断面形は底面から検出面にかけて広がる逆台形を呈する。南側の部分は、現用水路保護のため法面として残した。井戸状遺構上位の側壁に沿って径約10~20cm程度の礫がまとまり、礫の崩落を止める横板と、横板を支える木杭が4本検出された。底面には約40×25cmの礫が2点敷かれている。上下の礫は階段状に配置される。礫は大・小ともに断面にほとんど見られず、北側に偏ることが推定される。

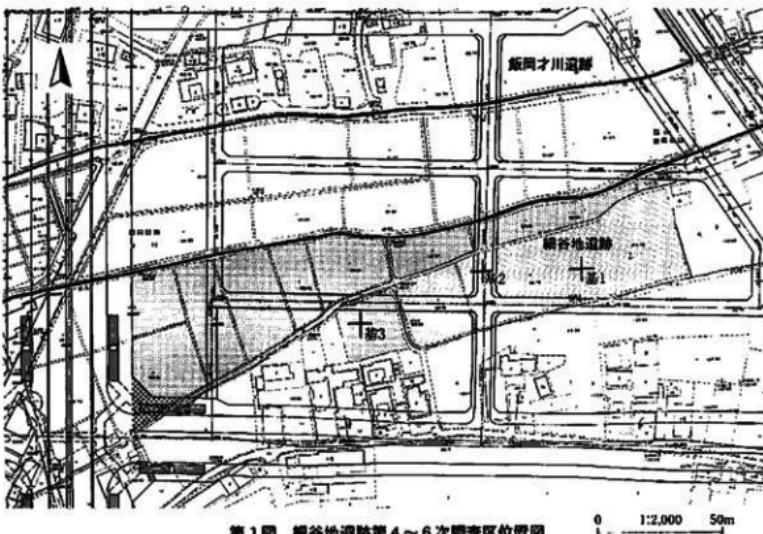
5.まとめ

第6次調査区の遺構の時期は検出面から近世と考えられ、細谷地遺跡の他調査区で確認された古代の遺構は認められない。

なお、細谷地遺跡第6次調査に関する報告は、これをもって全てとする。

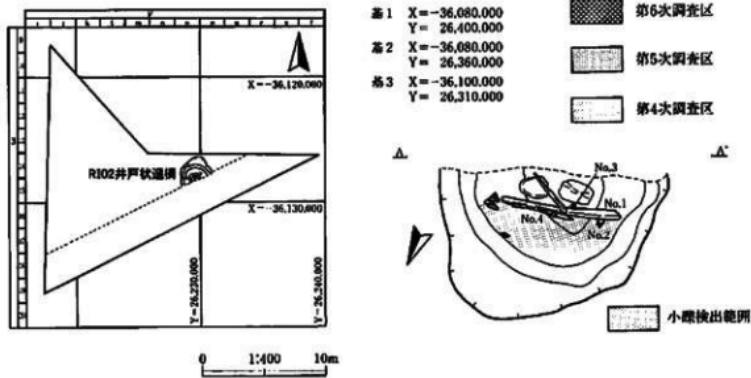
報告書抄録

ふりがな	いわてけんまいぞうぶんかざいはくつちょうさりゃくほう							
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第397集							
著者名	八木勝枝							
発行機関	財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	西暦2002年3月29日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° °'	東経 ° °'	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
細谷地遺跡	岩手県盛岡市 飯岡新田2地 割67地	03201	L E26 -0214	39度 40分 27秒	141度 08分 24秒	20010522~ 20010605	190m ²	盛岡南新都市 開発事業に伴 う緊急発掘調 査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
細谷地遺跡	集落跡	近世	井戸状遺構	角材・木杭				



第1図 細谷地遺跡第4～6次調査区位置図

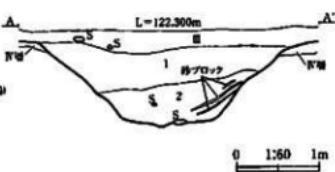
0 1:2,000 50m



第2図 細谷地遺跡 第6次調査区造構配図

0 1:400 10m

1. 7SYK3/1 黄褐色シルト 粘性やや弱 植や小草
堆積プロフリット 1m～5cmを少量含む（5%未満）
2. 7SYK2/1 黄褐色シルト 粘性強 植や小草
部分的に砂の流れ込みあり



第3図 RIO2井戸状造構

細谷地遺跡第6次調査造構配図・井戸状造構

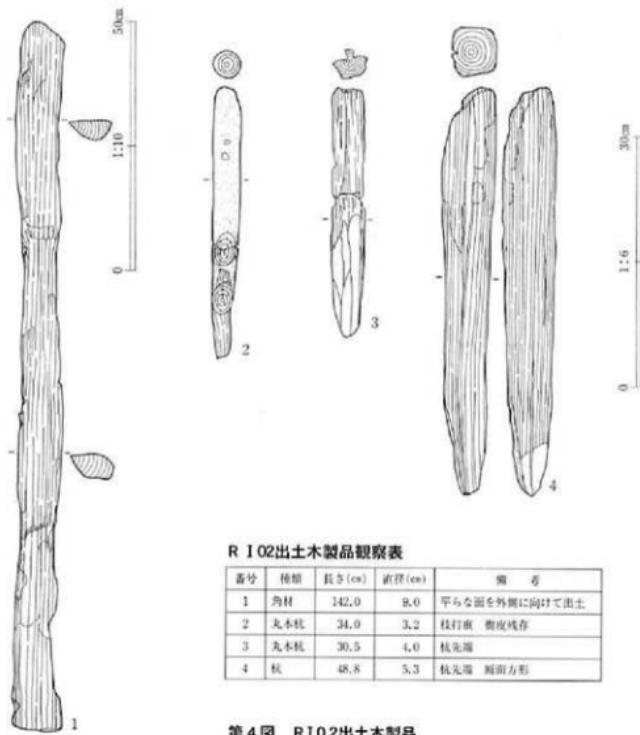


R IO2断面



R IO2底面遺物出土状況

細谷地遺跡第6次調査検出遺構写真



R IO2出土木製品観察表

番号	種類	長さ(cm)	直径(cm)	備考
1	角材	142.0	9.0	平らな面を外側に向けて出土
2	丸木杭	34.0	3.2	枝打痕 梗皮残存
3	丸木杭	30.5	4.0	枝先端
4	杭	48.8	5.3	杭先端 楔形方形

第4図 RIO2出土木製品

細谷地遺跡第6次調査検出遺構写真・出土木製品

(40) 新井田Ⅱ遺跡第1次調査

所 在 地 盛岡市羽場字木伏～新井田地内

委 託 者 盛岡地方振興局土木部

事 業 名 緊急地方道路整備事業

主要地方道盛岡和賀線改良工事

発掘調査機関 平成13年10月1日～11月1日

調査対象面積 1,300m²

発掘調査面積 1,300m²

遺跡番号・略号 L E 26-2004・N I D-01

調査担当者 小松剛也・菊池貴広

協力機関 盛岡市教育委員会



遺跡位置

1:50,000 盛岡

1. 調査に至る経過

新井田Ⅱ遺跡は、「主要地方盛岡と賀線緊急地方道路整備事業」の実施に伴い、その事業区域内にすることから、発掘調査を実施することになったものである。

本事業は、交通量の増大に伴い交通の安全と円滑な流れを確保するため、現状の2車線を4車線とするものであり、平成5年度から事業執行中である。(H5～H11道路改築事業、H12から緊急地方道路整備事業)

本地区は、平成12年度に岩手県教育委員会の要請により試掘調査をした結果、発掘調査が必要になったことから岩手県教育委員会と盛岡地方振興局が協議を行い、発掘調査を財團法人文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

(盛岡地方振興局土木部)

2. 遺跡の立地

新井田Ⅱ遺跡はJR東北本線飯岡駅より西へ約2.7km、半石川右岸の河岸段丘上に位置する。標高は121～122m前後で、現況は宅地、荒地、畠地である。

3. 基本土層

I層 表土

II層 10Y R2/2黒褐色シルト 粘性なし 繋まり密(縄文前期、弥生、土師器出土)

III層 10Y R3/4暗褐色シルト 粘性弱 繋まり密(縄文土器出土)

IV層 10Y R4/6褐色シルト 粘性弱 繋まり密(地山ローム)

4. 調査の概要と検出遺構

数箇所に試掘トレッチを入れ、各地点の遺物出土状況や土壌の層序を確認しながら重機による表土除去を行い、検出作業を行った。その結果、土坑1基、柱穴状ピット21基を検出した。

〈RD01土坑〉 WB2b区で検出した。規模は開口部径1.23×1.21m、底部径60×59cm、深さ20cmである。平面形は円形である。埋土は崩落した地山を含む。磁器の極小破片と観の破片が出土した。出土遺物から時期は近代のものと推測される。

〈柱穴状ピット〉 調査区南側から3基(pp1～3)、北側から18基(pp4～21)、計21基検出した。開口部径は、6～44cm、深さ6～82cmを測る。埋土は、粘性や繋まりに多少違いはあるが、いずれも単層の黒色シルトである。pp11とpp14からは、摩滅した縄文が施された小破片が出土している。

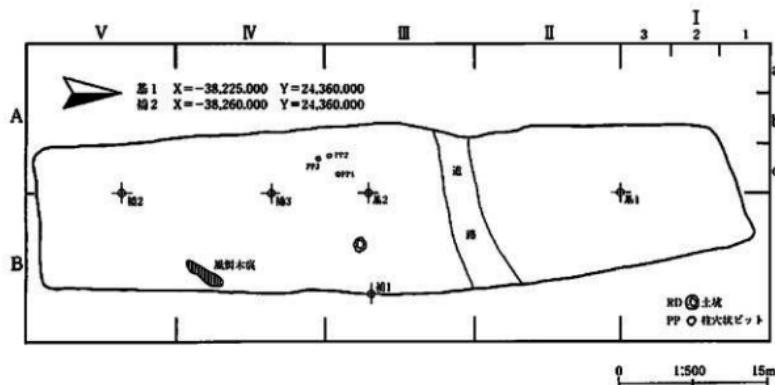
5. 出土遺物

縄文前期から弥生中期に至る土器が、小コンテナで1箱ほど出土した。すべてII層からの出土で、4の蓋は変形工字文が変異した弥生中期前葉の流水文である。石器はII層中位から出土した。10は磨製石斧である。11の石錐は剥離調整が粗い。遺構外から陶磁器が出土している。12は衆付の蓋で、見込みは火炎文である。13は瀬戸産の碗である。

6.まとめ

遺物集中区からは、弥生中期の土器をはじめとし縄文土器(前期)・石錐・石核・陶磁器なども出土した。この地域は自然地形の落ち込み部分にあたり、遺物は流れ込んだものと推測される。また、弥生時代の遺物が出土したことから、周辺に同時期の集落が存在したことを裏付けるものもある。

なお、新井田Ⅱ遺跡第1次調査に関する報告は、これをもって全てとする。



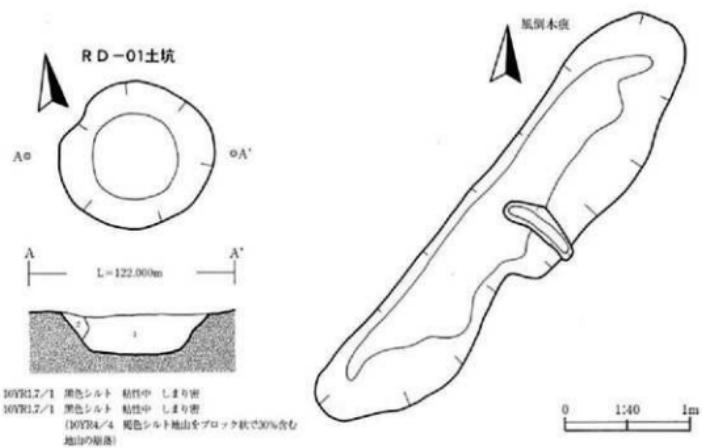
新井用工具附第1次調查地圖配圖

報告書抄録

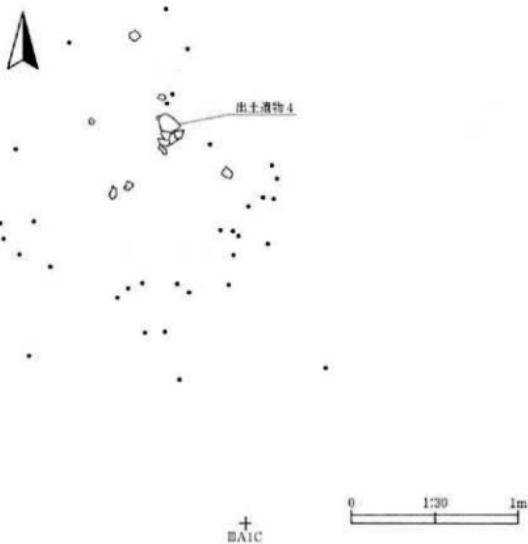
ふりがな	いわてけんmaiぞうぶんかざいはくつちょうさりやくほう
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第397集
編著者名	小松剛也・菊池貴広
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下領岡11-185 TEL (019) 638-9001
発行年月日	西暦2002年3月29日

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ° °	東經 ° ° °	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
新井田遺跡 第1次調査	岩手県盛岡市 羽場字木伏~ 新井田地内	03201	L E 26 -2004	39度 39分 40秒	141度 06分 28秒	20011001~ 20011101	1,300m ²	「主要地方道 盛岡と賀線緊 急地方整備事業」 にともなう 緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
新井田Ⅱ遺跡 第1次調査	散布地	縄文前期 弥生中期 近世	土坑1基 柱穴状ピット21基	縄文前期～ 弥生土器 陶磁器 麻製石斧 石器 陶磁器	弥生中期前葉の蓋が出土

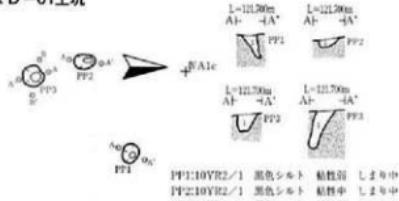


弥生土器出土状況

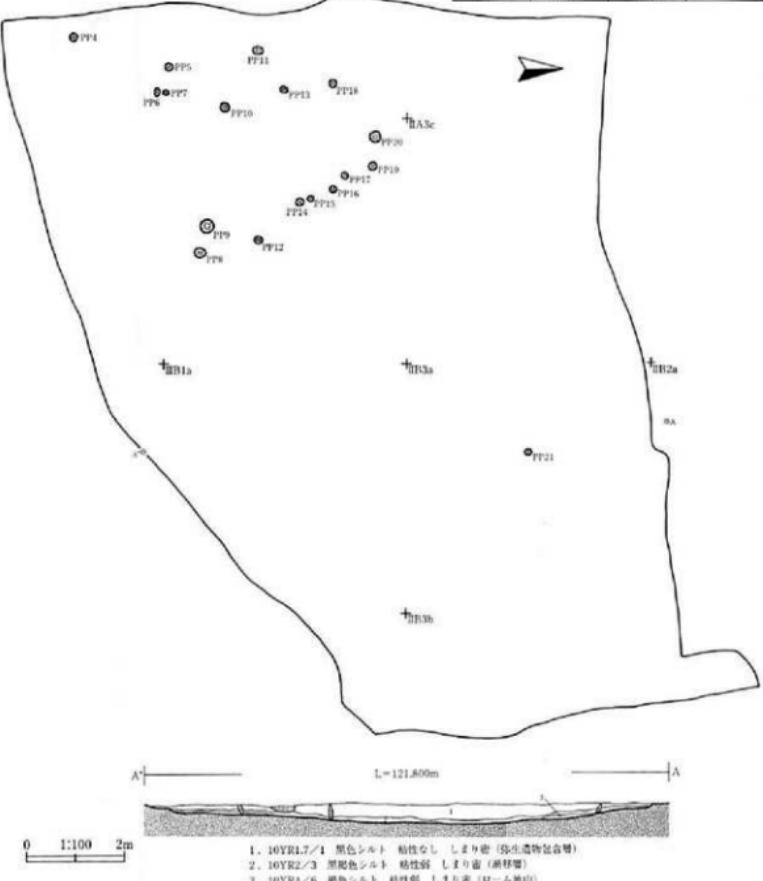


第2図 新井田Ⅱ遺跡第1次調査土坑・風倒木痕・遺物出土状況

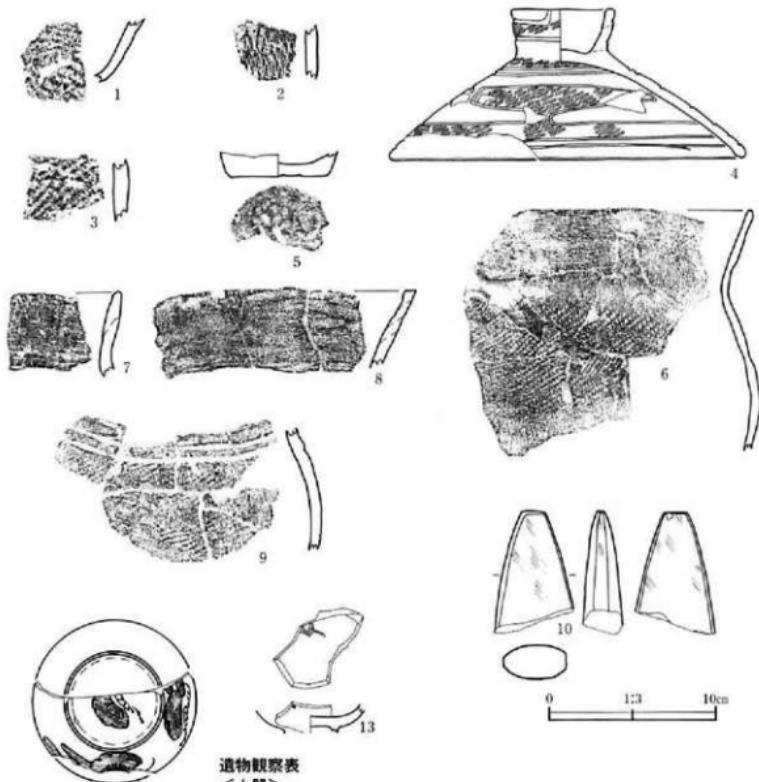
R D - 01 土坑



PP番号	間口(幅) (cm)	奥行き (cm)	土器片収入
PP1	42.0×32.0	36.0	
PP2	41.5×30.0	14.0	
PP3	44.0×42.5	25.0	
PP4	9.0×7.0	8.0	
PP5	8.5×7.0	14.0	
PP6	9.5×6.5	8.5	
PP7	8.0×5.5	11.0	
PP8	12.0×9.5	24.0	
PP9	8.0×6.5	23.0	
PP10	9.0×9.0	20.0	
PP11	12.0×9.0	20.0	有り
PP12	8.0×6.5	11.0	
PP13	9.0×7.5	7.5	
PP14	7.5×6.0	16.5	
PP15	6.0×5.0	10.5	
PP16	8.0×7.5	15.0	
PP17	6.0×6.0	11.0	
PP18	8.0×7.5	14.0	
PP19	9.0×7.5	17.5	
PP20	12.0×11.0	18.0	
PP21	8.0×6.5	10.5	



第3図 新井田Ⅱ遺跡第1次調査柱穴状ピット群・土器出土区・断面



遺物観察表

<土器>

番号	出土地点	層位	器種	部位	外面/底面/模様等	内面	時代時期	写真
1	II A2c	II層	深鉢?	側部	原体不明、織維合存	ナゲ	縄文前期	1/3
2	II A2c	II層	深鉢?	側部	西高文(?)、織維合	ナゲ	縄文前期	1/3
3	II A3c	II層	深鉢	側部	II長縫文	ナゲ	縄文	1/3
4	II A3b	II層	釜	フマキ-笠形	II長縫文模様、磨消純文 並行凹線、砂粒金雲母含、流水文	ミガキ	弥生中期 前葉	1/3
5	II C1c	II層	甌	底部	小縫合		弥生中期	1/3
6	II A3c	II層	甌	口縁から側部	無文、磨消純文、小波状口縁、外側褐村着	ナゲ	弥生中期	1/3
7	II A2c	II層	甌	口縁部	無文、小縫合、織維合	ナゲ	弥生中期	1/3
8	II A3c	II層	甌	口縁部	無文、小波状口縁、砂粒金雲母含	ナゲ	弥生中期	1/3
9	II A3c	II層	広口甌	底部	II磨消純文、沈縫、小縫合	ナゲ	弥生中期	1/3

<石器>

番号	出土地点	層位	器種	石質	長cm	幅cm	厚さcm	重量g	産地	写真
10	II A3b	II層中位	磨製石斧	凝灰質頁岩	6.8	4.5	2.5	101.5	北上山地	1/3
11	不明	II層中位	石鏟	頁岩	2.4	1.3	0.56	1.80	北上山地	1/1

<陶磁器>

番号	出土地点	層位	器種	底模	底径cm	フマキ径cm	高さcm	胎土	釉薬	産地	年代	写真
12	II B1a	盛土	磨鎔器	釜	(9.6)	5.8	1.8	灰白色	赤付	肥前	19c後	1/3
13	不明	表土	磨鎔器	釜				灰白色	赤付	瀬戸?	19c前	1/3

第4図 新井田Ⅱ遺跡第1次調査出土遺物



調査区北側



調査区南側



R D -01 平面



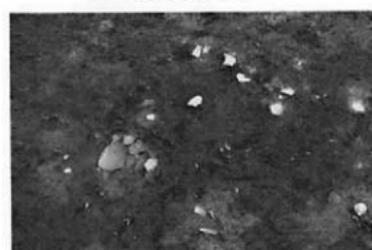
R D -01 断面



柱穴状ビット群



ビット断面



遺物出土状況



遺物出土状況

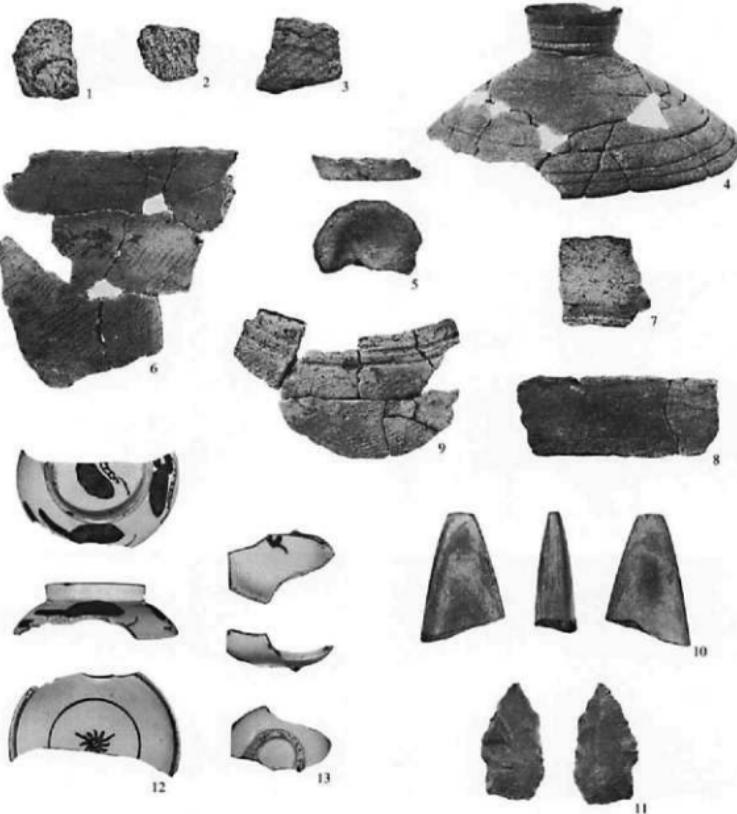
写真図版 1 新井田Ⅱ遺跡第1次調査土坑・柱穴・遺物出土状況



遺物出土区範囲



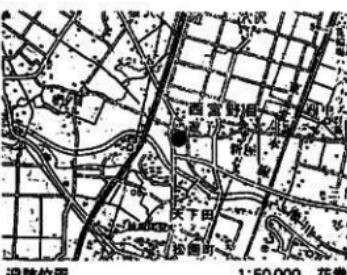
遺物出土区断面



写真図版2 新井田Ⅱ第1次調査出土区・出土遺物

(41) 遊子Ⅱ遺跡

所 在 地 花巻市西宮野目2番地51-2ほか
委 託 者 花巻地方振興局土木部
事 業 名 一般県道東和花巻温泉線
発掘調査期間 平成13年4月9日～5月7日
調査対象面積 1,700m²
調査終了面積 1,700m²
遺跡番号・略号 ME 15-1368・Y G-01
調査担当者 千葉正彦・菊池 賢
協 力 機 関 花巻市教育委員会



1. 調査に至る経過

遊子Ⅱ遺跡は、一般県道東和花巻温泉線西宮野目地区道路改築工事の施工に伴って、その事業区域内に存することから発掘調査が実施されることとなった。本事業は交通量の増加に伴う交通の安全と円滑な流れを確保するために平成9年度より執行中である。本地区については平成12年度に試掘調査を実施した結果、事業施行に先立って発掘調査が必要となることが判明した。そこで岩手県教育委員会と花巻地方振興局とが協議を行い、当遺跡の発掘調査を財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

(花巻地方振興局土木部)

2. 遺跡の立地

遊子Ⅱ遺跡は、花巻市北西部の宮野目地区に所在する。遺跡はJR花巻駅の北約3km、北上川支流の瀬川左岸に形成された河岸段丘面に載っている。調査区付近の標高は海拔88-89mで、現況は水田である。

3. 基本土層

調査区の土層は調査区の地点により様相が異なり、南端では表土直下で枯土質土層、北端では褐灰色砂礫層となる。一方、中央付近では地山が落ち込んで凹地状となり、一部に黒色～黒褐色の泥炭層、その直下にグライ化粘土層・砂層が存在している。この落ち込み部分は沢跡ないしは低湿地跡と思われる。遺構は地山がやや高い南北両端部分でのみ検出されている。以上を踏まえて、次のような層序を設定した。

I a 層	水田耕作土・床土	最大厚40cm	下部に酸化鉄集積層
I b 層	10Y R2/1黒色粘土質シルト	最大厚35cm	小窓が1%程度混入 水成堆積層
II 層	10Y R6/4にぶい黄褐色粘土質土	層厚不明	南側遺構検出面 調査区中央ではグライ化
III 層	10Y R6/2灰褐色砂礫土	層厚不明	北側遺構検出面 調査区中央付近ではグライ化 伏流水の影響なのか、部分的（3号炉跡周辺など）には全く縛まりがない

4. 調査の概要と検出遺構

検出されたのは、炉跡2基、土坑4基、掘立柱建物跡1棟、柱穴群、配石遺構1基である（第1図）。
<炉跡> 1号炉跡（第1・5図） 調査区北端付近9VグリッドII層面で検出した。土器埋設部と前庭部からなる「複式炉」であるが、土器埋設部と前庭部とがやや離れ気味である。土器埋設部には深鉢形土器が据

えられ、周辺には径50×45cmほどの楕円形状に焼土（最大厚5cm）が広がる。前底部は浅い皿状の掘り込みである。前平により壁が消失した竪穴住居跡である可能性が高い。炉埋上から縄文土器片および石器が出土した。1は炉に埋設されていた深鉢、2は前底部から出土した深鉢削部片であるが、いずれも脆弱化して表面剥落が著しく詳細不明である。3は埋上から出土した無茎の石錐である。炉の形態から見て、所屬時期は縄文時代中期後葉と推測される。

2号炉跡（第1・5図） 調査区北部10UグリッドⅢ層面で検出した。環を円形に配しており、石で囲まれた内から敷き詰めたような状態で土器片が出土している。焼土は確認されていないが、出土土器片が何れも被熱により脆弱化しており、「土器片痕跡」であった可能性が考えられる。2号炉跡と同様、竪穴住居に付随する炉だった可能性が高い。炉内および周辺から縄文土器片および石器が出土している。4～7は粗製深鉢片、8は無茎石錐である。出土遺物から縄文時代に属すると推測されるが、具体的な時期は不明である。

＜土坑＞ 1号土坑（第2図） 18LグリッドⅢ層面で検出した。平面形は1.1m×95cmの楕円形を呈する。壁はやや外傾し台形状の断面形で、深さは約25cmである。埋土には多量の焼土ブロック・炭化物粒が混入している。遺物は出土していない。時期判断の資料を欠いており時期不明である。

2号土坑（第2図） 18MグリッドⅢ層面で検出した。平面形は70×55cmの楕円形、断面は皿状で深さ約15cmである。埋土には1号土坑と同じく、焼土ブロック・炭化物粒が混入している。遺物は出土していない。時期不明である。

3号土坑（第2・5図） 12Wグリッドで検出した。平面形は長さ3.4m・幅70cmの溝状である。埋土は単層である。縄文土器片9および四石10が出土しており、縄文時代に属するものと考えられる。

4号土坑（第2・5図） 11Wグリッドで検出した。平面形は不整であるが、やや弧を描く溝状である。倒木痕の可能性もある。長さ2.9m・幅50cmである。埋土は黑色土の單層である。縄文土器片11・12および四石13が出土した。出土遺物から縄文時代に属するものと考えられる。

＜その他の遺構＞ 1号建物跡（第3・5図） 調査区北部のⅢ層面で検出した柱穴群である。うち7基（P1～7）については直線的配列であることから「建物跡」としたが、不確実である。東西方向に並ぶP2・P5～7については柱痕跡が同一直線上にあるが、南北方向のP1～4では軸線がずれている。その他の周辺に分布するものを含めて建物を構成するものと思われるが、全体の配列を把握できなかった。径30～45cm、深さ5～30cmで、P1を除いて柱痕跡が確認された。P8の埋土から、陶器片2点（14・15）と寛文通寶16が出土している。近世に属するものと考えられる。

1号柱穴群（第2・5図） 調査区北部のⅢ層面に散在する小径の柱穴群（P1～7）である。径15～25cm、深さは13～43cmである。P3の埋土から縄文土器17が出土しているのみで、時期不明である。

2号柱穴群（第4図） 調査区南部Ⅱ層面で検出した柱穴群（P51～73）である。径20～60cmの円形基調で、深さは17～64cmと比較的深いものもある。遺物は出土しておらず、所屬時期は不明である。

1号配石造構（第4図） 調査区東側13WグリッドのⅢ層面で検出した。検出時点では住居の炉と思われたが、精査の結果、炉ではなかった。約55cm四方の方形、深さ約10cmの掘り込みの四辺に板材を組み、その上に環を隅丸方形に並べている。遺物は出土していない。時期・用途ともに不明である。

4. 出土遺物

土器類、石器、石製品が中コンテナ1箱分出土している（第5・6図）。遺構に伴うものは少量で、多くは表土上（Ia層）および泥炭層（Ib層）からの遺物で原位置を保っていないものである。土器類は縄文土器、須恵器、陶磁器が出土した。縄文土器は小破片が多く時期を特定できないが、中期後半頃ではないかと思わ

れる。遺構外で18~22が出土しており、いずれも粗製深鉢である。時期を特定できないものの、1号炉跡と時期差がないとすれば中期後秦頭の資料と思われる。また、中世の中国青磁片23が出土しているが、表掲資料であり遺構との関係は不明である。なお、掲載していないが表掲で須恵器片が出土している。一方、石器は24~27の削搔器、石製品は28・29の砥石が出土している。個々の詳細は、遺物観察表に記した。

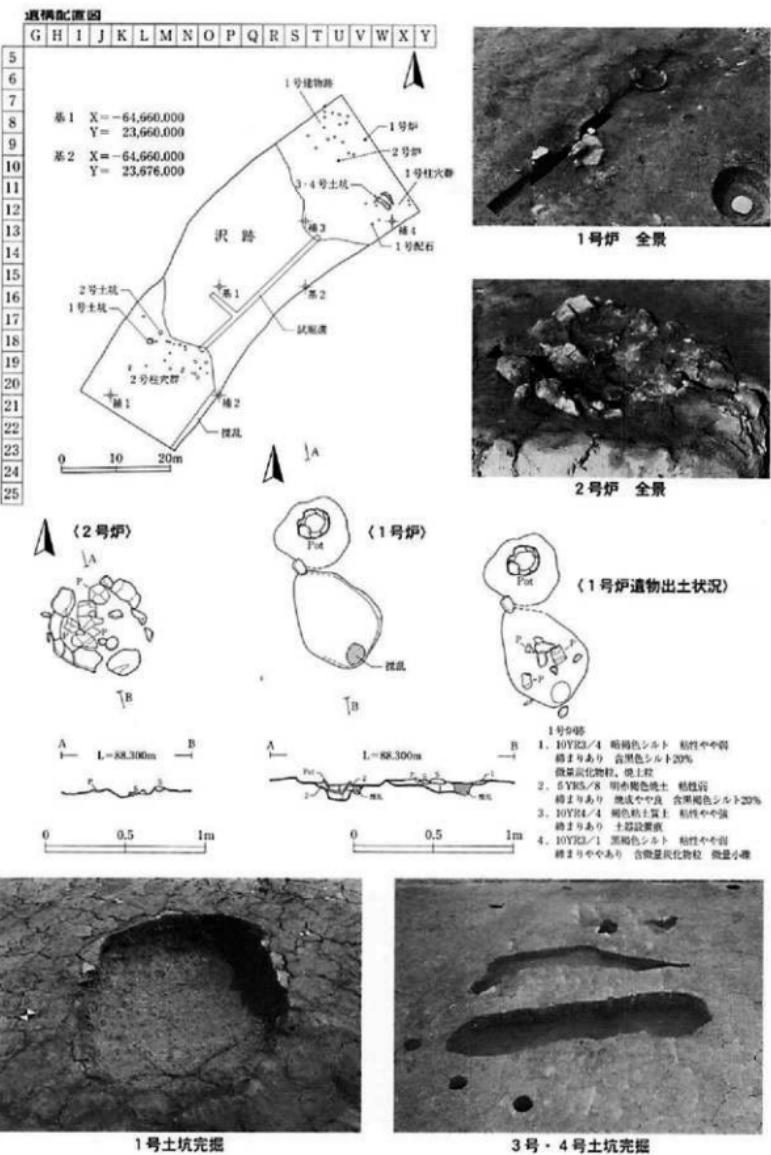
5.まとめ

調査の結果、縄文時代・近世の遺構・遺物が少量ながらも検出された。縄文時代では、炉跡・土坑が検出された。炉跡は本来は住居に付随したものだった可能性が高く、調査区が後期集落の一部だったと推測される。古代の遺構は確認されず須恵器片が数点出土したのみであり、遺物散布地の域を出ない。また、近世においては掘立柱建物が存在し、集落の一部をなしていた可能性がある。調査区の大部分は小河川跡ないしは低湿地跡であり、各時代ともに遺跡の主体部分はより高位の段丘面に展開しているものと考えられる。

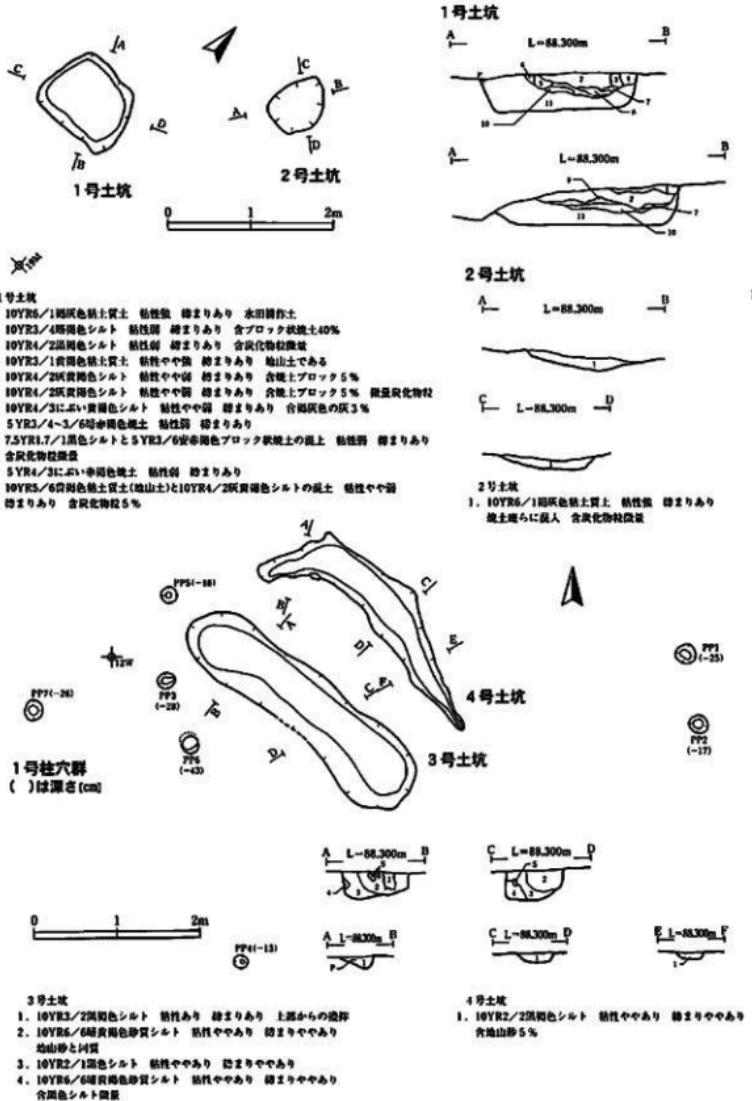
なお、蓮子Ⅱ遺跡に関する報告は、これをもって全てとする。

報 告 書 抄 錄

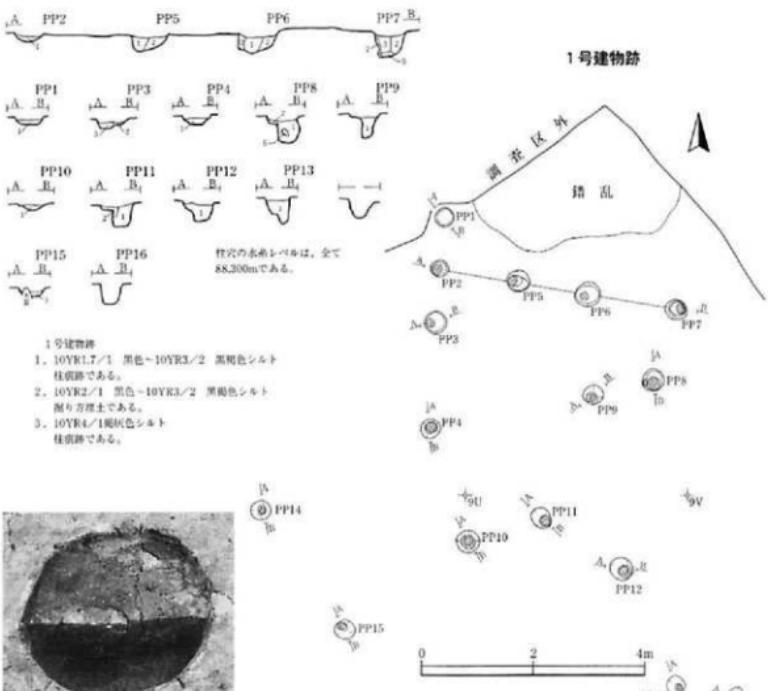
ふりがな	いわけんmaiぞうぶんかざいはくつちょうさりやくほう							
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第397集							
編著者名	千葉正彦・菊池賛							
編集機関	財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	西暦2002年3月29日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 市町村	東経 遺跡番号	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
蓮子Ⅱ遺跡	岩手県花巻市 西宮野目2番 地51-2ほか	03205	ME15 -1368	39度 25分 01秒	141度 06分 29秒	20010409~ 20010507	1,700m ²	一般保護東和 花巻温泉線改 築事業に伴う 緊急発掘調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
蓮子Ⅱ遺跡	集落跡 散布地 集落跡	縄文時代 古代 近世	炉跡、土坑 柱穴群		縄文土器、須恵器 陶器、石器 古錢			



第1図 遊子Ⅱ遺跡遺構配置図及び検出遺構

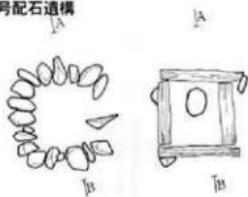


第2図 遊子II遺跡 1~4号土坑・1号柱穴群



第3図 遊子Ⅱ遺跡 1号建物跡

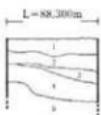
1号配石遺構



A — L=88.300m — B

1. 10YR4/2 灰黃褐色シルト 粘性ややあり 締まりややあり
0 0.5 1m

基本土層断面

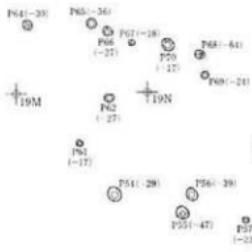
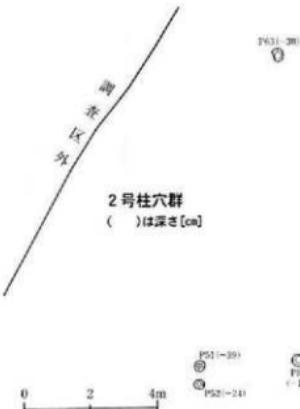


1. 表上層 水田耕作土
2. 10YR5/2 灰黃褐色粘土質土
粘性やや強 締まりあり
含水比5%
3. 2.5Y4/1 黄灰粘土質土
粘性やや強 締まりあり
含水比3%
4. 10YR2/1 黑色シルト
粘性強 締まりややあり
含水比微量
5. 2.5GY4/1 塗オリーブ灰褐色
粘性なし

1号配石 検出

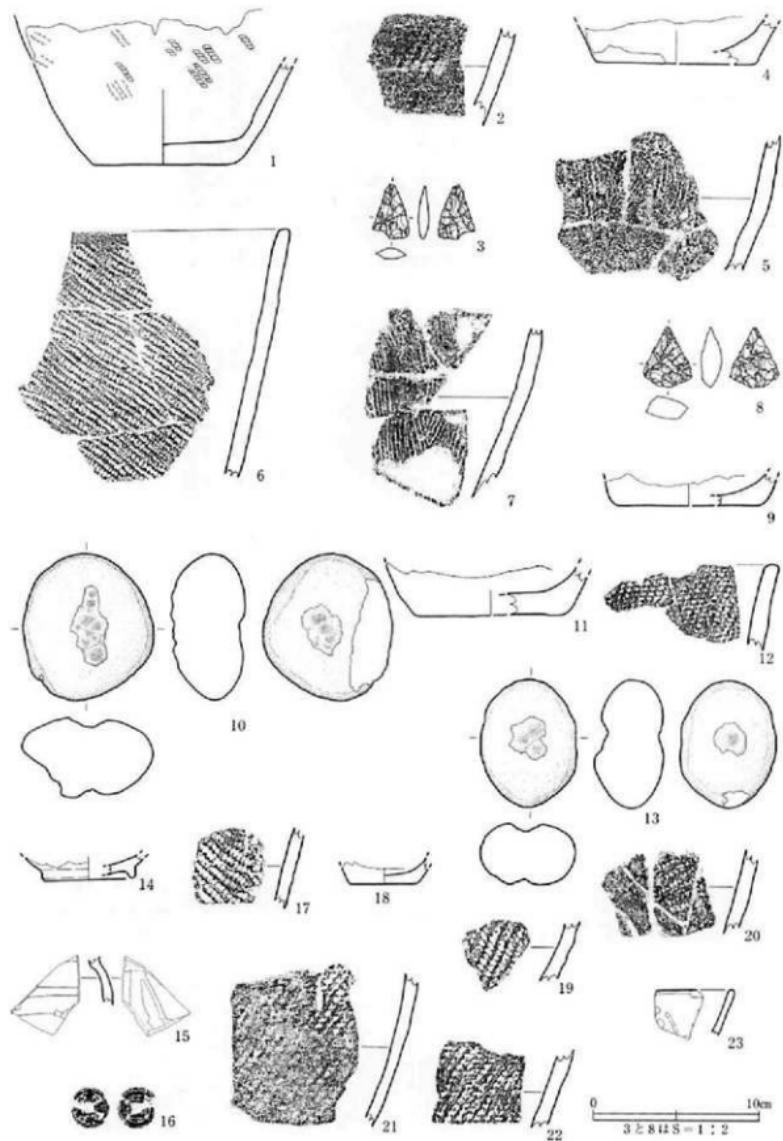


1号配石 完掘

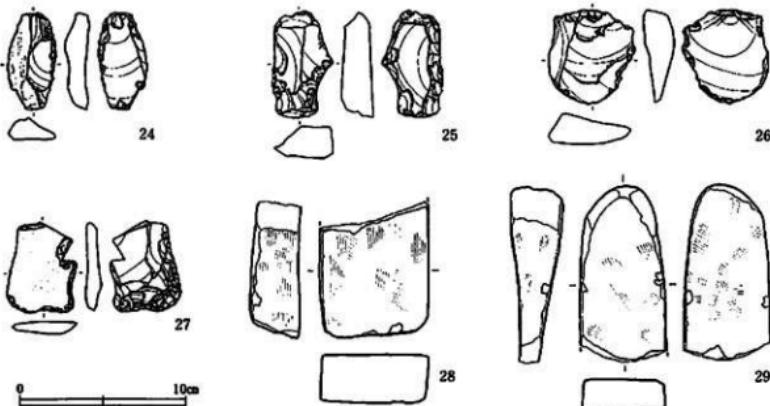


2号柱穴群完掘全景(北から)

第4図 遊子II遺跡 1号配石・2号柱穴群



第5図 遊子II遺跡出土遺物 1



第6図 遊子Ⅱ遺跡出土遺物2

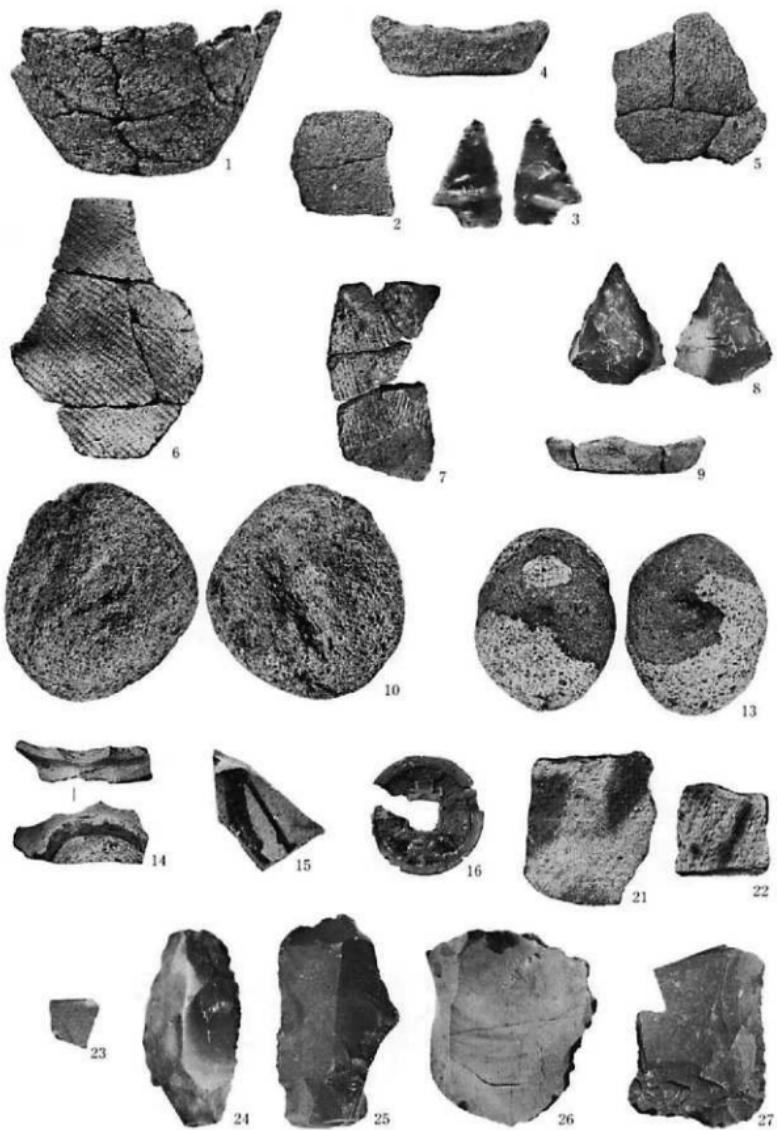
出土遺物目録表

番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	文様・製作	備考
1	1	1号炉	炉内壁部	陶文深鉢	底部不~底部	L.R.製	
2	2	1号炉・曲底部	堆土	陶文深鉢	側部	R.L.製?	摩拭。磨化鉄付着。
4	3	2号炉	堆土	陶文深鉢	底部		摩拭。底面ナデ。
5	5	2号炉	堆土	陶文深鉢	側部	不明	摩拭。
6	15	2号炉附近	地山直上	陶文深鉢	口縁部	R.L.製	
7	4	2号炉	堆土	陶文深鉢	側部	半削R	
9	6	3号火坑	堆土	陶文深鉢	底部		底面ナデ。
11	7	4号土坑	堆土	陶文深鉢	底部		底面ナデ。
12	8	4号土坑	堆土	陶文深鉢	(I)側部	R.L.製	
17	11	1号炉穴群・P3	堆土	陶文深鉢	側部	L.R.製	スヌタル付着物。
18	9	調査区東・藤込部	泥炭層	陶文深鉢	底部	不明	小形。底面ナデ。磨化鉄付着。
19	10	調査区東・藤込部	泥炭層	陶文深鉢	側部	L.R.製	
20	16	調査区北半	地山直上	陶文深鉢	側部	R.L.製?	摩拭。スヌタル付着物。
21	12	調査区東・藤込部	泥炭層	陶文深鉢	側部	R.L.R.製	22と同一個体? 磨化鉄付着。
22	13	調査区東・藤込部	泥炭層	陶文深鉢	側部	R.L.R.製	21と同一個体? 磨化鉄付着。

番号	登録番号	出土地点	層位	器種	部位	備考
14	18	1号植物・P8	堆土	陶磁器皿	底部	窓水道管と共伴(近傍)。
15	19	1号植物・P8	堆土	陶磁器皿	底部	窓水道管と共伴(近傍)。
23	-	調査区北西隅	地土層	青磁碗	(I)縁部	中國窓(14世紀後半~15世紀)。

番号	登録番号	出土地点	層位	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	石材
3	25	1号炉	堆土	石圓	2.2	1.5	0.4	珪質質(奥羽山脈)
8	24	2号炉	堆土	石圓	2.6	2	0.9	石質(奥羽山脈)
10	22	3号土坑	堆土	石圓	5.9	7.9	4.7	石英安山岩(奥羽山脈)
13	23	4号土坑	堆土	門石	7.6	5.8	4.2	石英安山岩(奥羽山脈)
24	26	調査区北半	地土層	崩積岩	5.8	3	1.5	頁岩(奥羽山脈)
25	27	不明	堆土	崩積岩	6.4	3.7	2	頁岩(奥羽山脈)
26	28	調査区北半	地土層	崩積岩	5.7	5.2	1.9	頁岩(奥羽山脈)
27	29	調査区北半	地土層	崩積岩	5.5	4.3	0.9	赤色頁岩(奥羽山脈)
28	21	不明	堆土	砾石	8.2	6.6	3.1	流紋岩(奥羽山脈)
29	20	調査区南半	地土層	砾石	10.6	5.2	3.1	灰岩(奥羽山脈)

番号	登録番号	出土地点	層位	器種	備考
16	17	1号植物・P8	堆土	窓水道管	いわゆる「古窓水」。



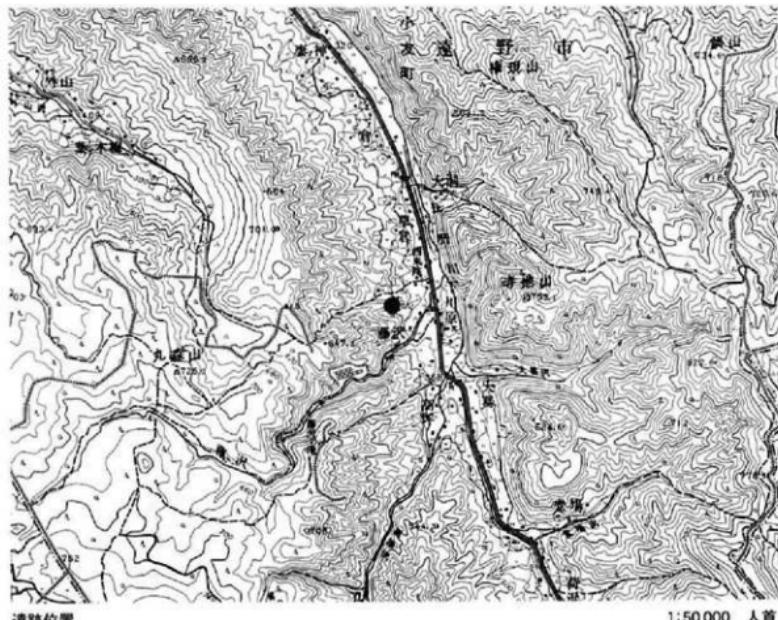
写真図版 遊子Ⅱ遺跡出土遺物

ひらしみざたてあと
(42) 平清水館跡

所 在 地 遠野市小友町字第22地割67番1ほか
委 託 者 遠野地方振興局林務部
事 業 名 林業地域総合整備事業
発 挖 調 査 期 間 平成13年4月10日～5月24日
調 査 対 象 面 積 1,186m²
発 挖 調 査 面 積 1,186m²
遺 跡 番 号・略 号 MF83-0053・H SMT-01
調 査 担 当 者 丸山浩治・川又晋
協 力 機 間 遠野市教育委員会

1. 調査に至る経過

平清水館跡は、平成13年度普通林道草倉線開設事業の施行に伴い、その路線内に位置することから、発掘調査を実施することになったものである。



普通林道草倉線は、遠野市小友町鉢貝地内の県道小友・米里線を基点とし、小友町藤沢に至る、延長11,000m幅員4mの普通林道である。この林道は、沿線の森林603ヘクタールの林業整備を目的とし、平成1年度に着手、平成15年度の完了を目指して施行中のものである。

事業施行に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、平成10年11月26日付け遠野地方振興局から岩手県教育委員会に対し分布調査を依頼し、平成10年12月9日付け教文第979号の回答をもって、工事区域内に「平清水館跡」がふくまれることが確認されたことにはじまる。

この分布調査結果に基づき、遠野地方振興局では、県教育委員会に対し、平成11年11月12日付け遠野林第1192号で試掘調査を依頼した。依頼を受けた県教育委員会では、平成11年12月15~17日に試掘調査を実施した結果、発掘調査の必要が判明し、平成11年12月21日付け教文第946号でその旨回答があったものである。

(遠野地方振興局林務部)

2. 遺跡の立地

平清水館跡は、JR釜石線鰐沢駅の南東約7.5km付近に位置し、丸森山から続く丘陵の縁辺部東向き斜面地に立地している。調査区の標高は約408~418mで、現況は山林である。

3. 基本層序

山林であることから木根による擾乱が非常に多い。また、急斜面地が多いため堆積は薄く、大半が二次堆積である。本遺跡では概ね次のような考古層序が確認された。

I層 7.5Y R2/2黒褐色シルト 粘性弱・締まり弱 表土

II層 10Y R3/3暗褐色シルト 粘性弱・締まり弱

III層 7.5Y R3/3暗褐色シルト 粘性中・締まり弱 3cm以下の亜角礫2%混入

IV層 5Y R5/8明赤褐色粘土質シルト 粘性中・締まり中 5cm以下の角礫10%混入

IV層以下には角礫が多量に混入し、基本的に下層になるほど多量・大形となる。遺構はII層以下から検出され、その構築土及び覆土は各層土が混在し礫の大きさも様々である。

4. 調査の概要

先ず遺跡周辺地形の観察・踏査を行い、曲輪2箇所、堀1条の存在を確認。現況地形を記録するため光波トランシットを使用した20cm間隔の地形測量図作成を行った。その後、地形傾斜に対して順方向の幅1mのトレンチを調査区を横断するように8本設定し、土層の堆積状況把握を行った。これにより土塁2箇所を検出している。各トレンチ精査の結果、第5トレンチ以南は遺構表面までの覆土除去を行うこととし、覆土除去後各遺構平面形の把握と写真撮影、実測を適時進めた。この際、曲輪・土塁の盛り土遺構に関しては、盛り土厚及び旧地表面確認のためトレンチをさらに掘り下げ、断面による確認調査を行っている。各遺構精査終了後、本遺跡構築時の地形を記録するため20cm間隔の地形測量図作成を再度行った。なお、第4トレンチ以北は傾斜が約30度前後と大きく、最初に行った踏査でも、トレンチ調査によても遺構が確認されなかつたことから各トレンチの断面実測のみを行い、調査終了とした。

グリッド設定は第2・3回の通りである。地形・遺構を考慮した結果、平面直角座標第X系を用いるのが適当と判断し、これに合わせる形を取った。1グリッド5×5mで、基点は北西である。

5. 検出遺構

検出された遺構は、曲輪跡2箇所、堀跡1条、土壙跡2箇所である。下記の数値は全て現存値である。

〈曲輪跡〉 本遺跡の曲輪跡は調査区東西にさらに数段ずつ存在するものと推定され、実際に西側には2箇所を確認した。このため本調査区の2箇所は全体の中段付近にあたるものと思われる。i~i-9グリフ

ド付近のものを1号曲輪、その斜面下方7mにあたるi～n～9～12グリッド付近のものを2号曲輪とした。2号曲輪は下半部が調査区外にあたり、上半部のみの調査である。1号曲輪の規模は長軸14.5m、短軸3m以上で、三日月状を呈する。盛り土で普請されており、その残存最厚部は43cmである。2号曲輪の規模は長軸28.5m、短軸7m以上で、半月状を呈する。本館跡内で最も広い曲輪と考えられる。普請方法は調査区外に及ぶため不明。中央部で礎石状の扁平砾（最大約60cm）が7点確認されたが、現地表面での確認である上、木根による擾乱がひどく、その性格は不明である。柱穴等も確認されなかった。

＜堀跡＞ n～o～6グリッド以東で確認され、東西方向に延びる堅壠状を呈する。検出した長さは30m強であるが、堀自体はさらに斜面下方へ続き、途中北方向へ折れて2号曲輪を巻くように調査区外へ続く。遺構はⅢ層以下を掘り込んで構築されており、底面は箱型状を呈する。2号土塁までの実効法高は最大値で4.4m、法面角度58°前後、実効堀幅は5～6.8m程度、堀底面幅は1.7m前後である。

＜土塁跡＞ 2号曲輪南側外縁部のn～10グリッド以東で1号土塁を、1号堀南側外縁部のo～8グリッド以東で2号土塁を検出した。両者とも東側調査区外へ続く。1号土塁は残存状態が非常に悪く、幅は最大1.6mを測るのみで上部は残存しない。2号土塁は基底幅2.1m前後、上幅約1.1m、1号堀からの垂直累壁高は60cm前後を測る。両者とも1号堀の掘削土で旧塗土上に構築した隙き土塁である。

6. 出土遺物

小コンテナ1箱分の土器と礎石器、銭貨9枚、礎石状砾が出土している。出土地点は銭貨1点のみ1号掘付近、それ以外は全て2号曲輪付近である。造営時期と同期の可能性があるものは嘉祐通寶1枚と礎石のみであるが、両者とも現地表面上あるいはI層出土のため原位置を留めておらず、当該期の遺物と明確に判断できるものは皆無である。

＜土器＞ 弥生時代後期頃の土器が出土している。全てI層（表土）からの出土で、斜面上方からの流れ込みあるいは遺構築時の擾乱によるものと思われる。小破片ばかりで詳細が不明なものが多い。

＜石器＞ 全て礎石器で、4点出土している。この他に礎石状の砾が十数点出土しており、1点のみ図示した。明確な使用痕を有するものではなく、微弱な磨痕や敵打痕が観察されるのみである。

＜銭貨＞ 初鋤年代1056年の北宋銭である嘉祐通寶が1点出土している。他6点が寛永通寶で、1点はいわゆる古寛永、3点は新寛永で、2点は不明。この他の摩滅や破損が著しく、判別不能である。

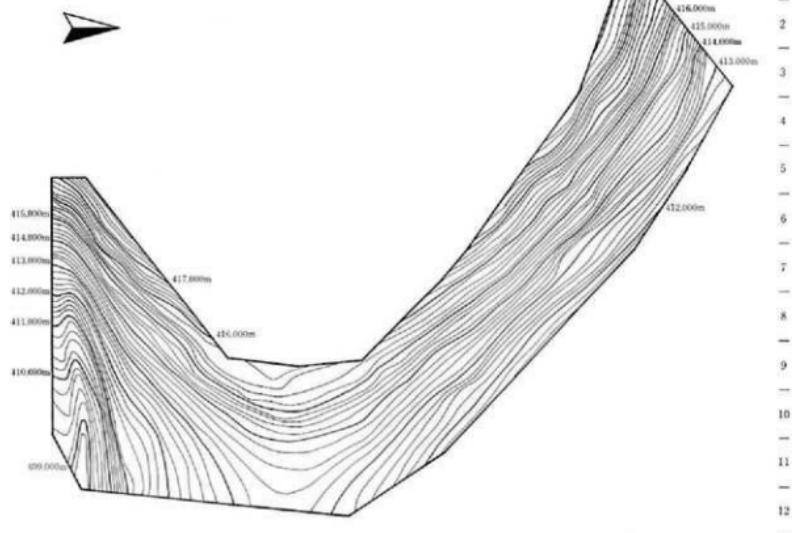
7.まとめ

今回の調査で明らかになった遺構は上述の通りである。このうち、堀跡の斜面上方には平清水氏が祀ったとされる福荷神社の祠があり、館廃絶後、堀はこの祠への参道として使用されたものと考えられる。出土した銭貨もこの祠に関連するものである可能性が高い。なお、館範囲は調査区の上下に統いており、今回はごく一部の調査であるため館の全容は明らかではない。

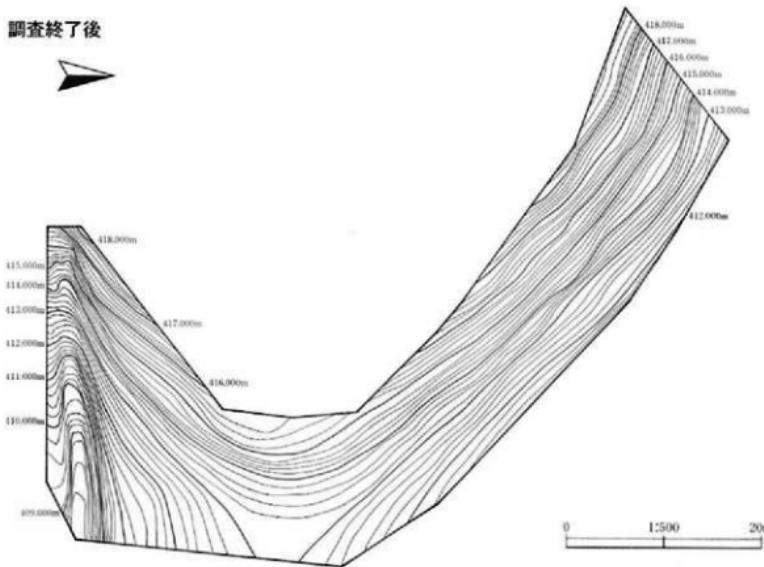
文献によれば、平清水館は阿曾沼氏臣であった平清水氏の居城とされている。初代平左衛門は阿曾沼孫水郎広郷及び孫三郎広長に仕え、知行600石であった。平清水の名前が最も多く登場するのは慶長5年（1600年冬）の阿曾沼孫三郎広長追放の前後である。これは平左衛門の嫡子平右衛門駿河（当時侍大將）の時で、舞沢左馬之助広勝、上野右近広吉と共に主君広長を追放した主要人物の一人とされている。特に柳坂翁の戦いで活躍し、南部氏から論功行賞として1,000石に加増され遠野城代、江戸南部屋敷詰めの家老となつたが、その後大阪夏の陣後に罪あって切腹し絶命になつてゐる。正確な築城年代及び存続期間は不明であるが、以上のことから16世紀中頃～17世紀初め頃までは存続していたものと推定される。

なお、平清水館跡に関する報告は、これをもって全てとする。

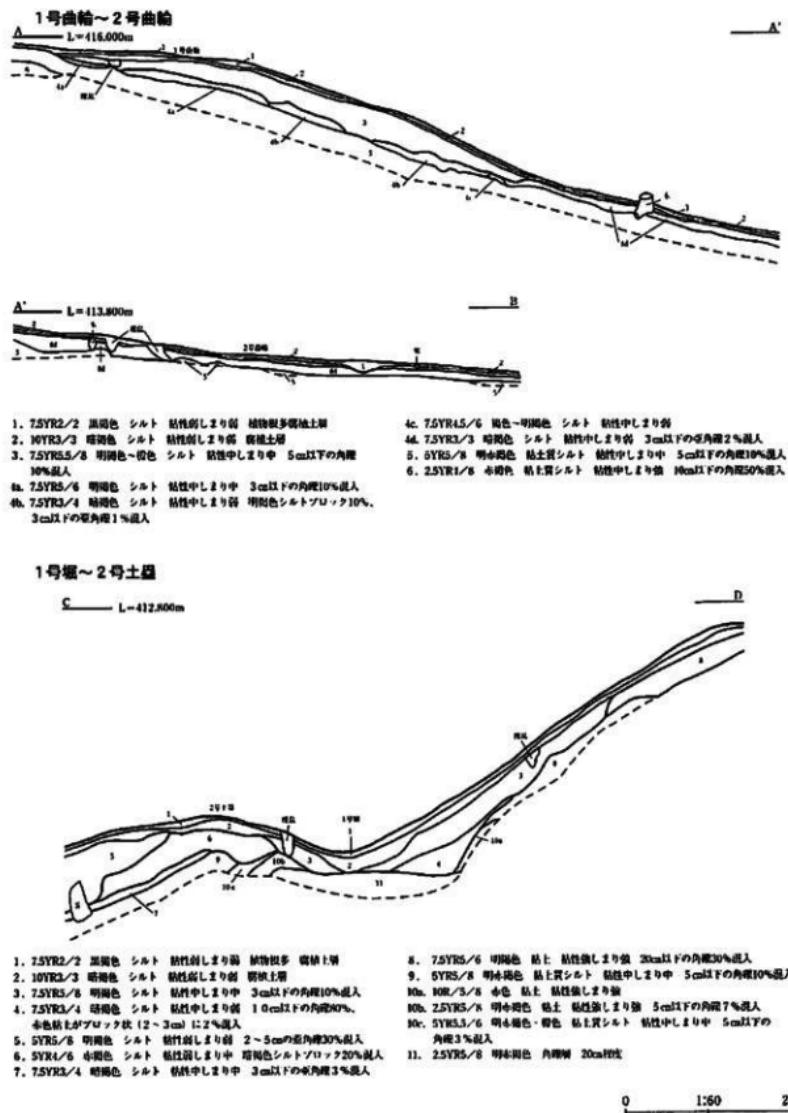
l p l o l n l m l i l k l j l i l h l g l f l e l d l c l b l a L
現況



調査終了後



第1図 平清水館跡地形測量図

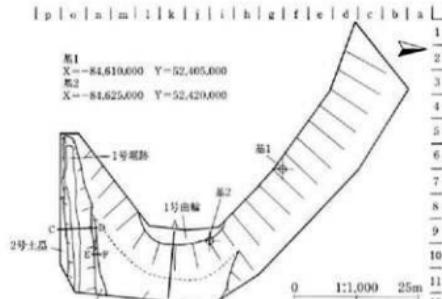


第2図 平清水館跡曲輪・堀・土塁断面

1号土壘



1. 7SYR2/2 黒褐色 シルト 粘性弱しまり弱
植物根多
植葉土層
2. 5YR5.5/6 明赤褐色～橙色 シルト 粘性弱しまり強
費性シルトと明褐色シルトの混土 (双方ともブロック状)
5cm以下 (底付) の割合2%未だ入
3. 10YR4/6 褐色 シルト 粘性弱しまり中
4. 10YR4/4 暗色と10YR2/3 暗褐色の混土 シルト
粘性弱しまり中 3cm以下の中割合1%未だ入
5. 7SYR5.5/7 黄色～明褐色 角礫層 粘性弱しまり強
20cm以下 (角礫) (5~10mmが中心) 80%



遺構配置図

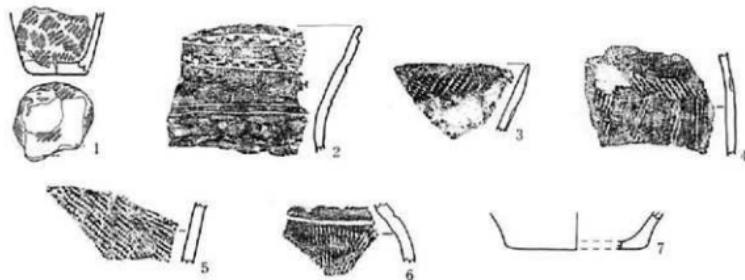
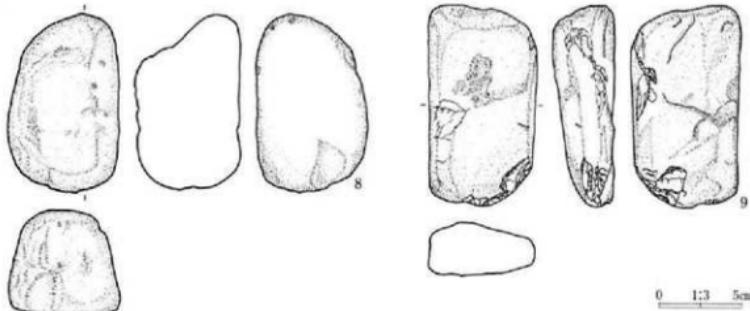


表1 土器観察表

No.	出土地点	器種	残存部位	特徴
1	k-11 1層	ミニチャウル	胸～底部	底部方形 胸余文 (R)
2	k-10 1層	口縁部	交互刺突文 汎縁	
3	j-11 1層	深鉢?	L R	
4	I-11 1層	深鉢	側部	付加条 (R L)

No.	出土地点	器種	残存部位	時期・特徴
5	I-12 1層	深鉢?	胸部	L Rヨコ
6	I-11 1層	盤?	胸部	付加条 (R) 沈縁
7	k-11 1層	深鉢?	底部	時期不明 無文



第3図 平清水館跡 1号土壘断面・遺構配置図・出土遺物 1

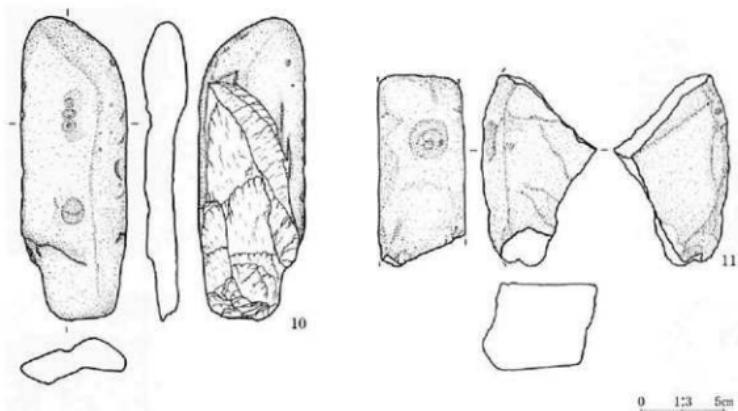


表2 石器観察表

No.	出土地点	器種	残存状態	石質	石材産地	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
8	k-12 1層	磨り石	完形	凝灰岩	北上山地	10.6	6.65	6.3	681.61
9	j-11 1層	磨り石+砾石	完形	凝灰岩	北上山地	11.8	6.5	3.2	451.09
10	m-12 II層下位	砾石	1/3欠	ホルンフェルス	北上山地	18.3	6.3	2.6	457.22
11	k-11 II層下位	砾石	3/4欠	凝灰岩	北上山地	—	—	5.2	502.64



表3 銭貨観察表

No.	出土地点	種類	特徴	径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	No.	出土地点	種類	特徴	径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
12	k-11 1層	嘉祐通寶	2.50	0.11	2.57		17	k-11 1層	寛永通寶	劣化	2.88	0.23	5.57
13	k-11 1層	寛永通寶	古鏡水	2.29	0.11	1.91	18	k-11 1層	寛永通寶	劣化	2.17	0.09	—
14	o-6 1層	寛永通寶	新鏡水	2.30	0.10	1.88	19	k-11 1層	不明	劣化	2.83	0.21	—
15	k-11 1層	寛永通寶	新鏡水	2.30	0.10	2.12	20	k-11 1層	不明	劣化	2.46	0.28	2.04
16	k-11 1層	寛永通寶	新鏡水	2.32	0.10	1.83							

* No. 18~20は写真的み掲載

第4図 平清水館跡出土遺物2



調査区全景



1号曲輪(北東から)



1号・2号曲輪(北西から)



1号曲輪断面(南東から)



礎石出土状況(2号曲輪)



1号堀(東から)



1号堀断面(東から)



2号土壠断面(東から)

写真図版 1 平清水館跡調査区全景・検出遺構



写真図版2 平清水館跡出土遺物（1）



17



18



19



20

写真図版3 平清水館跡出土遺物（2）

引用・参考文献

南部叢書刊行会 1928 「阿曾沿岸観記」「南部叢書」第三輯

浅野市史編纂委員会 1974 「浅野市史」第一巻

小友探訪会 1999 「とおの 小友探訪」

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2001 「猿掛跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第353集

報告書抄録

ふりがな	いわてけんまいぞうぶんかざいはっくつちょうさりやくほう							
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第353集							
編著者名	丸山浩治・川又晋							
編集機関	財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	西暦2002年3月29日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
平清水館跡	岩手県浅野市 小友町字第22 地番67番1号	03201	MF09 -1273	39度 14分 12秒	141度 26分 18秒	20010412～ 20010524	1,186m ²	林業地域統合 整備事業に伴 う緊急発掘調 査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
平清水館跡	城館跡 散布地	中世 (15～16世紀)	曲輪跡2箇所 堀跡1条 土塁跡2基	錢貨 礫石 弥生土器 石器				

(43) 林崎 I 遺跡

所 在 地 遠野市上郷町細越第12地割字林崎76-1ほか

委 託 者 遠野地方振興局遠野農村整備事務所

事 業 名 は場整備猫川左岸地区

発掘調査期間 平成13年4月10日～5月10日

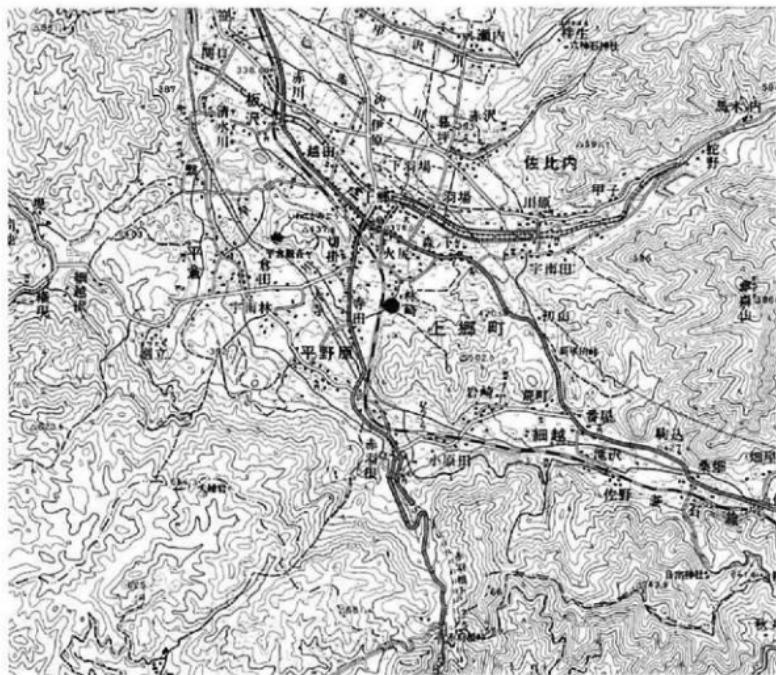
調査対象面積 1,000m²

発掘調査面積 1,158m²

遺跡番号・略号 MF66-2158・H Z I -01

調査担当者 長村克稔・北村忠昭

協 力 機 関 遠野市教育委員会



遺跡位置

1:50,000 遠野

1. 調査に至る経過

林崎I遺跡は、「ほ場整備事業（担い手育成区画整理型）猪川左岸地区」の施行に伴って、その事業区域に位置することから発掘調査することとなったものである。

当事業は、遠野市上郷町地内の受益面積91haの地区で、水田は昭和30年代に一部10a区画に整理されたが、区画状況が小さく農道の幅員も狭い状況であった。

また、小用水路は土水路で潤水し、用水不足を補うために小排水路は用排兼用で浅く、排水不良となって澁出化しているなど、営農の機械化、耕地の汎用化、さらには農地の流動化、生活環境の向上など、高生産性農業を阻害していた。

これらの阻害要因を除去し、効率的で安定的な経営体に農地を集積し、高生産性農業の確立を図り、併せて農村環境水準の向上に資するために、大区画は場整備を実施するものとして、平成10年度新規採択された地区であり、平成13年度で4年目である。

当事業の施行に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、遠野地方振興局遠野農村整備事務所から平成11年3月9日付け遠農整第539号「呂営ほ場整備事業実施に伴う遺跡分布調査について（依頼）」の文書によって岩手県教育委員会に対して分布調査の依頼をしたのが最初である。

依頼を受けた岩手県教育委員会では、平成11年5月17日～19・24日調査を実施したが、その結果は平成11年6月8日付け教文第261号「呂営ほ場整備事業実施に伴う遺跡分布調査について（回答）」で遠野地方振興局遠野農村整備事務所へ回答し、その際工事施工範囲内が林崎I遺跡の範囲内であることが付記された。

回答を受けた遠野地方振興局遠野農村整備事務所では、林崎I遺跡を平成12年11月14日付け遠農整第616号「ほ場整備事業（担い手育成区画整理型）猪川左岸地区における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」の文書によって岩手県教育委員会に対して、試掘調査を依頼した。

依頼を受けた岩手県教育委員会では、平成12年11月20日・21日に試掘調査を実施したが、その結果は平成12年11月24日付け教文第995号「ほ場整備事業（担い手育成区画整理型）猪川左岸地区における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」で遠野地方振興局遠野農村整備事務所へ回答し、その際林崎I遺跡の発掘調査が必要である旨が付記された。

（遠野地方振興局遠野農村整備事務所）

2. 遺跡の立地

林崎I遺跡は、JR釜石線岩手上郷駅の南東約1kmに位置し、調査区の北側を西流する猪川の左岸に形成された扇状地地形内に立地する。遺跡の標高は約375～377mで、調査開始前は水田及び畠地であった。

3. 基本土層

本遺跡の基本土層は次の4層に大別される。

I層 10Y R3/2黒褐色土 粘性弱・締まり密 現表土 層厚15～20cm

II層 10Y R2/1黒色土 粘性やや強・締まり中 層厚12～20cm

III層 10Y R4/3にぶい黄褐色土 粘性やや強・締まり中に10Y R5/6黄褐色土粘性中・締まり疏がブロック状に混在している 層厚12～15cm

IV層 10Y R5/6黄褐色土 粘性中・締まり密 地山 層厚不明

4. 調査の概要と検出遺構

調査は昨年度岩手県教育委員会生涯学習文化課が行った試掘調査の結果をもとに、試掘トレンチの位置の確認、掘り下げ、土層及び遺物の出土状況の確認、表土削除、遺構検出、精査という順で行った。調査を行う上で便宜上調査区内の道路を挟んで北側を調査区北、南側を調査区南と呼称した。

試掘データーで住居と思われたものは、調査の結果自然による落ち込みで遺構にならなかった。

また、調査区南の調査は、北側と同様に試掘データーで確認された土坑の検出を行ったが、検出することができなかつた。調査を進めていく段階で、試掘トレーンチを入れた場所が調査区内に含まれていないことに気付き、遠野地方振興局遠野農村整備事務所・県教委生涯学習文化課との協議の上、調査区を拡張した。調査の便宜上、調査区南側で初めの部分を調査区南①、拡張した部分を調査区南②とした。

検出された遺構は、土坑3基、柱穴状土坑2基、焼土遺構1基、溝跡1条である。

＜土坑＞ 1号土坑は、調査区南7D3aグリッドⅢ層上面で検出された。平面形は不整な円形、断面形はすり鉢状を呈している。長軸は約50cm、深さ25cmを測る。遺物が出土していないため、時期詳細については不明である。

2号土坑は、調査区北1E5eグリッドに位置し、調査区の限界Ⅳ層上面で検出された。一部が調査区外に延びるため、遺構の規模の全容および形状は不明であるが、検出された部分は径155×(55)cm、深さ約30cmである。遺物が出土していないため、時期詳細については不明である。

3号土坑は、調査区南6F3bグリッドⅣ層上面で検出された。生涯学習文化課の試掘で一部削平されており、遺構の規模の全容及び形状は不明であるが、検出された部分は径76×(47)cm、深さ30cmである。遺物が出土していないため、時期詳細については不明である。

＜柱穴状土坑＞ 2基検出された。PP1は調査区北2E1dグリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出された。平面形は円形を呈し、径は25×25cm、深さ10cmを測る。PP2は調査区南6F3aグリッドⅢ層上面で検出された。平面形は梢円形を呈し、径は55×45cm、深さ40cmを測る。いずれからも遺物が出土していないため、時期詳細については不明である。また、柱痕も確認されなかつた。

＜焼土遺構＞ 調査区南7D2bグリッドⅡ層上面で検出された。1.2m×90cmの範囲で不整な広がりを持ち、焼土の厚さは最大で5cmである。焼成はやや良好で、現地性焼土と思われる。遺物が出土していないため、時期詳細については不明である。

＜溝跡＞ 1号西側溝は、調査区南6DグリッドⅢ層上面で検出された。1号西側溝は南東・北西方向に延び、長さ約7.3m、上幅43~55cm、下幅20~43cm、深さ約10cmを測る。遺物が出土していないため、時期詳細については不明である。また、土層観察用のベルトを換んで東側にある1号東側溝も、配置から1号西側溝と同じものであると考えられる。

5. 出土遺物

出土した遺物は、全て遺構外からで土器片20数点、陶磁器片10数点、調片石器1点、鉄製品1点である。土器片は、大部分が縄文時代早期のものと思われる。陶磁器片は表土剥削時に出土したもので、近現代に属す。この他に太刀と思われる鉄製品が4C・4Dグリッドの落ち込み部分で1点出土している。時期については不明である。

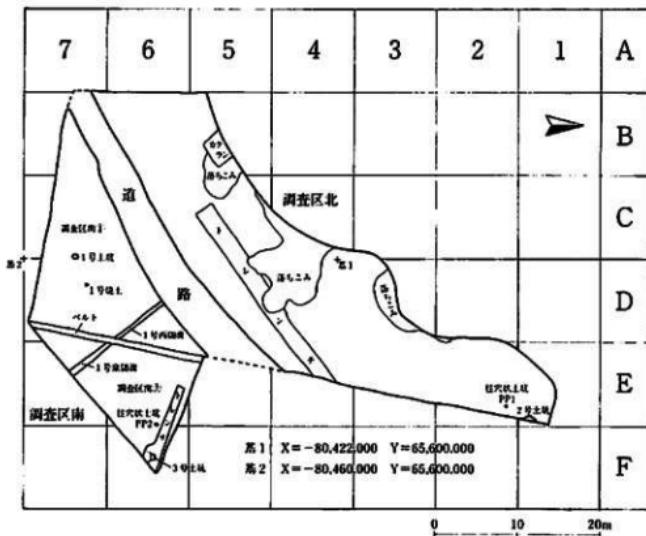
6.まとめ

今回の調査では、検出された遺構および出土した遺物が少なく、遺跡全体の性格を明らかにすることはできなかつた。今後、周辺地域の調査が進むことによって遺跡の全容が明らかになると思われる。

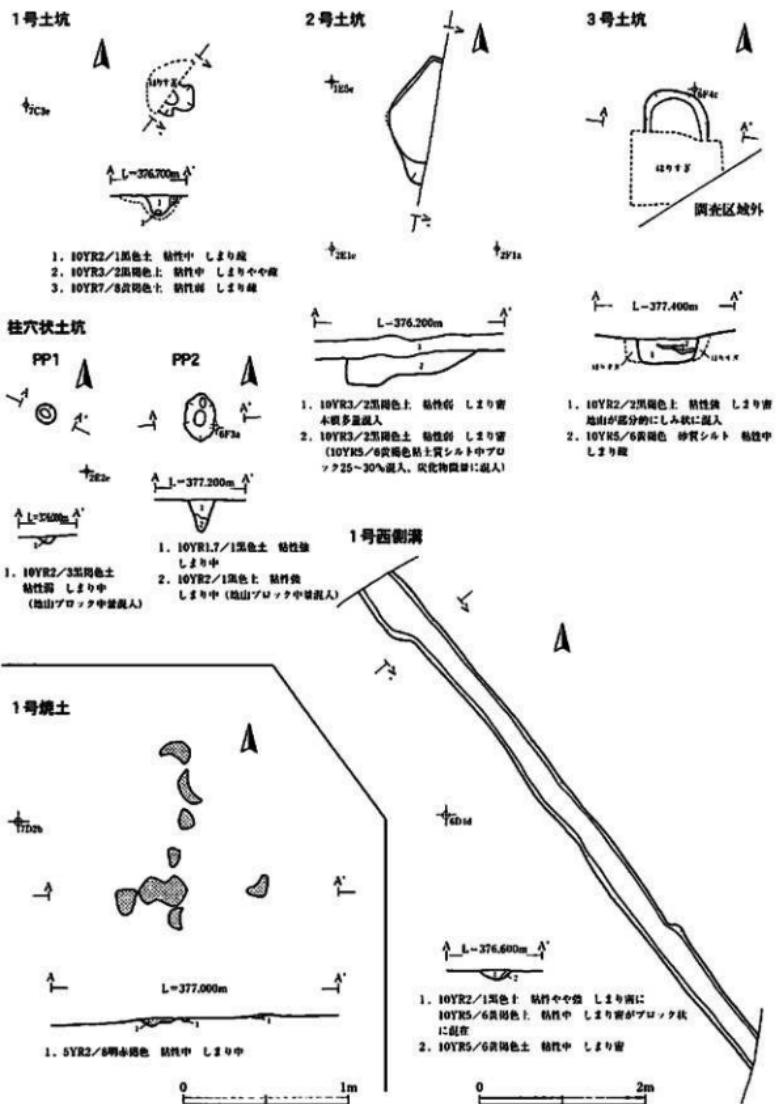
なお、林崎1遺跡に関する報告は、これをもって全てとする。

報告書抄録

ふりがな	いわてけんmaiぞうぶんかざいはっくつちょうさりやくほう							
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第397集							
編著者名	長村克後							
編集機関	財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	西暦2002年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 道跡番号	東經	調査期間	調査面積	調査原因	
林崎 I 遺跡	岩手県遠野市 上郷町細越第 12地番林崎 76-11	03201	M F66 -2158	39度 16分 23秒	141度 35分 41秒	20010410 ~ 20010510	1,158m ²	「ほ場整備 川左岸地区」事 業に伴う緊急 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
林崎 I 遺跡	散布地	不明	土坑3基 柱穴状土坑2基 焼土遺構1基 溝路1条	繩文土器 陶磁器 測量石器 鉄製品				



第1図 林崎 I 遺跡遺構配置図



第2図 林崎I追跡検出遺構

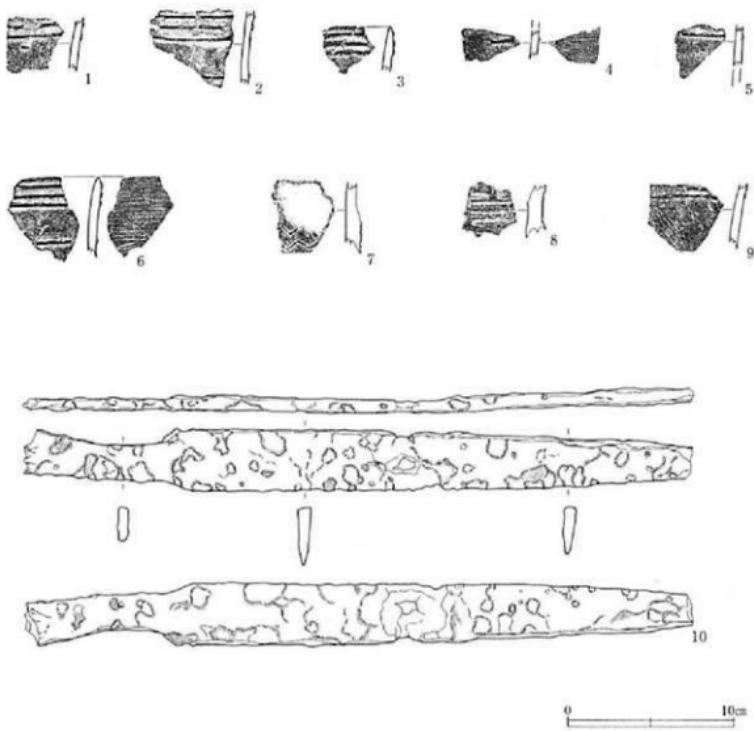


表1 土器観察表

番号	出土地点	器種	部位	特徴	内面	時代・時期
1	6D5a Ⅲ層	漆鉢	側部	隆筋		縄文時代 早期
2	6D5a Ⅲ層	漆鉢	側部	隆筋	貝殻条痕文	縄文時代 早期
3	6D5c Ⅲ層	漆鉢	口縁部	隆筋	貝殻条痕文	縄文時代 早期
4	6C1K Ⅲ層	漆鉢	側部	隆筋	貝殻条痕文	縄文時代 早期
5	6C1K Ⅲ層	漆鉢	側部	隆筋	貝殻条痕文	縄文時代 早期
6	6C1K Ⅲ層	漆鉢	口縁部	隆筋	貝殻条痕文	縄文時代 早期
7	6E区 Ⅲ層	漆鉢	側部	鋸歯状沈痕文	ナマ	縄文時代 前期後半
8	5C1K Ⅰ層	漆鉢	側部	並行沈痕		縄文時代 前期末葉?
9	6D1K Ⅱ層	漆鉢	側部	隆筋		縄文時代 早期

表2 太刀観察表

番号	出土地点	現存全長cm	茎長cm	刀身長cm	横幅cm	身幅cm
10	4C・4Dグリッド	40.2	(8.5)	(31.7)	0.6	3.6

第3図 林崎I遺跡出土遺物



1号土坑平面



1号土坑断面



2号土坑平面



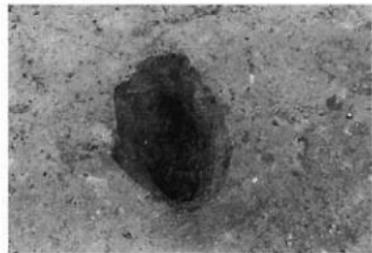
2号土坑断面



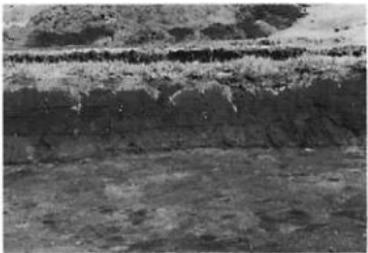
3号土坑平面



3号土坑断面

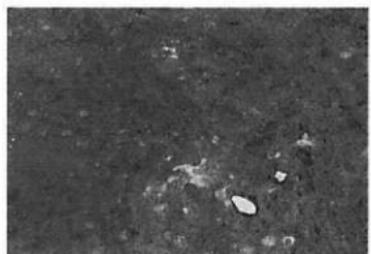


柱穴状土坑P P 2平面

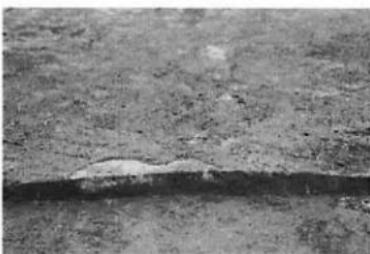


基本土层

写真図版 1 林崎 I 遺跡検出遺構 (1)



1号焼土平面



1号焼土断面



1号西侧溝平面



1号西侧溝断面



S=1/3

写真図版2 林崎I遺跡検出遺構(2)・出土遺物

(44) 黒岩宿遺跡

所 在 地 北上市黒岩27地割64番地ほか

委 託 者 北上地方振興局土木部

事 業 名 主要地方道花巻北上線

緊急地方道路整備事業

発掘調査機関 平成13年7月6日～10月1日

調査対象面積 4,681m²

発掘調査面積 4,681m²

遺跡番号・略号 ME56-1388・KIS-01

調査担当者 小松則也・菊池貴広

協力機関 北上市教育委員会



1. 調査に至る経過

黒岩宿遺跡は、「主要地方道花巻北上線緊急地方道路整備事業」の実施に伴い、その事業区内に在することから、発掘調査を実施することになったものである。

本事業は、主要地方道花巻北上線黒岩地区において、平成10年度より導入されている圃場整備事業の創設換地により、計画道路復員（歩道付2車線道路）を確保するものである。当路線は、花巻・北上を結ぶ重要な道路でありながら、当区間は幅員狭小かつ、歩道が未設置であり、北上川の高水位により道路が冠水する箇所でもある。このため、道路改良による冠水解消、歩道整備による歩行者の安全確保を目的とし、平成11年度より執行中である。

本地区は、岩手県教育委員会が既に黒岩宿として確認しているため、岩手県教育委員会は、北上地方振興局と協議を行い、発掘調査を財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。
(北上地方振興局土木部)

2. 遺跡の立地

黒岩宿遺跡は、JR東北本線北上駅より東北東に約3.6kmに位置し、北上川左岸の自然堤防上に立地している。調査区全域は、河川の氾濫堆積により形成された砂質土で概ね覆われる。標高は56~58m前後で、現状は旧水田及び畑地である。周辺には縄文集落跡の八天遺跡（県指定）、中世の三坊木遺跡、平安時代の立花館遺跡等や和賀氏、藤原氏に係わる「白山庵寺」、「千曳城」などがある。

3. 基本土層

北上川の氾濫および水田造成時の削平や攪乱を受けている箇所が多いが、概ね次のような基本土層を示している。

- I 層 2.5Y R5/3黄褐色シルト 稲作土
- II 層 7.5Y R4/3褐色シルト 粘性弱 繋まり密（陶磁器が少数出土）
- III 层 10Y R3/4暗褐色シルト 粘性弱 繋まり密（土師器の小破片出土、歯間状遺構検出）
- IV 层 10Y R4/3にぶい黄褐色シルト 粘性弱 繋まり密（縄文の遺物が少数出土）
- V 层 10Y R4/2灰褐色シルト 粘性中 繋まり密

4. 調査の概要と検出遺構

試掘トレーンチを入れ、各地点の遺物出土状況や土壤の層序を確認しながら重機による表土除去を行い、検出作業を行った。その結果、土坑13基、柱穴状ビット14基、溝跡2条、歯間状遺構約400m²を検出した。

＜土坑＞ 検出された遺構13基である。遺構名には、検出した順番に番号を付した。II F区からII G区において7基（1号・2号・3号・4号・5号・6号・7号）検出、I B区において3基（8号・9号・10号）検出、II C区において2基（11号・12号）検出、II B区において1基（13号）を検出した。このうち、形状から陥入穴状遺構と思われるものは5基である（1号・6号・7号・11号・13号）。他の遺構は、扁平な梢円形または円形である。3・9号土坑埋土からは、炭化材を検出した。9・10号土坑埋土からは、十和田a降下火山灰を少量検出した13号土坑底部から小ビットを2基検出している。11号土坑埋土下位からは、縄文晩期の土器が出土したことから11号土坑は同時期のものと推測される。

＜歯間状遺構＞ II H区からII J区の間、調査区のはば中央に位置する。検出面は、III層暗褐色シルトに対し褐色の砂質土が溝状のプランとして東西方向に連続して確認された。規模は約400m²である。河川の氾濫による削平や変遷の影響から、歯の頂部が削平され残存状況は不良である。調査区境界内における歯の長さは60cm~6.8mを測る。歯幅は60~90cm、溝幅20~30cm、深さは植物3~8cmを測る。いずれも断面形は皿型を呈している。なお、イネ属やオムギ属に由来する植物珪酸体が分析の結果確認されている。

＜柱穴状ビット＞ 調査区北側から6基、II E 2 e グリット付近から8基、計14基の柱穴状小ビットを整備した。開口部径16~35cm、深さ12~42cmを測る。埋土場所によって、暗褐色シルト・にぶい褐色シルト・灰褐色シルトに分かれるが、いずれも單層である。詳細については不明である。

＜溝跡＞ 調査区北側より東西に走る溝2条を検出した。規模は1号溝長さ5.05m×30cm、2号溝1.3m×32cm、深さ1~7cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトを含む十和田a降下火山灰である。明確な掘り方は認められず、雨蓋溝に火山灰が流れ込んだ可能性もある。

＜1号炭化物＞ II E 3 e 区で検出した。55×35cmのはば長方形を呈している。厚さは10cmを測る。焼土が

認められず、遺木が自然に炭化したものと思われる。樹種はクリ材である。

5. 出土遺物

＜土器＞ 全体で、小コンテナ崩出土した。IV層から、縄文時代の甕・鉢が出土した。II号土坑からは、同一固体となる縄文土器が出土した。摩滅が著しく明確な原体を確認することができなかたため、時期の特定には至らなかった。II C 1 d 区、層から出土した浅鉢の土器片は、内外面の調整や文様からして縄文晩期中葉大洞C式である。

＜石器＞ 石鏃2点と利刀2点と計4点が出土している。使用痕が認められる石鏃2点を実測掲載した。石鏃はⅡ層上面と10号土坑上面から出土した。10は、無茎鏃に属する凹基無茎鏃である。11は有茎鏃に属する平基有茎鏃である。凹基無茎鏃の胸の片方は欠損している。石材は共に北上山地の頁岩である。

＜陶器＞ 陶器が2点と磁器が1点、計3点出土した。12は肥前窯の皿で内面に銅線釉、外面に透明釉を施した。13は大船相馬窯で、外面に鉄釉、内面に灰釉が施されている。腰さび茶碗である。

＜古錢＞ 1点のみ調査区外から寛永通寶を表揚している。

6.まとめ

本遺跡は、北上川の影響を受けた河岸段丘地帯であり、調査区全域は既ね砂質土に覆われている。なお、水の影響を受け、数箇所にグライ化した状態や粘土の層が見られた。加えて、水田の造成により自然地形の上面が削平されたり攪乱を受けたりという状況が広範囲に見られる。自然地形の残りは良くない。陥穴の形状を呈した土坑を5基確認した。歴史状況の土壤分析から、イネ穀やムギなどが栽培されていた可能性が示唆される。遺物に付いては摩滅が著しいことから、流れ込みにより運び込まれたものと思われる。これら地形や造構の状況から、調査区の一部分は農耕社会の基盤としての痕跡であり、また、縄文時代には集落であったと考えられる。

報告書抄録

ふりがな	いわてけんまいぞうぶんかざいはくつちょうさりやくほう							
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第397集							
掲著者名	小松剛也・菊池貴広							
収集機関	財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	西暦2002年3月29日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
	市町村	遺跡番号	度分秒	度分秒				
黒岩宿遺跡	岩手県北上市 黒岩27地番64 番地ほか	03206	ME 56 -1388	39度 17分 32秒	141度 09分 06秒	20010706~ 20011001	4,681m ²	「主要地方道 花巻北上線緊急 地方道路整備事業」に伴う 緊急発掘調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
黒岩宿遺跡	散在地	縄文時代晚期 平安時代 近世	土坑13基 歴史状況 柱穴状ピット14基	縄文晩期土器 石器 土器 陶磁器				

はじめに

黒岩宿遺跡は岩手県北上市に所在し、北上川左岸の段丘の縁に立地している。本遺跡からは繩文時代以降～近代以前とされている鉢間状遺構が検出されている。鉢間状遺構は下位側面北上川の氾濫堆積物の下から検出されており、並行して検出されることから鉢間状遺構は、烟跡と推測される。この遺構を構成する土壌は、遺構を覆っていた締りの悪い氾濫堆積物に比べて硬いことから、氾濫が起こらない比較的長い時期に形成されたものと思われている。

今回はこの煙と思われる鉢間状遺構において、どのような植物が栽培されているかを検討するため、花粉分析・植物珪酸体分析を行う。

1. 試料

花粉分析・植物珪酸体分析を行う試料は、U I S -01の比較的残存状態の良い鉢の頂部より採取された試料C地点においても調査を行い情報収集に務めた。

2. 分析方法

(1) 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による無機物質の除去、アセトトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分析の順に物理・科学的処理を施して花粉を検出する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

(2) 植物珪酸体分析

重液5g前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W、250KHz、1分間）、沈底法、重液分離法（ポリタンクステン酸ナトリウム、比重2.5g）の順に物理・科学的処理を行い、植物珪酸体を分離・検出する。検出しやすい速度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックで封入して、プレパラートを作成する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を検査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉梢）の葉部單細胞に由来した植物珪酸体（以下、単細胞珪酸体と呼ぶ）、およそ葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を近藤・須藤（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から栽培植物や古植生について検討するために、植物珪酸体群集と珪化組織片の分布図を作成した。各種類の出現率は、単細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。

3. 結果

(1) 花粉分析

結果を表1に示す。花粉化石はほとんど検出されず、定量分析を行うだけの固体数は得られなかった。A地点より確認された花粉化石は、草本花粉のイネ科のみであった。確認のため、B・C地点の試料においても概査を行ったところ、同様に検出される花粉化石は少なく、B地点からイネ科が、C地点からイネ属とイネ属以外のイネ科の花粉が確認された。シゲチ胞子についてみると、いずれの試料でもあまり産出していない。また、木本花粉についてはA地点からマツ属が、B点からブナ属が、それぞれ1個体ずつ確認されたが保存状態が非常に悪く、ほかの花粉化石と比べて色の濃い花粉であった。このような花粉はより古い時代の堆積物から再堆積と考えられることから、今回の計数結果に加えていない。プレパラート内の状況写真を図版に示す。

(2) 植物珪酸体分析

結果を表2、図1に示す。試料から植物珪酸体が検出されるもの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（透食痕）が認められる栽培植物では、最初段階に形成される頸珪酸体、イネ属の葉部に形成される単細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が検出される。また、コムギやオムギなどの栽培稲を分類群に含むオムギ属も検出されるが、今回検出された植物珪酸体の形態からは、栽培種か否かの判断が難しい。

この他にも、タケアリ科の産出が日立ち、ヨシ属、ウシクサ族（コブナグサ族やスキ属含む）、イチゴツナキ亞科などが検出された。また、球藻の殻片や海綿骨針も認められた。

4. 考察

今回、鉢間状遺構のA地点からイネ属やオムギ族に由来する植物珪酸体が検出されており、C地点の花粉分析結果からも、1個体だけではあるがイネ属花粉が検出されている。これらのことから、本遺構でもイネ属やムギなどの栽培が行われた可能性がある。ただし、保温・保湿のための敷き藁、あるいは福屋などを用いた地肥による施肥が行われた場合にも、土壤中に植物体が供給される可能性があるため、今回の結果から栽培について明言することは困難である。岩手県内における烟道構の事例では、軽米町の皂角子久保遺跡で平安時代の鉢間からイネ・オムギ類の植物珪酸体や煙道構が検出され、これらの栽培が推測される。（古環境研究所、1988；パリノ・サーヴェイ株式会社、1998）また、北上市鬼柳N遺跡でも、平安時代以降の烟道構とその周辺において、イネあるいはオムギの栽培が営まれた可能性が指摘されている。

(パリノ・サーヴェイ株式会社, 1992)

花粉分析の結果では、花粉化石はほとんど産出しなかった。一般に花粉化石・シダ類胞子は腐植に対する抵抗性が種類によって異なっており、花粉よりもシダ類胞子の方が酸化に対する抵抗性が高いとされている。

(中村 1985)

(千円、1957)
本述記が立地する氾濫原のような場所は、氾濫堆積物の供給がないときは酸化環境に晒されやすい。おそらく歴史的構造が煙として機能していたならば、常に常に酸化状態であったと思われる。このような場所では、花粉やシダ類胞子は酸化や土壤微生物によって分解・消失されやすいことから、堆積した花粉は腐敗作用により消失したものと推測される。

ところで検出されたほかの植物珪酸体についてみると、タケモチ、ヨシモチ、ウシクサ族、イギソナギヤクなどのイネ科植物が検出されており、珪藻の殻片も認められている。タケモチやウシクサ族は比較的乾いた場所に生育する種類である。遺構が確認されている地山自体も北上川の氾濫堆積物であることから、北上川流域にこれら種々な種類が生息しており、氾濫堆積物とともに本地点に供給されたと考えられる。そして、氾濫が起きたくなつたような時期に、畝間状遺構が形成されたと推測される。

今回の分析結果では、栽培に関する明確な情報は得られなかつた。今後は、畠、畝間、地山などの地点ごとに比較するとともに、微生物分析や土壤理化分析などを加え、複合的な解析を行うことが望まれる。

表1 花粉分属结果

品種	UIS-01		
	A結果	B結果	C結果
草本花粉	-	-	1
イネ科	-	-	1
他のイネ科	1	2	1
アカツキイネ	-	-	1
シダ類花粉	7	9	6
合計	0	0	0
木本花粉	0	0	0
草本花粉	1	2	3
不明花粉	0	0	0
シダ類花粉	7	9	6
累計(不確を除く)	8	11	8

表2 植物功能件分界由来

品目	規格	数量
イキナギ	本葉	8
タケ葉		114
ヨシ葉		12
タクシテラコブナダラ葉		5
タクシテラコスカサカ葉		26
サツボウタケモチオムギ葉		7
イチゴガラバ豆茎		4
不明キモ		20
不明ヒグリニ型		28
不明ダラク葉		2
イキナギ	根葉細胞織体	
イキナギ	本葉	6
タケ葉	葉身	104
ヨシ葉		7
タクシテラ	葉身	17
不明葉		33
合計		330
イキナギ	根葉細胞織物	255
イキナギ	根葉細胞織物成体	195
計		411
五	根葉	
イキナギ	根葉細胞織体	3
イキナギ	根葉細胞成体	4

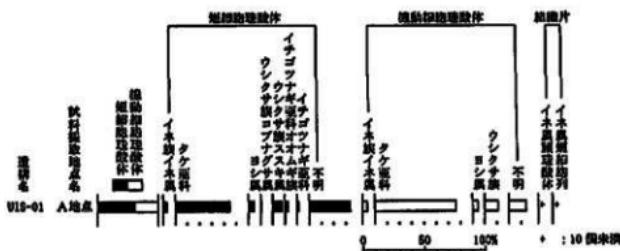


図1 植物理活性酵素と組織片の液度
出典引は、イネ科葉面活性酵素活性体、イネ科葉面活性酵素活性体の濃度を系数として百分率で算出した。なお、組織片の液度を検出装置により、の記号で示す。

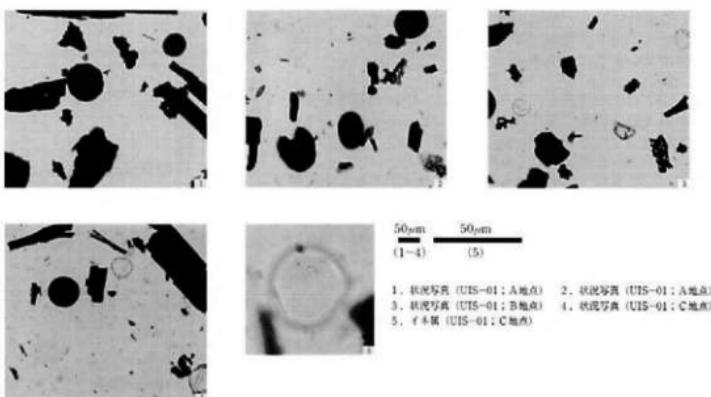
〈引用文献〉

古環境研究所(1988) プラント・オーパール分析調査報告書。岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第129号「角字久保、跡遺发掘調査報告書—一般国道340号改良工事関連道路発掘洞穴」。p.116-128、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

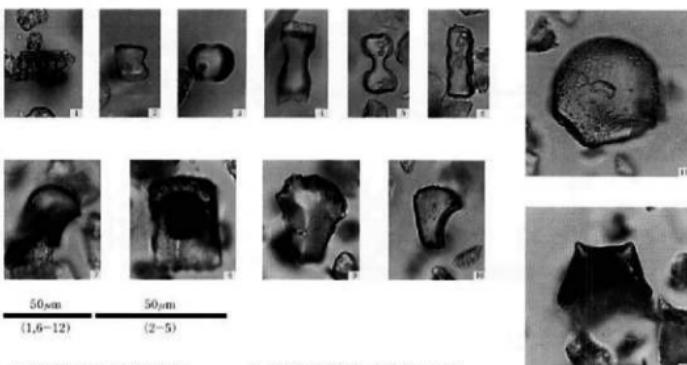
近藤聰三・佐藤隆 (1986) 植物珪酸体分析、その特性と応用、第四紀, 25, p. 31-64. 中村純 (1967) 「花粉分析」

,232p., 古今書院
パリヨン・サーウェイ株式会社(1998)「岩角子久保、遺跡出土試料種子同定報告」、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第129集「岩角子久保、遺跡発掘調査報告書」一般国道340号改良工事関連遺跡発掘調査」, p.129-134。財团法人岩手県文化振興事業団岩手県埋蔵文化財センター
パリヨン・サーウェイ株式会社(1992)「種子同定および絕粒状態分析報告」、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第160集「上鬼柳跡除草発掘調査報告書」東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査」, p.177-188。財团法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

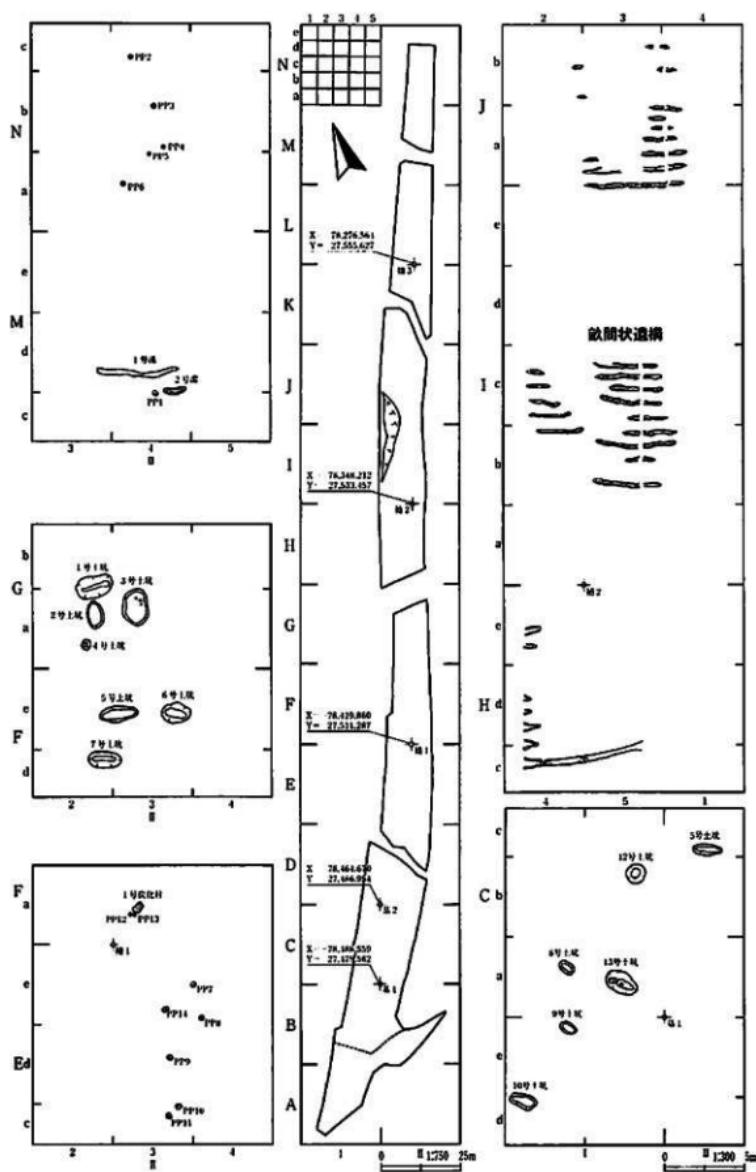
図版1 花粉分析プレバート内の状況写真



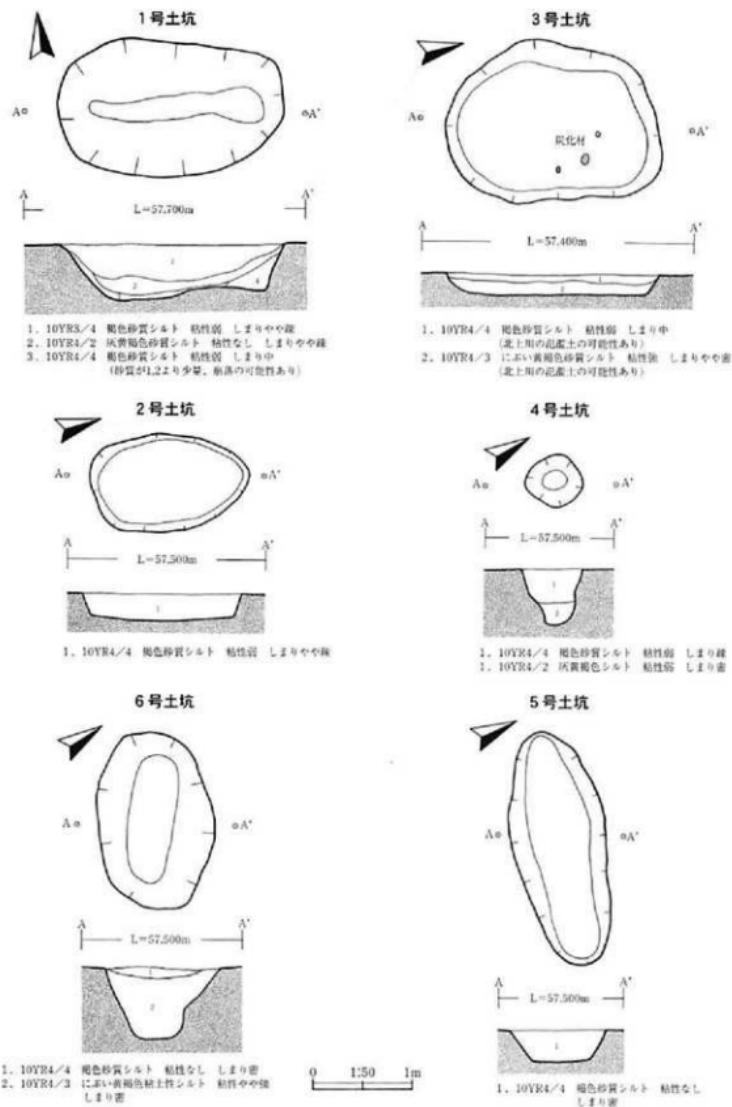
図版2 植物珪酸体



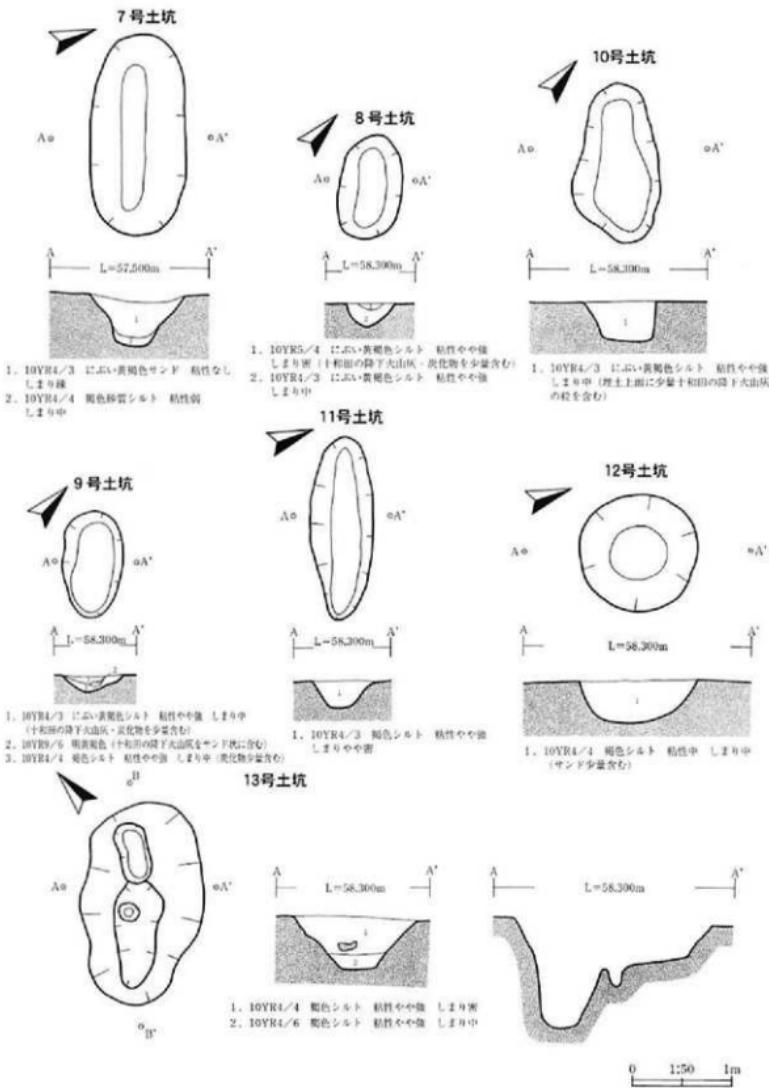
- 1. イネ属植物珪酸体 (UIS-01; A地点)
- 2. テケモ科植物珪酸体 (UIS-01; A地点)
- 3. ヨシ属植物珪酸体 (UIS-01; A地点)
- 4. コブタグラム属植物珪酸体 (UIS-01; A地点)
- 5. ススキ属植物珪酸体 (UIS-01; A地点)
- 6. オオムギ属植物珪酸体 (UIS-01; A地点)
- 7. イネ属植物珪酸体 (UIS-01; A地点)
- 8. イネ属植物珪酸体 (UIS-01; A地点)
- 9. タケモ科植物珪酸体 (UIS-01; A地点)
- 10. ウツクサ属植物珪酸体 (UIS-01; A地点)
- 11. イネ属植物珪酸体 (UIS-01; A地点)
- 12. イネ属植物珪酸体 (UIS-01; A地点)



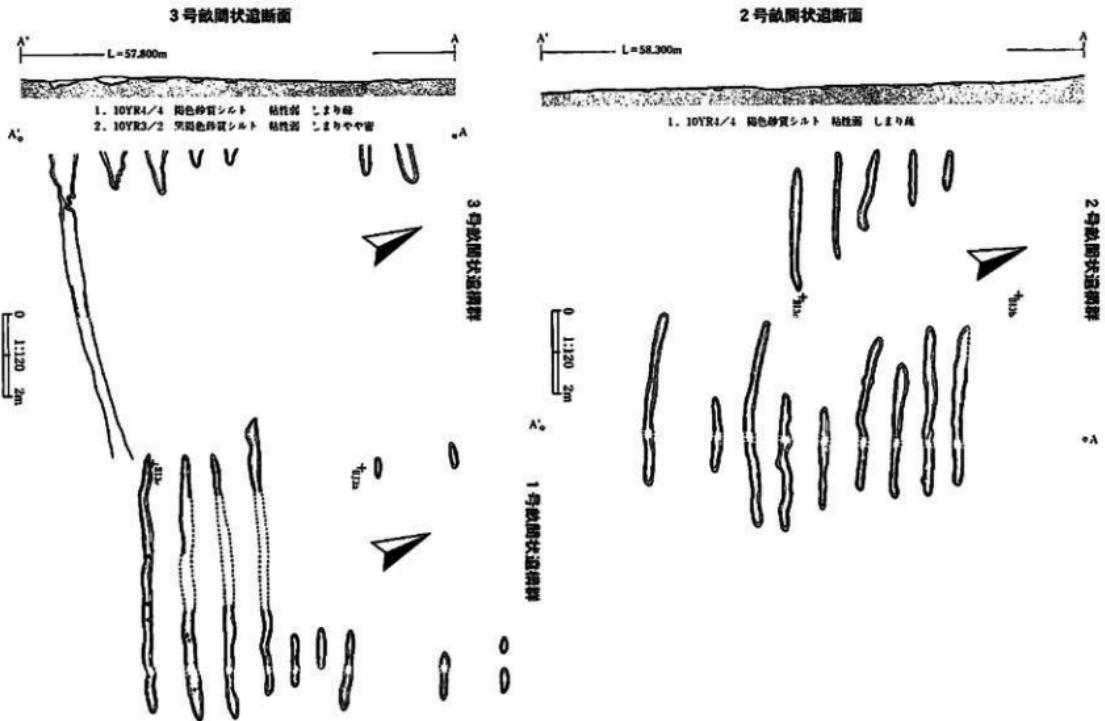
第1図 黒岩宿遺跡造構配置図



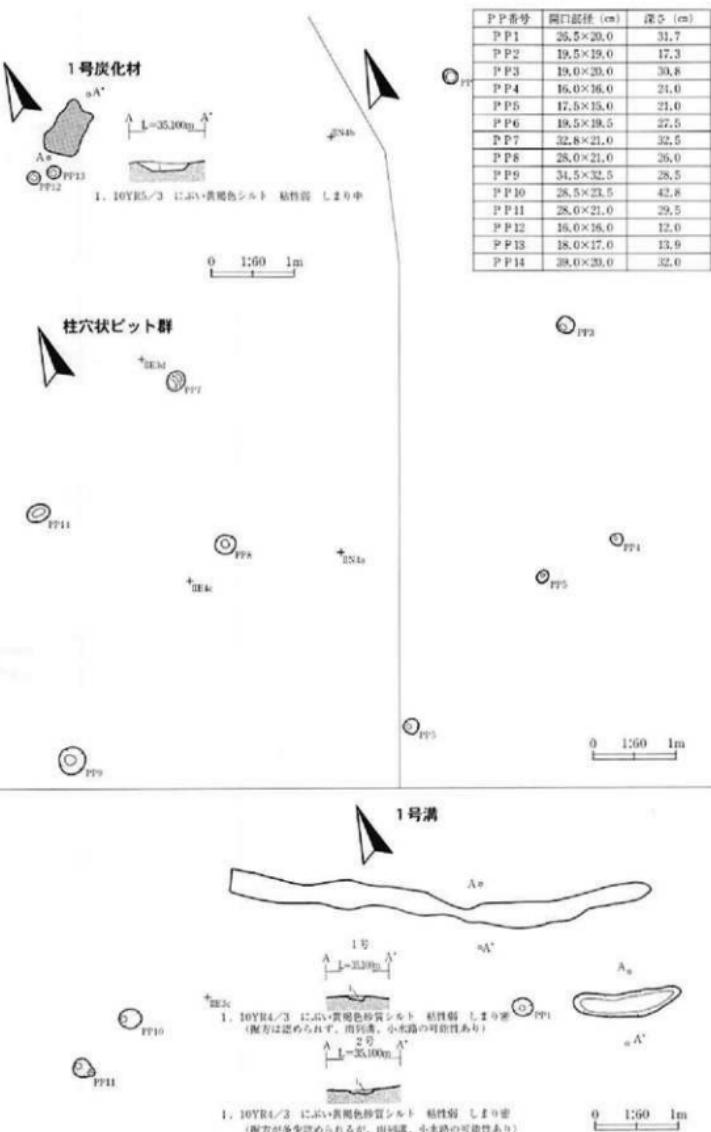
第2図 黒岩宿遺跡土坑 1



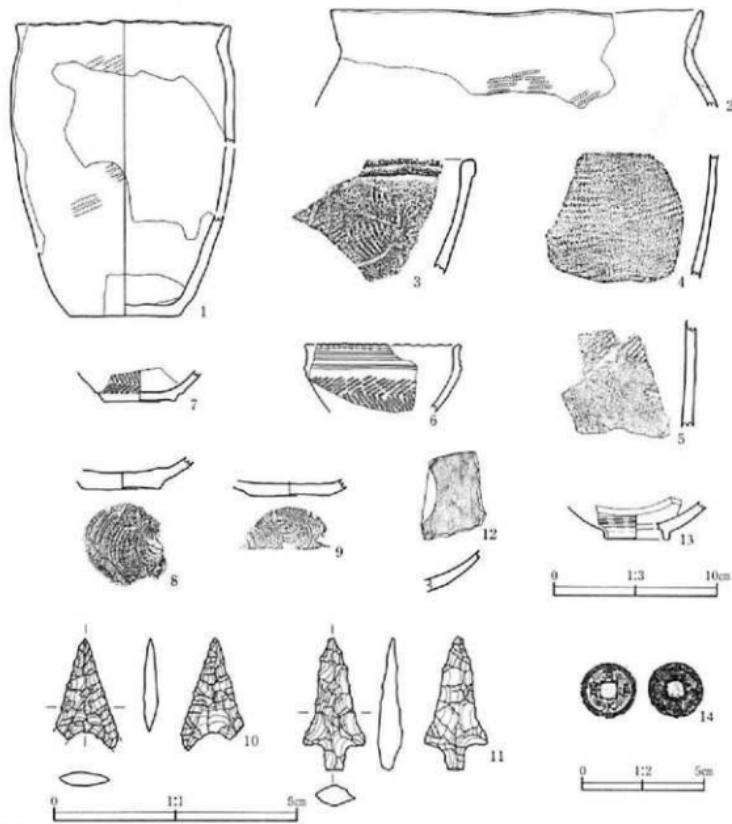
第3図 黒岩宿遺跡土坑2



第4図 黒岩洞道跡状況調査標本・出土遺物



第5図 黒岩宿遺跡炭化材・柱穴状ピット群・溝



遺物觀察表

<土器>

番号	出土場所	種別	形状	大きさ	特徴	出所	時代層	寸法
1	II-1-14	壺	壺	口径: 30mm 底径: 25mm	手縫目打跡、口縫目打跡、縁部に火燒痕等	手縫目打跡、口縫目打跡、縁部に火燒痕等	II-1-1	40cm 1/3
2	II-1-14	壺	壺	口径: 28mm 底径: 23mm	手縫目打跡、口縫目打跡、縁部に火燒痕等	手縫目打跡、口縫目打跡、縁部に火燒痕等	II-1-1	38cm 1/3
3	II-1-14	壺	壺	口径: 28mm 底径: 23mm	手縫目打跡、口縫目打跡、縁部に火燒痕等	手縫目打跡、口縫目打跡、縁部に火燒痕等	II-1-1	38cm 1/3
4	II-1-14	壺	壺	口径: 28mm 底径: 23mm	手縫目打跡、口縫目打跡、縁部に火燒痕等	手縫目打跡、口縫目打跡、縁部に火燒痕等	II-1-1	38cm 1/3
5	II-1-14	壺	壺	口径: 28mm 底径: 23mm	手縫目打跡、口縫目打跡、縁部に火燒痕等	手縫目打跡、口縫目打跡、縁部に火燒痕等	II-1-1	38cm 1/3
6	II-1-14	壺	壺	口径: 28mm 底径: 23mm	手縫目打跡、口縫目打跡、縁部に火燒痕等	手縫目打跡、口縫目打跡、縁部に火燒痕等	II-1-1	38cm 1/3
7	II-1-14	壺	壺	口径: 28mm 底径: 23mm	手縫目打跡、口縫目打跡、縁部に火燒痕等	手縫目打跡、口縫目打跡、縁部に火燒痕等	II-1-1	38cm 1/3
8	II-1-14	壺	壺	口径: 28mm 底径: 23mm	手縫目打跡、口縫目打跡、縁部に火燒痕等	手縫目打跡、口縫目打跡、縁部に火燒痕等	II-1-1	38cm 1/3
9	II-1-14	壺	壺	口径: 28mm 底径: 23mm	手縫目打跡、口縫目打跡、縁部に火燒痕等	手縫目打跡、口縫目打跡、縁部に火燒痕等	II-1-1	38cm 1/3
10	II-1-14	石器	石器	長さ: 10mm 幅: 5mm	手縫目打跡、平行火燒痕、口縫目打跡	手縫目打跡、平行火燒痕、口縫目打跡	II-1-1	10mm 1/3
11	II-1-14	石器	石器	長さ: 10mm 幅: 5mm	手縫目打跡、平行火燒痕、口縫目打跡	手縫目打跡、平行火燒痕、口縫目打跡	II-1-1	10mm 1/3
12	II-1-14	石器	石器	長さ: 10mm 幅: 5mm	手縫目打跡、平行火燒痕、口縫目打跡	手縫目打跡、平行火燒痕、口縫目打跡	II-1-1	10mm 1/3
13	II-1-14	石器	石器	長さ: 10mm 幅: 5mm	手縫目打跡、平行火燒痕、口縫目打跡	手縫目打跡、平行火燒痕、口縫目打跡	II-1-1	10mm 1/3
14	II-1-14	石器	石器	直径: 10mm 厚さ: 2mm	手縫目打跡、平行火燒痕、口縫目打跡	手縫目打跡、平行火燒痕、口縫目打跡	II-1-1	10mm 1/3

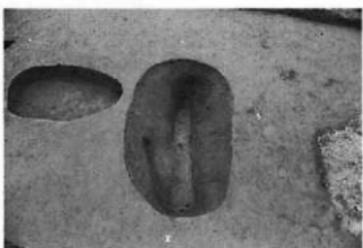
<石器>

番号	出土場所	種別	形状	大きさ	特徴	出所	時代層	寸法
12	II-1-14	石器	石器	長さ: 10mm 幅: 5mm	手縫目打跡、平行火燒痕、口縫目打跡	手縫目打跡、平行火燒痕、口縫目打跡	II-1-1	10mm 1/3
13	II-1-14	石器	石器	長さ: 10mm 幅: 5mm	手縫目打跡、平行火燒痕、口縫目打跡	手縫目打跡、平行火燒痕、口縫目打跡	II-1-1	10mm 1/3
14	II-1-14	石器	石器	長さ: 10mm 幅: 5mm	手縫目打跡、平行火燒痕、口縫目打跡	手縫目打跡、平行火燒痕、口縫目打跡	II-1-1	10mm 1/3

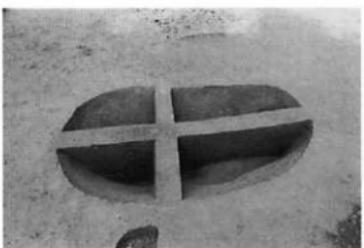
<陶器>

番号	出土場所	種別	形状	大きさ	特徴	出所	時代層	寸法
15	II-1-14	陶器	陶器	直径: 10mm 高さ: 2mm	手縫目打跡、平行火燒痕、口縫目打跡	手縫目打跡、平行火燒痕、口縫目打跡	II-1-1	10mm 1/3
16	II-1-14	陶器	陶器	直径: 10mm 高さ: 2mm	手縫目打跡、平行火燒痕、口縫目打跡	手縫目打跡、平行火燒痕、口縫目打跡	II-1-1	10mm 1/3

第6図 黒岩宿遺跡出土遺物



1号土坑平面



1号土坑断面



2号土坑平面



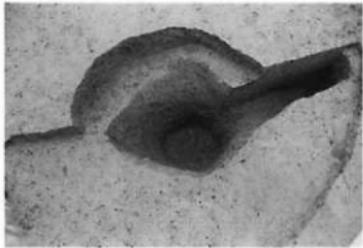
2号土坑断面



3号土坑平面



3号土坑断面

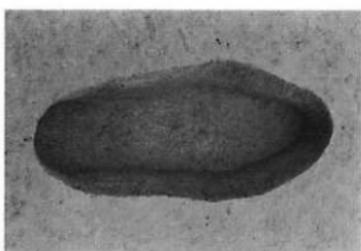


4号土坑平面



4号土坑断面

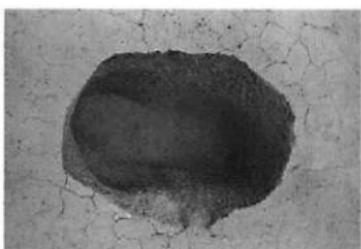
写真図版 1 黑岩宿遺跡土坑 1



5号土坑平面



5号土坑断面



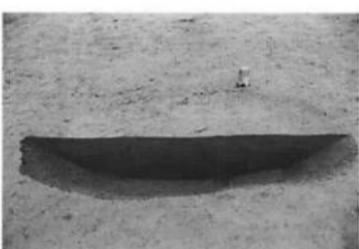
6号土坑平面



6号土坑断面



7号土坑平面



7号土坑断面



8号土坑平面

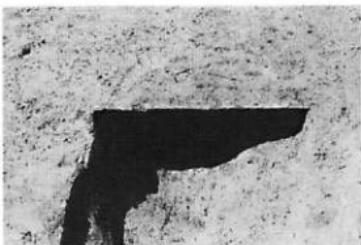


8号土坑断面

写真図版 2 黑岩宿遺跡土坑 2



9号土坑平面



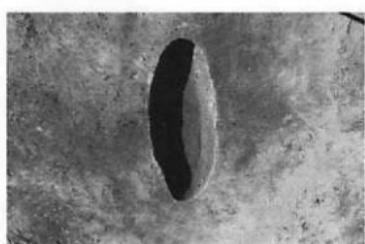
9号土坑断面



10号土坑平面



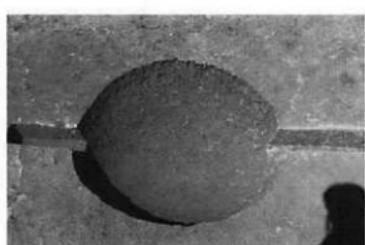
10号土坑断面



11号土坑平面



11号土坑断面



12号土坑平面



12号土坑断面

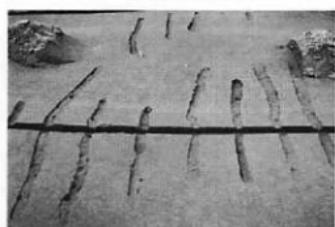
写真図版 3 黑岩宿遺跡土坑 3



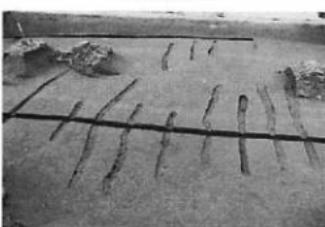
13号土坑平面



13号土坑断面



長間状遺構



長間状遺構



写真図版 4 黒岩宿遺跡土坑 4・長間状遺構・出土遺物

(45) てらがまえ
寺ヶ前Ⅲ遺跡

所 在 地 水沢市真城字谷地田147ほか
委 託 者 水沢地方振興局水沢農村整備事務所
事 業 名 担い手育成基盤整備事業姉体地区（農道部分）
発掘調査期間 平成13年4月9日～4月19日
調査対象面積 800m²
発掘調査面積 800m²
遺跡番号・略号 NE37-0074・TMⅢ-01
調査担当者 金子昭彦・坂部忠造
協 力 機 関 水沢市教育委員会



遺跡位置

1:50,000 水沢

1. 調査に至る経過

寺ヶ前Ⅲ遺跡は、「扱い手育成基盤整備事業総合地区」の施行に伴って、その事業区域に位置することから発掘調査することとなったものである。

「扱い手育成基盤整備事業総合地区」は、水沢市総合及び前沢町古城の一部にまたがる受益面積373haの地区で、水田は昭和32年頃10a区画に整理されたが、区画形状が小さく農道の幅員も狭い状況であった。又小用水路は、土水路で漏水し用水不足を補うために、小排水路は用耕兼用で浅く、排水不良となって湿地化しているなど、営農の機械化、耕地の汎用化、さらには農地の流動化、生活環境の向上など、高生産性農業を阻害していた。

これらの阻害要因を除去し、効率的で安定的な經營体に農地を集積し、高生産性農業の確立を図り、併せて農村環境水準の向上を資するために、人区画は場整備を実施するものとして、平成9年度新規採択された地区で、平成12年度で4年目である。

当事業の施行に係る埋蔵文化財の収穫については、水沢地方振興局胆江土地改良事業所から（平成10年度から水沢農村整備事務所）平成9年5月15日付け胆江地第146号「県営は場整備実施に伴う遺跡の分布調査について（依頼）」の文章によって岩手県教育委員会にたいして分布調査の依頼をしたのが最初である。依頼を受けた岩手県教育委員会では、平成9年6月12、17、19日に分布調査を実施し、その結果は平成9年7月15日付け教文第353号「県営は場整備実施に伴う遺跡の分布調査について（回答）」で水沢地方振興局胆江土地改良事業所へ回答し、その際工事施工範囲内が寺ヶ前Ⅲ遺跡の範囲内であることが付記された。

回答を受けた水沢地方振興局水沢農村整備事務所では、寺ヶ前Ⅲ遺跡を含む面工事実施年度である平成12年9月27日付け水農整第371-3号「は場整備事業（扱い手育成区画整理型）総合地区における埋蔵文化財の試掘調査について（依頼）」の文章によって岩手県教育委員会にたいして、試掘調査を依頼した。依頼を受けた岩手県教育委員会では平成12年11月16、17、30日に試掘調査を実施したが、その結果は平成12年12月28日付け教文第1177号「は場整備事業（扱い手育成区画整理型）総合地区における埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」で水沢地方振興局水沢農村整備事務所へ回答し、その際寺ヶ前Ⅲ遺跡の発掘調査が必要である旨が付記された。

（水沢地方振興局水沢農村整備事務所）

2. 遺跡の立地

寺ヶ前Ⅲ遺跡は、JR東日本東北本線陸中折居駅の北東約2kmにあり、北上川右岸の自然堤防状の微高地に立地する。標高は34~35m前後で、調査範囲の現況は水田である。

3. 基本層序

基本層序は以下の通りであるが、0からⅡb層まで確認されたのは調査範囲東端のみで、他は前回のは場整備以前に削平されており、I層の下がⅢ層という状態であった。

0層 盛土 ロームブロックの混じる土 I~Ⅲ層の混土

I層 にぶい黄褐色土 (10Y R4/3) 粘土質シルト 水田耕作土 層厚20cm

II a層 黒褐色土 (10Y R3/2) 粘土質シルト 中近世造構の肥土になる 層厚0~15cm

II b層 黑褐色土 (10Y R2/2) 粘土質シルト 古代造構の肥土になる 層厚0~15cm

III層 明黄褐色土 (10Y R6/8) 粘土 地点により異なり白色粘土化している所もある 層厚40cm

IV層 緑灰色土 (7.5G Y) 粘土 層厚不明

4. 調査の概要と検出遺構

掘立柱建物跡3棟、柱穴状土坑25基、土坑1基、溝跡1条が検出された。掘立柱建物跡1棟、溝は古代

(平安時代)、その他は中近世の可能性が高い。今回の調査では中世の遺物は出土していないが、埋土では区別できず近世と断定する決め手もない。中近世と広く位便づけた。第1号掘立柱建物跡と溝跡の一部は完掘時に掘り広がったため断面図と平面図が合わない部分があり、溝はセクション・ポイントも合わない。

〈掘立柱建物跡〉 3棟認定した。第1号は古代、第2、3号は中近世と思われる。

第1号掘立柱建物跡は、北側の調査範囲外に統くため、全体の形、規模は不明である。5つの柱穴の不自然な構成だが、相当部分を丹念に検出しても柱穴を見つけることはできなかった。軸方向はほぼ東西南北に沿っており、第2号、第3号掘立柱建物跡とは明らかに異なる。規模は現状で4.5×4.5mで正方形に近い構成を取る。柱穴は、掘り方が直径約50cm、深さは削平されているため浅く15~30cm。柱痕跡が認められるものが多いが、元の状態は保っていないようである。埋土6、7層が掘り方理屈上に相当し、8層が柱あたりになる。遺物は出土していないが、検出状況、埋土などから、古代の可能性が高い。

第2号掘立柱建物跡は8つ、第3号は9つの柱穴状土坑が並んでいるように思われたので、建物跡に認定したものである。両方とも南側の調査範囲外に統く可能性が高いためか、はっきりとした遺物を構成しない。第2号については、柱穴が続きそうな部分を丹念に検出し断ち切ったが発見できなかった。柱穴の位置から建て替えが行われている可能性が高い。軸方向は、第2号、第3号とも南北一東西で、微妙にずれるが(2号は約25°、3号は約5°)、第1号と比べれば類似し、埋土も似ておりⅡa層に近い。柱痕跡や掘り方ははっきり認められるものが多い。遺物は出土していないが、埋土などから中近世の可能性がある。

〈柱穴状土坑〉 建物跡にまとめることができなかつた柱穴状土坑である。第2号、第3号掘立柱建物跡の柱穴とほとんど同じで、25基検出した。1基から土器器坏が出土しているが(配置図に図示)、出土層位からは、構築時に紛れ込んだもの、遺棄したものの両方に受け取れる。このようなものもあるが、第1号との違い、第2号、第3号掘立柱建物跡との共通性から、多くは基本的に中近世の可能性があると考える。

〈土坑〉 1基検出した。規模から土坑としたが、埋土や底面の状態から掘立柱建物跡の柱穴の可能性が高い。これと組み合う柱穴を探したが、削平されているためか調査範囲内に見つけることはできなかった。掘り方は、90×65cm程度の隅丸長方形である。削平されているため10cmと浅く、断面形は浅い皿状に近い。埋土は、3層が柱痕跡、1、2層は掘り方埋土である。4層は、柱の重みで層巣がグリル化したものようである。遺物は出土していないが、埋土や検出状況などから古代の可能性が高い。

〈溝跡〉 1条検出した。南側の調査範囲外に統くため、平面形、規模ははっきりしないが、隅丸の方形周溝のようで、西北西→東南東方向は約9mある。幅は約35~40cmで、断面形は不整形な浅い皿状を呈する。東側の幅が広く見えるのは、断面からわかるように本来2条に分かれていたものを同時に掘ってしまったためのようである。ただし耕作時の搅乱を受けていて検出状況が悪く、重複しているのか枝分かれしているのかはわからなかった。深さは削平されているため5~15cmと浅い。埋土は単層でⅡb層に似る。摩耗した土器片が出土している(第5図2)。これまでの類例、埋土、出土遺物から、平安時代の可能性が高い。

5. 出土遺物

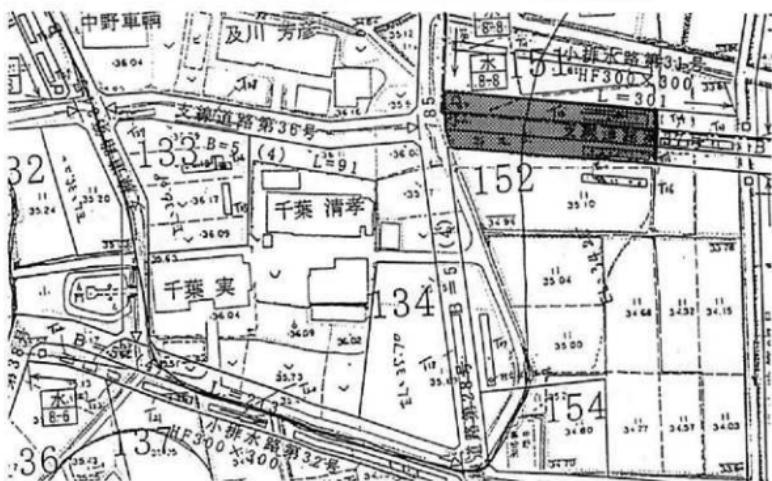
図示した以外に、遺構外から須恵器小片、近世陶磁器小片が出土している。

6.まとめ

調査範囲は東端を除き大きく削平されていたが、古代(平安時代)および中近世の可能性のある掘立柱建物跡や溝跡を発見できた。また今回の調査範囲は遺跡の東端であったようで、その東側は湿地が続いている。既に岩手県教育委員会の試掘調査で確認されていたが、現地形に沿って引かれた遺跡範囲南東側の凹んだ部分(第1図参照)は東に広がり、遺跡の東限は北から南へほぼ直線的に続いているようである。



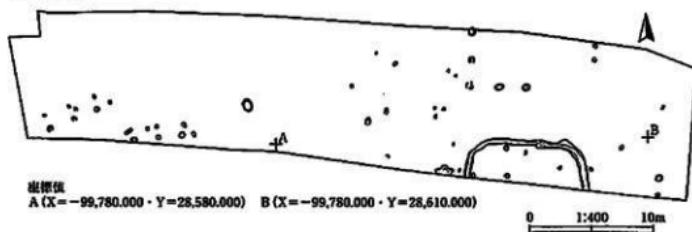
遺跡範囲(中央斜線範囲が寺ヶ前Ⅲ遺跡、網がかかっている部分が調査範囲)



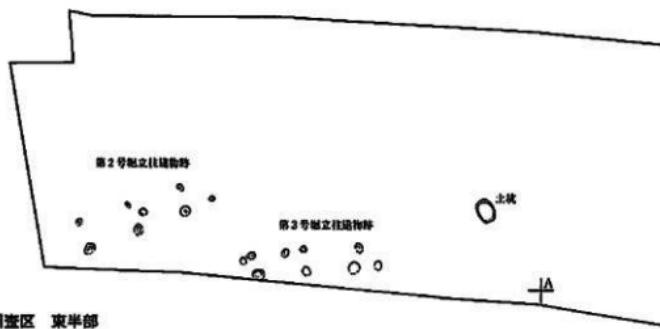
調査範囲(網がかかっている部分が調査範囲)

第1図 寺ヶ前Ⅲ遺跡 遺跡、調査範囲

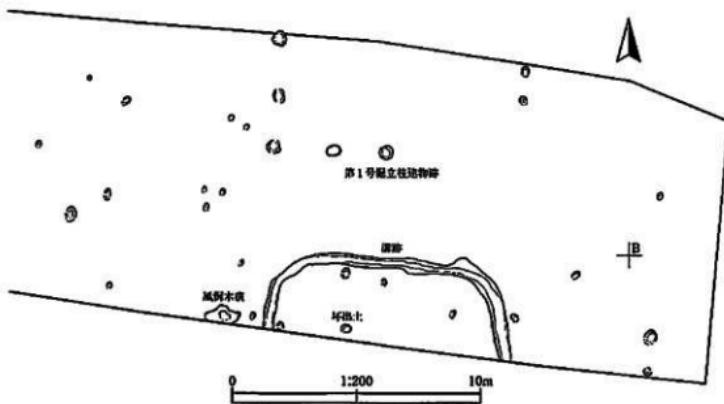
調査区全体



調査区 西半部

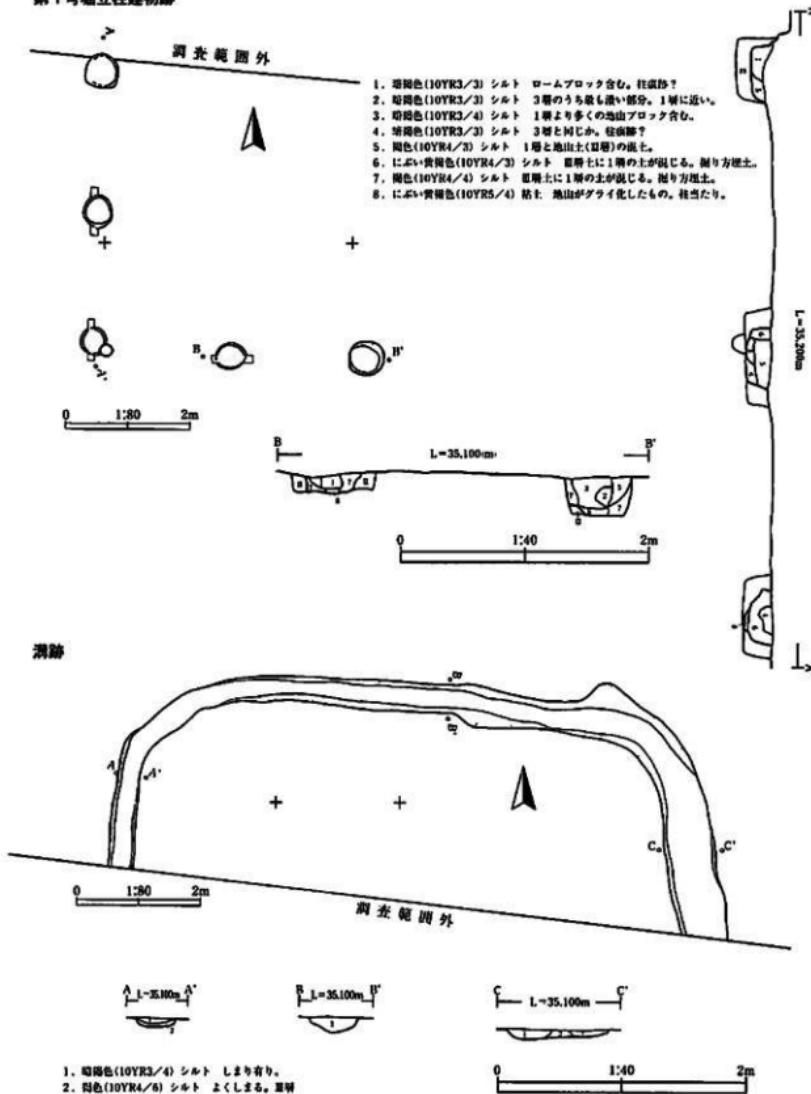


調査区 東半部

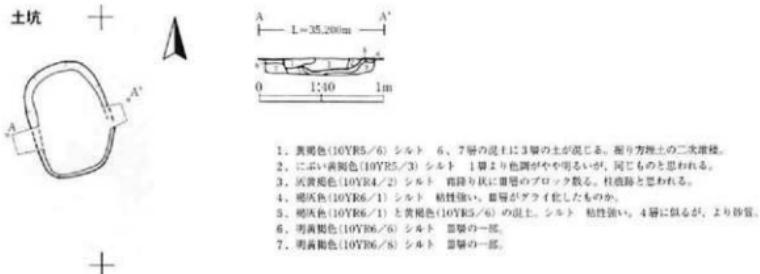


第2図 寺ヶ前Ⅲ遺跡遺構配置図

第1号壇立柱建物跡



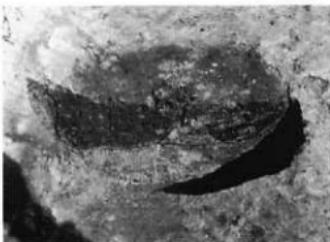
第3図 寺ヶ前Ⅲ遺跡検出遺構(1)



第4図 寺ヶ前III遺跡検出遺構(2)



第1号掘立柱建物跡

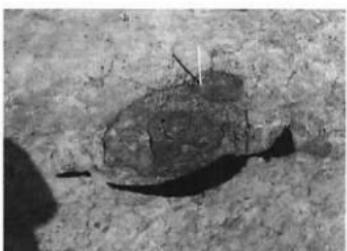


同 柱穴断面(1)

写真図版1 寺ヶ前III遺跡検出遺構(1)



同 柱穴断面(2)



同 柱穴断面(3)



同 柱穴断面(4)



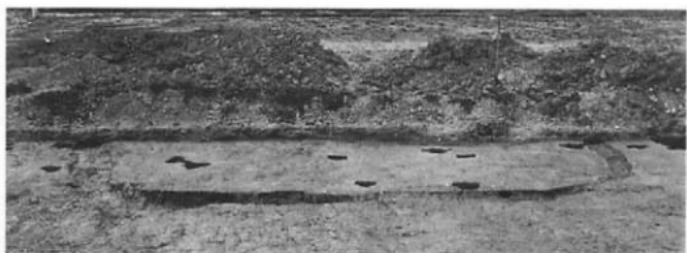
同 柱穴断面(5)



第2号据立柱建物跡



第3号据立柱建物跡



溝跡全景

写真図版2 寺ヶ前Ⅲ遺跡検出遺構(2)



溝跡断面(1)



溝跡断面(2)



溝跡断面(3)



調査風景



土坑平面



土坑断面

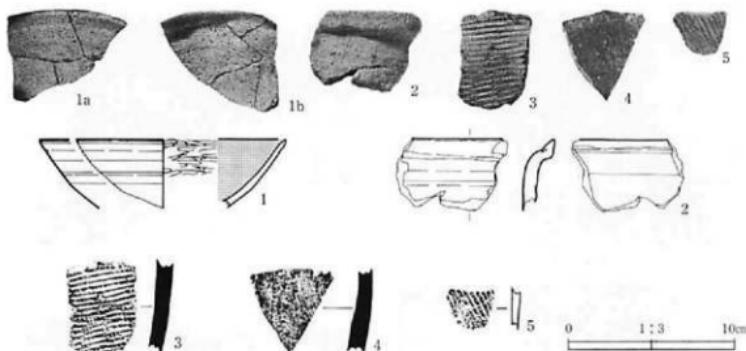


第1号掘立柱穴と重複する中近世の柱穴(右)



倒木痕

写真図版3 寺ヶ前Ⅲ遺跡検出遺構(3)



No.	出土地点・場所	種別	器種・部位	外観	内面	残存状況	備考
1	柱穴・柱痕跡と掘り方理土の中切端	土器器	口縁部	(口縁部／側部／底面) ロクロ(摩利)	モザイク→黒色処理	1/8周2片・摩耗 位置配置図に回示	
2	第1号溝跡	土器器	裏・口縁部	ロクロナナデ	ロクロナナデ?	1/24周破片・ 摩耗ひせい	
3	調査区北西隅	須恵器	裏・側部破片	平行タキ目	ナデ?	小片	
4	第1号溝跡付近・横出面	須恵器	裏・側部破片	ケズリ	ナデ	小片	
5	黒削木(粘土は焼成配置図に回示)	繩文土器	深鉢形・柄部	單輪鉢1(口)ナナデ	ナデ	小片	後期前半?

第5図 寺ヶ前Ⅲ遺跡出土遺物

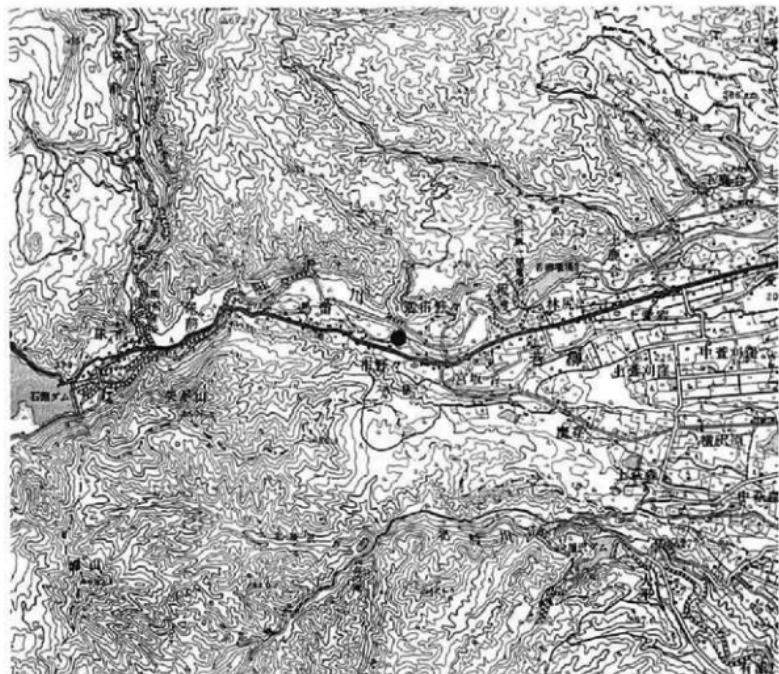
報告書抄録

ふりがな	いわてけんmaiぞうぶんかざいはくつちょうさりやくほう
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査報
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第397集
編著者名	金子昭彦
編集機関	財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019) 638-9001
発行年月日	西暦2002年3月29日

ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
寺ヶ前Ⅲ遺跡	岩手県水沢市 真城字谷地田 147ほか	03204	NE37 -0074	39度 05分 26秒	141度 10分 00秒	20010409～ 20010419	800m ²	「担い手育成 基盤整備事業 始動地区」に伴 う緊急発掘調 査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
寺ヶ前Ⅲ遺跡	集落跡	平安時代	掘立柱建物跡1棟 溝(方形周溝?) 1条	繩文土器 土師器 須恵器 近世陶磁器		遺跡の南東限を確認。 繩文土器出土。		
		中近世?	掘立柱建物跡、柱穴					

いのちの
(46) 市野々遺跡

所 在 地 胆沢町若柳字市野々7番ほか
委 託 者 国土交通省東北地方整備局胆沢ダム工事事務所
事 業 名 胆沢ダム建設
発掘調査期間 平成13年4月13日～7月9日
調査対象面積 13,800m²
発掘調査面積 13,800m²
遺跡番号・略号 NE22-2116・INN-01
調査担当者 飯坂一重・瀬 浩二郎・原 美津子
協 力 機 間 胆沢町教育委員会



遺跡位置

1:50,000 焼石岳

1. 調査に至る経過

市野ヶ遺跡は「胆沢ダム建設事業」に伴って、その事業区域内（フィルター採取地及び残土受入地）に位置することから発掘調査を実施することとなったものである。

胆沢ダムは、北上川右支川の胆沢川に建設される高さ132m、長さ745m、総貯水容積1億4,300万m³の中央コア型ロックフィルダムであり、その目的は、洪水調節・河川環境保全等のための流水の確保・かんがい用水・水道用水・水力発電を行う多目的ダムで、平成2年5月11日に「胆沢ダム建設に関する基本計画」が官報公示され今日に至っている。

埋蔵文化財の取扱いについては、事業に先立ち昭和58年10月に建設省新石器時代調査事務所（昭和63年4月胆沢ダム工事事務所と名称変更）から、ダム事業区域内の埋蔵文化財の有無の照会が岩手県教育委員会に出され、周知地区864,000m²、可能性有地区490,000m²が確認された。その後、水没面積（4,400,000m²）を含む事業区域内の埋蔵文化財の包蔵地の取扱いについて、毎年度各工事等の実施に先立って、岩手県教育委員会と協議を行いながら計画的に調査を実施しているところである。

市野ヶ遺跡については、平成12年5月29日付け東北電工第75号により胆沢ダム工事事務所長から岩手県教育委員会に試掘調査の依頼がなされた。依頼を受けた岩手県教育委員会は平成12年9月5日及び追加分について12月25日26日に試掘調査を実施し、その結果、当初試掘レンチ15箇所全域から平安時代の堀立柱建物を構成する柱穴群等が検出した。又、追加試掘箇所はレンチ16箇所のうち5箇所から绳文時代の竪穴住居跡や柱穴群等が存在する可能性が高いことが判明した。このため岩手県教育委員会は平成12年9月12日付け教文第704号及び平成13年1月4日付け教文第1132号で、発掘調査が必要である旨胆沢ダム工事事務所に回答された。

以上のようなことから、これに沿って両者が協議を行い、消滅する遺跡について事前に発掘調査を実施することとし、発掘調査事業については、財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

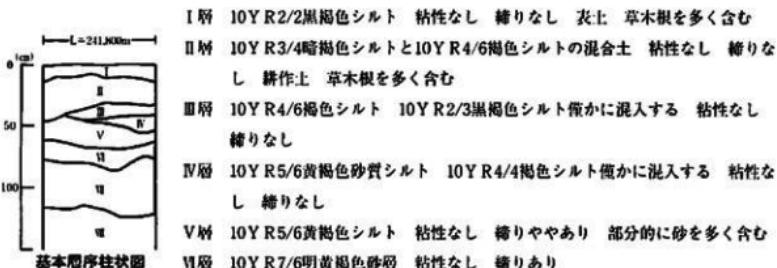
（国土交通省東北地方整備局胆沢ダム工事事務所）

2. 遺跡の立地

市野ヶ遺跡は、胆沢町役場の西方約10kmの国道397号沿い北側に位置し、隣接してすぐ北側を流れる胆沢川の河岸段丘に立地している。道路の南側は国道をはさんで急斜面の丘陵地帯となっており、スキー場として利用されている。調査区は標高約240mの平坦地で、現況は山林及び原野であるが、昭和50年代までは宅地・水田として利用されていた。

3. 基本層序

調査区は、宅地・水田造成によって改変されているが、基本層序はおおよそ次の通りである。



Ⅲ層 10Y R6/6明黄褐色砂層 10Y R7/6明黄褐色砂を斑状に含む 粘性なし 繊りあり Ⅳ層との
境界に10Y R5/4にぶい黄褐色砂が薄く層をつくる

Ⅴ層 砂疊層 10Y R7/6 明黄褐色砂と大小の砾から構成される 層厚は不明

4. 調査の概要と検出遺構

今回の調査で検出された遺構は土坑17基、焼土遺構1基、井戸跡1基、炭窯跡11基である。他に近世の墓塚群が確認された。墓塚については、協議により地権者に引渡したので調査は行っていない。

調査区グリッドの設定にあたっては、基準点測量を委託し、平面直角座標系第X系を利用した。調査区城内に基準点1、基準点2をそれぞれ設定した。大グリッドは北西隅を基点に、調査区全域をカバーするよう50m単位で区画し、西から東へA～E、北から南へI～Vの名称をつけた。さらに大グリッドを5m単位で100升に小区画し、北西隅を基点に西から東へ01～10、北から南へ01・11・21～91というように名称をつけた。したがって、最小グリッドはI A01、II B21というよう呼称される。なお、平面図の作成にあたってはグリッド北西隅の点X=-98,000.000m、Y=9,500.000mを基点として、南方向へはS---、東方向へはE---(単位m)と表記している。

＜土坑＞ 17基検出された。遺物を伴っている土坑は6基である。他は出土遺物がなく時期不明である。15号土坑からは縄文時代晩期の完形深鉢が出土した。土坑は調査区内一帯に散在しており、各土坑の関連性は不明である。

＜焼土遺構＞ 調査区西端で1基検出されている。平面形は不整規円形を呈し、規模は1.69m×71cm、厚さ22cmである。遺構内及び周辺からは遺物が出土しておらず、時期は不明である。焼土に混入物が多く見られることから、異地性の焼土と思われる。

＜井戸跡＞ Ⅲ C区から1基検出された。開口部は2.38×2.20mの円形を呈し、深さが3.07mである。出土遺物はなく、井戸の周囲にも柱穴など付帯施設が検出されなかった。住宅跡の近くから検出されており、近現代の井戸跡と思われる。

＜炭窯跡＞ 調査区全域から11基検出されている。平面形は全て隅丸方形で、小さいものは2.59×2.07m、大きいものは5.12×2.90mである。深さは20～40cmを測る。この地域で炭焼きが盛んに行われていた近現代のものと思われるが、詳細は不明である。

5. 出土遺物

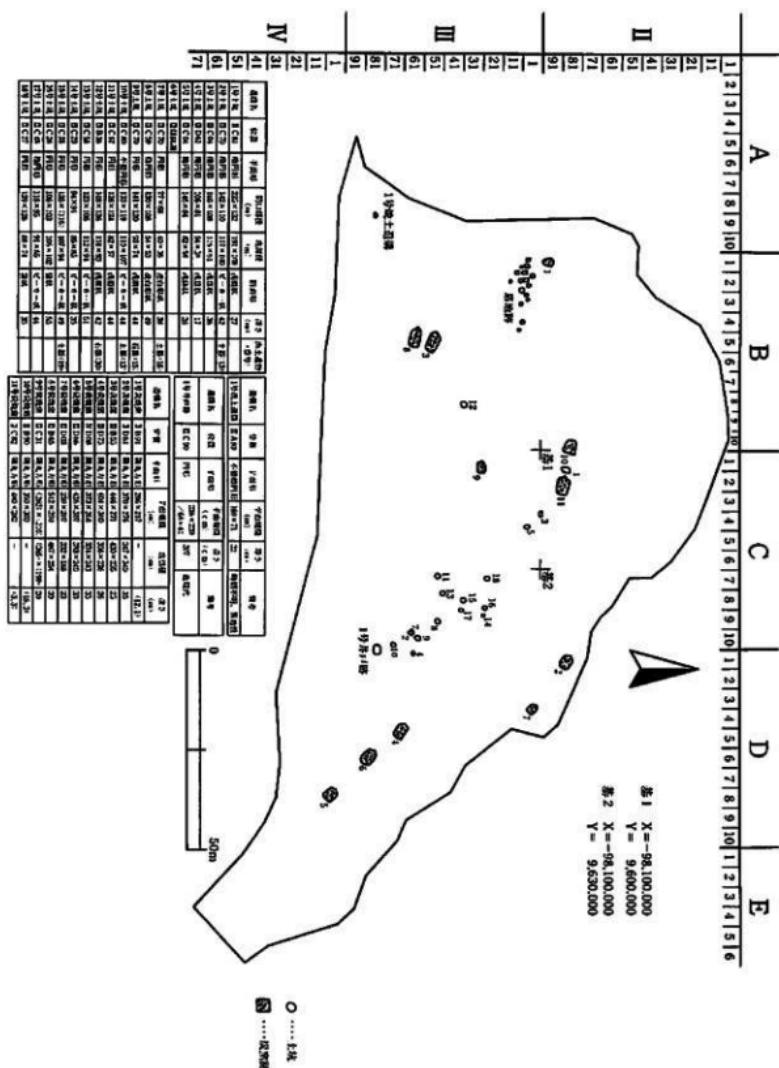
出土した遺物は、土器は大コンテナで2箱あり、縄文時代前・後・晩期と各期にわたって出土している。他に土師器、須恵器、陶器、円盤上製品が僅かに出土している。石器は中コンテナで1箱出土している。剥片石器がほとんどで、砾石器は出土していない。土器・石器とともに遺構内からの出土は少ない。他に寛永通寶、平安通寶、淳化通寶、永樂通寶が各1枚出土している。墓塚には寛永通寶が約50枚刷券品として埋葬されていた。

6.まとめ

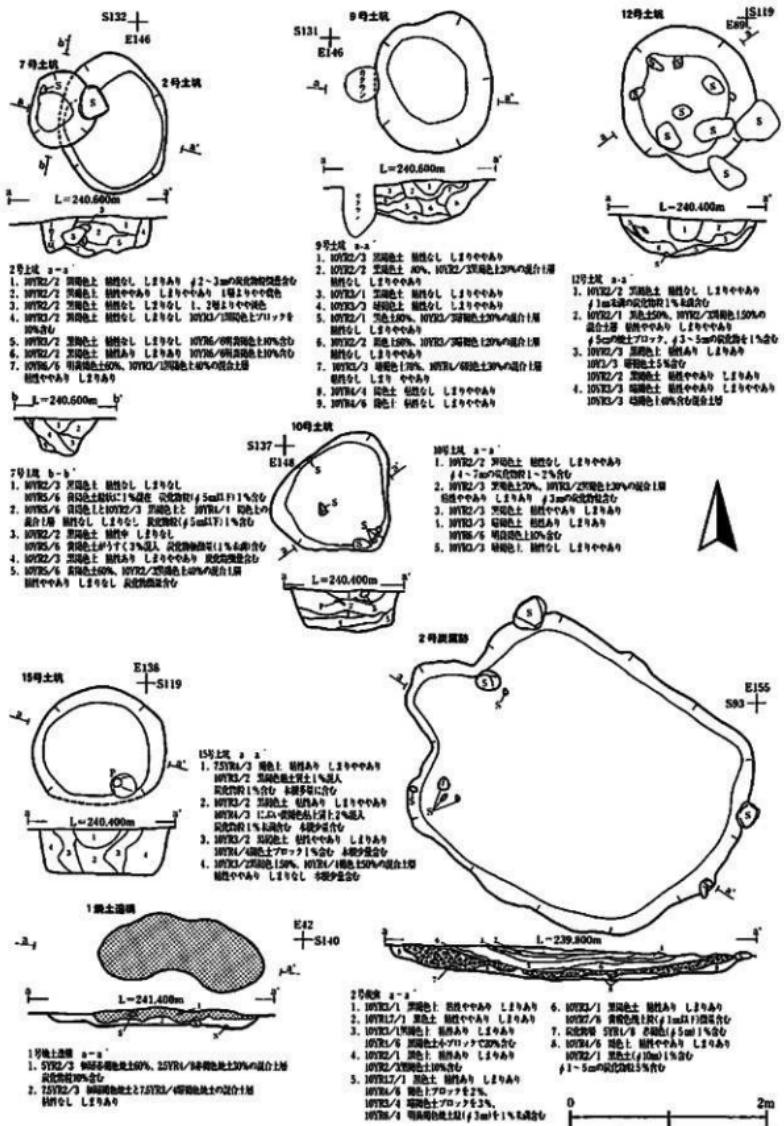
今回の調査区は、水田のあった所で地盤がかなり変更されていた。さらに伊沢川に近い北側Ⅲ区の地盤の変更や大量に残されていた石は、川の氾濫によるものではないかと考えられる。

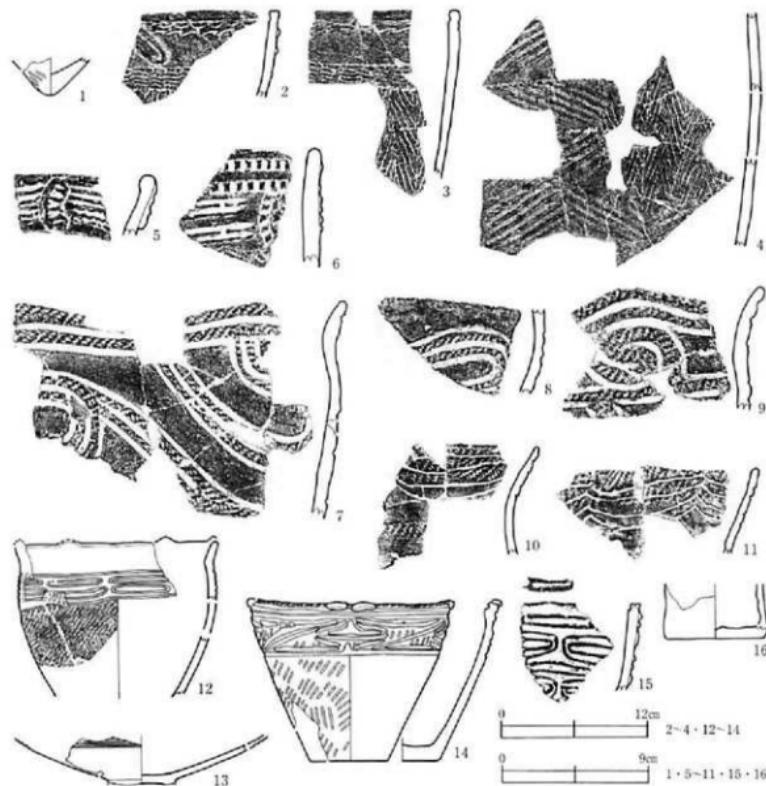
調査の結果、当初予想されていた縄文時代の集落跡は、検出されなかった。検出された遺構の大部分は近現代のものである。しかし、縄文時代の遺物がある程度出土することから見て、当時の人々が何らかの形でこの地に関わっていたと思われる。

なお、市野々跡に關する報告は、これをもって全てとする。



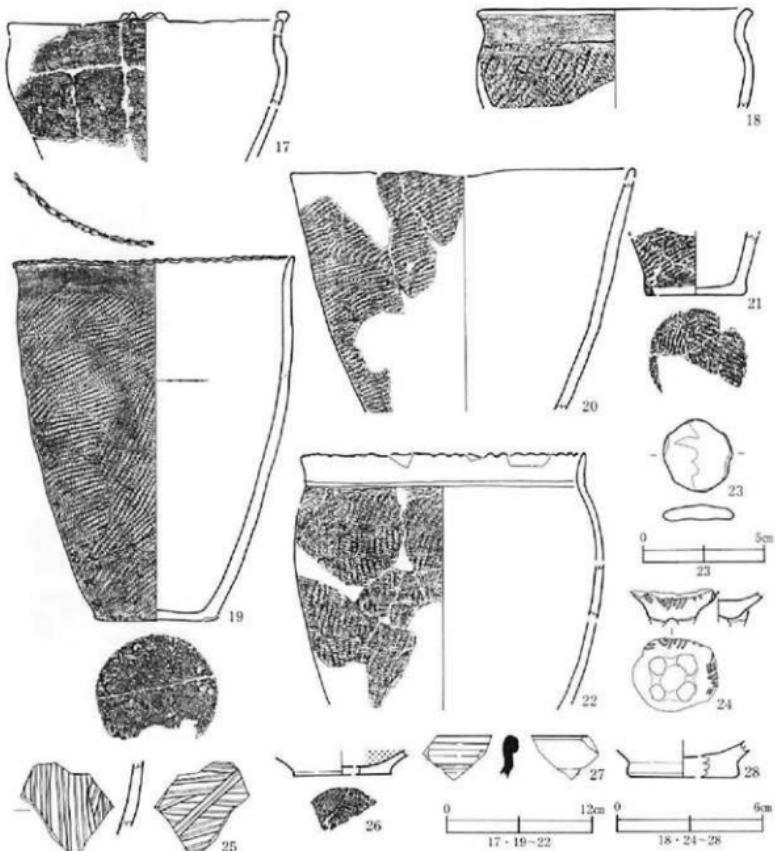
第1図 市野々遺跡遺構配置図





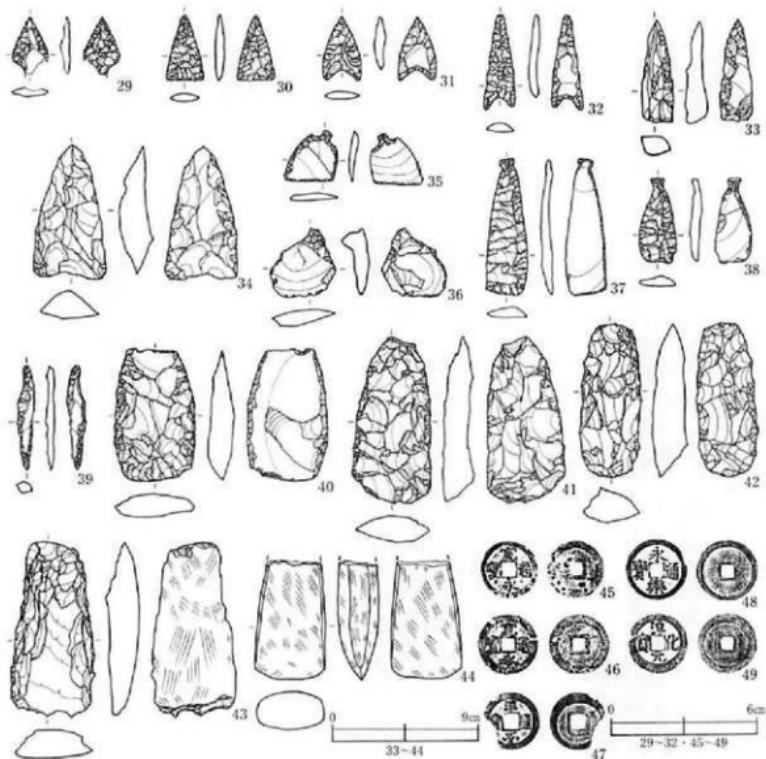
規範番号	出土地点・層位	器種	部位	單体	特徴	時期
1	II C 65	深鉢	底	R L 横	尖底部分	早期?
2	II C 67	深鉢	II-胴	R L 横		
3	II C 67	深鉢	II-胴	L R	II縁: 横縞文、腹: 前縫、捺凹形状に斜縞貼付、後縞文、側: 方向、底体を変えた木口状撲垂文	前期
4	II C 67	脚部	-	-		
5	II D 94	深鉢	II縁部	-	口縁: 内縦肥厚、平行沈縞2本+小造沈縞2本。ぐの字状の陰帶に刺込み	中期初期
6	II A 69	深鉢	II-胴	R L 横	沈縞、半載沿管による陰起縞文2筋	中期初期
7	II A 88/II 38	深鉢	II-胴	R L 横	波状II縁、曲面的な帶縞文	中期前半
8	II A 90/II 38	深鉢	脚部	L R 横	脚: 沈縞区画の横縞文、無文帶	後期前半
9	II A 89/II 38	深鉢	II-胴	L R 横	口縁: 2筋の帯縞文、酒呑文、酒り口	後期前半
10	II C 81	深鉢	II-胴	L R 横	口縁: L 及横+波形沈縞文、腹: 前縫	後期
11	II C 88	深鉢	II-頭	-		
12	II C 80	鉢	II-胴	L R 横	II縁: 小山形突起、II縁: 外反、側: 2本の平行沈縞文+低縞文、?摩滅痕し。	成期後葉
13	10号土坑	台付浅鉢?	脚-底	-	脚: 平行沈縞、脚部: 次相、赤色顔料? 内面: オキ	後期
14	II D 04-14	鉢	II-底	L R 横	口縁: 斜縞の製み、2個対の小山状突起4箇所貼り付け?、脚: 実形工字文	晚期後葉
15	II D 04	壺	頭	-	口縁: 表側に溝状沈縞、実形工字文、内面: オキ	晚期末葉
16	II A 79/II 38	小型深鉢?	脚-底	不明	やや内傾して立ち上がる。削減痕し。底: 本紫釉	不明

第3図 市野々遺跡出土遺物土器



回数 番号	出土地点・場所	器種	部位	草体	文様等	時期
17	III C 98・IV D 94Ⅱ路	深鉢	口・側	L.R 横版	口沿: 2個1対の小山状突起と施錆貼り付け残存。口縁: 磁消	晩期
18	7号土坑埋土	深鉢	口・側	L.R 横	口縁: 施錆。表面: 磁	晩期
19	15号土坑	深鉢	完全	L.R 横・斜	口縁: 小波状。底: 本类型	晩期
20	II A 80元跨	深鉢	口・側	L.R 横	口縁: 突起の痕跡あり。底: 施錆 L.R	晩期
21	II C 93	深鉢	口・側	L.R 横	口縁: 小波状。底: 施錆	?
22	III A 69	円盤状土製品	—	不明	表面半平滑、壓滅激しい	?
24	III C 73	四足小型俎?	底(脚) 部	R.L 横・斜	脚部欠損	晩期
25	III D 03	土師器	側部	—	外壁: 褐ハケメ。内面: 横ハケメ	?
26	III C 98	土師器・环	底部	—	内底黑色施錆。同軸系切り机	9世紀後半
27	III C 35	角底器・環?	口縁部	—	折り曲げ口縁	平安時代
28	III C 88	陶器・瓶?	底部	—	鉄錆	古世?

第4図 市野々遺跡出土遺物土器



標識番号	出土地点・層位	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石質 (産地)	備考
29	III C 83	石核	(2.4)	1.5	0.5	0.85	赤色百石 (奥羽山脈)	破損
30	12号上坑	石核	2.7	1.5	0.4	1.23	頁岩 (奥羽山脈)	
31	III C 69	石核	2.2	1.6	0.5	1.27	頁岩 (奥羽山脈)	
32	III D 76	石核	3.4	1.3	0.4	1.46	頁岩 (奥羽山脈)	付着物
33	II C 28	尖状器	6.3	1.9	1.3	12.23	頁岩 (北上山地)	
34	II C 67	尖状器	7.8	4.4	1.8	56.65	頁岩 (奥羽山脈)	
35	II A 89	石核	3.5	3.0	0.4	4.01	頁岩 (奥羽山脈)	つまみ先端 付着物
36	III D 72	石核	4	3.8	1.4	13.54	頁岩 (奥羽山脈)	
37	III D 43	石核	8.4	2.5	0.7	15.25	頁岩 (奥羽山脈)	
38	III D 56	石核	5.1	2.2	0.7	7.84	頁岩 (奥羽山脈)	
39	9号土坑埋土	石核	6.3	1	0.6	3.98	頁岩 (奥羽山脈)	
40	III D 54	石核	8.0	5.0	1.5	68.30	頁岩 (奥羽山脈)	種器?
41	III C 17	石核	10.2	4.9	1.9	94.44	頁岩 (奥羽山脈)	
42	III C 84	石核	9.3	3.6	1.8	26.25	頁岩 (奥羽山脈)	
43	III A 85	打制石斧	10.5	5.1	2	14.99	頁岩 (北上山地)	片面磨加工
44	III A 88	打制石斧	7.3	4.2	2.3	139.96	砂岩 (北上山地)	

番号	出土地点・層位	器種	時代	直径 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
45	III C 80	東北百石	1636~1659	2.37	0.17	3.33	古窓水
46	N 138号灰陶	東北百石	1636~1659	2.51	0.16	2.15	古窓水
47	T 12	平安通寶	4-9	2.38	0.09	1.05	欠組
48	III D 65	永樂通寶	中世末~近世初	2.52	0.13	2.86	横鋸抜
49	III D 65	淳化通寶	北宋, 960	2.49	0.13	3.17	真書

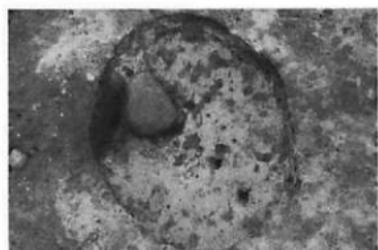
第5図 市野々遺跡出土遺物石器・古銭



調査区全景



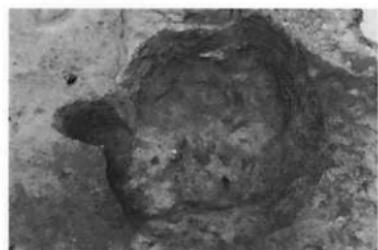
7号土坑断面



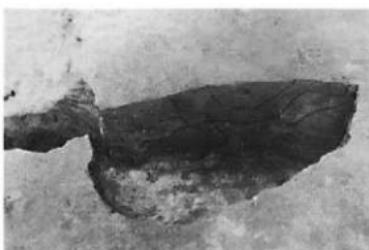
2号土坑平面



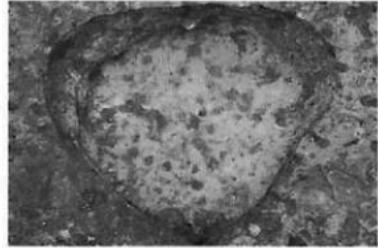
2号土坑断面



9号土坑平面



9号土坑断面

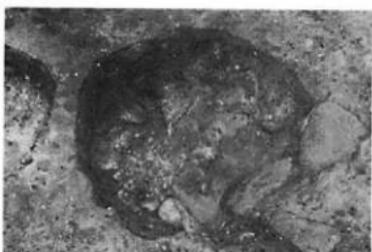


10号土坑平面



10号土坑断面

写真図版 1 市野々遺跡調査区全景・土坑



12号土坑平面



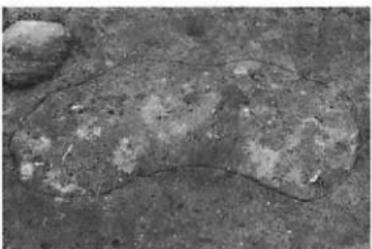
12号土坑断面



15号土坑平面



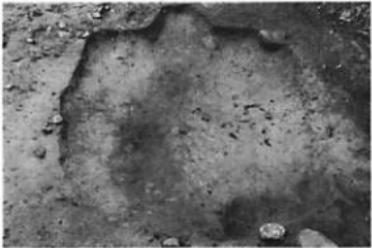
15号土坑断面



1号烧土遗構検出状況



1号烧土遗構断面

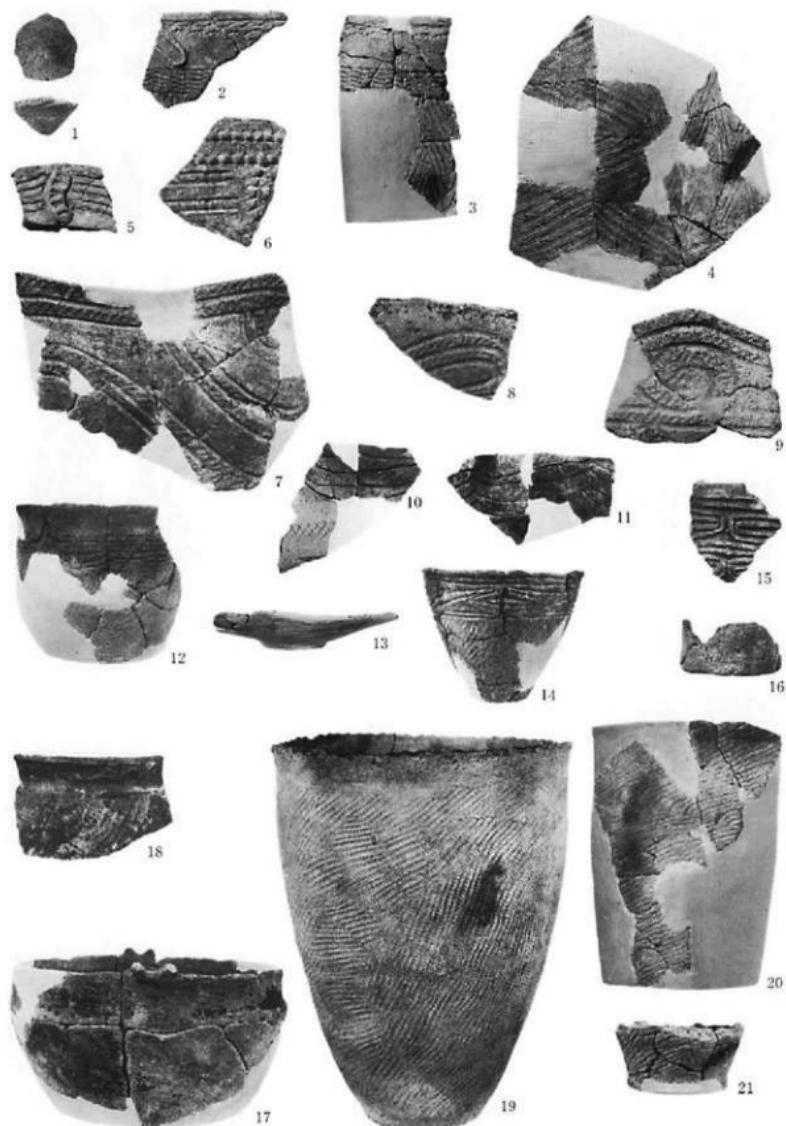


2号炭窯跡平面

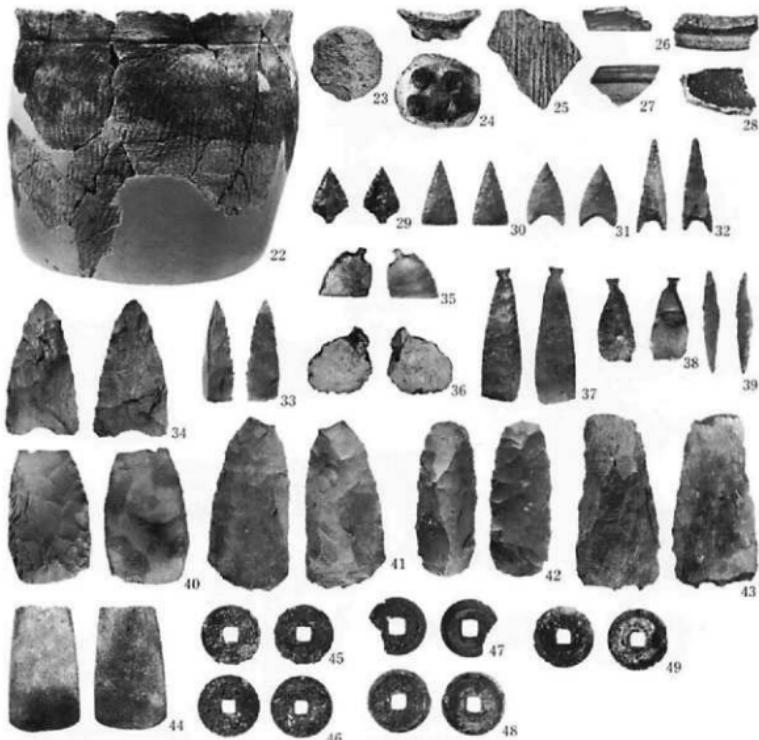


2号炭窯跡断面

写真図版2 土坑・焼土遺構・炭窯跡



写真図版3 出土遺物 土器



写真図版4 出土遺物（土器・石器・古銭）

報告書抄録

ふりがな	いわけんまいぞうぶんかさいはくつちょうさりやくほう							
書名	岩手県文化財発掘調査報告							
シリーズ名	別冊文化振興事業用埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第307集							
編著者名	鶴坂一重・原美津子							
編集機関	財團法人岩手県文化振興事業用埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯田町11-185 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	西暦2002年3月29日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所取遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
いわきのいわき市野々道路	岩手県伊沢郡伊沢町野々道字市野々7番地	03383	N E22 -2116	39度 06分 52秒	140度 56分 47秒	20010413~ 20010708	13,800m ²	「胆沢ダム建設」 に伴う緊急発掘 調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
古野々道路	散布地	縄文時代 近世	土坑17基 壇上道橋1基 井戸跡1基 炭焼窯跡11基	縄文土器（後期・晚期 中心） 石器 古錢				

(47~52) いの台Ⅱ遺跡他5遺跡

委託者 森林水産省東北農政局胆沢狼ヶ石土地改良建設事業所いさわ南部農地整備事業建設所

事業名 国营いさわ南部農地整備事業

調査期間 平成13年10月11日~11月8日

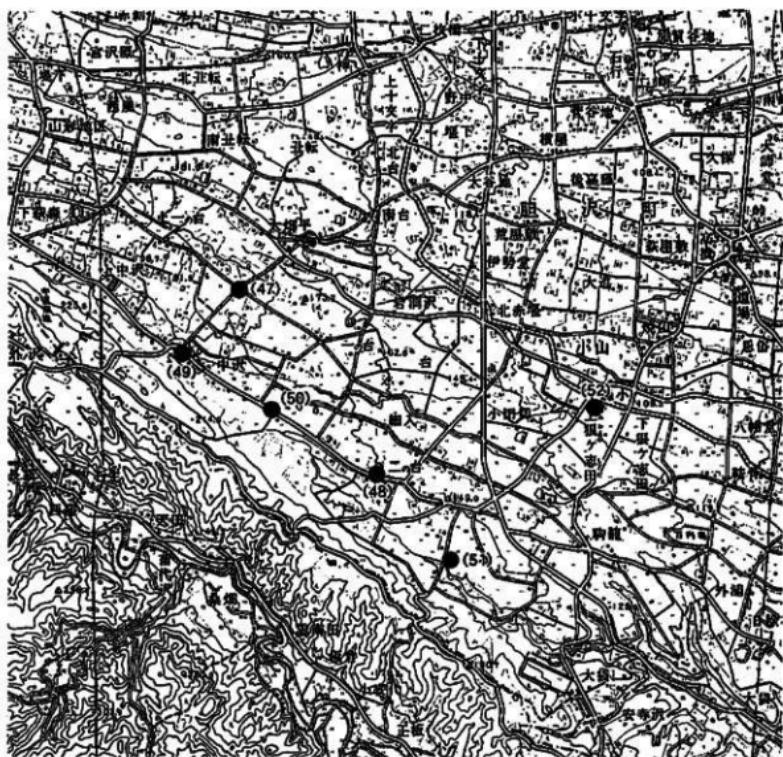
調査対象総面積 109,001.60m²

遺跡番号・路号 NE34-1058・NE34-2022・NE44-0230

NE34-2172・NE44-1228・NE35-2074

調査担当者 鈴木一重・中村直美・北田 熊

協力機関 岩手県教育委員会生涯学習文化課



遺跡位置

1:50,000 水沢

一の台Ⅱ遺跡他5遺跡 試掘調査に至る経過

国営いさわ南部農地整備事業実施地区は、岩手県の南西部に位置し、胆沢川から北上川にかけての扇状地の右辺部にあり、標高110~210mの段丘地形を呈している。この地形のなかに位置する「一の台Ⅱ遺跡」、「上中沢Ⅰ遺跡」、「二の台遺跡」、「NE34-2172(遺跡名なし)」、「屋敷遺跡」、「上狼ヶ志田遺跡」は、「国営いさわ南部農地整備事業」の施行に伴って、その事業地区内に存することから試掘調査を実施することとなったものである。

この地区的農業は、水田を主体とした経営により発展してきたものの、所有耕地が分散し区画形状は未整備もしくは昭和30年代に整備された10a区画がほとんどで、かんがい用水不足に加え用排水渠も未整備などから農業の近代化が困難なまま生産性の低い農業経営を余儀なくされている。

このため、農用地の効率的利用と労働生産性の高い農業経営の展開が可能な生産基盤を形成するため、国営かんがい排水事業等により基幹的な用排水施設を整備し、本事業では既耕地を再編整備する区画整理875haと地目変換による農地造成8haの地域を一体的に施行し、併せて担い手への農地利用の集約による経営規模の拡大と経営の合理化を図るとともに、土地利用の整序化を通じ農業の振興を基幹として本地域の活性化に資することを目的に、現在事業を進めている。

この地区的埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会が平成8年度に分布調査を実施し、「一の台Ⅱ遺跡」、「上中沢Ⅰ遺跡」、「二の台遺跡」、「NE34-2172(遺跡名なし)」、「屋敷遺跡」、「上狼ヶ志田遺跡」が確認されている。その結果に基づいて岩手県教育委員会は東北農政局胆沢狼ヶ石土地改良建設事業所に対し事業について照会した。回答を受けた岩手県教育委員会は東北農政局胆沢狼ヶ石土地改良建設事業所いさわ南部農地整備建設事業所と協議を行い、試掘調査を財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とすることとした。

これにより、岩手県教育委員会は平成13年度事業について、平成13年6月28日付「教文第495号」により財團法人岩手県文化振興事業団へ通知した。

これを受けて財團法人文化振興事業団は「一の台Ⅱ遺跡」、「上中沢Ⅰ遺跡」、「二の台遺跡」、「NE34-2172(遺跡名なし)」、「屋敷遺跡」、「上狼ヶ志田遺跡」の6遺跡について同年9月28日付で、委託契約を締結し、10月11日から試掘調査に着手した。

(農林水産省東北農政局胆沢狼ヶ石土地改良建設事業所いさわ南部農地整備事業建設所)

(47) 一の台II遺跡

所 在 地 肥沢町小山字中沢上一の台
 委 託 者 農林水産省東北農政局
 肥沢猿ヶ石土地改良建設事業所
 いさわ南部農地整備事業建設所
 事 業 名 国营いさわ南部農地整備事業
 発掘調査期間 平成13年10月11日～10月18日
 調査対象面積 5,065.41m²
 試 挖 面 積 634m²
 遺跡番号・略号 NE 34-1058
 調査担当者 中村貞美
 協 力 機 関 岩手県教育委員会生涯学習文化課



道路位置

1:50,000 水沢

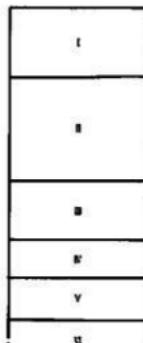
1. 遺跡の立地

一の台II遺跡は、JR東北本線前沢駅の北西約10kmに位置し、肥沢扇状地の中位段丘面上にあたる上野原段丘屋に立地する。調査区の標高は184m前後で、岩堀川との比高差は約30mほどである。

2. 基本層序

本遺跡の基本層序は次の通りである。

- I層 10Y R4/2灰褐色粘土質シルト 表土 水田耕作土
層厚20cm
- II層 10Y R7/8黄橙色粘土と10Y R4/1褐灰色粘土質シルト
の混合土 盛土 層厚10~30cm
- III層 10Y R1.7/1~2/1黑色シルト 旧表土 層厚15~17cm
- IV層 10Y R2/3黒褐色シルト 層厚10~15cm
- V層 10Y R3/1黒褐色シルト 層厚10~20cm
- VI層 10Y R7/8黄橙色粘土 地山



基本土層柱状図

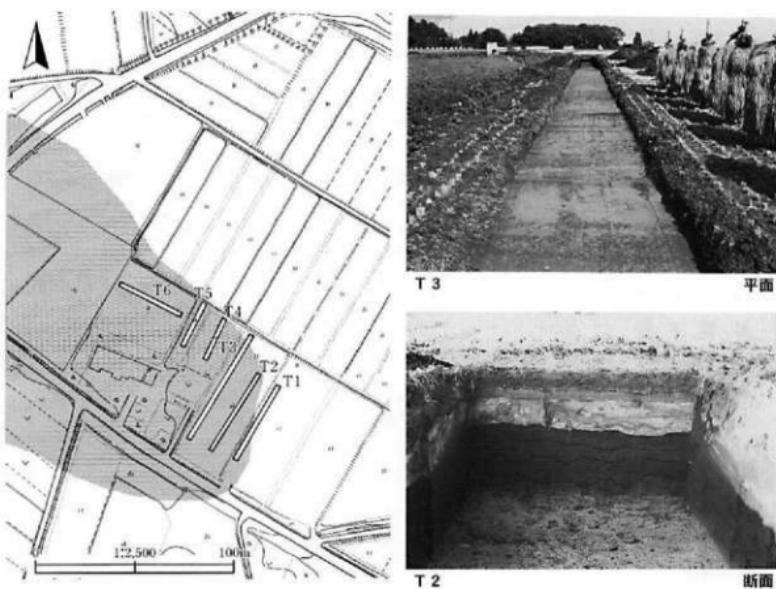
3. 調査結果

〈検出遺構・出土遺物〉 調査の結果、試掘範囲内においては遺構・遺物とも確認されなかった。

4. まとめ

今回の試掘調査によってT1～T6のいずれからも埋蔵文化財は確認されていない。調査区は南東側に向かって緩やかに沢状をなしており、T1～T2では盛土下に3～5層の堆積が認められ、部分的に旧表土が残存する。T6では盛土下に黄褐色の地山面が露出することから、肥沢開拓を行った際、北西側の自然堤防上が削平を受けていると判断される。

なお、一の台II遺跡に関する報告は、これをもって全てとする。



一の台Ⅱ遺跡トレンチ位置図および試掘状況写真

報 告 書 抄 錄

ふりがな 書名	いわてけんmaiぞうぶんかざいはつくつちょうきりやくほう 岩手県埋蔵文化財発掘調査略報							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第397集							
編著者名	中村直美							
編集機関	財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	西暦2002年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号
いわてけんmai 一の台Ⅱ遺跡 奥沢町小山字 中沢上一の台	いわてけんmai 岩手県埋蔵文化 財発掘調査報告書 第397集	03383	NE34 -1058	39度 05分 35秒	141度 01分 35秒	2001.10.11 ~ 2001.10.18	634m ²	国営いさわ南 部農地整備事 業に伴う緊急 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
一の台Ⅱ遺跡	散布地							

(48) 二の台遺跡

所 在 地 胆沢町小山字二の台
委 託 者 農林水産省東北農政局
胆沢猪ヶ石土地改良建設事業所
いさわ南部農地整備事業建設所
事 業 名 国営いさわ南部農地整備事業
発掘調査期間 平成13年10月18日～11月8日
調査対象面積 22,323.22m²
試 塵 面 積 1,640m²
遺跡番号・略号 N E44-0230
調査担当者 中村直美
協 力 機 関 岩手県教育委員会生涯学習文化課



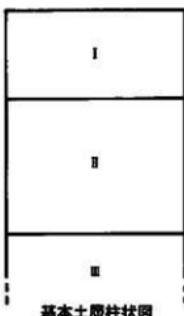
1. 遺跡の立地

二の台遺跡は、JR東北本線前沢駅の北西約8.3kmに位置し、胆沢層状地の高位段丘面にある石坂段丘の段丘崖縁付近に立地する。標高は165m前後で、白鳥川との比高差は約15mほどである。

2. 基本層序

本遺跡の基本層序は次の通りである。

- I層 10Y R5/3にぶい黄褐色粘土質シルト
表土 耕作土 層厚20cm
- II層 10Y R3/1黒褐色シルトと10Y R6/8明黄褐色
粘土質シルトの混合土 盛土 層厚10~30cm
- III層 10Y R7/6明黄褐色粘土 地山



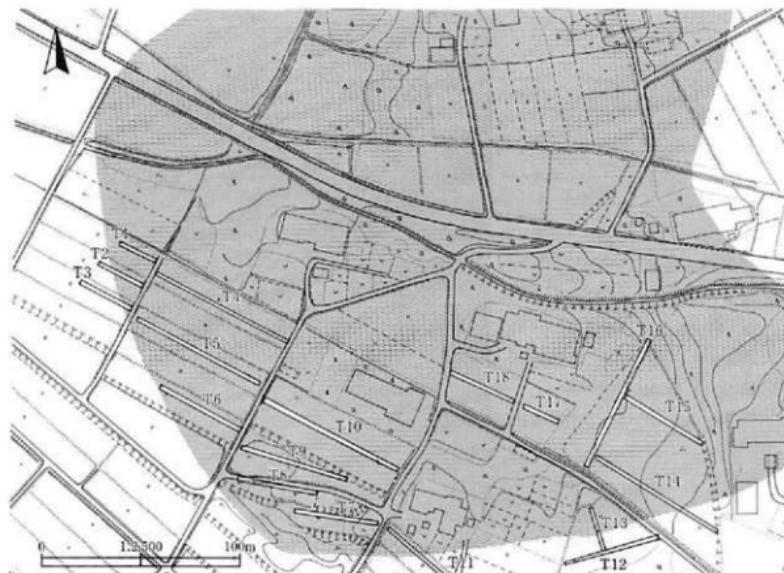
3. 調査結果

＜検出遺構・出土遺物＞ 調査の結果、T10において
陥し穴状造構1基、T13において土坑1基を検出した。
遺物は出土していない。

4.まとめ

T1において盛土面まで30cmほど除去した段階で、陥し穴状造構1基、T13で耕作土を20cmほど除去した段階で土坑1基を検出した。検出面はいずれも直層である。北西側T1～T3のトレンチでは表土直下で地山が露出する。南東側のT4～T16では10～50cmほど盛土を介して地山が認められた。調査区は昭和20年代に行われた胆沢開拓による削平を受け、本来の地形をほとんど留めていないと判断される。T17とT18(110m²)は耕作中であるため今回は試掘を行わず、来年度着手することとした。

なお、二の台遺跡に関する報告は、これをもって全てとする。



二の台遺跡遺トレンチ位置図

報 告 書 抄 錄

ふりがな	いわてけんmaiぞうぶんかざいはっくつちょうさりやくほう								
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書								
シリーズ番号	第397集								
編著者名	中村直美								
編集機関	財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター								
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019) 638-9001								
発行年月日	西暦2002年3月29日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
二の台Ⅱ遺跡	岩手県胆沢郡 胆沢町小山字 二の台	いわてけんいさわぐん たんざくちゅうしょくじ こやまじ にのかい	03383	NE44 -0230	39度 01分 35秒	141度 02分 30秒	20011018~ 20011008	1,640m ²	国営いさわ南部農地整備事業に伴う緊急 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項			
二の台遺跡	散布地	縄文	陥し穴状遺構						

(49) 上中沢 I 遺跡

所 在 地 胆沢町小山字中沢上中沢
 委 託 者 農林水産省東北農政局
 胆沢猿ヶ石土地改良建設事業所
 いさわ南部農地整備事業建設所
 事 業 名 国営いさわ南部農地整備事業
 発 掘 調査 期 間 平成13年10月16日～10月18日
 調査 対象面積 6,276.96m²
 試 掘 面 積 705m²
 遺跡番号・略号 N E34-2022
 調査 担 当 者 中村直美
 協 力 機 関 岩手県教育委員会生涯学習文化課



遺跡位置

1:50,000 水沢

1. 遺跡の立地

上中沢 I 遺跡は、JR 東北本線前沢駅の北西約10.3kmに位置し、胆沢扇状地の高位段丘面にあたる石坂段丘崖縁付近に立地する。標高は180m前後で、白鳥川との比高差は10mほどである。

2. 基本層序

本遺跡の基本層序は次の通りである。

- I 層 10Y R4/3にびい黄褐色シルト
表土 耕作土 層厚20cm
- II 層 10Y R6/6明黄褐色粘土質シルトと10Y R4/1褐灰色
粘土質シルトの混合土 盛土 層厚10~140cm
- III 層 10Y R6/6明黄褐色粘土質シルト 地山



基本土層柱状図

3. 調査結果

＜検出遺構・出土遺物＞ 調査の結果、遺構は検出されなかった。

4.まとめ

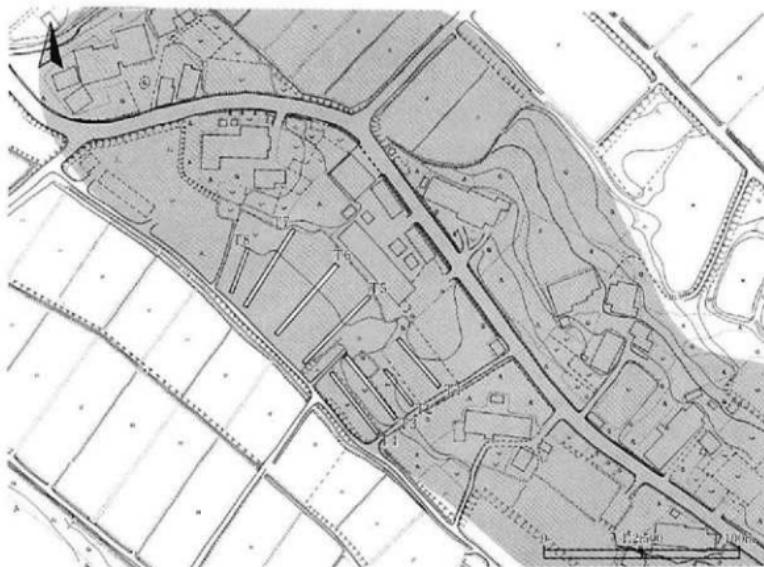
T 1～T 4 では80cmほど盛土がされており、試掘の際にも造成時の木根が多量に確認された。地山はグラウイ化しており、湧水が認められた。T 5～T 8 では南側で1.4m近くの炭化物を含む盛土が確認された(後に火災に遭った家屋跡を片付ける際、所有者が整地を行ったものと判明)。T 6・T 8 の炭化物を含む盛土中より近代陶磁器片が6点出土しただけで、遺構は確認されなかった。

なお、上中沢 I 遺跡に関する報告は、これをもって全てとする。

1～4 近代磁器片
 5・6 近代陶器片
 S = 1 : 3



上中沢 I 遺跡出土遺物



上中沢Ⅰ遺跡トレンチ位置図

報告書抄録

ふりがな	いわてけんmaiぞうぶんかざいはっくつちょうさりやくはう							
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第397集							
編著者名	中村直美							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	西暦2002年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かみなかやねいわせうわ 上中沢Ⅰ遺跡	いわてけん いわてぐん 岩手県胆沢郡 胆沢町小山字 中沢上中沢	03383	NE34 -2022	39度 05分 15秒	141度 01分 15秒	20011016～ 20011018	706m ²	国営いさわ南 部農地整備事 業に伴う緊急 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
上中沢Ⅰ遺跡	散在地	近代		陶磁器				

(50) N E 34-2172遺跡

所 在 地 胆沢町小山字中沢
 委 託 者 農林水産省東北農政局
 胆沢猿ヶ石土地改良建設事業所
 いさわ南部農地整備事業所
 事 業 名 国営いさわ南部農地整備事業
 発掘調査期間 平成13年10月23日～11月8日
 調査対象面積 66,155.60m²
 試 墓 面 積 4,850m²
 遺跡番号・略号 N E 34-2172
 調査担当者 飯坂一重・中村直美・北田 熊
 協 力 機 関 岩手県教育委員会生涯学習文化課



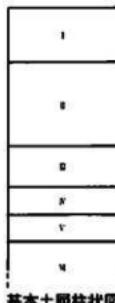
1. 遺跡の立地

N E 34-2172遺跡は、JR東北本線前沢駅の北西約9.4kmに位置し、胆沢原状地の高位段丘面にあたる石坂段丘の段丘岸線付近に立地する。標高は170m前後で、白鳥川との比高差は約15mである。

2. 基本層序

本遺跡の基本層序は次の通りである（第Ⅲ～V層は削平のためほとんど残存しない）。

- I層 10Y R4/4褐色粘土質シルト
表土、水田耕作上 層厚20cm
- II層 10Y R3/4暗褐色シルトと
10Y R6/6明黄褐色粘土の混合土
盛土 層厚10～60cm
- III層 10Y R1.7/1～2/1黒色シルト 旧表土 層厚20cm
- IV層 10Y R3/4暗褐色シルト 層厚10cm
- V層 10Y R3/1黒褐色シルト 层厚10cm
- VI層 10Y R7/6明黄褐色粘土 地山



3. 調査結果

＜検出遺構・出土物＞ 調査の結果、T 8、12、48において陥入穴状遺構が計3基、T18で土坑が1基検出された。遺物は出土していない。

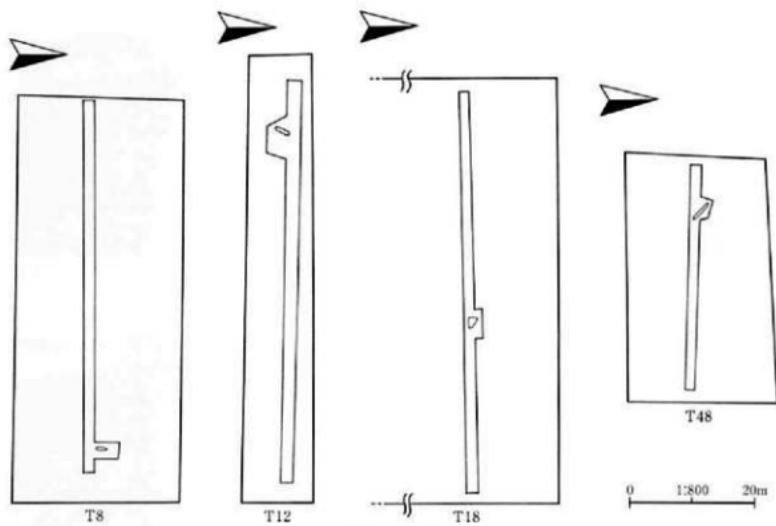
4. まとめ

県道を隔てて北東側では盛土が薄く、南西側では厚い傾向が認められた。南側中央では部分的に黒色土の堆積が最大70cmほどあり、一部に旧表土が残存する。T 8、12、48では表土～盛土面までを除去した(25～65cm)段階で陥入穴状遺構3基、T 18では盛土まで除去した(40cm)段階で土坑1基を検出した。調査区のはば全域で盛土下に地山面が露出することから、旧地形が改変されていると判断される。

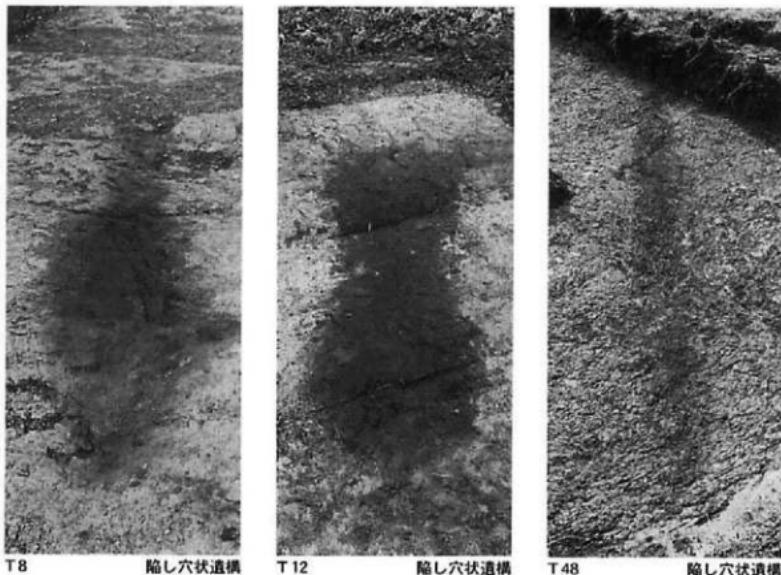
なお、N E 34-2172遺跡に関する報告は、これをもって全てとする。



N E 34-2172遺跡トレンチ位置図



検出した遺構



上中沢 I 遺跡トレンチ位置図および試掘状況写真①



T 18

平面



T 3

平面



T 21

断面



T 14

平面

N E 34-2172遺跡試掘状況写真②

報告書抄録

ふりがな 書名	いわてけんmaiいぞうぶんかざいはっくつちょうさりやくほう 岩手県埋蔵文化財発掘調査略報							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第397集							
編著者名	中村直美							
編集機関	財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	西暦2002年3月29日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
市町村	遺跡番号	度数	度数	度数	度数	度数	度数	度数
NE34-2172 遺跡	岩手県胆沢郡 胆沢町小山	03383	N E 34 -2172	39度 04分 55秒	141度 01分 50秒	20011023～ 20011108	4,850m ²	国営いさわ南部農地整備事業に伴う緊急 発掘調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
NE34-2172 遺跡	散布地	縄文	陥し穴状遺構					遺跡名なし

(51) やしき 屋敷遺跡

所 在 地 胆沢町小山字塙敷
委 託 者 農林水産省東北農政局
胆沢狼ヶ石土地改良建設事業所
いさわ南部農地整備事業建設所
事 業 名 国营いさわ南部農地整備事業
発掘調査期間 平成13年10月29日～11月1日
調査対象面積 4,916.52m²
試 墓 面 積 264m²
遺跡番号・略号 N E 44-1228
調査担当者 飯坂一重
協 力 機 間 岩手県教育委員会生涯学習文化課



1. 遺跡の立地

屋敷遺跡は、JR東北本線前沢駅の北西約7.3kmに位置し、胆沢層状地の高位段丘面にあたる石板段丘の段丘崖縁付近に立地する。標高は145m前後で、白鳥川との比高差は約20mである。

2. 基本層序

本遺跡の基本層序は次の通りである。

- I層 10Y R6/8明黄褐色粘土質シルト
表土 層厚25cm
- II層 10Y R6/8明黄褐色粘土質シルトと
7.5Y R5/8明褐色シルトの混合土。
盛土 層厚5～25cm
- III層 10Y R7/6明黄褐色粘土 地山

3. 調査結果

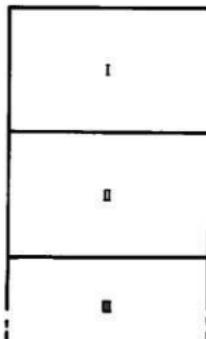
＜検出遺構・出土遺物＞ 調査の結果、T 1において擾乱埋土中より縄文土器細片10点と網片3点が出土した。

遺構は検出されなかった。

4.まとめ

調査区は南～南西側に向かって緩やかに下っており、T 1～T 3ではいずれも南側に至って盛上がりくなっている。盛土下で遺物が確認されたT 1では、その後トレンチの拡張を行い検出作業を行ったが、遺構プランを確認するには至らなかった。本調査区では北側の全域で盛土下に黄褐色の地山面が露出することがあり、造成を行った際、旧地形が削平を受けていると判断される。

なお、屋敷遺跡に関する報告は、これをもって全てとする。



基本土層柱状図



屋敷遺跡トレンチ位置図

報告書抄録

ふりがな	いわてけんmaiぞうぶんかざいはくつちょうさりやくほう						
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報						
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第397集						
編著者名	中村直美						
編集機関	財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター						
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019) 638-9001						
発行年月日	西暦2002年3月29日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
	市町村	道路番号	度	度			
屋敷遺跡	岩手県胆沢郡 胆沢町小山字 屋敷	03383	NE44 -1228	39度 04分 10秒	141度 03分 00秒	2001.10.29～ 2001.11.01	264m ²
国営いさわ南部農地整備事業に伴う緊急発掘調査							
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
屋敷遺跡	散布地	縄文		縄文土器			

(52) 上狼ヶ志田遺跡

所 在 地 胆沢町小山字上狼ヶ志田
 委 托 者 農林水産省東北農政局
 胆沢狼ヶ石土地改良建設事業所
 いさわ南部農地整備事業建設所
 事 業 名 国営いさわ南部農地整備事業
 発掘調査期間 平成13年11月1日～11月7日
 調査対象面積 4,264.60m²
 試 増 面 積 372m²
 遺跡番号・略号 N E35-2074
 調査担当者 中村直美
 協 力 機 間 岩手県教育委員会生涯学習文化課



遺跡位置

1:50,000 水沢

1. 遺跡の立地

上狼ヶ志田遺跡は、JR東北本線前沢駅の北西約6.6kmに位置し、胆沢層状地の中位段丘面上にあたる上野原段丘岸の縁辺に立地する。標高は110m前後で、岩堀川との比高差は約10mである。

2. 基本層序

本遺跡の基本層序は次の通りである。

- I 層 10Y R4/1褐色灰色粘土質シルト
表土：水田耕作土 稲厚20cm
- II 層 10Y R4/1褐色灰色粘土質シルトと
10Y R5/2灰褐色粘土の混合土
盛土 稲厚60～90cm
- III 層 10Y R7/4にぶい黄橙色粘土 地山

3. 調査結果

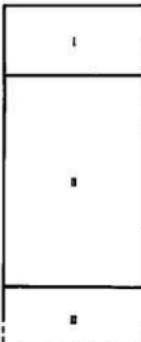
＜検出遺構・出土遺物＞ 調査の結果、試掘範囲

内において遺構と遺物は確認されていない。

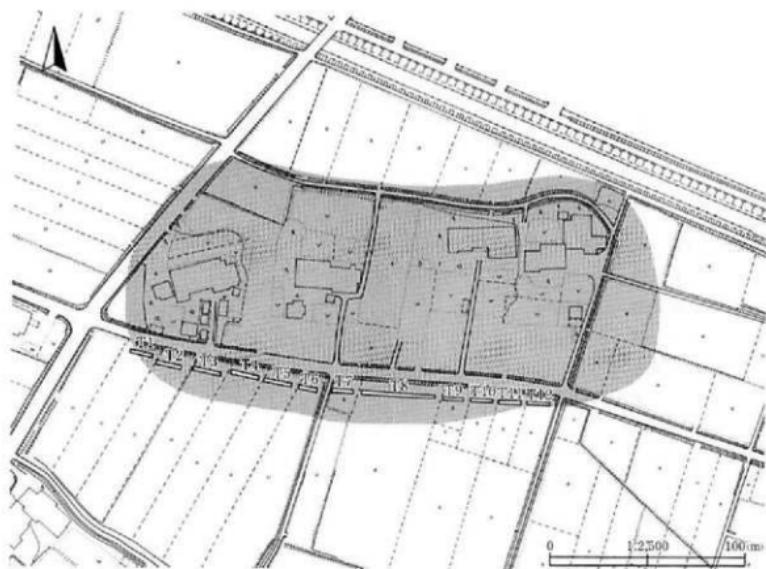
4. まとめ

今回の内容確認調査によってT1～T12のいずれからも、埋蔵文化財に関連する遺構と遺物は確認されなかった。調査区現況は西側T1～T6が一段高く、T7～T12が低くなっているが、試掘の結果T1～T6は90cm近く盛土されており、地形の高低差はほとんど認められない。調査区の水田は、昭和20年代の胆沢開拓以降も所有者の手による改変が加えられ、ほとんど本来の旧地形を留めていない。いずれのトレーニチでも盛土直下で地山が確認されていることから、遺構は削平を受け失われた可能性が高い。

なお、上狼ヶ志田遺跡に関する報告は、これをもって全てとする。



基本土層柱状図



上狼ヶ志田遺跡トレンチ位置図

報告書抄録

ふりがな	いわてけんmaiぞうぶんかざいはくつちょうきりやくほう							
書名	岩手県埋蔵文化財発掘調査略報							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第397集							
編著者名	中村直美							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	西暦2002年3月29日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
上狼ヶ志田遺跡	岩手県胆沢郡 胆沢町小山字 上狼ヶ志田	市町村 03383	遺跡番号 NE 44 - 1228	39度 04分 10秒	141度 03分 00秒	20011029～ 20011101	264m ²	国営いさわ南部農地整備事業に伴う緊急 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
上狼ヶ志田遺跡	散布地							

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所長 伊藤民也 副所長 高橋正儀

(管理課)

課長補佐	佐山正善	吾光美
*	山直	多加志
主事	立花	

嘱託	高橋雄童
*	木本照光
*	湯澤邦美
*	湯澤邦子

(調査第一課)

課長補佐	佐々木勝文	佐々木介透	佐々木介透
*	佐々木清義	佐々木清義	佐々木清義
文化財専門員	内山秀	大庭信健	大庭信健
文化財調査員	田中高	田中高	田中高
*	山田春	山田春	山田春
*	石田森	石田森	石田森
*	赤城	赤城	赤城
*	吉井	吉井	吉井
*	小佐原	小佐原	小佐原
*	笠原野	笠原野	笠原野
*	松潤	松潤	松潤
*	居子	居子	居子
*	柴葉村	柴葉村	柴葉村
*	藤池上	藤池上	藤池上
*	多木村	多木村	多木村
*	涌山原	涌山原	涌山原
*	村林	村林	村林
*	藤池上	藤池上	藤池上
*	又田部村	又田部村	又田部村
*	北高丸島	北高丸島	北高丸島
*	中小江	中小江	中小江
*	菊井川	菊井川	菊井川
*	吉坂木	吉坂木	吉坂木

(調査第二課)

課長補佐	川中高橋	川中高橋
文化財専門員	佐々木與右衛門	佐々木與右衛門
文化財調査員	佐々木重紀	佐々木重紀
*	田藤子	田藤子
*	藤木淳	藤木淳
*	原澤治	原澤治
*	山澤	山澤
*	木部川	木部川
*	田田	田田
*	藤里	藤里
*	美津和	美津和
*	勝勝	勝勝
*	(阿吉北)	(阿吉北)
*	吉原	吉原
*	齋	齋
*	駒木	駒木
*	野智	野智

期限付調査員

期限付調査員

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第397集

岩手県埋蔵文化財発掘調査略報

(平成13年度)

印刷 平成14年3月22日

発行 平成14年3月29日

発 行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒 020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185

電 話 (019)638-9001

F A X (019)638-8563

印 刷 小松総合印刷株式会社

〒 020-0827 岩手県盛岡市鉢塚町15-4

電 話 (019)624-1374

F A X (019)623-6719
